朝酌川中小河川改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第12冊

西川津遺跡 Ⅶ

2000年3月

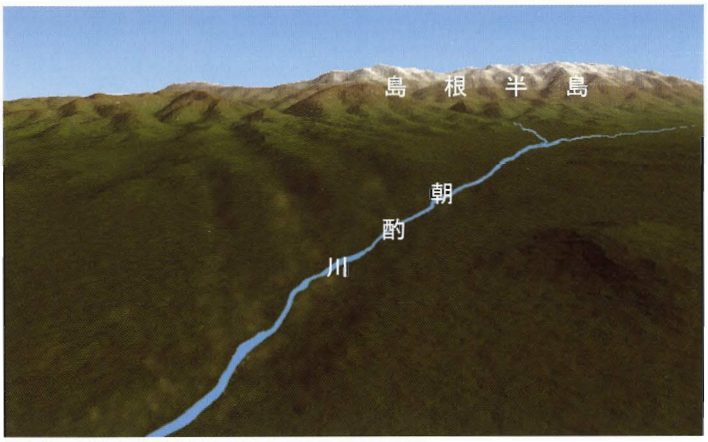
島根県教育委員会

朝酌川中小河川改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第12冊

西川津遺跡 Ⅶ

２０００年３月

島根県教育委員会

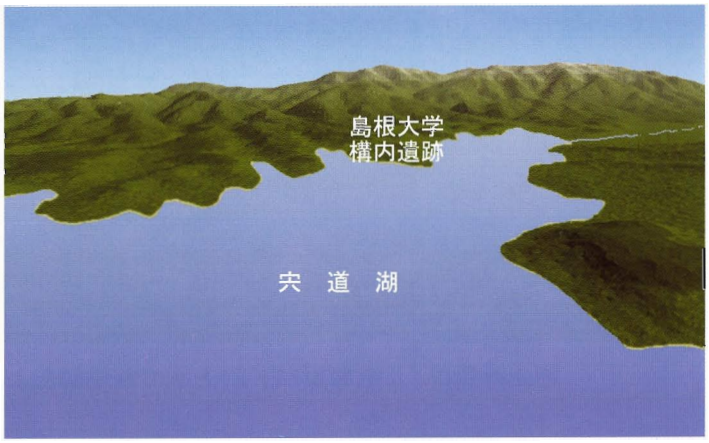


20000年前（旧石器時代）

海面が大きく低下した氷期には、朝酌川が谷を形成しながら西へ流れていた。

6000年前（縄文時代）

1万年前に氷期が終わると縄文海進がおこり、西川津遺跡一帯は内湾の一部になった。

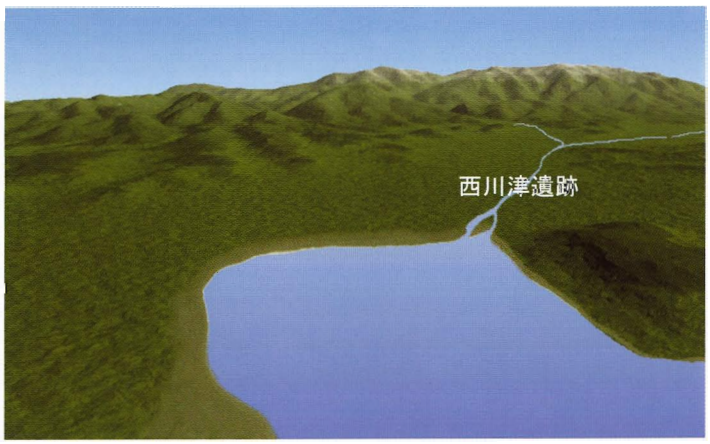


4000年前（縄文時代）

縄文海進が終わると、川や沿岸流が運んだ土砂が内湾を埋め立てて、平野が形成されはじめた。

2000年前（弥生時代）

丘陵の裾部等に集落ができ、朝酌川流域の水田では稲作が行われていた。



朝酌川流域の景観の変遷

西川津遺跡（Ⅱ区右岸：右下）と原の前遺跡および島根大学構内遺跡（東より）

Ⅲ区全景（南から、上流に嵩見橋が見える）

Ⅱ区（右岸）C調査区　杭検出状況（西から）

Ⅱ区（右岸）B調査区　弥生時代前期の河道

Ⅱ区（左岸）Ｂ－２調査区　岩盤（北から）

Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区　橇（そり）出土状況（西から）

Ⅲ区（左岸）C調査区　重りと泥除（未製品）

そり
橇

たてぎね
竪杵

Ⅲ区（左岸）C調査区　出土木製品

Ⅱ区出土弥生土器

Ⅱ区・Ⅲ区出土ミニチュア土器

序

本報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成６年度と７年度の二ヶ年で実施した松江市西川津町の朝酌川中小河川改修事業予定地内に所在する西川津遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区の発掘調査の成果を記録したものです。

この調査では、今からおよそ2000年前の弥生時代に松江市立川津小学校付近を流れていた朝酌川の旧河川を検出するとともに、堆積していた土砂の中から当時の人々が日常使用していた土器や木製品を多量に発見しました。これらの遺構、遺物は、朝酌川の変遷と川津地区の集落の成立や当時の生活を知るうえで貴重な資料といえます。

本書が朝酌川流域の自然環境の変化とこの地域の歴史とに触れる契機となり、私たちの周りに残されている文化財への理解に少なからず寄与すれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と報告書作成にあたって、御協力いただきました関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

島根県教育委員会

教育長 **山　﨑　悠　雄**

例　　言

1．本書は、島根県教育委員会が島根県土木部河川課から委託を受けて、1994（平成６）年度と1995（平成７）年度の二ケ年にわたって実施した朝酌川中小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査を行った西川津遺跡（島根県松江市西川津町）の地区は次のとおりである。

1994（平成６）年度　Ⅱ区（左岸）、Ⅲ区（左岸）

1995（平成７）年度　Ⅱ区（右岸）、Ⅲ区（左岸）、Ⅳ区

3．調査組織は次のとおりである。

〔調査指導〕

山本　清（島根大学名誉教授）、田中義昭（島根大学法文学部教授）

徳岡隆夫（島根大学理学部教授）、大西郁夫（島根大学理学部教授）

林　正久（島根大学教育学部教授）、竹広文明（島根大学汽水域研究センター助手）

〔1994（平成６）年度〕

事務局　広沢卓嗣（文化課長）、勝部　昭（島根県埋蔵文化財調査センター長）、
野村純一（課長補佐）、佐伯善治（課長補佐）、工藤直樹（主事）

調査員　西尾克己（調査第３係長）、間野大丞（主事）、中村陵子（臨時職員）
曽田辰雄（臨時職員）

〔1995（平成７）年度〕

事務局　勝部　昭（文化課長）、森山洋光（課長補佐）
宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター長）、佐伯善治（課長補佐）
澁谷昌宏（主事）

調査員　西尾克己（調査第３係長）、中村陵子（臨時職員）、久保田一郎（臨時職員）

〔1999（平成11）年度〕

事務局　宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、秋山実（総務課長）、
松本岩雄（調査課長）、今岡宏（総務係長）、川崎崇（主事）

調査員　西尾克己（調査第２係長）、大谷朋子（臨時職員）

4．木製品の樹種および獣骨の鑑定は次の方々にお願いした。

島根大学農学部 古野毅教授（樹種鑑定）、鳥取大学医学部 井上孝夫教授（獣骨鑑定）

5．本書の執筆・編集は、西尾が他の調査員の協力を得て行った。なお、土層堆積の記述と考察は中村唯史（島根大学理学部地質学教室院生）が、石製品の記述は大谷朋子が担当した。

6．挿図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系の軸方位である。従って、磁北より７°12′、真北より０°32′東の方向を指す。

7．本書に掲載した土層堆積図面については、中村唯史が観察、分層し、調査員と記録を作成した。

8．遺物の実測は調査員、報告書作成作業員を中心に行った。写真については、現場は調査員が担当し、遺物は大庭俊次（調査第２係文化財保護主事）、岩橋孝典（同主事）が主に当たった。巻頭写真の遺物は牛嶋茂氏（奈良国立文化財研究所）と杉本敏昭氏（西大寺フォト）の撮影による。

9．本遺跡の出土遺物および実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10. 花粉分析と樹種鑑定は（株）文化財調査コンサルタント（渡辺正巳氏）に依頼した。

11. 出土木製品の保存処理は（財）元興寺文化財研究所に委託し、実施した。

12. 調査に当たり協力・教示および従事頂いた方は次のとおりである。

調 査 協 力

三宅博士（安来市教育委員会）、会下和宏（島根大学埋蔵文化財調査研究センター）、下村智（福岡市立埋蔵文化財センター）、積山洋、趙哲済（財団法人大阪文化財協会）、柳浦俊一、丹羽野裕、中川寧、平石充、松山智弘（島根県埋蔵文化財調査センター）、岡宏三（島根県古代文化センター）

発掘調査作業

安達多津子、井上節雄、井上三重、小川吉子、小草美代子、奥田安昭、小原美紀、片寄禧福、片寄照子、金恵敦子、加納幸正、久米基、黒木欣綱、越迫卓、小西好市、坂本強、佐々木一夫、仙田公男、仙田照子、仙田ミヤコ、高木正雄、多久和尚、栃原嘉明、冨吉将平、野津干俊、原唯雄、平江末忠、平野功、福島幸彦、福田和也、福田美代江、藤原和子、藤原昭治、細木澄子、牧野益蔵、牧野幸枝、増野普次、増本好史、水口晶郎、宮廻恭、村上将博、山陰猛、吉岡シミ子、和田隆徳

遺 物 整 理

大塚敬子、景山光子、善波睦美、立脇由美、吉田典子

報 告 書 作 成

池橋こずえ、加藤往子、金津まり子、堀江五十鈴、錦織美千恵、山根るみ子

本　文　目　次

序

第１章　調査に至る経緯と調査経過……1

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と歴史的環境……4

第２節　遺跡の地質と自然環境の変化……8

第３章　Ⅱ区右岸の調査

第１節　調査経過と調査概要……12

第２節　各調査区の遺構と遺物

（１）　南トレンチ……12

（２）　Ａ調査区……12

（３）　Ｂ調査区……13

（４）　Ｃ調査区……20

（５）　北トレンチ……24

第４章　Ⅱ区左岸の調査

第１節　調査経過と調査概要……39

第２節　各調査区の遺構と遺物

（１）　Ａ調査区……40

（２）　Ｂ調査区……67

（３）　Ｃ調査区……87

（４）　Ｄ調査区……94

第５章　Ⅲ区左岸の調査

第１節　調査経過と調査概要……110

第２節　各調査区の遺構と遺物

（１）　Ａ調査区……113

（２）　Ｂ調査区……113

（３）　Ｃ調査区……143

第６章　Ⅳ区の調査

第１節　調査経過と調査概要……172

第２節　各調査区の遺構と遺物

（１）　Ａ調査区……174

（２）　Ｂ調査区……177

第７章　自然科学分析

第１節　西川津遺跡の古環境変遷……187

第２節　西川津遺跡1995年度調査における花粉分析……194

第３節　西川津遺跡1995年度調査における樹種鑑定……199

第８章　まとめ……205

挿　図　目　次

第１章

第１図　遺跡位置図　2
第２図　平成６・７年度発掘調査区配置図　3

第２章

第３図　西川津遺跡と周辺の遺跡　6
第４図　Ⅱ・Ⅳ区出土の中世遺物実測図　7
第５図　遺跡周辺の古地理図　9
第６図　堆積層形成の模式図　10
第７図　西川津遺跡の変遷　11

第３章

第８図　Ⅱ区（右岸）調査区位置図　14
第９図　Ⅱ区（右岸）南トレンチ砂礫層出土土器実測図　14
第10図　Ⅱ区（右岸）Ｂ調査区（南壁）・Ｃ調査区（南壁）・南トレンチ（南壁）土層堆積図　15
第11図　Ⅱ区（右岸）Ａ・Ｂ調査区地形測量図　16
第12図　Ⅱ区（右岸）Ａ調査区粘土層出土土器実測図　17
第13図　Ⅱ区（右岸）Ａ調査区砂礫層出土土器実測図　18
第14図　Ⅱ区（右岸）Ｂ調査区泥層・砂礫層出土土器・鹿角実測図　20
第15図　Ⅱ区Ａ・Ｂ・Ｃ調査区河道跡測量図と遺物出土位置図　21
第16図　Ⅱ区（右岸）Ｂ調査区土器出土状況実測図　22
第17図　Ⅱ区（右岸）Ｂ調査区出土土器実測図　23
第18図　Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区流木・杭検出状況図　23
第19図　Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区（セクションベルト北壁）・北トレンチ（北壁）土層堆積図　24
第20図　Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区砂礫層出土土器実測図　25
第21図　Ⅱ区（右岸）北トレンチ砂層出土土器実測図　25
第22図　Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区杭と流木出土状況実測図　26
第23図　Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区杭出土状況実測図　27
第24図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（１）　29
第25図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（２）　30
第26図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（３）　31
第27図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（４）　32
第28図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（５）　33・34
第29図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（６）　35
第30図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（７）　36
第31図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（８）　37
第32図　Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区（東壁）杭と土層模式図　38

第４章

第33図　Ⅱ区（左岸）調査区位置図　39
第34図　Ⅱ区河川堆積図（ダイヤグラム）　41
第35図　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区砂礫層測量図（土器の出土位置）　42
第36図　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区（西壁）土層堆積図　43
第37図　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区（北壁・北セクションベルト南壁）土層堆積図　44
第38図　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区（南セクションベルト北壁・南壁）土層堆積図　45
第39図　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区粘土層出土土器実測図（１）　46
第40図　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区粘土層出土土器実測図（２）　47

第41図　Ⅱ区(左岸)　A調査区
粘土層出土銭貨　48
第42図　Ⅱ区(左岸)　A調査区
粘土層出土土器・陶磁器実測図　48
第43図　Ⅱ区(左岸)　砂礫層出土土器実測図　49
第44図　Ⅱ区(左岸)　A調査区
砂礫層出土土器実測図(1)　50
第45図　Ⅱ区(左岸)　A調査区
砂礫層出土土器実測図(2)　52
第46図　Ⅱ区(左岸)　A調査区
砂礫層出土土器実測図(3)　53
第47図　Ⅱ区(左岸)　A調査区
砂礫層出土土器実測図(4)　54
第48図　Ⅱ区(左岸)　A調査区
砂礫層出土土器実測図(5)　55
第49図　Ⅱ区(左岸)
出土ミニチュア土器実測図　59
第50図　Ⅱ・Ⅲ区出土土笛実測図　60
第51図　Ⅱ区(左岸)　出土土錘実測図　61
第52図　Ⅱ区(左岸)　出土円形土製品・
紡錘車実測図　61
第53図　Ⅱ区(左岸)
砂礫層出土石製品実測図(1)　62
第54図　Ⅱ区(左岸)
砂礫層出土石製品実測図(2)　63
第55図　Ⅱ区(左岸)
砂礫層出土石製品実測図(3)　64
第56図　Ⅱ区(左岸)
砂礫層出土木製品実測図(1)　65
第57図　Ⅱ区(左岸)
砂礫層出土木製品実測図(2)　66
第58図　Ⅱ区(左岸)　B調査区杭出土位置図　67
第59図　Ⅱ区(左岸)　B調査区岩盤測量図　68
第60図　Ⅱ区(左岸)　B調査区
(西壁)　土層堆積図　69
第61図　Ⅱ区(左岸)　B調査区
(セクションベルト南壁・南壁)
土層堆積図　70
第62図　Ⅱ区(左岸)　B調査区遺物出土位置図　71
第63図　Ⅱ区(左岸)　B－1調査区
杭列A実測図　72
第64図　Ⅱ区(左岸)　B－2調査区
杭列B実測図　73
第65図　Ⅱ区(左岸)　B調査区
粘土層出土土器実測図　74
第66図　Ⅱ区(左岸)　B－2調査区
砂礫層上面出土土器実測図　75
第67図　Ⅱ区(左岸)　B調査区
粘土層出土木製品実測図　75
第68図　Ⅱ区(左岸)　B－1調査区
砂礫層(1層)　出土土器実測図　76
第69図　Ⅱ区(左岸)　B－1調査区
砂礫層(2層)　出土土器実測図(1)　77
第70図　Ⅱ区(左岸)　B－1調査区
砂礫層(2層)　出土土器実測図(2)　78
第71図　Ⅱ区(左岸)　B－1調査区
砂礫層(2層)　出土土器実測図(3)　79
第72図　Ⅱ区(左岸)　B－1調査区
砂礫層(3層)　出土土器実測図　82
第73図　Ⅱ区(左岸)　B－2調査区
砂礫層(1層)　出土土器実測図　84
第74図　Ⅱ区(左岸)　B－2調査区
砂礫層(2層)　出土土器実測図　84
第75図　Ⅱ区(左岸)　B－2調査区
砂礫層(3層)　出土土器実測図(1)　85
第76図　Ⅱ区(左岸)　B－2調査区
砂礫層(3層)　出土土器実測図(2)　86
第77図　Ⅱ区(左岸)　C調査区(西壁・北壁)
土層堆積図　87
第78図　Ⅱ区(左岸)　C調査区
砂礫層(1層)　出土土器実測図　89
第79図　Ⅱ区(左岸)　C調査区
砂礫層(2層)　出土土器実測図　89
第80図　Ⅱ区(左岸)　C調査区
砂礫層(3層)　出土土器実測図(1)　90
第81図　Ⅱ区(左岸)　C調査区

砂礫層（３層）出土土器実測図（２）　91
第82図　Ⅱ区（左岸）Ｃ・Ｄ調査区
位置図・調査区測量図　94
第83図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
杭・塔婆出土状況実測図　95・96
第84図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
（西壁・北壁・東壁）土層堆積図　97
第85図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
泥層出土土器実測図　98
第86図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
砂礫層（２層）出土土器実測図　98
第87図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
砂礫層（３層）出土土器実測図（１）　99
第88図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
砂礫層（３層）出土土器実測図（２）　100
第89図　Ⅱ区付近の明治期の切図（写）　102
第90図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
塔婆実測図（１）　103・104
第91図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
塔婆実測図（２）　105・106
第92図　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区
塔婆実測図（３）　107・108

第５章

第93図　Ⅲ区（左岸）調査区位置図　110
第94図　Ⅲ区（左岸）Ａ・Ｂ調査区
砂礫層上面測量図・遺物出土位置図　111
第95図　Ⅲ区（左岸）河川堆積図
（ダイヤグラム）　112
第96図　Ⅲ区（左岸）Ａ調査区（西壁・北壁）
土層堆積図　114
第97図　Ⅲ区（左岸）Ａ調査区
砂礫層（上層）出土土器実測図　115
第98図　Ⅲ区（左岸）Ａ調査区
砂礫層（下層）出土土器実測図　115
第99図　Ⅲ区（左岸）Ａ・Ｂ調査区
砂礫層出土土器実測図（１）　116
第100図　Ⅲ区（左岸）Ａ・Ｂ調査区
砂礫層出土土器実測図（２）　117
第101図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区杭列実測図　120
第102図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区（西壁・北壁）・
Ｃ調査区（東壁）土層堆積図　121・122
第103図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区
砂礫層（上層）出土土器実測図　123
第104図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区
砂礫層（中層）出土土器実測図　124
第105図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下層）出土土器実測図（１）　125
第106図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下層）出土土器実測図（２）　126
第107図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下層）出土土器実測図（３）　126
第108図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下層）出土土器実測図（４）　127
第109図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下層）出土土器実測図（５）　128
第110図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下層）出土土器実測図（６）　129
第111図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下々層）出土土器実測図（１）　130
第112図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下々層）出土土器実測図（２）　131
第113図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区砂礫層
（下々層）出土土器実測図（３）　131
第114図　Ⅲ区（左岸）砂礫層
出土ミニチュア土器実測図　136
第115図　Ⅲ区（左岸）砂礫層出土土錘・
土玉実測図　136
第116図　Ⅲ区（左岸）砂礫層出土紡錘車・
円形土製品実測図　138
第117図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区
砂礫層出土石製品実測図（１）　140
第118図　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区
砂礫層出土石製品実測図（２）　141
第119図　Ⅲ区（左岸）Ｂ・Ｃ調査区
砂礫層出土木製品実測図　142

第120図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(下々層) 測量図　142
第121図　Ⅲ区(左岸) C調査区
遺物出土位置図　144
第122図　Ⅲ区(左岸) C調査区
砂礫層遺物出土状況実測図　145
第123図　Ⅲ区(左岸) C調査区
砂礫層出土土器実測図　147
第124図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(上層) 出土土器実測図(1)　149
第125図　Ⅲ区 (左岸) C調査区砂礫層
(上層) 出土土器実測図(2)　150
第126図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(上層) 出土土器実測図(3)　151
第127図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(上層) 出土土器実測図(4)　151
第128図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(上層) 出土土器実測図(5)　152
第129図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(上層) 出土土器実測図(6)　154
第130図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(上層) 出土土器実測図(7)　155
第131図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(中層) 出土土器実測図　156
第132図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(下層) 出土土器実測図　157
第133図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(下々層) 出土土器実測図(1)　158
第134図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(下々層) 出土土器実測図(2)　159
第135図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(下々層) 出土土器実測図(3)　159
第136図　Ⅲ区(左岸) C調査区
砂礫層出土石製品実測図(1)　166
第137図　Ⅲ区(左岸) C調査区
砂礫層出土石製品実測図(2)　167
第138図　Ⅲ区(左岸) C調査区砂礫層
(下層) 出土石製品(重り) 実測図　168
第139図　Ⅲ区(左岸) C調査区
砂礫層出土木製品実測図(1)　169
第140図　Ⅲ区(左岸) C調査区
砂礫層出土木製品実測図(2)　170

第6章

第141図　Ⅳ区試掘・本調査区位置図　172
第142図　Ⅳ区調査区位置図　173
第143図　Ⅳ区A調査区測量図　173
第144図　Ⅳ区A調査区 (北壁)・B調査区
(北壁・東壁)・試掘区 (南壁)
土層堆積図　175・176
第145図　Ⅳ区A調査区出土土器実測図　177
第146図　Ⅳ区A調査区遺物出土状況実測図　178
第147図　Ⅳ区B調査区
測量図・遺物出土位置図　179
第148図　Ⅳ区A・B調査区出土土器実測図　180
第149図　Ⅳ区B調査区
出土石製品実測図(1)　181
第150図　Ⅳ区B調査区
出土石製品実測図(2)　182
第151図　Ⅳ区A・B調査区出土木製品実測図　183
第152図　Ⅳ区付近切図 (西川津村切図写)　186

第7章

第153図　松江低地の位置と周辺地形　187
第154図　調査位置　187
第155図　完新統泥層基底面高度分布と
古水系　188
第156図　遺跡堆積層のイオウ濃度　188
第157図　松江低地から出雲平野までの
地下地質断面図　189
第158図　試料採取トレンチ位置図　194
第159図　花粉ダイアグラム　195・196
第160図　試料杭材配置図　199
第161図　樹種鑑定用プレパラート作製
フローチャート　201
第162図　Ⅱ・Ⅲ区の河川変遷概念図　206

写真図版目次

巻頭写真図版

中表紙　土笛

ＰＬ．１　朝酌川流域の景観の変遷

ＰＬ．２　上：西川津遺跡（Ⅱ区）と原の前遺跡および島根大学構内遺跡

下：Ⅲ区全景

ＰＬ．３　上：Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区杭検出状況

下：Ⅱ区（右岸）Ｂ調査区弥生時代前期の河道

ＰＬ．４　上：Ⅱ区（左岸）Ｂ－２調査区岩盤

下：Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区櫂出土状況

ＰＬ．５　上：Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区重りと泥除（未製品）

Ⅲ区Ｃ調査区出土木製品　下左：櫂　下右：竪杵

ＰＬ．６　Ⅱ区出土弥生土器

ＰＬ．７　Ⅱ区・Ⅲ区出土ミニチュア土器

第７章

写真１．　穿孔貝の巣孔

写真２．　フナクイムシの巣穴

写真３．　現在の宍道湖湖岸の風景

写真４．　樹種鑑定（１）

写真５．　樹種鑑定（２）

写真６．　樹種鑑定（３）

図版表紙　Ⅲ区（左岸）砂礫層出土弥生土器

図版１．　遺跡（Ⅱ～Ⅳ区）航空写真（1988年）

図版２－上．原の前遺跡上空から遺跡Ⅱ・Ⅲ区を下流より望む

下．Ⅲ区上空から下流を望む

図版３－上．Ⅲ・Ⅳ区を学園橋上空から望む

下．Ⅱ区全景

図版４－上．Ⅱ区（右岸）全景

下．Ⅱ区（右岸）Ｂ調査区全景

図版５－上．Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区全景

下．Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区流木

図版６－上．Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区弥生時代の河道跡と流木

下．Ⅱ区（右岸）Ａ調査区弥生時代の河道跡

図版７－上．Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区杭検出状況

下．Ⅱ区（右岸）北トレンチ杭検出状況

図版８．　Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区杭・縄文土器検出状況
図版９－上．Ⅱ区（左岸）Ａ調査区
下．Ⅱ区（左岸）Ａ調査区調査風景
図版10－上．Ⅱ区（左岸）Ａ調査区北壁
下．Ⅱ区（左岸）Ａ調査区土層堆積状況
図版11－上．Ⅱ区（左岸）Ａ調査区
下．Ⅱ区（左岸）Ａ調査区西壁
図版12－上．Ⅱ区（左岸）Ｂ－２調査区東側杭列
下．Ⅱ区（左岸）Ｂ－２調査区粘土層土器出土状況
図版13－上．Ⅱ区（左岸）Ｂ調査区岩盤と杭列
下．Ⅱ区（左岸）Ｂ－２調査区杭列
図版14－上．Ⅱ区（左岸）Ｂ－１調査区２層土器出土状況
下．Ⅱ区（左岸）Ｂ－２調査区土層堆積状況
図版15－上．Ⅱ区（左岸）Ｂ調査区全景
下．Ⅱ区（左岸）Ｂ－１調査区
図版16－上．Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区杭検出状況
下．Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区塔婆検出状況
図版17－上．Ⅱ区（左岸）Ｃ・Ｄ調査区
下．Ⅱ区（左岸）Ｃ調査区西壁土層堆積状況
図版18－上．Ⅱ区（左岸）Ｂ－２調査区北壁
下．Ⅱ区（左岸）Ｃ・Ｄ調査区全景
図版19　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区塔婆検出状況
図版20－上．Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区杭と遺物出土状況
下．Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区西壁
図版21－上．Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区中層遺物出土状況
下．Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区下層遺物出土状況
図版22－上．Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区遺物出土状況
下．Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区櫂・遺物出土状況
図版23－上．Ⅳ区Ｂ調査区
下．Ⅳ区Ｂ調査区北壁
図版24－上．Ⅳ区Ａ調査区北壁と遺物出土状況
下．Ⅳ区Ａ調査区遺物出土状況
図版25－上．Ⅱ区（右岸）Ａ調査区砂礫層出土土器
中．Ⅱ区（右岸）Ａ調査区砂礫層出土土器
下．Ⅱ区（右岸）Ｃ調査区砂層・砂礫層出土土器
図版26－上．Ⅱ区（右岸）Ｂ調査区出土土器
下．Ⅱ区（右岸）Ｂ調査区出土土器
図版27．　Ⅱ区（左岸）Ａ・Ｂ調査区出土土器

図版28.　Ⅱ区（左岸）出土土器
図版29.　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区出土土器
図版30.　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区出土土器
図版31.　Ⅱ区（左岸）Ａ調査区出土土器
図版32.　Ⅱ区（左岸）Ｂ－１・Ｂ－２調査区出土土器
図版33.　Ⅱ区（左岸）Ｂ－１・Ｂ－２・Ｄ調査区出土土器
図版34.　Ⅱ区（左岸）Ｃ調査区出土土器
図版35.　Ⅱ区（左岸）Ｃ・Ｄ調査区出土土器
図版36.　Ⅲ区（左岸）Ａ調査区出土土器
図版37.　Ⅲ区（左岸）Ａ・Ｂ調査区出土土器
図版38.　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区出土土器
図版39.　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区出土土器
図版40.　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区出土土器
図版41.　Ⅲ区（左岸）Ｂ調査区出土土器
図版42.　Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区出土土器
図版43.　Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区出土土器
図版44.　Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区出土土器
図版45.　Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区出土土器
図版46.　Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区出土土器
図版47.　Ⅳ区Ａ・Ｂ調査区土器
図版48.　土笛、Ⅱ区・Ⅲ区（左岸）出土ミニチュア土器
図版49.　円盤状土製品・紡錘車・土錘
図版50.　Ⅱ区（右岸）検出の杭
図版51.　Ⅱ区（右岸）検出の杭
図版52.　Ⅱ区（右岸）検出の杭
図版53.　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区塔婆
図版54.　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区塔婆
図版55.　Ⅱ区（左岸）Ｄ調査区塔婆
図版56.　Ⅱ区（左岸）・Ⅲ区（左岸）・Ⅳ区出土木製品
図版57.　Ⅲ区（左岸）・Ⅳ区出土木製品
図版58.　Ⅱ区・Ⅲ区（左岸）出土木製品
図版59.　Ⅱ区（左岸）・Ⅲ区（左岸）出土木製品
図版60.　Ⅱ区（左岸）・Ⅲ区（左岸）出土木製品
図版61.　Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区出土木製品
図板62.　Ⅱ区（左岸）・Ⅲ区（左岸）出土木製品
図板63.　Ⅱ区（左岸）出土石製品
図版64.　Ⅲ区（左岸）Ｂ・Ｃ調査区出土石製品
図版65.　Ⅲ区（左岸）Ⅳ区出土石製品

図版66.　　Ⅲ区（左岸）Ｃ調査区出土石製品（重り）
図板67.　　Ⅱ区（右岸）出土獣骨

表 目 次

第３章

表１　Ⅱ区(右岸)砂礫層出土土器観察表　14
表２　Ⅱ区(右岸)Ａ調査区粘土層出土土器観察表　19
表３　Ⅱ区(右岸)Ａ調査区砂礫層出土土器観察表　19
表４　Ⅱ区(右岸)Ｂ調査区泥層・砂礫層出土土器・鹿角観察表　21
表５　Ⅱ区(右岸)Ｂ調査区出土土器観察表　23
表６　Ⅱ区(右岸)Ｃ調査区砂礫層出土土器観察表　25
表７　Ⅱ区(右岸)北トレンチ砂層出土土器観察表　25
表８　Ⅱ区(右岸)　検出杭観察表・分類模式図　28

第４章

表９　Ⅱ区(左岸)Ａ調査区粘土層出土土器観察表　44～47
表10　Ⅱ区(左岸)Ａ調査区粘土層出土銭貨観察表　48
表11　Ⅱ区(左岸)Ａ調査区粘土層出土土器・陶磁器観察表　48
表12　Ⅱ区(左岸)砂礫層出土土器観察表　56
表13　Ⅱ区(左岸)Ａ調査区砂礫層出土土器観察表　56～59
表14　Ⅱ区(左岸)Ａ・Ｂ調査区出土ミニチュア土器観察表　59
表15　Ⅱ・Ⅲ区出土土笛観察表　60
表16　Ⅱ区(左岸)出土土錘観察表　61
表17　Ⅱ区(左岸)出土円形土製品・紡錘車観察表　61
表18　Ⅱ区(左岸)出土石製品観察表　62
表19　Ⅱ区(左岸)砂礫層出土木製品観察表　65
表20　Ⅱ区(左岸)Ｂ調査区粘土層出土土器観察表　75
表21　Ⅱ区(左岸)Ｂ－２調査区砂礫層上面出土土器観察表　75
表22　Ⅱ区(左岸)Ｂ調査区粘土層出土木製品観察表　76
表23　Ⅱ区(左岸)Ｂ－１調査区砂礫層出土土器観察表　82・83
表24　Ⅱ区(左岸)Ｂ－２調査区砂礫層出土土器観察表　87・88
表25　Ⅱ区(左岸)Ｃ調査区砂礫層出土土器観察表　91・92
表26　Ⅱ区(左岸)Ｄ調査区泥層出土土器観察表　101
表27　Ⅱ区(左岸)Ｄ調査区砂礫層出土土器観察表　101
表28　Ⅱ区(左岸)Ｄ調査区塔婆釈文一覧表　109

第５章

表29　Ⅲ区(左岸)Ａ調査区砂礫層出土土器観察表　115・116
表30　Ⅲ区(左岸)Ａ・Ｂ調査区砂礫層出土土器観察表　118
表31　Ⅲ区(左岸)Ｂ調査区砂礫層出土土器観察表　132～135
表32　Ⅲ区(左岸)砂礫層出土ミニチュア土器観察表　137
表33　Ⅲ区(左岸)砂礫層出土土錘・土玉観察表　137
表34　Ⅲ区(左岸)砂礫層出土紡錘車・円形土製品観察表　139
表35　Ⅲ区(左岸)Ｂ調査区砂礫層出土石製品観察表　140・142
表36　Ⅲ区(左岸)Ｂ・Ｃ調査区砂礫層出土木製品観察表　142
表37　Ⅲ区(左岸)Ｃ調査区砂礫層出土土器観察表　148
表38　Ⅲ区(左岸)Ｃ調査区砂礫層出土土器観察表　160～164
表39　Ⅲ区(左岸)Ｃ調査区砂礫層出土石製品観察表　171
表40　Ⅲ区(左岸)Ｃ調査区砂礫層出土木製品観察表　171

第６章

表41　Ⅳ区Ａ調査区出土土器観察表　177
表42　Ⅳ区出土土器観察表　184
表43　Ⅳ区Ｂ調査区出土石製品観察表　185
表44　Ⅳ区出土木製品観察表　185

第７章

表45　樹種鑑定結果一覧表　201

第１章　調査に至る経緯と調査経過

１．西川津遺跡、タテチョウ遺跡、原の前遺跡の発見と調査

西川津遺跡は、松江市の北東部を蛇行しながら南北に流れている朝酌川沿いに位置している。同遺跡の下流には原の前遺跡とタテチョウ遺跡とが存在し、「朝酌川遺跡群」と呼べる一連の遺跡群を構成している。

朝酌川遺跡群の発見は、1934(昭和９）年に行われた堰と水門を造る工事中に、西川津町字竪丁（タテチョウ遺跡の南端）において弥生土器などが出土し、その存在が確認されたことに溯る。この付近において、1949(昭和24）年に島根大学の山本清氏により試掘調査が行われ、タテチョウ遺跡が弥生時代を中心に古墳時代に及ぶ複合遺跡であることが明らかとなった。西川津遺跡の発見は1939(昭和14）年に行われた水田の排水工事で弥生土器などが出土したことによる。また、戦後の間もない時期に行われた電柱埋設工事と1967(昭和42）年の県道松江－境線(現在の国道431号）沿いの電話線の埋設工事の際にも土器などが発見されたが、発掘調査は実施されなかったことから遺跡の範囲・性格は不明であった。

昭和40年代になって、朝酌川流域周辺の水田部は急激に市街地化が図られたため、朝酌川の氾濫が宅地にも大きな損害を与えるようになり、1972(昭和47）年から島根県土木部において河積拡大のための河川改修計画が建てられた。島根県教育委員会では、島根県土木部の依頼を受けて、1974(昭和49）年に工事予定地のタテチョウ遺跡の範囲確認調査を行い、その結果、南北300mにも及ぶ大規模な低湿地遺跡であることが判明した。タテチョウ遺跡の本格的な発掘調査は1977(昭和52）年から開始され、1991(平成３）年に終了した。

河川改修の暫定掘削工事も下流から進められ、1979(昭和54）年に上流の西川津町橋本のガラガラ橋と宮尾橋との間で遺物が発見されたことで、新たな遺跡（原の前遺跡）の存在が確認された。発掘調査は1992(平成４）年と1993(平成５）年の２年間実施した。なお、1977(昭和52）年に上流の西川津町橋本と大内谷の間の宮尾坪内（西川津遺跡Ⅲ区）において掘削工事中に土器が発見され、西川津遺跡の範囲が広がることが知られ、暫定掘削部分の発掘調査は1972(昭和47）年から1981(昭和56）年に島根県教育委員会が実施した。

２．西川津遺跡における1994・1995(平成６・７）年度の調査

平成５年度に原の前遺跡の調査が終了し、平成６年度から原の前遺跡の上流にある西川津遺跡の本調査に入った。

【1994(平成６）年度の調査】

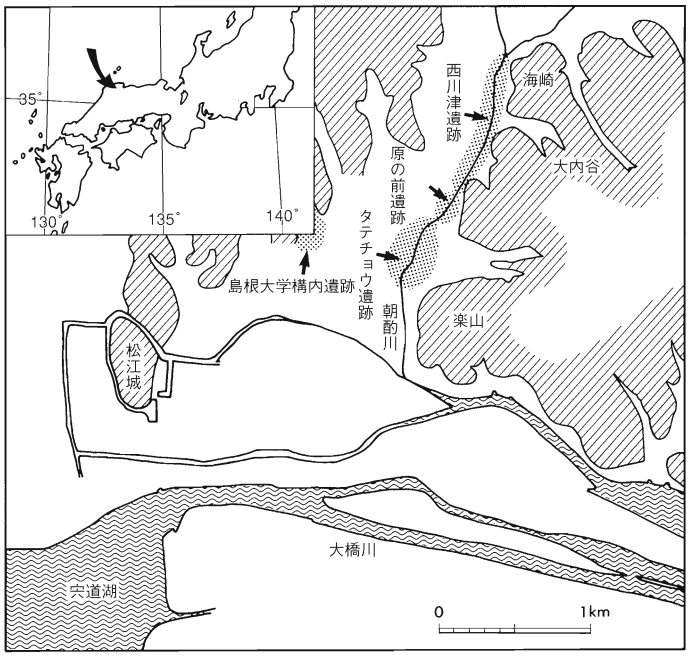
西川津遺跡のⅡ区とⅢ区の本調査を実施した。Ⅱ区は宮尾橋と学園橋の間、Ⅲ区は学園橋の上流で、大内谷までの間を指す。1994(平成６）年度はⅡ区の左岸（面積は680㎡）とⅢ区の左岸の南側（面積は300㎡）を対象とした。便宜上、Ⅱ区は南からＡ～Ｄ調査区と、Ⅲ区はＡ、Ｂ調査区と呼ぶ。Ⅱ区の遺構としては全域で弥生時代の河川跡を検出し、さらにＤ調査区において江戸時代後半の杭列を、Ｂ調査区で現代の護岸の杭列と水田の排水路跡を発見した。川津小学校のグランドに接する部分であるⅢ区でも弥生時代の河川跡を検出した。なお、Ⅲ区の南端すなわちＡ調査区の部分は学園橋の上流に当たり、戦後の昭和50年代まで朝酌川が流れており、古い時代の遺構は存在しな

かった。

【1995(平成７）年度の調査】

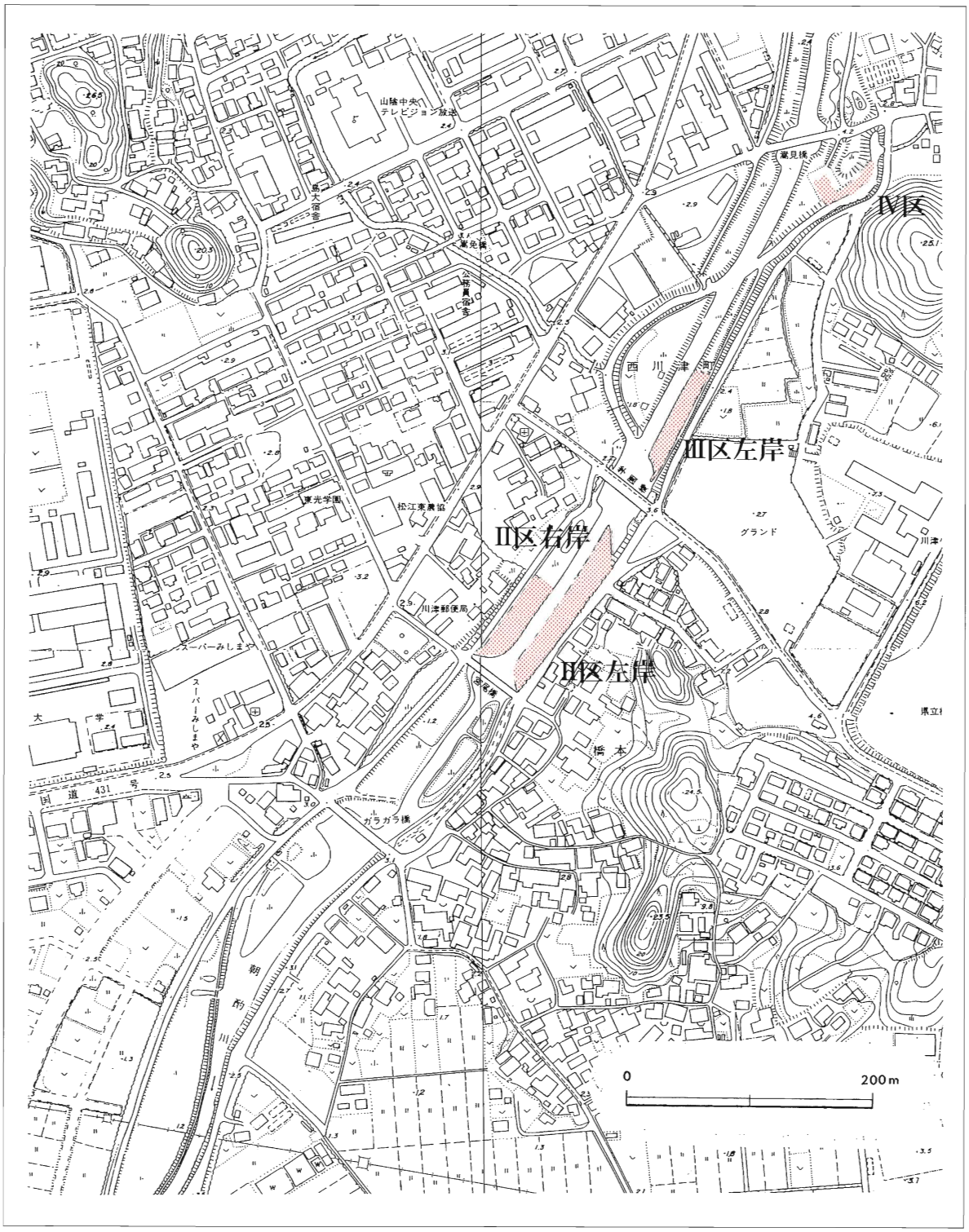
西川津遺跡のⅡ区とⅢ区およびⅣ区の本調査を実施した。Ⅱ区は宮尾橋と学園橋の間の右岸、Ⅲ区は左岸で1994(平成６）年度の上流部を、Ⅳ区は嵩見橋(だけみばし)東詰の下流部を対象とした。なお、便宜上、Ⅱ区はＡ～Ｃ調査区、Ⅲ区はＣ調査区、Ⅳ区はＡ、Ｂ調査区に分割した。

遺構としてはⅡ区の右岸において縄文時代後・晩期の砂礫層を検出した。これまでに調査を行ったタテチョウ遺跡、西川津遺跡、原の前遺跡を通じて最古の川跡である。Ⅲ区は1994(平成６）年度調査地の上流部に当たり、弥生時代前期から中期前半の土器などが多量に含まれている砂礫層が中州状に堆積していた。Ⅳ区の調査地は古墳時代後期以降河川敷が変わらなかったため、縄文土器や弥生土器も多いが、これらに混じり近世以後の遺物も同じ堆積層から発見されている。



第１図　遺跡位置図

西川津遺跡（Ｖ区）と旧朝酌川（1980 年）



第2図　平成6・7年度 発掘調査区配置図（松江市都市計画図）

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　遺跡の位置と歴史的環境

西川津遺跡は松江市西川津町に所在し、松江市の市街地の東側にあたる。付近には島根大学や松江市立川津小学校などの学園が集まり、最近、遺跡の周囲は宅地化が進んでいる。

西川津遺跡は朝酌川の河川敷に存在する低湿地遺跡である。朝酌川は島根半島の北山から流れを発し、松江市街の東端の沖積地を南下して、宍道湖と中海をつなぐ大橋川に注ぐ河川で、この川沿いには西川津遺跡、原の前遺跡、タテチョウ遺跡が存在する。西川津遺跡はその他の二遺跡の上流部に位置し、朝酌川に架かる宮尾橋と海崎橋の間に当たる。また、この川が形成する平野周辺部の低丘陵には古墳をはじめ、多くの遺跡が分布する。

（旧石器時代）

現在の地形とは大きく異なり、谷合となっていたと考えられ、今のところ、この時代の遺跡は知られていない。しかし、西川津遺跡やタテチョウ遺跡において、尖頭器や細石刃核と考えられる石器が出土しており、付近に旧石器時代の遺跡が発見される可能性がある。

（縄文時代）

温暖な時期にあたり、宍道湖が山合まで広がっていたと推定される。縄文土器が出土している遺跡としては西川津遺跡、タテチョウ遺跡、島根大学構内遺跡、金崎遺跡、城の越遺跡が挙げられる。西川津遺跡は1979(昭和54）年から発掘調査が行われており、縄文時代と弥生時代のものを中心とした多量の遺物が発見されている。縄文時代の遺物としては早期末の繊維土器をはじめ、前期、晩期の土器や石製品類が多く出土している。タテチョウ遺跡も1977(昭和52）年より1991(平成３）年まで調査が行われ、西川津遺跡と同様に遺物が多く、この地域における縄文時代のようすを知るうえで貴重な遺跡である。また、西川津遺跡や原の前遺跡ではアカホヤ火山灰が湖底の堆積層中で認められ、前期から中期にかけて、宍道湖がこの付近まで拡張していたことを物語っている。島根大学構内遺跡は1994(平成６）年から発掘調査が行われ、橋縄手地区からはアカホヤ火山灰の純粋層を挟んで早期末から前期末にかけての遺物群が層位的に出土している。主な遺物には前期初頭から前半の頃の丸木舟がある。地質学的調査もあわせて行われており、古環境変遷の復元とそれに適応する人類遺跡の展開過程を追求するうえで重要な遺跡である。なお、金崎遺跡と城の越遺跡からは後期と晩期の土器が採集されている。

（弥生時代）

縄文時代の終わり頃には宍道湖の汀線も原の前遺跡よりもかなり南のタテチョウ遺跡付近まで後退し、周囲は湿地帯となり、初期農耕に適し、水田に利用されていたと想像される。前述の西川津遺跡やタテチョウ遺跡をはじめ貝崎遺跡、橋本遺跡などが知られている。西川津遺跡には前期から中期にかけての多量の土器や木製の農工具、石製品、骨角器などがあり、遺構としては前期の貝塚、中期の掘立柱建物跡なども検出されている。タテチョウ遺跡では前期から後期までの土器や木製品および石製品などが発見されている。両遺跡から出土している特異な遺物としては土笛や櫛、腕輪、管玉などの装身具、分銅形土製品、西川津遺跡からは流水文銅鐸がある。原の前遺跡と同様、川辺の生活や朝酌川の洪水などの痕跡を知る遺跡である。なお、貝崎遺跡や橋本遺跡からも弥生土器が

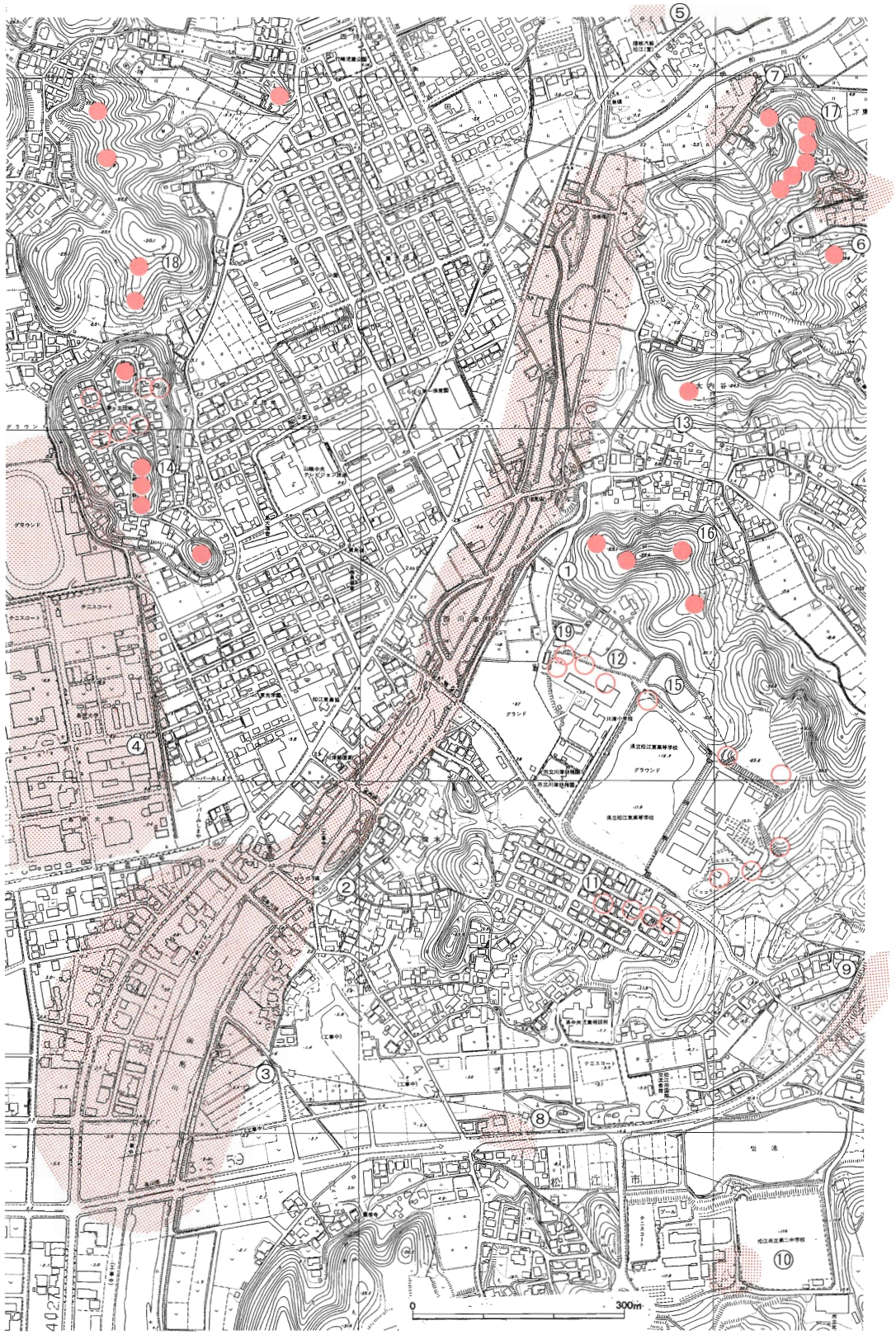
採集されている。

（古墳時代）

朝酌川流域の低丘陵には多くの古墳が分布し、出雲地方における古墳の密集地の一つとなっている。しかし、古い時期の古墳は少なく、山崎１号墳や柴尾２号墳が知られているに過ぎない。山崎１号墳は一辺15mの方墳で、埋葬施設から墳丘裾へ延びる、石を置いた排水溝をもつ。割竹形木棺が直葬されていたと推定されるが、副葬品は少なく、鉄剣と銅鏃のみが出土している。柴尾２号墳は朝酌川中流域の下東川津町に所在する一辺８mの小規模な方墳で、内部主体としては割竹形木棺と箱形木棺が各１基検出されている。出土品には古式の土師器壷や甕がある。中期以降になると周辺部の丘陵に多くの古墳群が出現する。大部分は、須恵器が出る頃のもので、柴古墳群（３基）、馬込山古墳群（４基）、金崎古墳群(11基)、上浜弓古墳群（９基）、住吉神社裏古墳などがあり、一辺20m以下の方墳が相当数築造されるようになる。また、出土品がなく、時期を明確にできないものの、中期から後期にかけての頃と推定されるものに、宮田古墳群、菅田丘古墳群、大内谷古墳群、福山古墳群、深町古墳群などがある。これら古墳群の中でも、規模が大きいのが金崎古墳群である。１号墳は全長35mの前方後方墳で、小形の竪穴式石室をもつ。副葬品には倣製内行花文鏡、子持勾玉などの玉類、剣、矛等の武器および各種の須恵器があり、この古墳は朝酌川流域一帯を支配した首長の墓と考えられる。谷を挟んで西の丘陵にある薬師山古墳からも倣製珠文鏡や古い須恵器が出土している。しかし、後期には、横穴式石室をもつ古墳は原の前遺跡付近の朝酌川中流域には全く存在しない。横穴墓も深町横穴墓のみが知られる程度である。この時期には上流の持田地区付近には太田古墳群(５基）に代表される各壁を一枚石で構成する石棺式石室をもつ古墳が多く築造されている。さらに、全長50mの前方後方墳で横穴式石室を２基もつ薄井原古墳も出現する。これらの古墳の被葬者は、後に出雲国府の置かれた意宇川下流域の古墳群の勢力には及ばないものの、かなりの力を有していた首長であることがうかがえる。一方、集落跡は調査例が少なく、柴遺跡や堤廻遺跡が知られる程度である。柴遺跡は小さな谷合の奥部に所在し、前期の竪穴式住居２棟が調査されている。堤廻遺跡は低丘陵の斜面に位置し、竪穴住居跡21棟、掘立柱建物跡２棟を検出し、この時代の集落を知るうえでの好資料を提供することとなった。その時期は、３棟が前期、９棟が中期前半、８棟が後半で、計20棟が確認されている。なお、西川津遺跡、タテチョウ遺跡、原の前遺跡の河川堆積物中に古墳時代の土師器や須恵器をはじめ、木製品などの遺物が大量に含まれている。この時代の集落が川沿いに幾つも存在し、洪水時に、その一部が川に押し流されたことを示している。また、最近の調査結果より、この時代も今とほぼ同じところが流路となっていたことが知られている。

（奈良時代・平安時代）

733(天平５）年に作成された『出雲国風土記』によれば、奈良時代の西川津町一帯は島根（しまね）郡に属し、当時の郡の役所である郡家（ぐうけ）がある山口郷に比定されている。所在地には諸説があるが、松江市福原町の芝原遺跡では規則性をもつ掘建柱建物群が発見され、その可能性が指摘されている。『出雲国風土記』には朝酌川は水草河とある。その源は二つで、途中で合流し、入海(宍道湖）に注いでいたとある。なお、今は朝酌町で大橋川と合流している。この時期の遺構としてはタテチョウ遺跡において船着き場と推定される杭列があり、付近から「驛」と墨書された須恵器杯が出土している。柴Ⅲ遺跡では８世紀末から９世紀前半にかけての掘立柱建物跡が十数棟検出されている。平安時代初めの集落跡である。

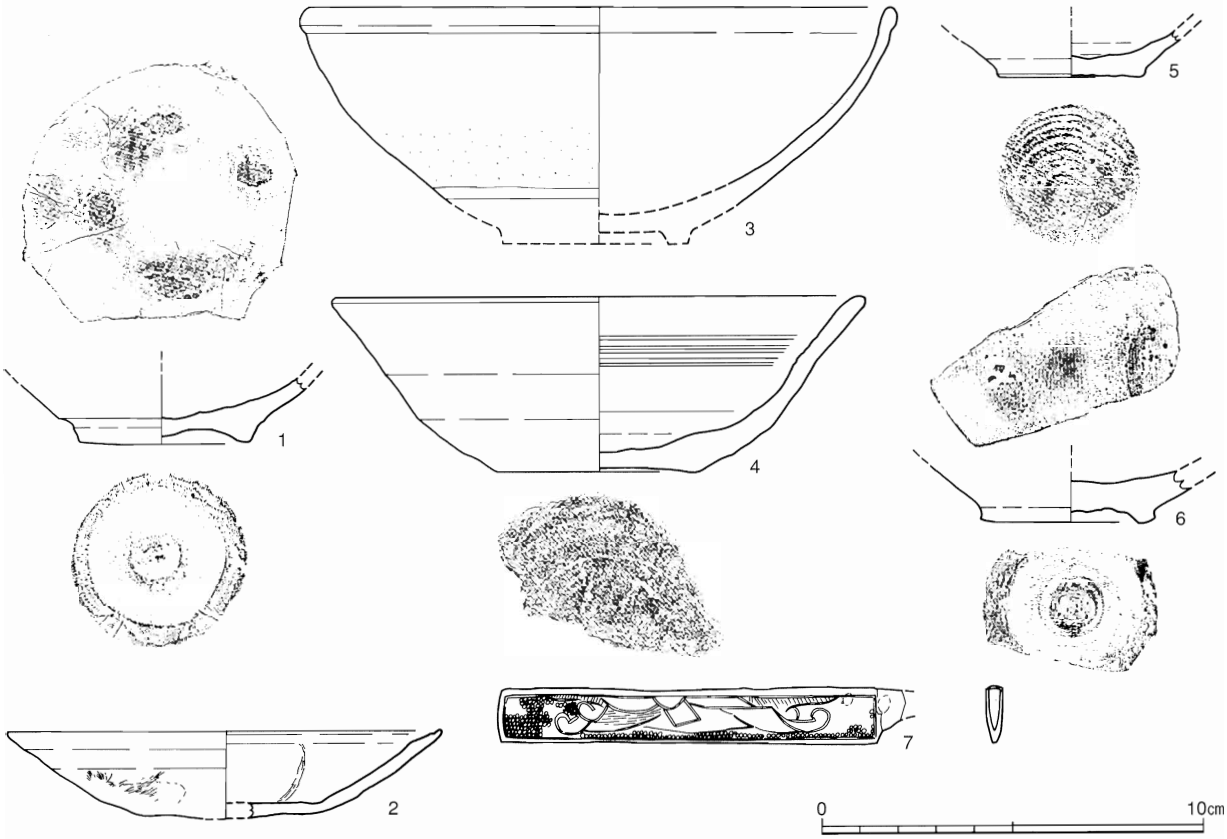


第3図　西川津遺跡と周辺の遺跡　（●現存、○消滅）

1．西川津遺跡　2．原の前遺跡　3．タテチョウ遺跡　4．島根大学構内遺跡
5．散布地　6．散布地　7．貝崎遺跡　8．橋本遺跡
9．柴遺跡　10．堤廻遺跡　11．山崎古墳　12．柴古墳群
13．住吉神社裏古墳　14．金崎古墳群　15．馬込山古墳群　16．大内谷古墳群
17．貝崎古墳群　18．福山古墳群　19．馬込山古墓群

（中世）

西川津地域は中世には「長田郷」と呼ばれるようになった。遺跡としては川津城跡や堂ケ平城跡などの小規模な山城や馬込山古墓群、上浜弓遺跡等の中世末から近世にかけての古墓が知られているに過ぎない。しかし、第４図のように朝酌川改修に伴う発掘調査において、古代末から中世の陶磁器や土師質土器などが出土しており、集落は川沿いに新しい時代にも営まれていたと考えられる。



第4図　Ⅱ・Ⅳ区出土の中世遺物実測図　（1・2・7はⅡ区左岸出土）

１・６は朝鮮王国陶器椀、２・４・５は土師質土器杯、
３は白磁椀、７は小柄である。

【参考文献】

島根県教育委員会　『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅳ　1979 ～ 1992

島根県教育委員会　『西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅰ～Ⅵ　1980 ～ 1999

山本　清　「古代」『川津郷土誌』川津公民館　1982

松江市教育委員会　『山崎古墳』　1984

松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団　『柴尾遺跡発掘調査報告書（1）』　1994

松江市土地開発公社・松江市教育委員会　『堤廻遺跡』　1986

松江市教育委員会　『上浜弓１号墳他発掘調査報告書』　1993

石橋逸郎・近藤正「松江・馬込山古墓群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ　島根県教育委員会 1971

島根大学埋蔵文化財調査研究センター　『島根大学構内遺跡発掘調査概報』Ⅰ・Ⅱ　1994・1995

島根大学埋蔵文化財調査研究センター　『島根大学埋蔵文化財調査研究報告』１～４　1997 ～ 1999

田中義昭「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究』12 島根大学汽水域研究センター 1996

第２節　遺跡の地質と自然環境の変化

周辺地域の地史

西川津遺跡は松江低地に立地する低湿地遺跡である。宍道湖に面して発達する松江低地の環境は、１万年前以降の海面変化などの影響を受けながら、陸域から海域、そして低地の拡大によって再び陸域へと大きく変化してきた。

その中で営まれた西川津遺跡Ⅲ区からは、例えば、沿岸の浅い水域に打たれた杭群や重り石のように、当時の環境を彷彿させる遺構・遺物が出土しており、遺跡の営みが環境の変化と密接に関わっていたことがうかがわれる。

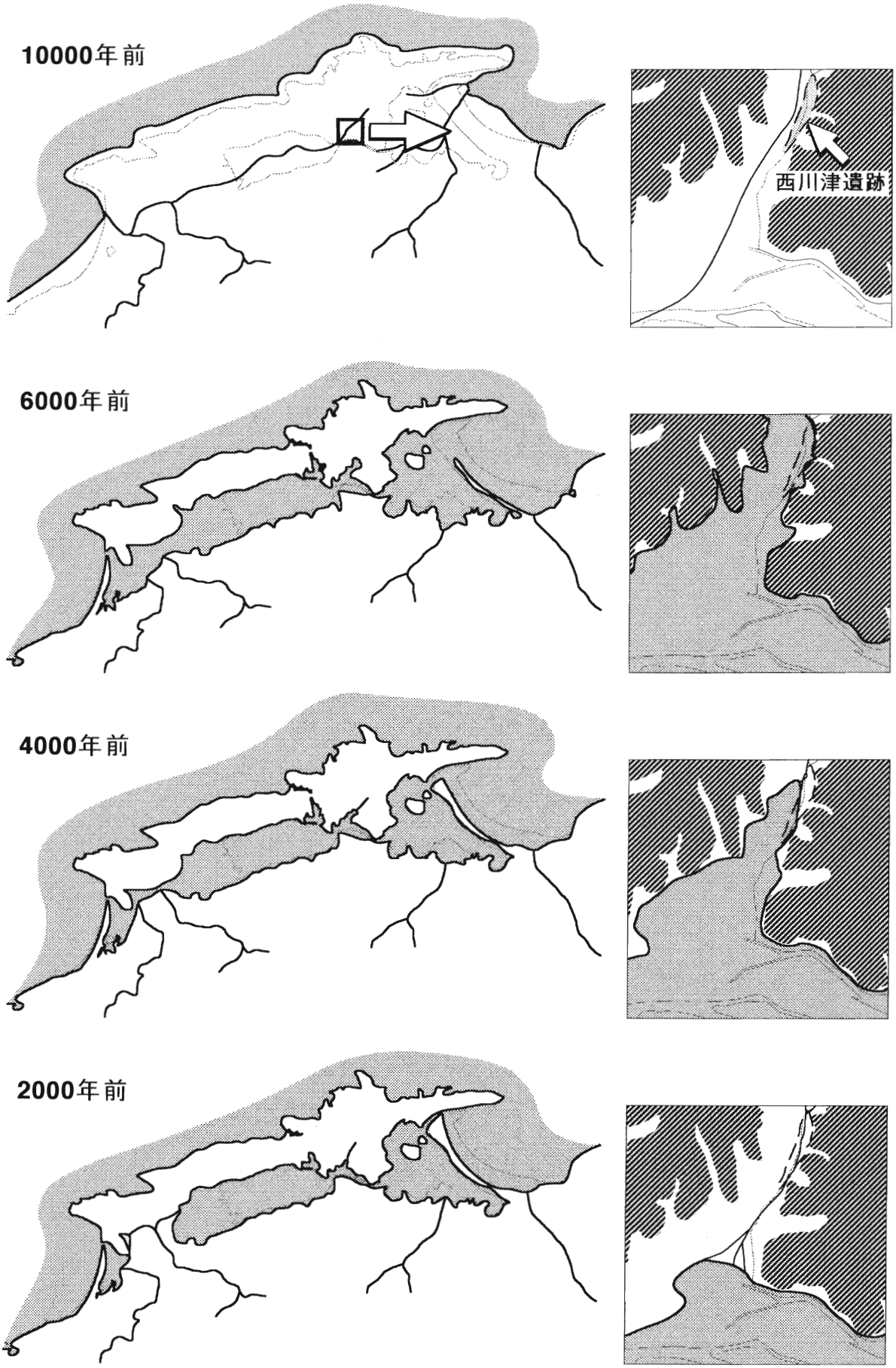
西川津遺跡をとりまく環境の変化は、次のようなものであった。

10000年前（縄文時代早期）：最終氷期が終わり、地質時代では現在に続く「完新世」が始まった。まだ氷期の影響が残っていて、日本列島周辺の海面はマイナス30～マイナス40m付近にあった。この頃、松江低地から西へ向かって流れる河川が深い谷を形成し、宍道湖から出雲平野の位置を流れていた。

6000年前（縄文時代前期）：１万年前から６千年前は気候が急速に温暖化した時代で、それに伴って海面が急上昇した。この海面上昇によって生じた海進現象は「縄文海進」と呼ばれている。氷期に形成された谷には西から海が浸入し、細長い内湾が形成された。松江低地も内湾の一部となり、７千年前頃には温暖な内湾に生息する二枚貝のハイガイなども生息していた。西川津遺跡では、６千３百年前に降灰したアカホヤ火山灰層が内湾底に堆積した泥層に挟まれている。

4000年前（縄文時代後期）：海面は６千年前頃に現在と同水準まで達し、その後、５千年前頃にプラス1.5m程度になっていた。海面上昇が終わると、三角州と海岸砂州が成長して内湾は埋め立てられ、沖積低地が拡大していった。朝酌川の三角州もゆっくりと成長し、松江低地が拡大していった。内湾の西部では出雲平野が拡大して外海との直接の連絡を絶ち、現在のように中海を経て海水が流入する宍道湖へ変化していった。

2000年前（弥生時代）：松江低地は西川津遺跡の下流に位置するタテチョウ遺跡付近まで広がっていた。低地の広い範囲は湿地状で、集落は丘陵裾部の緩斜面や、枝谷の扇状地を中心に形成されていたと推定される。低地をゆっくりと流れる朝酌川は、西川津遺跡付近まで海水が遡上していて、集落近くから海まで、舟での行き来が可能だった。



第5図　遺跡周辺の古地理図

西川津遺跡の堆積状況

本報告の西川津遺跡の各調査区(Ⅱ区右岸、Ⅱ区左岸、Ⅲ区左岸）では、遺物は朝酌川の河川堆積層に包含されていることが確認された。河川堆積層の下位には内湾成泥層が分布していて、ここからは遺物の出土はなかった。

河川堆積層は砂礫層、砂層、泥層が互層する地層で、地層の下部では砂礫層と砂層、上部では泥層が卓越する。また、部分的に腐食植物に富む。

西川津遺跡の河川堆積層は低地を緩やかに蛇行して流れる河川に特徴的なもので、次のような過程で形成された。

河川が蛇行して流れると、蛇行の外側ほど流れは早くなり、内側では遅い。そのため、外側では浸食作用が働き、内側では堆積作用が働く。平常時の朝酌川は流れが緩く、細かな泥が運ばれてゆっくりと堆積し、浸食作用はあまり働かない。降雨によって増水すると、礫や砂が運ばれて堆積し、砂礫層や砂層が形成される。同時に、流れを強くうける蛇行の外側では浸食が起こる。蛇行の内側での堆積、外側での浸食によって、河道の位置は蛇行の外側へ向かって移動し、河道が移動した後に河川堆積層が残される。

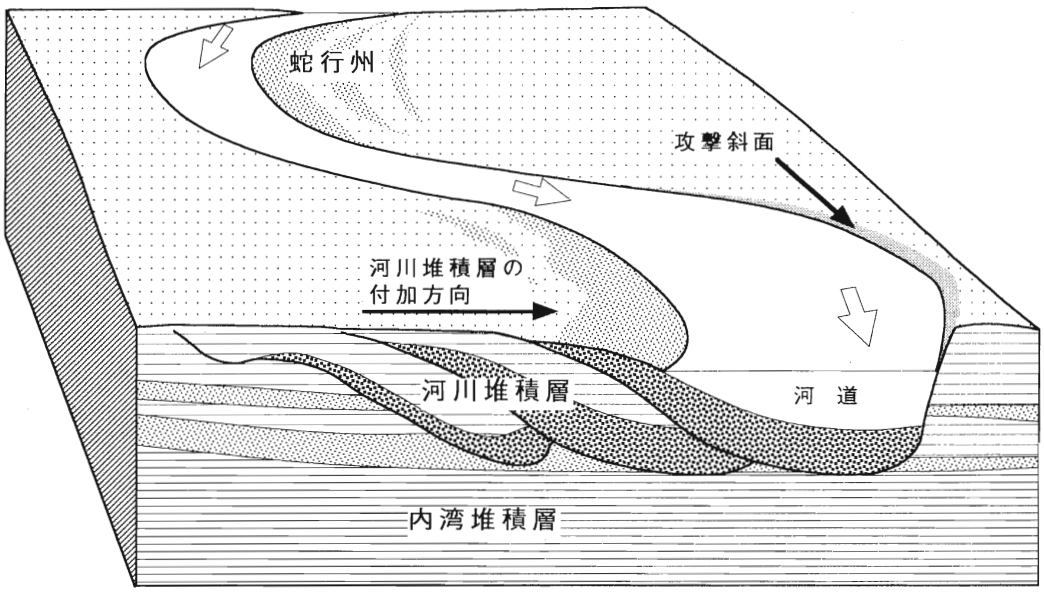
本報告の調査区で検出された遺物包含層は、このような作用が繰り返されて形成されたもので、遺物は礫として含まれている。遺物の多くは礫や砂とともに流されて堆積したと考えられるが、人為的に捨てたり、落としたりしてその場で堆積したと判断できるものもある。

発掘調査では、時間的に連続して堆積した地層グループの把握につとめ、各層から出土した遺物の時期と、上下の地層との関係から堆積時期を判断した。その結果、各調査区では次の時期の河川堆積層が分布していることが明らかになった。

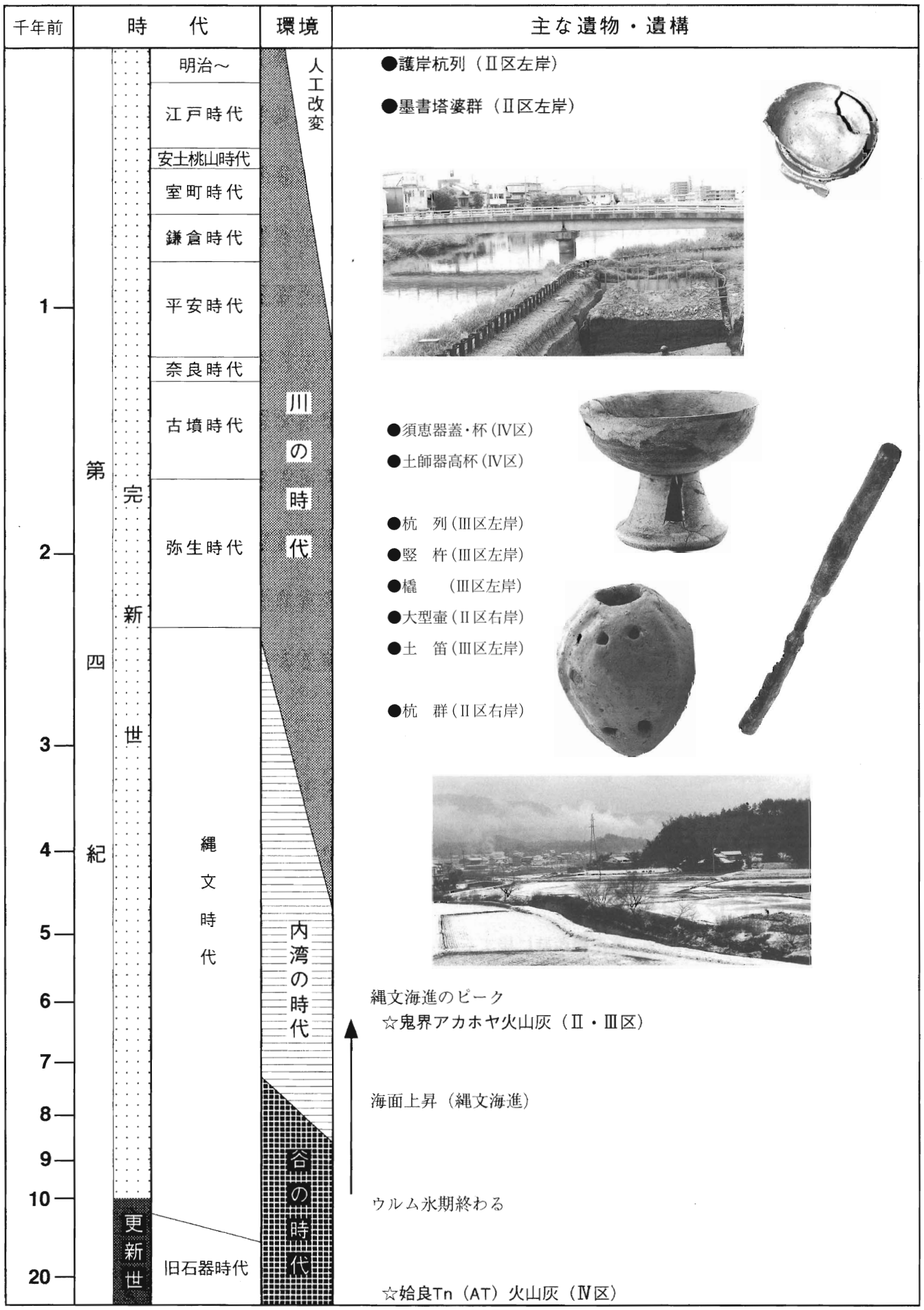
Ⅱ区右岸（1995年調査区）：縄文時代晩期・弥生時代前期・弥生時代中期

Ⅱ区左岸（1994年調査区）：弥生時代前期・弥生時代中期・弥生時代後期・古墳時代前期・近世
（河川堆積層上面から平安時代以降の遺物出土）

Ⅲ区左岸（1994年・1995年調査区）：弥生時代中期・弥生時代後期



第6図　堆積層形成の模式図



第7図　西川津遺跡の変遷

第３章　Ⅱ区右岸の調査

第１節　調査経過と調査概要

調査経過

西川津遺跡Ⅱ区右岸は、宮尾橋から学園橋の間の西側に該当する。1995年度調査はⅡ区の中央部を西側の住宅街から流れる水路を境とし、南半分を対象とした。まず、調査対象地の南北端でトレンチ調査を行ない、予め土層や深さを確認した。この成果を基に、南北60m、幅は５～７ｍを対象に調査区を設定した。この２個のトレンチを南トレンチ、北トレンチと呼び、その間を南からＡ、Ｂ、Ｃ調査区とした（第８図)。調査は下流部のＡ調査区から始め、水田の耕作土と客土を重機により除去した。その下部にある灰褐色粘土層から遺物を含む砂礫層までを人力で掘り下げた。

なお、Ⅱ区右岸の内、水路より北側は1996年度に発掘が行われている。(注１)

調査概要

遺構としては河川堆積にかかる縄文時代末頃の河道跡とそれに伴う杭群および、それを切り込んでいる弥生時代の河道跡を検出した。縄文時代末頃の河道跡の最深部分は標高マイナス120cmである。

調査区西側の河道跡の斜面は北東から南西の方向に認められる。Ｂ調査区では河道の裾部分で、南北方向の古流向を示す流痕が２条確認できた。しかし、砂礫層は薄く、多くは弥生時代中期以降の粘土層（泥層）が厚く堆積していた。

遺物は、縄文時代末頃の河道跡では縄文土器(注2)の破片が僅かに認められた。弥生時代前期の河道跡では、Ａ、Ｂ調査区の砂礫層中から前期後半の弥生土器(注3)(第13図)が少量出土している。土器以外の遺物としては石製品と獣骨が僅かに存在する。全体に遺物は少なく、コンテナ６箱分ほど出土している。

第２節　各調査区の遺構と遺物

（１）南トレンチ

Ⅱ区右岸の南端に当たり、宮尾橋西詰に接する。調査区は南北４ｍ×東西４～5.5mの大きさで、表土から2.4mの深さまで掘り下げた。なお、砂礫層を取り除いた底部分は標高マイナス170cmである。

この区は弥生時代前期の河道跡であり、遺構は認められなかった。層理面は東に傾斜しており、河川は西から東に移動したとみられる。調査区南壁の土層堆積図(第10図）では、褐灰色泥層は厚く、砂礫層は西側端で標高マイナス160cmからマイナス175cmの間に薄い層が一層存在する。この層からは、縄文と弥生時代前期の土器が少量と鹿の頸椎が１個出土している。なお、上層の粘土層からは犬の右大腿骨が１個発見されている。

土器で図示できたのは、縄文土器の破片(第９図１）と弥生土器の傘形の蓋（２）である。後者の時期は弥生時代の前期と考えられる。

（２）Ａ調査区

南トレンチの北側、南北10m×東西5.5～６ｍの大きさの調査区で、表土から180cmの深さまで掘

り下げた。なお、砂礫層を取り除いた底部分は標高マイナス180cmである。

この区は、弥生時代前期の河道跡であり、長さ約10m程にわたって水の流れた跡（流痕）が標高マイナス100～150cmの間に７、８条認められた。幅は10～30cmと狭く、深さは５～10cm程で浅い。層理面は南トレンチと同様に東に傾斜しており、河川は西から東に移動している。調査区北壁の土層堆積(第10図）では、砂礫層の上に堆積している泥層が厚く、100～150cmの厚さである。この層内の上部分の標高マイナス80cm付近で、弥生時代中期中葉の土器が２個体分出土している（第12図２、３)。泥層はその頃に堆積したと推定される。泥層の上には砂層と泥層が交互に堆積しているが、砂礫層は確認できなかった。なお、この調査区におけるアカホヤ火山灰の堆積は標高マイナス2.6mで認められ、１cm程の薄い層であった。

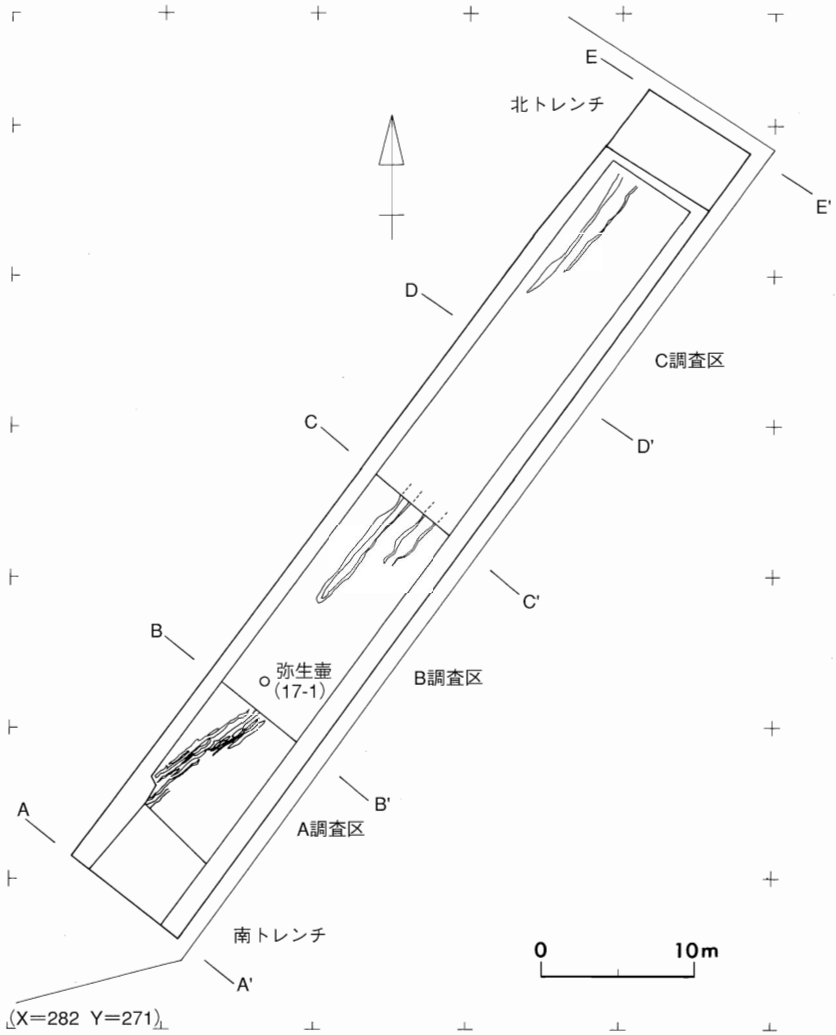
第13図は砂礫層出土の土器。１～４、15は縄文土器、５～14、16、17は弥生時代前期の土器である。１～３は縄文土器の深鉢。表面には条痕を施す。１は前期の肥厚帯をもつ鉢と考えられる。２は表面に刺突文が付く。土器片の周りを加工し、円盤状にしている。２～４は晩期の深鉢と推定される。15は鉢の底部。上げ底状となる。５～８は壷の破片。５は頸部と胴部に段をもつ。６は頸部と胴部に段をもち、下方にヘラによる平行直線文２条と１条巡らし、その間に貝殻による羽状文を施す。７は胴部の破片で、平行と斜めの３条の平行直線文を引く。８は頸部で、刻目をもつ２条の突帯が付く。９は小形品で、口縁部は短い。10は、口縁部が少し内傾する無頸壷で、コップ状を呈す。口縁部の下方に孔が開き、２個並ぶ。底部は上げ底状となる。11～14は、口縁部が少し外反する甕である。11はヘラによる４条の平行直線文をもつ。12は１条の沈線と刺突文を描く。13は９条の、14は４条の平行直線文をもつ。16、17は弥生土器の底部である。

獣骨としては、砂礫層から猪の右上顎骨と左下顎骨が出土している。

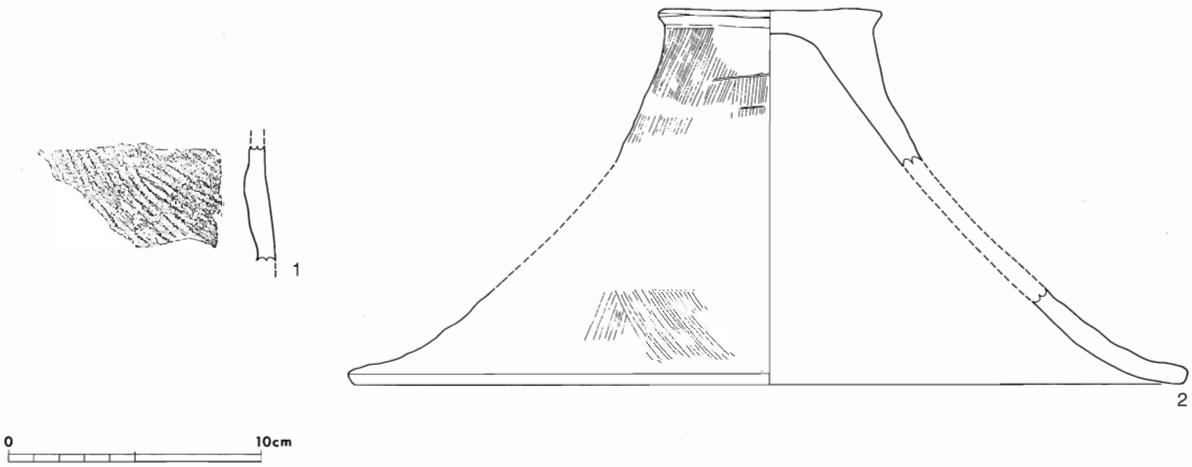
（３）Ｂ調査区

Ａ調査区の北側の区で、大きさは南北16m×東西６ｍで、表土から100～150cmの深さまで掘り下げた。なお、砂礫層のある底部は標高マイナス110cmである。

この区にもＡ調査区から延びる弥生時代前期の河道跡と、この河道に切り込まれている縄文時代後・晩期の河道跡が検出されている。縄文時代の河道跡では、水の流れた跡（流痕）２条が調査区中央から北側にかけて、調査区に平行して存在した。西側の流痕は、幅が１ｍで、深さは20cmである。東側にある流痕は、幅が１ｍであるが、深さは５cmで浅い。標高はマイナス110cm付近である。この河道にある砂礫層は調査区の中央で厚さ５cm程水平に堆積している。後の弥生時代の河道に比べて地層の傾斜が緩やかで、面的な広がりが大きいことから、河道の幅が広かったと推定される。層理面を見ると、上層部分の弥生時代以降の層は南側の調査区と同様に泥層が東に傾斜している。調査区北壁の土層堆積（第10図）では、砂礫層の上に泥層が10～20cm程堆積する。さらに、厚さ１～1.5cm程の砂層が３層、水平に堆積している。さらに20cm以上の泥層があり、この泥層を弥生時代の河川が斜めに切り込んでいる。この川の底部は調査区の東端になり、Ａ調査区の流路の延長線とも重なる。この弥生時代の切り込みが西側斜面に立ち上がる標高マイナス110cmの粘土層内で、弥生時代前期後葉の壷が横に倒れた状況で発見された（第17図)。口径19.8cm、高さ39.5cmを測る大形の完形品で、口縁部は大きく外反し、頸部にはヘラで４条の平行直線文を巡らす。同様な壷はⅢ区Ｃ調査区でも出土している（第132図６)。この土器は過って川に落とされたものか、意図的に投棄さ



第8図　Ⅱ区（右岸）調査区位置図



第9図　Ⅱ図（右岸）南トレンチ　砂礫層出土土器実測図

表1　Ⅱ区（右岸）砂礫層出土土器観察表

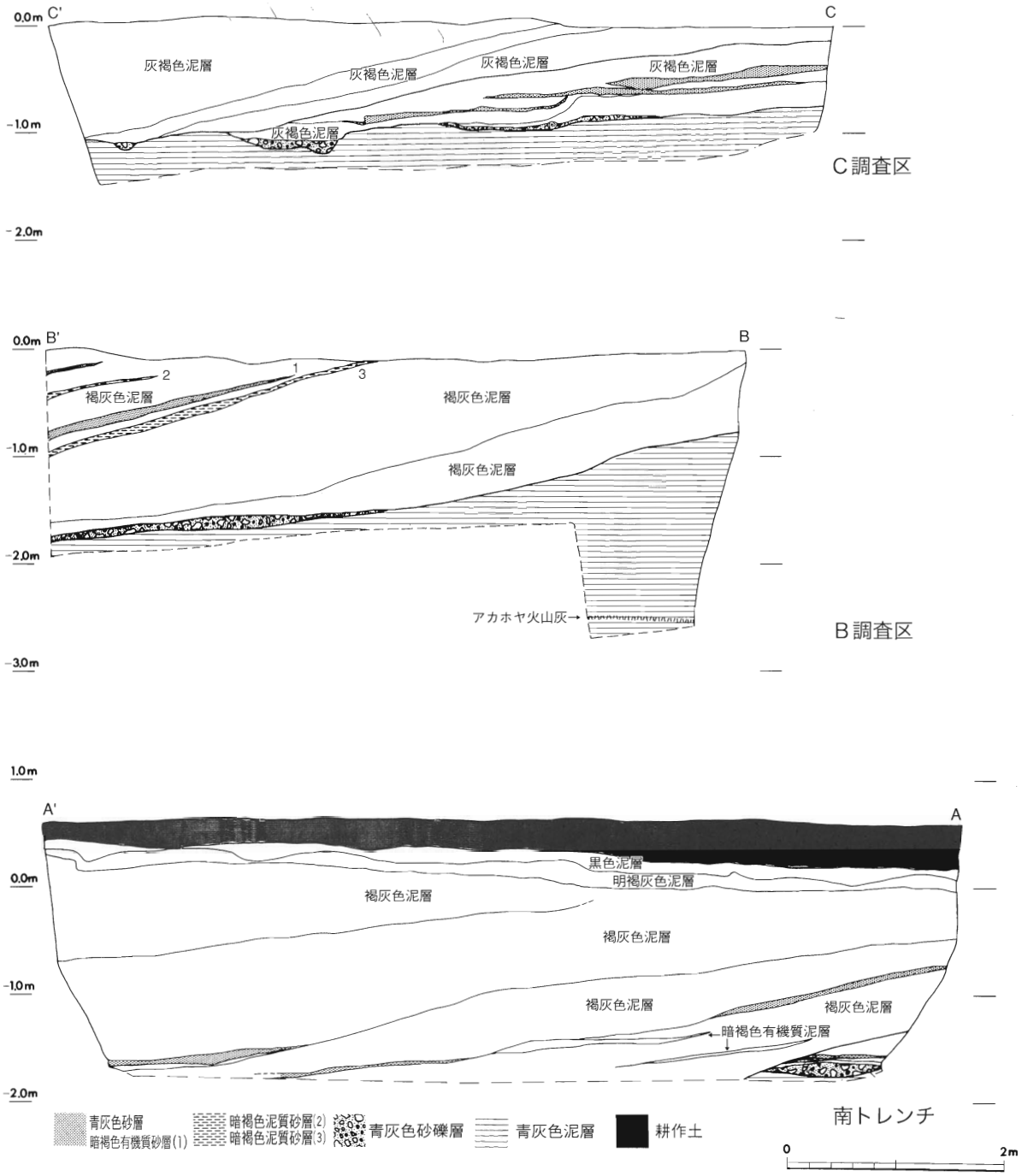
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
9－1	縄文　鉢	砂礫				ナデ　二枚貝条痕	細砂含む	暗褐色		
9－2	弥生　蓋	砂礫 (最下層)	33.1 天井径8.7	15.0 (推定)	傘形	外面　ハケ　ナデ 底部ケズリ 内面　ヨコナデ	粗砂含む	黄褐色	天井部完存	口縁部内面スス付着

（胎土については、便宜上0.5㎜以下の砂粒を微砂、1㎜前後を細砂、それ以上を粗砂と呼ぶこととした）

れたかは分からない。なお、内部には外と同じ泥が詰まっていた。

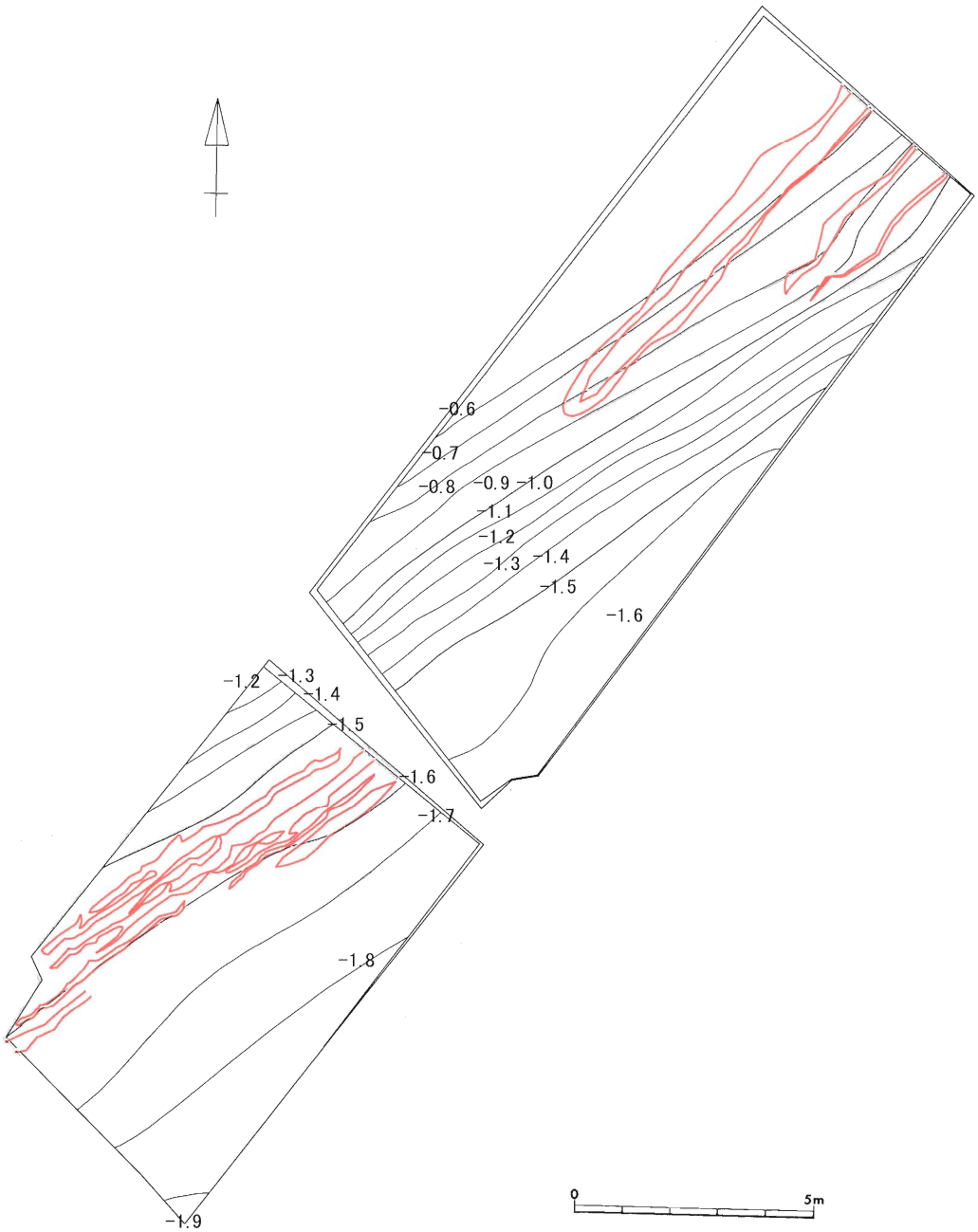
調査区の中央部から西側にかけてある砂礫層からは条痕で調整された前期の縄文土器の鉢片が出ている。弥生時代の河川堆積層の泥層からは前期後葉の壷と中期前葉の櫛による直線文を描く鉢片が出土している（第14図１～３）。Ａ調査区と同じく、泥層はその頃に堆積したと推定される。

獣骨には猪の右上顎骨、鹿角、鹿の左肩甲骨、鹿の右上腕骨の遠位端がある。鹿角は又部と両面が加工され、製品を作る途中のものである（第14図４）。

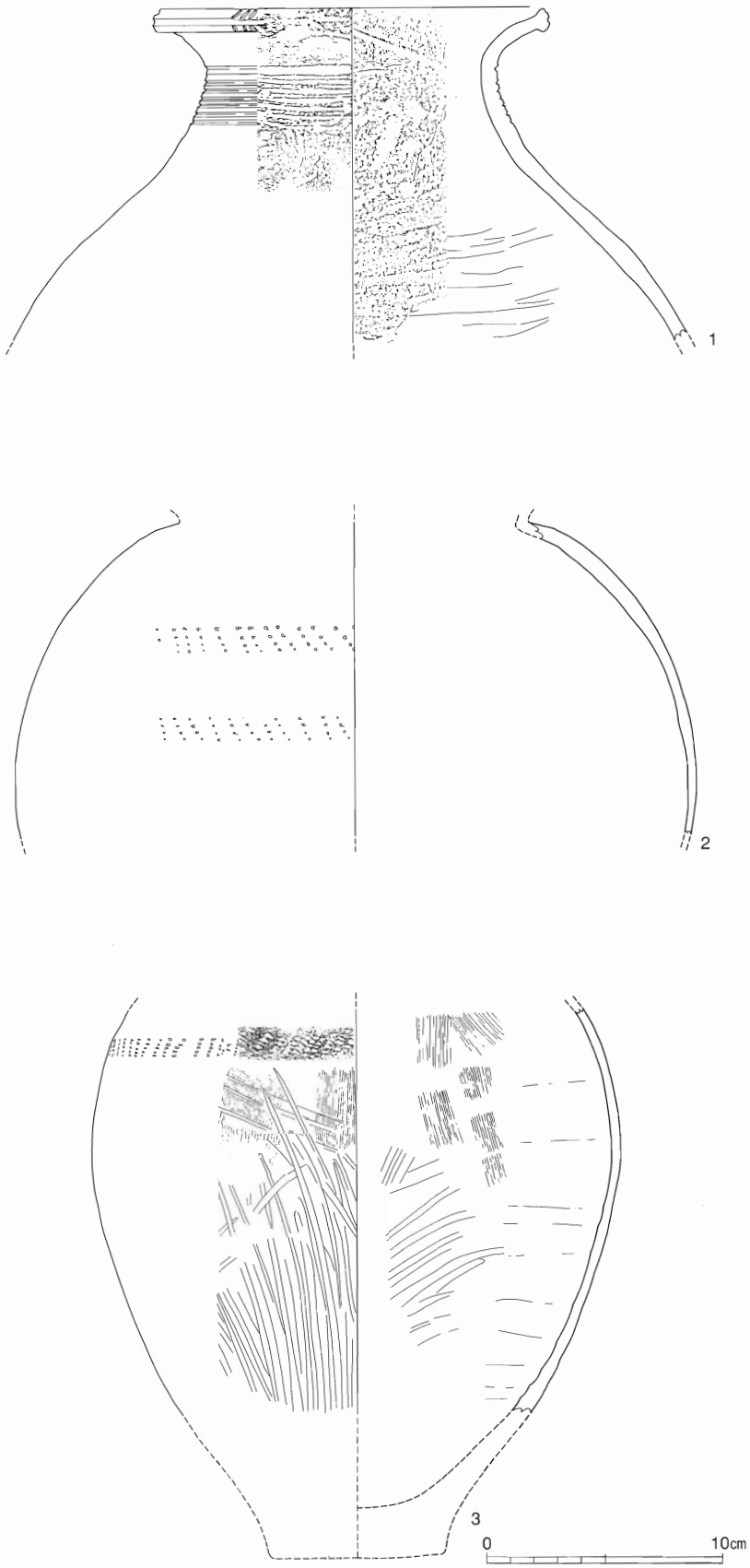


第10図　Ⅱ図（右岸）B調査区（南壁）・C調査区（南壁）・南トレンチ（南壁）土層堆積図

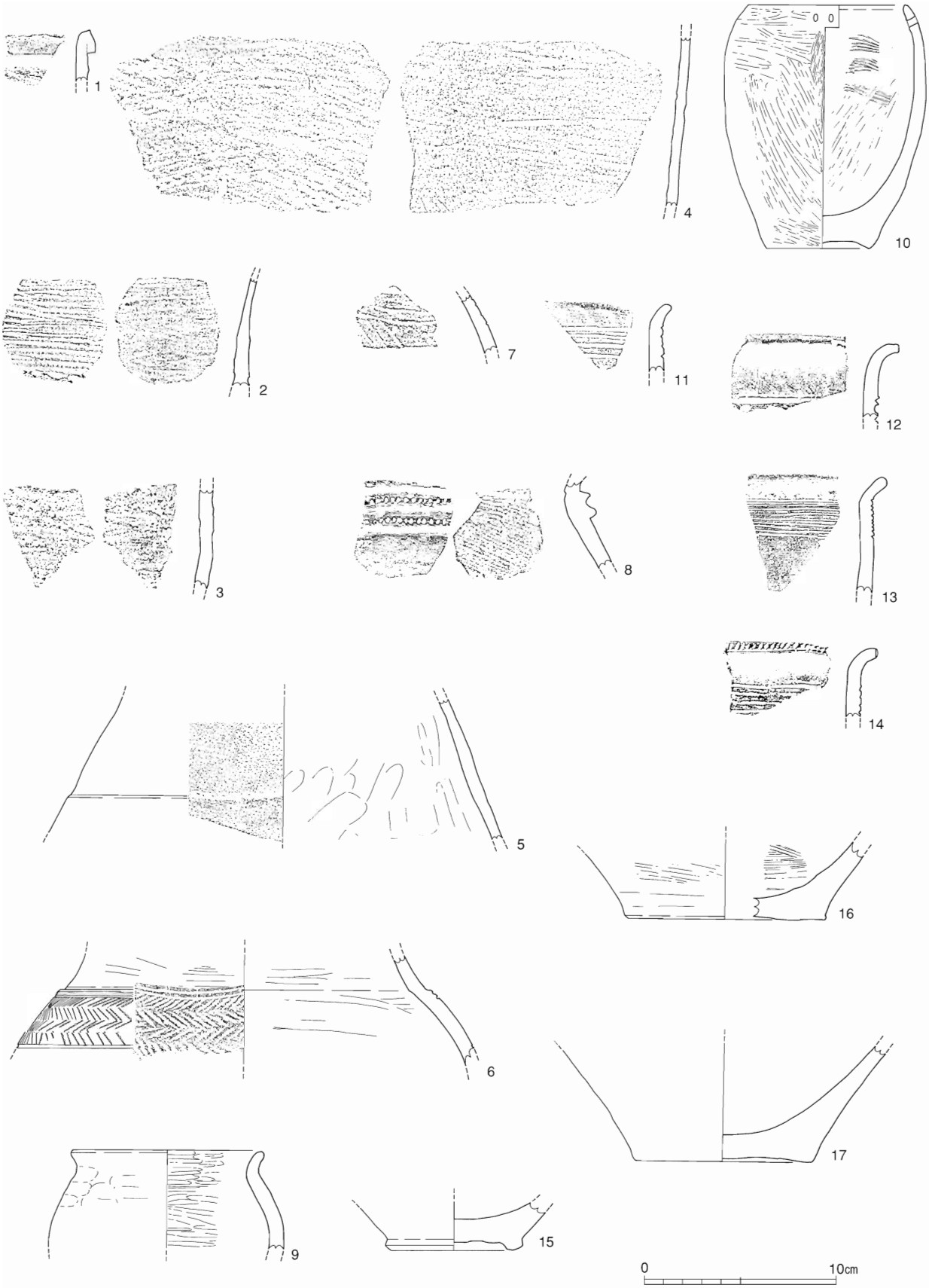
Ⅱ区（右岸）A調査区　弥生時代前期河道跡



第11図　Ⅱ区（右岸）A・B調査区地形測量図　（赤線は流痕）



第12図　Ⅱ区（右岸）A調査区　粘土層出土土器実測図



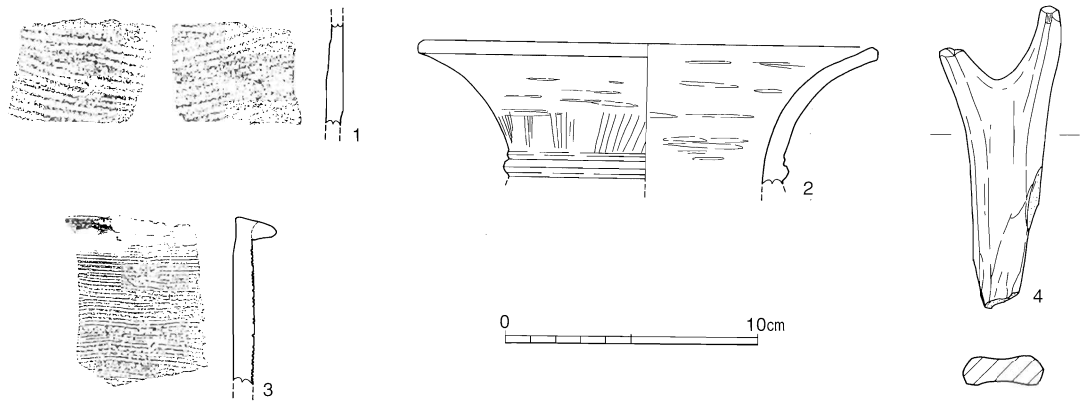
第13図　Ⅱ区（右岸）A調査区　砂礫層出土土器実測図

表2　Ⅱ区（右岸）A調査区粘土層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
12－1	弥生　壷	粘土	16.9		口縁部に有軸羽状文 ヘラ描平行直線文７条	外面　ヨコナデ　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	黄褐色	15	磨滅が著しい
12－2	壷	粘土			肩部に４連の櫛状刺突文	外面　ヨコナデ　細かいハケ 内面　ナデ	細砂含む	外面黒色 内面黄褐色		
12－3	壷	粘土			５連の櫛状刺突文	外内面とも細かいハケ　ヘラミガキ	微砂含む	茶褐色		内面に水草付着

表3　Ⅱ区（右岸）A調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高（cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
13－1	縄文　鉢	砂礫			口縁部外面に肥厚帯が付く	外面　ヨコナデ　ケズリ 内面　ケズリ	細砂含む	黄褐色		
13－2	鉢	砂礫				外面　二枚貝の条痕 内面　二枚貝の条痕の後ケズリ	細砂含む	灰褐色		外面スス付着 周囲を加工し、円盤状となる
13－3	鉢	砂礫				外面　ケズリ 内面　ナデ	細砂含む	暗褐色		
13－4	鉢	砂礫				外内面とも二枚貝の条痕か	細砂含む	外面灰褐色 内面こげ茶		
13－5	弥生　壷	砂礫			肩に段	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	細砂含む	灰褐色		磨滅が著しい
13－6	壷	砂礫			ヘラ描平行直線文 貝殻羽状文	外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	外面 灰褐色 内面 黒色		
13－7	壷	砂礫			ヘラ描平行直線文	外面　ヘラミガキか 内面　ナデか	細砂含む	灰褐色		
13－8	壷	砂礫			突帯２条	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ 内面　ハケ	細砂含む	外面茶褐色 内面灰褐色		
13－9	壷	砂礫	10.2			外面　ヨコナデ　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	黒色		小形品 外内面スス付着
13－10	壷	砂礫	8.4 底径　5.5		無頸壷 ２方向に２個ずつの孔が穿ってある　上げ底	外面　ハケの後ヘラミガキ ヨコナデの後ミガキ 内面　ヘラミガキ　ヨコナデ ハケ	密	茶褐色	ほぼ完存	
13－11	甕	砂礫 (最下層)			ヘラ描平行直線文４条	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ナデ	細砂含む	こげ茶		外面スス付着
13－12	甕	砂礫			ヘラ描沈線 刺突文	外面　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケ	微砂含む	外面茶褐色 内面黄褐色		炭化物付着
13－13	甕	砂礫 (最下層)			ヘラ描平行直線文９条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケ	細砂含む	黄褐色		外面スス付着
13－14	甕	砂礫			刻目　ヘラ描平行直線文４条	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ナデ	細砂含む	暗褐色		外面スス付着
13－15	縄文(底部)	砂礫	底径　7.2		上げ底	外内面ともナデ	細砂含む	灰褐色	55	
13－16	弥生(底部)	砂礫	底径 10.4			外面　ナデの後ミガキ 底部ヘラミガキ 内面　ナデの後ヘラミガキ	細砂含む	黄褐色	45	
13－17	(底部)	砂礫	底径　9.4			内外面ともナデ	細砂含む	外面灰褐色 内面茶褐色	55	



第14図　Ⅱ区（右岸）B調査区　泥層・砂礫層出土土器・鹿角実測図

（4）　C調査区

B調査区の北側に設定した。南北16m×東西６mの調査区で、表土から150cmの深さまで掘り下げた。なお、砂礫層のある河道の底部は標高マイナス100～120cmである。

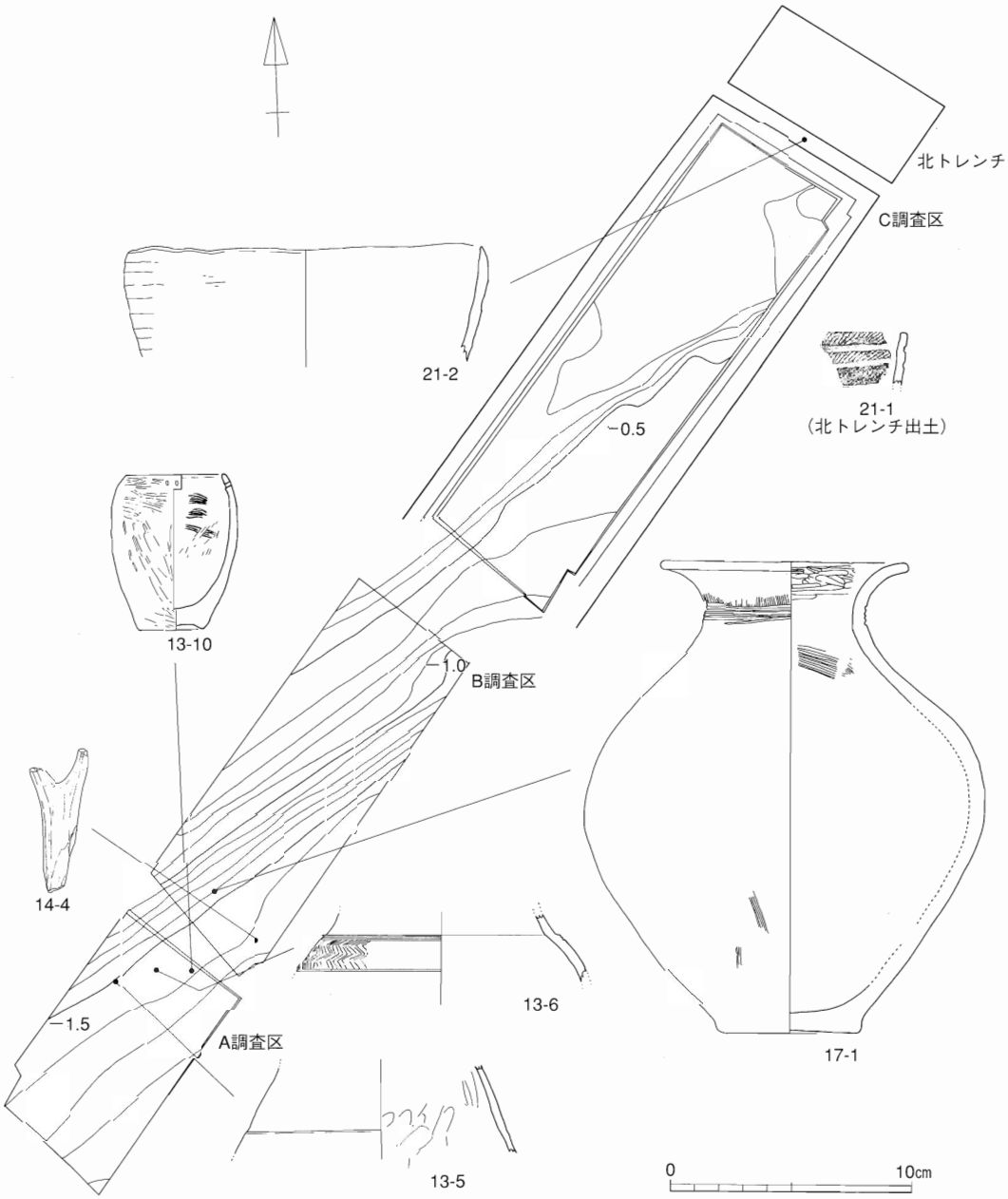
この調査区にもB調査区から延びる縄文時代の河道跡と、この河道を切っている弥生時代前期の河道跡の肩部分が検出されている。縄文時代の河道跡では、調査区中央から北側にかけて、調査区と平行する流痕を１条検出した。幅は1.3mで、深さは20cm程である。

調査区全域において、細長い丸木でできた30本近くの杭が打ち込まれた状態で検出された。また、弥生時代前期の河道跡では、洪水で流されたアカガシなどの大きな流木３本も標高０m付近で発見された（第22・23図、写真図版5～7）。丸木の杭は、大きいものは最大径９cm、長いものは２m40cmある。多くは皮が付いたままのものである。これらは列としては並ばず、規則性は認められない。範囲は北トレンチから南はB調査区の北側までに存在し、1996年度の調査では右岸の学園橋付近までの広い範囲で検出されている[注4]。杭の検出状況をみると、打ち込み時に杭の周囲の地層が引きずり込まれている状況から打ち込まれた面が判別できるものがある。それによると、縄文時代末の河道跡に伴う地層の堆積以前に当時宍道湖底であった泥層に打ち込まれたものと、堆積の途中で打たれたものとがあり、ある程度の期間に亙って杭が何度か打たれたことを物語っている。このうち、縄文時代末の地層の堆積以前に打たれたもののほとんどが上端を下流に向けて傾いた状態で出土し、途中で折れたものもあった。杭Bはそのうちの一本であるが、その土層観察によると杭が折れている面（標高マイナス70cm）の上に砂礫層が厚く堆積している。杭Bはこの砂礫層を堆積させた急な水流（大洪水と考えられる）の力で下流側に折れたものと見られる。傾いた杭A群でも、打ち込み面の直上にある上記の砂礫層が杭の上流側に落ち込んでいる様子が認められた。また、砂礫の落ち込み部分の上流側壁面に、当初は、杭がその面から打たれていたことを示す地層の引きずり跡がある。このことから、本来は垂直に打たれていた杭が縄文時代末の砂礫層堆積時の水流によって押し倒されて傾いたと判断できる。

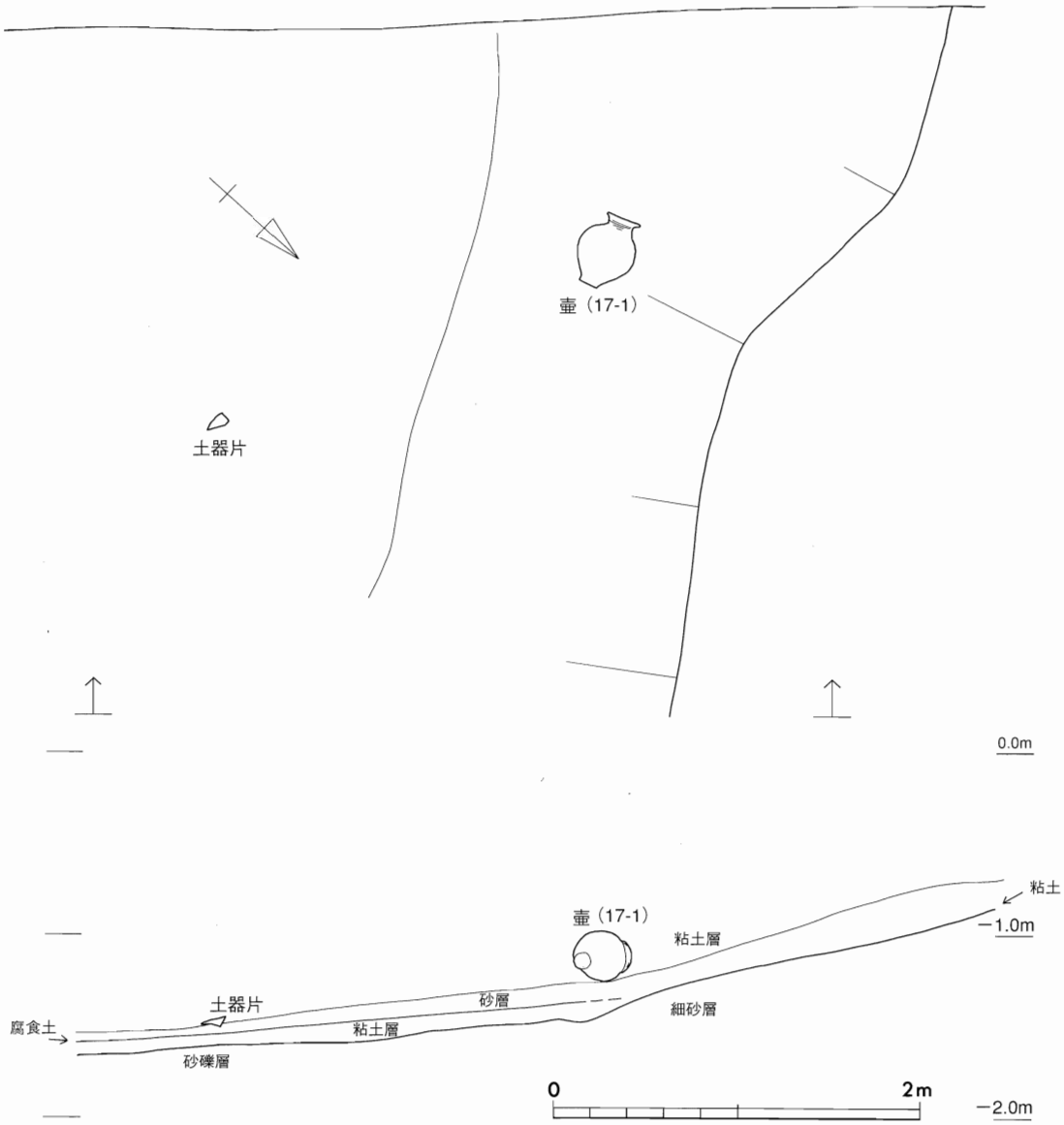
上記の杭以外に、垂直に近い状態で残っている杭C群も見られた。これらは、A群や杭Bのように急な水流(大洪水）の影響を受けずほぼ直立していたので、河道に伴う地層の堆積途中に打たれたと見られる。中には、標高０mの高さで巨大な流木に頭を折られた杭Dのようなものもある。流木は杭Dなどにぶつかって止まったのであろう。他のC群の杭もほとんどが標高０mで頭を折られて

表4　Ⅱ区（右岸）B調査区泥層・砂礫層出土土器・鹿角観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
14－1	縄文　鉢	砂礫				二枚貝の条痕	細砂含む	灰褐色		外面スス付着
14－2	弥生　壷	青灰色細砂	18.0		頸部に貼付突帯	外面　ヨコナデ ハケ ヘラミガキ 内面　ヨコナデの後ヘラミガキ	細砂含む	灰褐色		外面スス付着 周囲を加工し円盤状となる
14－3	鉢	褐灰色粘土			櫛描直線文５条	外面　ヨコナデ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	茶褐色	5	スス付着
14－4	鹿角	砂礫	長 12.0 幅 4.8	厚 1.1						加工されている



第15図　Ⅱ区（右岸）A・B・C調査区　河道跡測量図と遺物出土位置図

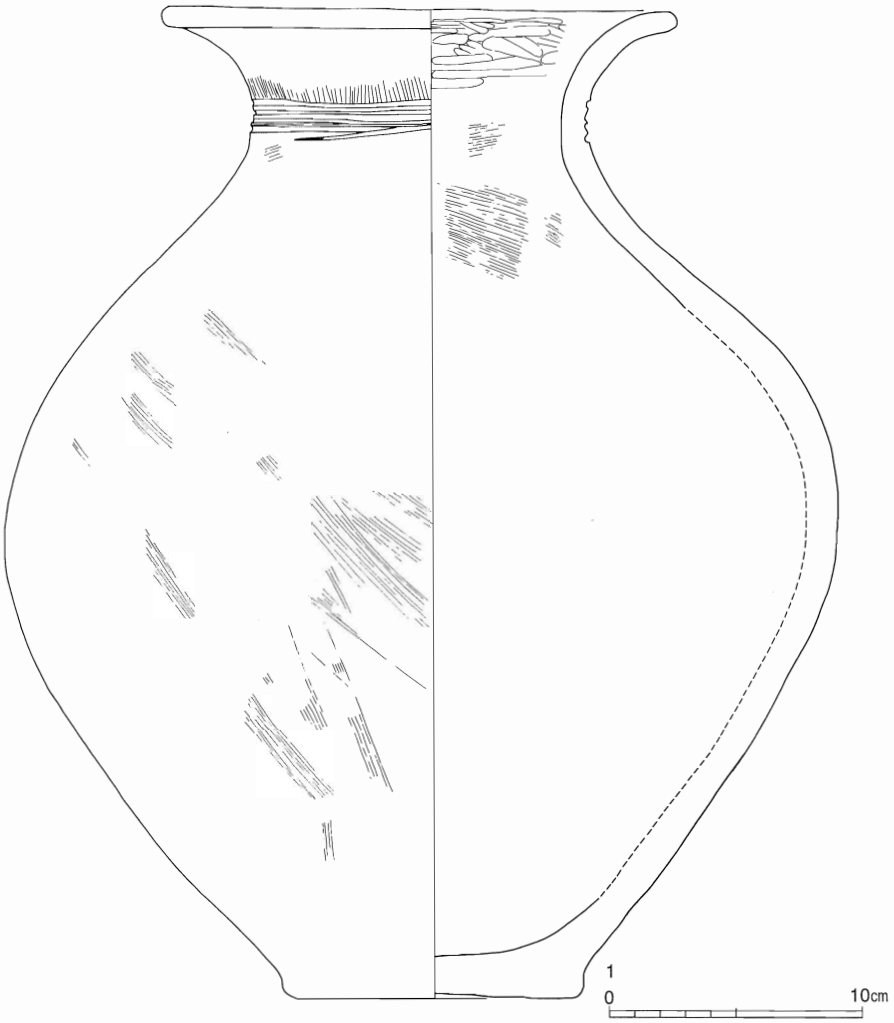


第16図　Ⅱ区（右岸）B調査区　土器出土状況実測図

おり、流木がぶつかって折れた可能性がある。また、これら（C群）の頭の部分や流木にフナクイムシの巣穴が見られるので、当時の水面がほぼ標高０m付近であったことも判明する。

杭の上端はいずれも朽ち折れており、そこにフナクイムシの巣穴が見られるものが多い。朽ち折れた部分より上は、打たれた時に水面上に顔を出していたと思われる。なお、杭以外に杭の使途や性格を示すものはなかった。

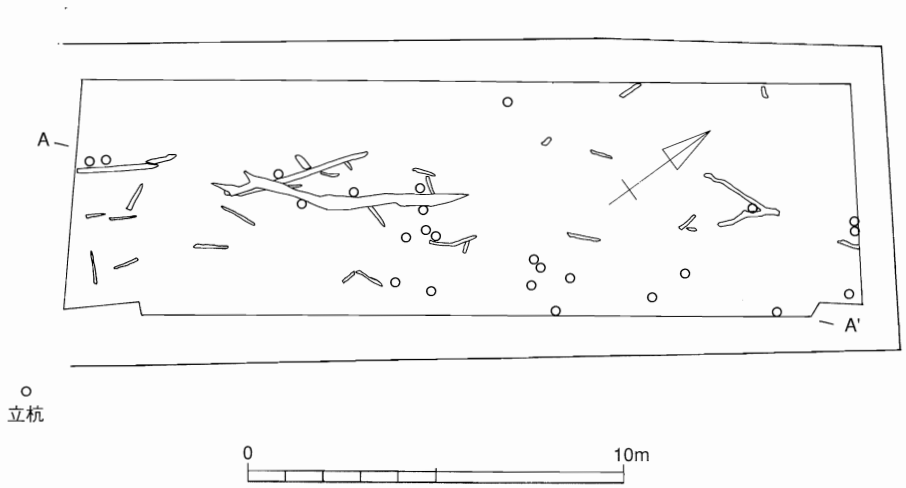
調査区セクションベルト北壁の土層（第19図）をみると、縄文時代の砂礫層が３層ある。ほぼ水平に堆積しているが、厚さは最下層が薄く、５cm前後である。中層と上層は25～30cmで厚い。最下層の標高はマイナス120cm付近で、最上層の上面はマイナス40cmを測る。上下の砂礫層から縄文土器がポリ袋２個分出土しているが、総て細片である。第20図１は前期、２は晩期の鉢の破片である。



第17図　Ⅱ区（右岸）B調査区　出土土器実測図

表5　Ⅱ区（右岸）B調査区出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
17－1	弥生　壷	細砂 粘土	19.8 底径 10.7	39.5	ヘラ描平行直線文４条	外面　ハケ　ナデ　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ヨコハケ ナデ	粗砂含む	褐色	ほぼ完存	黒色塗彩



第18図　Ⅱ区（右岸）C調査区　流木・杭検出状況図

（5）北トレンチ

Ｃ調査区の北側に設定したトレンチ。大きさは南北４ｍ×東西８ｍで、表土から２ｍの深さまで掘り下げた。なお、この区にもＣ調査区から延びる砂礫層があり、Ｃ調査区と同様に３層存在し、最下層の下部は標高マイナス110cmを測る。

縄文時代の河道跡の堆積層と底に打ち込まれた細長い丸木の杭が６本検出された。傾いたり、折れているが、すべて上部は下流を向いていた（第23図、写真図版７）。

調査区北壁の土層(第19図）をみると、ほぼ水平に堆積している。厚さは、中層が薄く、５cm前後である。上層は厚く、20～30cmである。最下層は厚さが20cmの所と５cm程の部分とに分かれ、さらに端部では認められない。最下層の標高はマイナス110cm、最上層の上面はマイナス15cmであった。また、砂礫層の間や泥層の上には砂層が数層存在した。厚さは５cmから20cmとまちまちである。これらの砂礫層と砂層から縄文土器が２片出土している。第21図１は縄文時代中期末から後期頃の鉢で、磨消縄文の破片である。２は浅い鉢で、文様はない。晩期か。

なお、東端の上部の標高０ｍ付近で、他の調査区と同様に縄文時代の堆積層を削る弥生時代の河道跡の肩部が認められた。

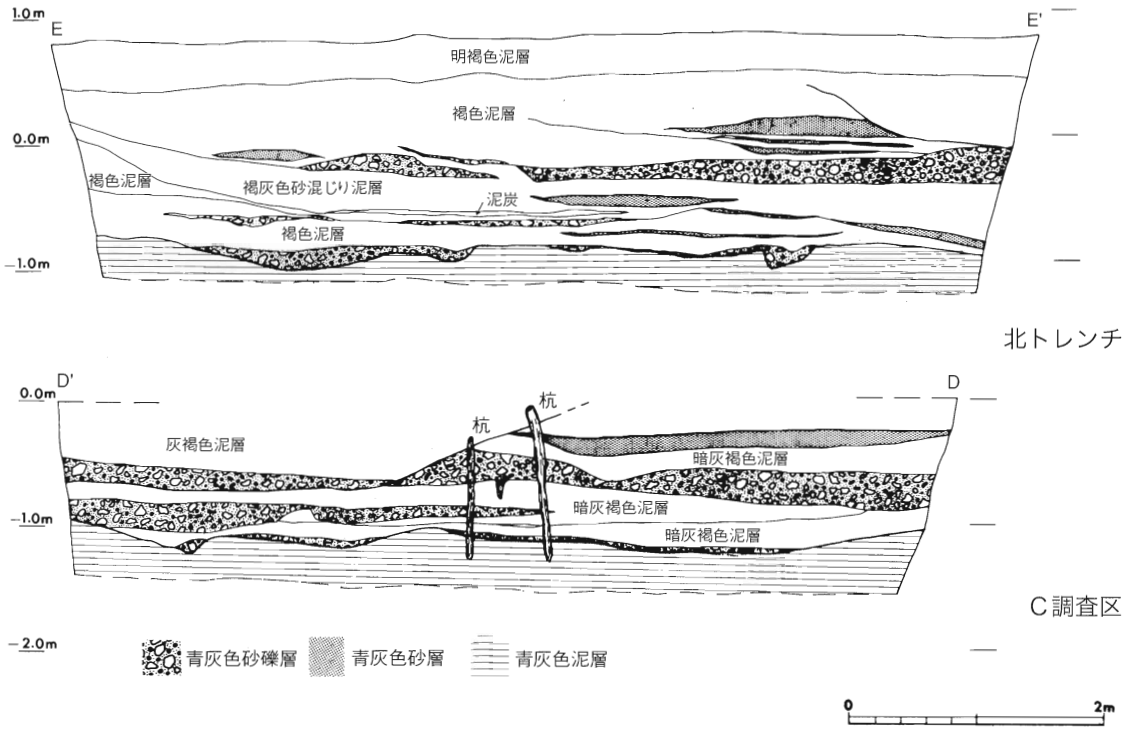
（注）

（１）島根県教育委員会『朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第 11 冊西川津遺跡』Ⅵ 1999

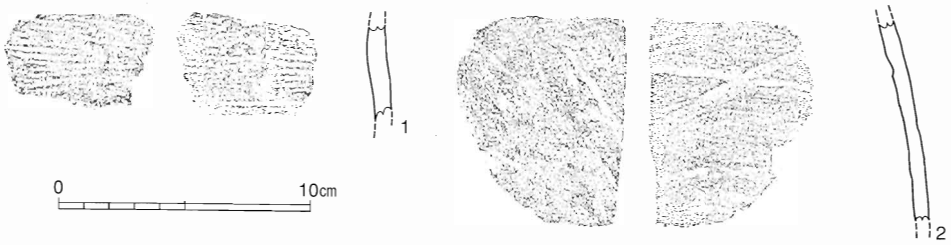
（２）縄文土器の時期などについては柳浦俊一氏の教示を得た。

（３）弥生土器の時期については、正岡睦夫・松本岩雄『弥生土器の様式と編年』木耳社 1992 による。第Ⅰ様式を前期、第Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ様式を中期（前葉 中葉 後葉)、第Ⅴ様式を後期として記述している。

（４）注１に同じ。1996 年度の調査では約 300 本の杭が検出されている。規則性がないので、魚を捕る施設および杭に付着した貝や海藻を採取する簡単な施設が想定されている。なお、分類は１～５類までに分けられてあり、今回もその分類に依った。



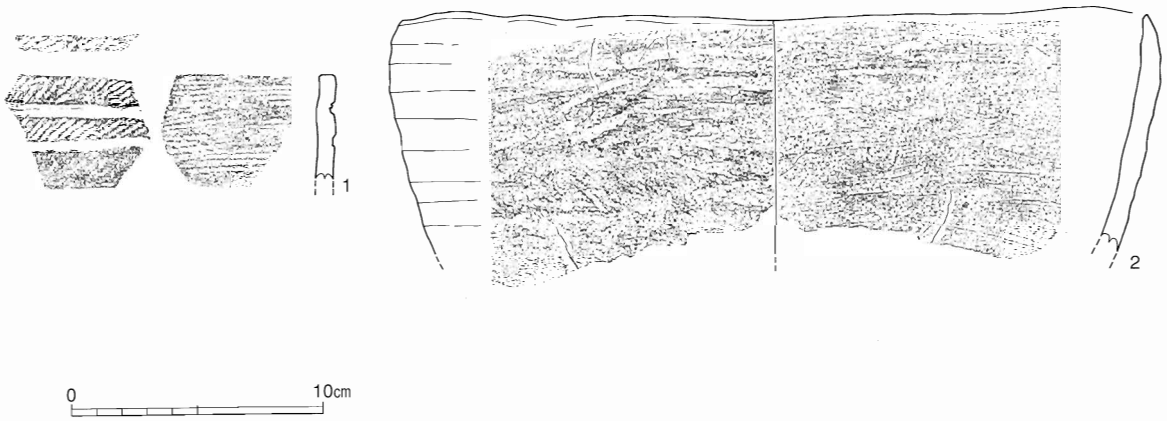
第19図　Ⅱ区（右岸）C調査区（セクションベルト北壁）・北トレンチ（北壁）土層堆積図
（DD'・EE'は第8図参照）



第20図　Ⅱ区（右岸）C調査区砂礫層出土土器実測図

表6　Ⅱ区（右岸）C調査区砂礫層出土土器観察表

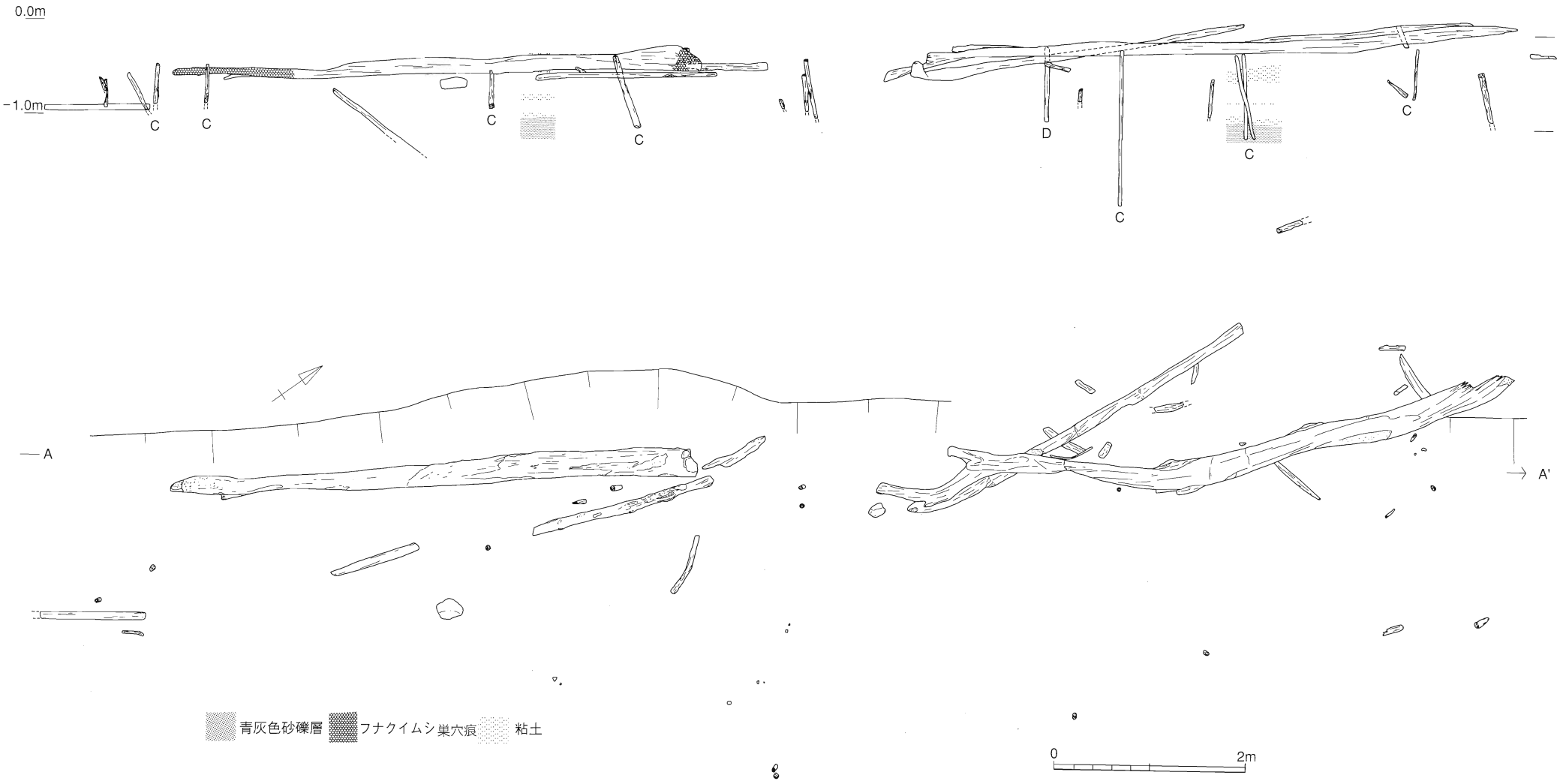
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
20－1	縄文　鉢	砂礫				二枚貝の条痕	細砂含む	外面黄褐色 内面茶褐色		炭化物付着
20－2	鉢	砂礫				外面　巻貝の条痕 内面　ケズリ	微砂含む	茶褐色		外面スス付着



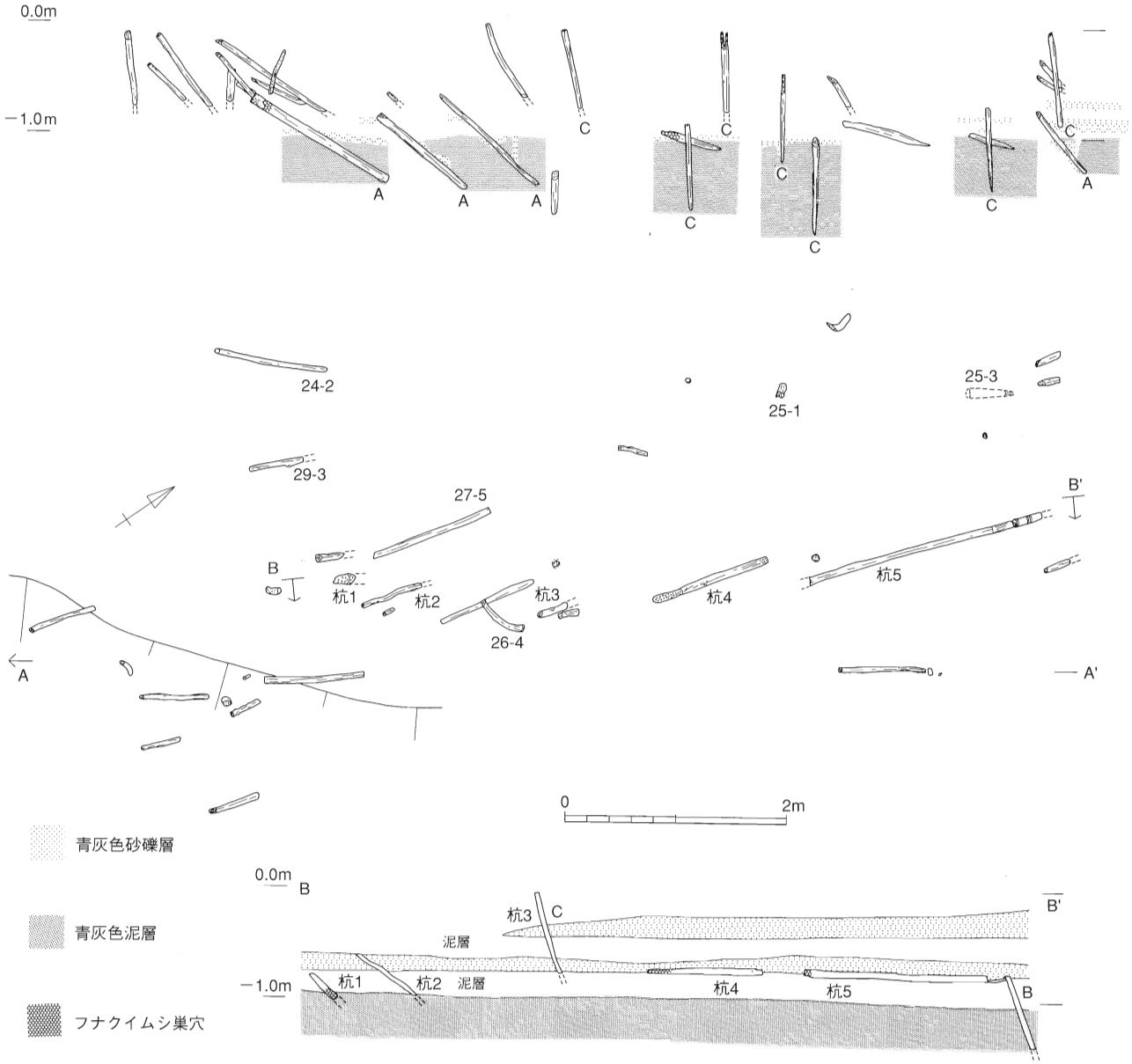
第21図　Ⅱ区（右岸）北トレンチ砂層出土土器実測図

表7　Ⅱ区（右岸）北トレンチ砂層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
21－1	縄文　鉢	砂礫			口縁上面と外面に縄文 沈線２条　磨消縄文	外面　二枚貝の条痕 内面　二枚貝の条痕	細砂含む	暗褐色	10	
21－2	鉢	青灰色砂 (粗粒砂)	29.7			外面　ヨコナデ 内面　ミガキ　巻貝の条痕	微砂含む	茶褐色	20	外面スス付着 凹凸著しい



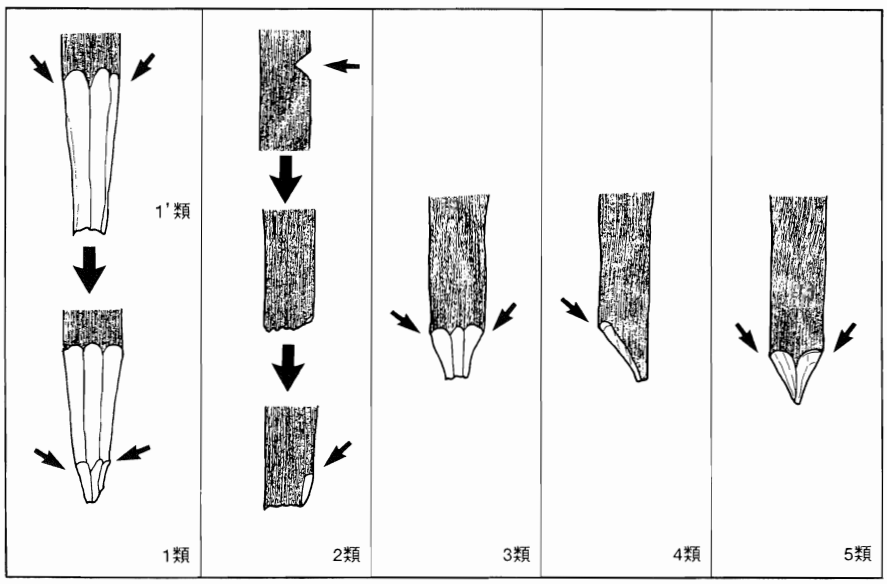
第22図　Ⅱ区（右岸）C調査区　杭と流木出土状況実測図（AA'は第18図参照）



第23図　Ⅱ区（右岸）C調査区　杭出土状況実測図（AA'は第18図参照）

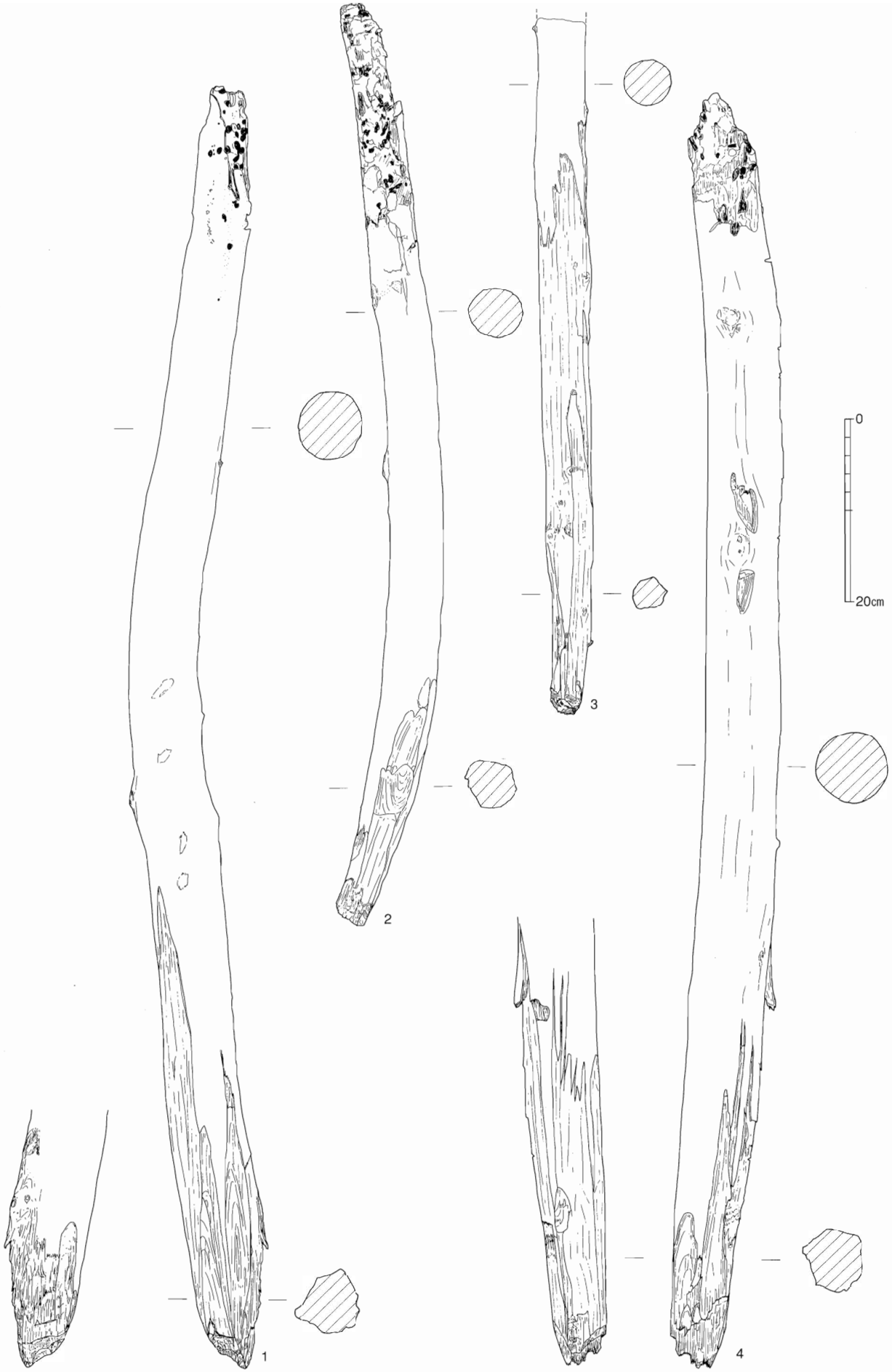
表8　Ⅱ区（右岸）検出杭観察表・分類模式図

挿図番号	長さ (cm)	最大径 (cm)	形態の特徴	分類	刃部最大幅 (cm)	樹種	備考
24－1	119.2	6.6	先端に切断面を大きく残し、全周に長い加工のち先端に3方から加工	1	40.4		フナクイムシ巣穴あり
24－2	147.6	4.6	先端に切断面をわずかに残し、3方から長い加工のち先端全周を加工	1	36.0		皮付き　フナクイムシ巣穴あり
24－3	150.2	4.6	先端に切断面を残し、全周に長い加工	1	37.2		フナクイムシ巣穴あり
25－1	140.2	6.6	先端に切断面を小さく残し、3方から長い加工のち先端全周を加工	1	51.6		フナクイムシ巣穴あり
25－2	101.0	5.8	先端に切断面を残し、全周に長い加工	1	26.0		フナクイムシ巣穴あり
25－3	76.2	5.0	先端に切断面を残し、全周に長い加工	1	35.0	モミ属	皮付き
25－4	139.4	7.8	先端に切断面を残し、全周に長い加工のち先端に3方に加工	1	38.0		フナクイムシ巣穴あり
26－1	90.6	4.4	先端に切断面を大きく残し、3方に長く浅い加工	2	44.0	ヒノキ属	
26－2	75.6	4.8	先端に切断面を残し、先端2方に加工	2	7.0		皮付き
26－3	83.2	4.8	先端に切断面を残し、先端2方に短く浅い加工	2	6.6		皮付き
26－4	121.6	3.8	先端に切断面を大きく残し、先端3方に加工	2	2.8		
26－5	26.6	5.0	先端に切断面を大きく残し、先端2方に加工	2	5.6		皮付き
27－1	50.6	6.4	先端に切断面を残し、先端全周に短い加工	3	5.8		フナクイムシ巣穴あり
27－2	44.0	5.2	先端に切断面を残し、先端全周に短い加工	3	7.6		
27－3	81.2	6.0	先端に切断面を大きく残し、先端全周に短い加工	3	3.4		皮付き　フナクイムシ巣穴あり
27－4	79.2	4.8	先端に切断面を残し、先端全周に加工	3	6.0		皮付き
27－5	98.2	6.4	先端に切断面を残し、全周に3～5段の加工痕が鱗状	3	10.6		フナクイムシ巣穴あり
28－1	244.8	5.0	先端に切断面をわずかに残し、先端全周に加工	3	4.8		
28－2	141.8	5.4	先端に切断面を残し、全周に浅い加工のち先端3方に加工	3	12.0		フナクイムシ巣穴あり
29－1	134.2	6.4	先端に切断面を残し、6方から3段程度の加工	3	10.6		皮付き　フナクイムシ巣穴あり
29－2	118.2	5.6	先端に切断面を残し、全周に浅い加工のち先端に加工	3	20.2	ヒノキ属	皮付き　フナクイムシ巣穴あり
29－3	119.4	6.8	先端に切断面を残し、先端全周に加工　3分の1は段をなす	3	6.0	ヒノキ属	皮付き　フナクイムシ巣穴あり
30－1	86.8	4.6	先端に切断面を残し、一方から加工	4	5.2	ヒノキ属	
30－2	122.2	6.2	一方から大きく斜めに加工薄く先端が残る	4	15.6	ヒノキ属	フナクイムシ巣穴あり
30－3	134.0	5.6	先端に切断面を残し、5方から大きい加工のち先端2方から加工	4	26.4		皮付き
31－1	151.4	5.4	先端に切断面を残し、3方から加工	5	8.4		フナクイムシ巣穴あり

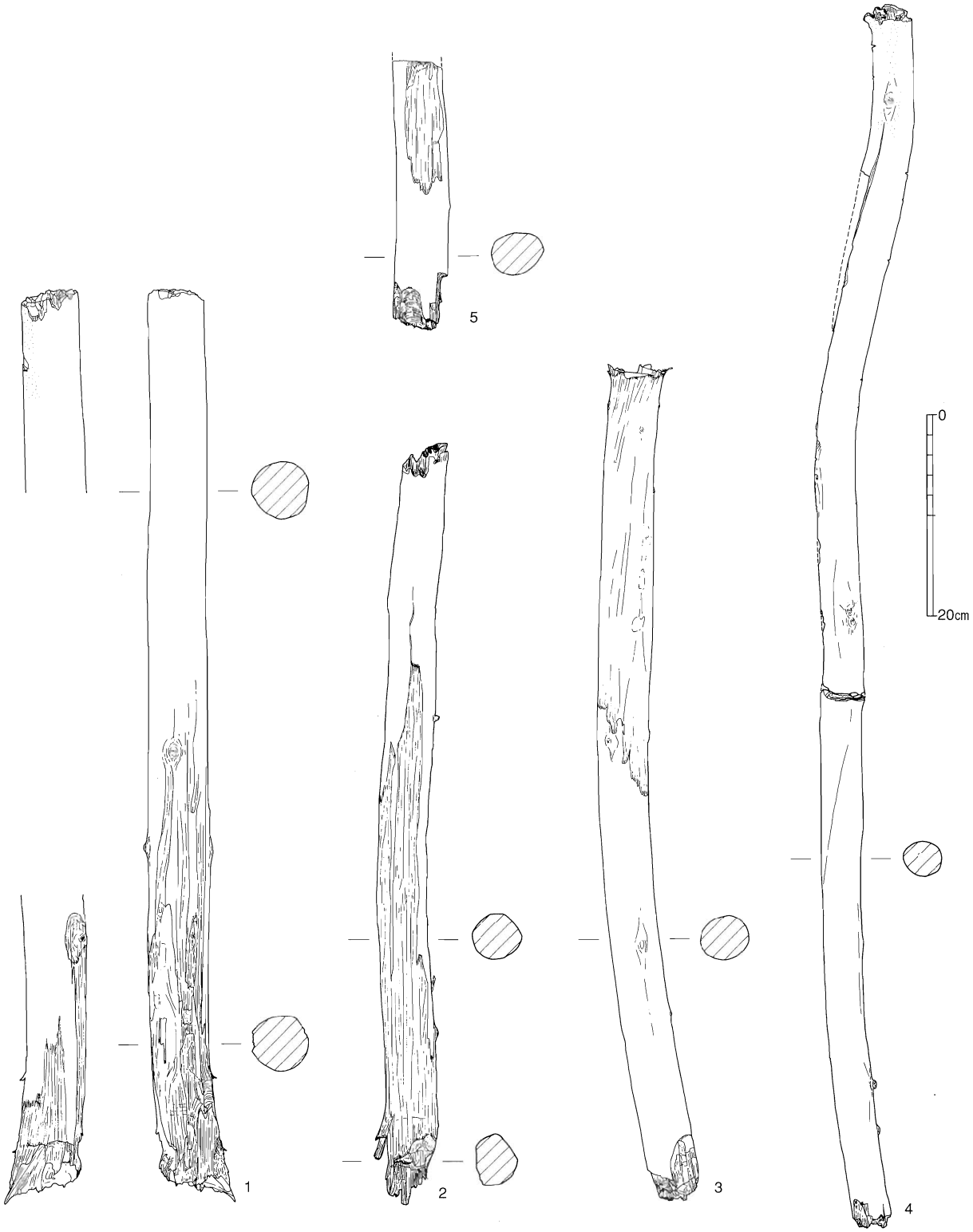


（『朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11冊西川津遺跡』Ⅵ1999より）

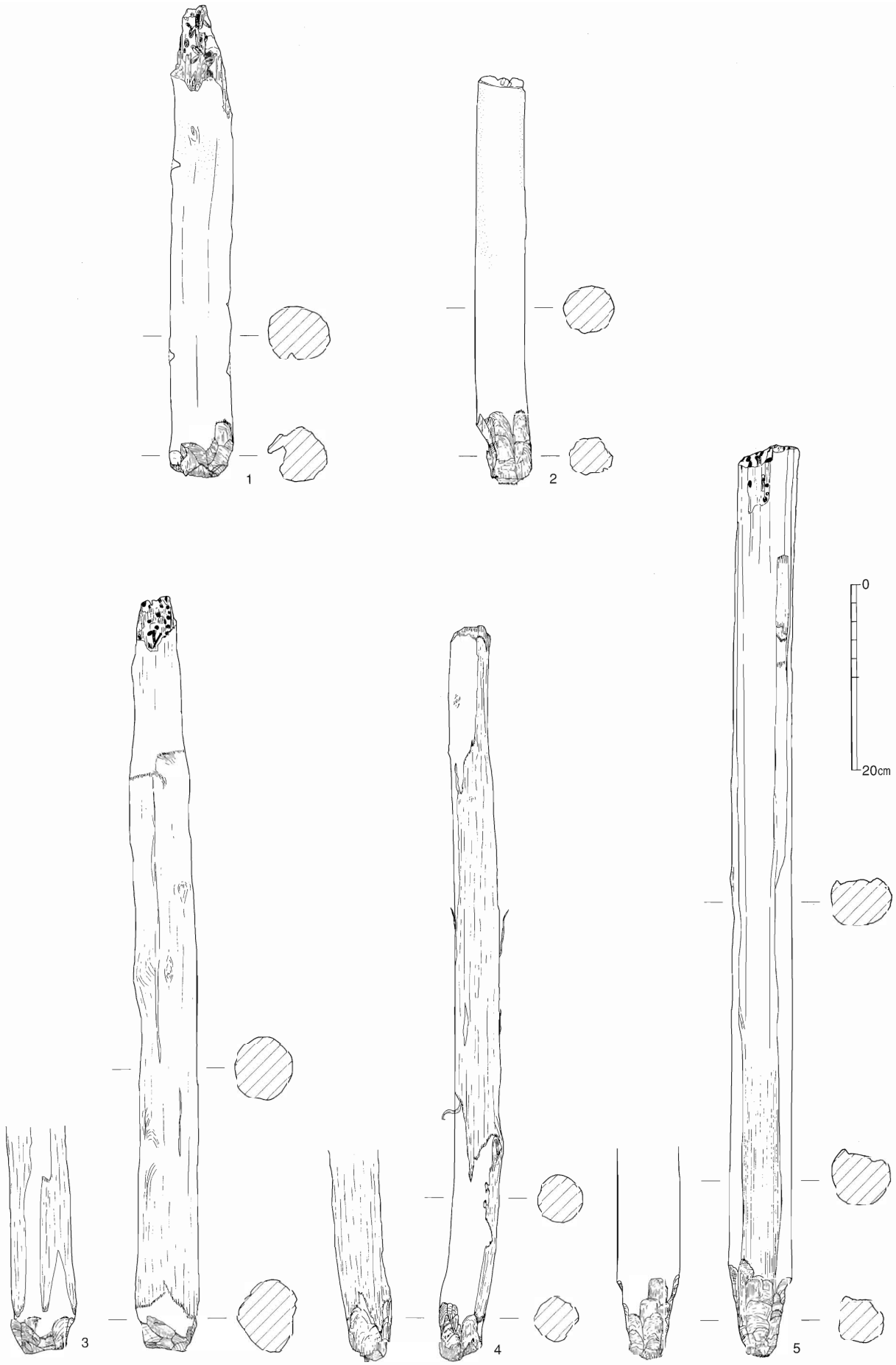
第24図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（1）



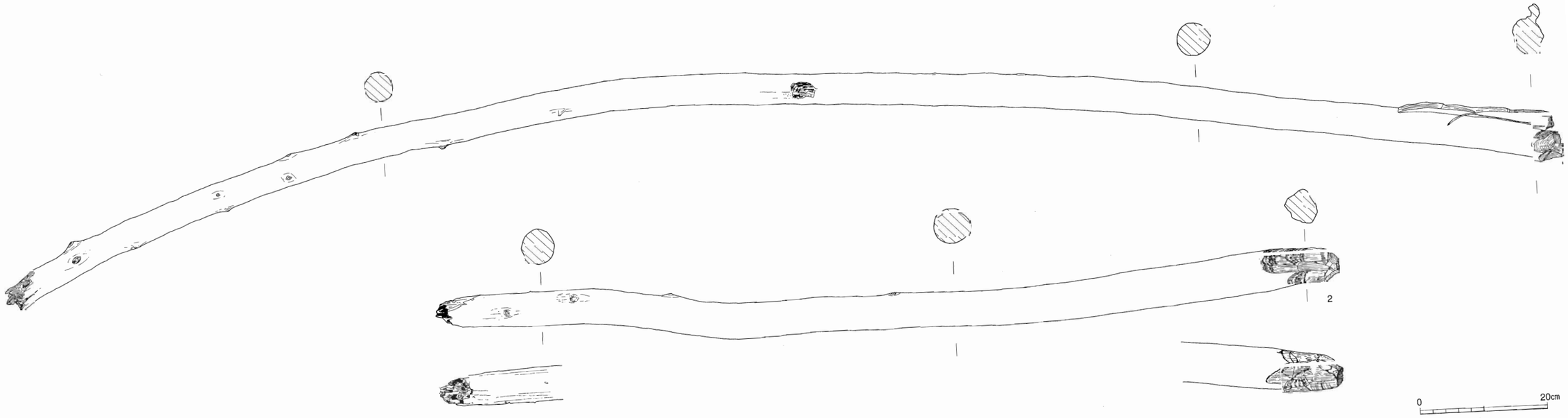
第25図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（2）



第26図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（3）

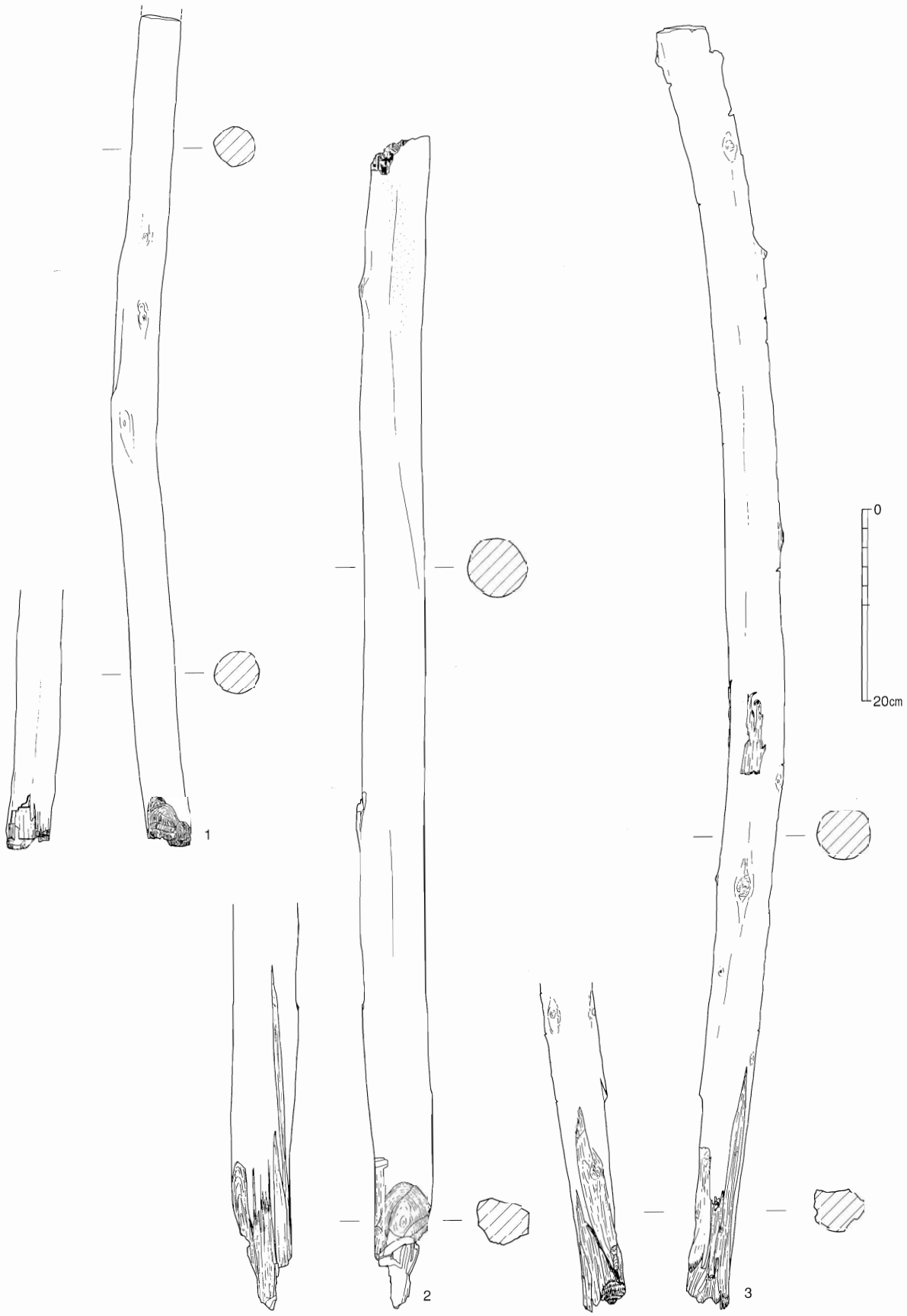


第27図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（4）

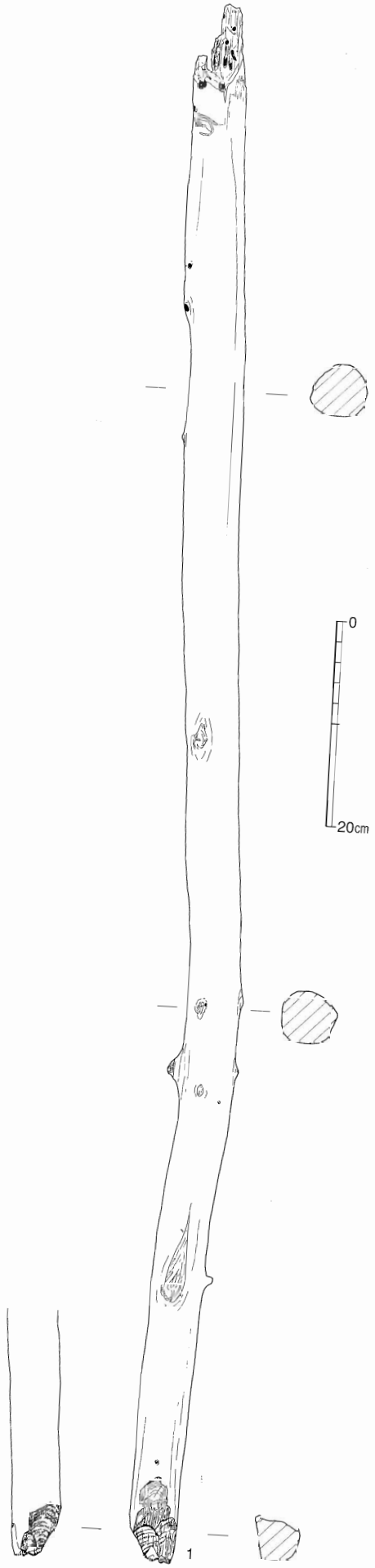


第28図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（5）

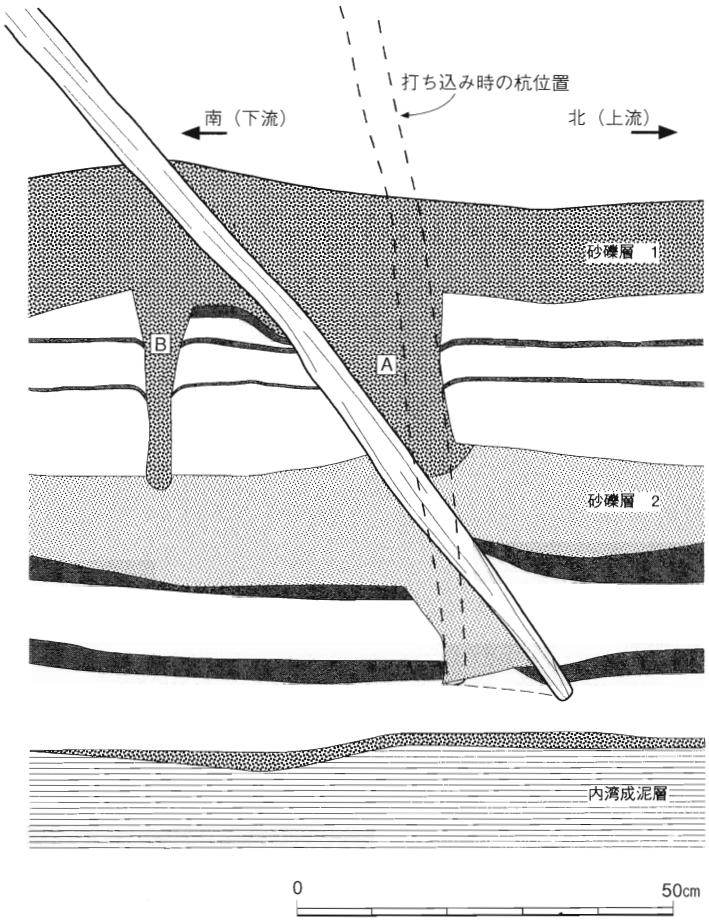
第29図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（6）



第30図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（7）



第31図　Ⅱ区（右岸）杭実測図（8）



第32図　Ⅱ区（右岸）C調査区（東壁）杭と土層模式図

杭の上流側（図中A）に砂礫層１が落ち込んでいる。落ち込み部分の壁に、打ち込み時に地層を引き込んだ痕跡があり、当初はこの位置に打たれたことがわかる。
図中Bには杭を打った痕跡だけが残っている。

第４章　Ⅱ区左岸の調査

第１節　調査経過と調査概要

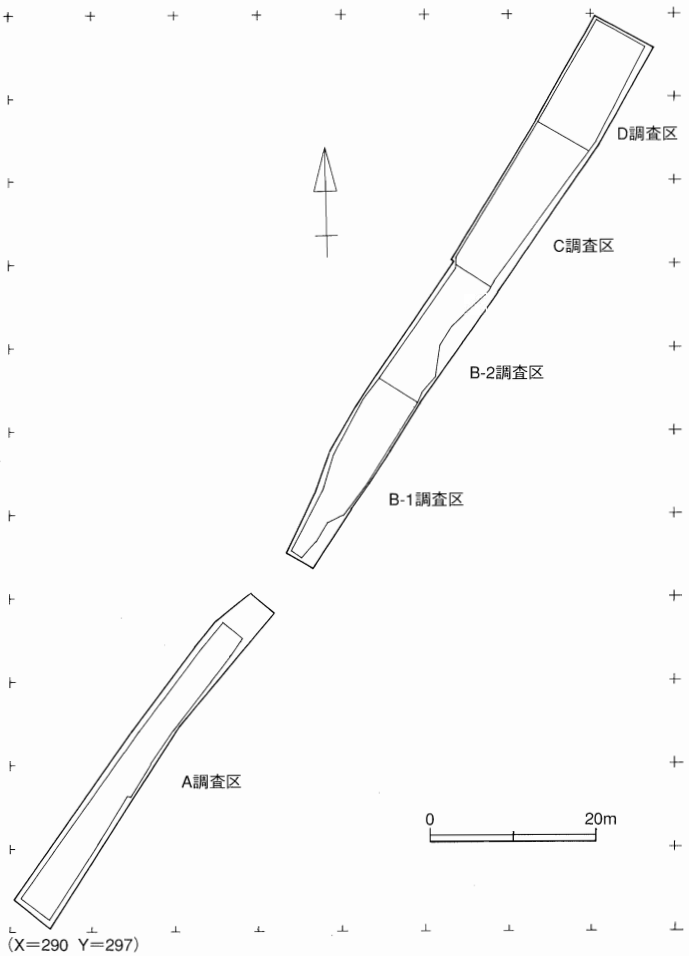
調査経過

西川津遺跡Ⅱ区は、宮尾橋から学園橋の間に該当する。この区のトレンチ調査は1991年度に行われ、本調査の対象地は現在流れている川の両岸の河川敷とされていた。よって、この区の内、1994年の調査範囲は左岸とし、南北113m、幅は最大８m、最小2.5mの総面積約680m²を対象に調査区を設定した。なお、調査区中程は河川敷がかなり狭くなっていたため、矢板をクランク状に打った。これにより、調査区は大きく二つのブロックとなったので、矢板が狭くなった所を境に南側をＡ調査区、北側をＢ～Ｄ調査区とした。さらに、北側の調査区内には玄武岩の岩盤の高まりが存在したため、これを境に南側をＢ，北側をＣ、調査区の最北端をＤ調査区と呼ぶこととした。なお、この調査区の東にある南北に走る市道部分が昭和50年代までの朝酌川である。

調査は下流部のＡ調査区から始めた。まず、水田の耕作土と客土を重機により除去した。その下部にある青灰色粘土層から遺物を含む砂礫層までを人力で掘り下げた。

調査概要

遺構としては、弥生時代の河道跡、江戸時代の杭列や近代から現代にかけての護岸の杭列と水田の排水溝などが検出された。



第33図　Ⅱ区（左岸）調査区位置図

河道跡は北東から南西の方向に認められるが、Ｂ調査区は東南の低丘陵から延びる尾根の先にあたり、標高20cm以下に玄武岩の岩盤が現れた。この岩に堰き止められた形で、弥生時代前期から中期の砂礫層が厚く堆積していた。その層は厚く、洪水時の強い水流で運搬され、堆積したものとみられる。

検出された杭列は各調査区で認められたが、時期が分かるのはＢ、Ｃ、Ｄ調査区のものである。Ｂ調査区の岩盤付近にある杭は弥生時代の砂礫層中に存在しており、古い時代に打たれたものであるが、その他のものは近世以降に打たれている。例えば、Ｂ、Ｃ調査区東側にある杭は近世以降に護岸用に打たれたもの、Ｄ調査区の東側にある杭列は長さ1.5m程の松材からなる塔婆を逆さに打ち込んだもので、表面に墨書で書かれた「天明８年」(1788年）の文字がある。

杭以外の遺物としては、Ｂ調査区の岩盤付近の厚い砂礫層中から弥生時代の土器がコンテナ56箱分出土している。土器以外の遺物では石製品と木製品があり、類例の少ないものとしては弥生時代の漆塗り櫛や土笛(注1)がある。

第２節　各調査区の遺構と遺物

（１）Ａ調査区

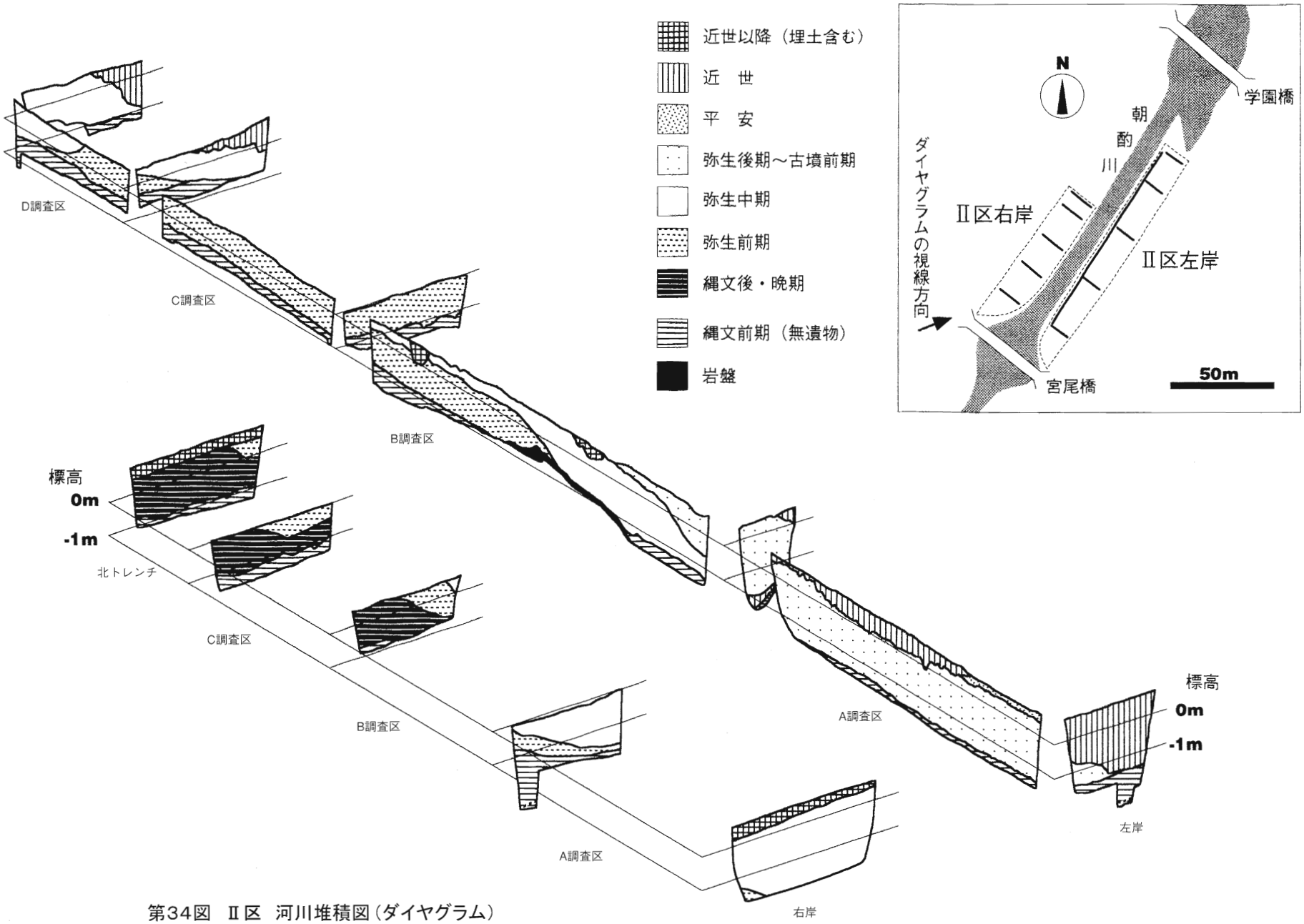
Ⅱ区左岸の南側に当たり、南端は宮尾橋東詰に接する。調査区は南北46m×東西４～5.5mの範囲で、表土から２～３mの深さまで掘り下げた。なお、砂礫層を取り除いた底部分は標高マイナス1.5～２mである。

この区では遺構は認められなかった。ただし、調査区中程で青灰色粘土層内に打ち込まれた杭が10数本存在した。時期は青灰色粘土層の堆積時期以降の近世頃と推定される。層理面は東に傾斜しており、河川は西から東に移動したとみられる。調査区南壁の層理面(第38図）では青灰色粘土層にアカホヤ火山灰層が挟まれるのが確認できたが、調査区北壁の土層堆積図(第37図）では青灰色粘土層は薄く、砂礫層の直下に岩盤がある。砂礫層は標高マイナス90cmとマイナス150cmの所に存在する。この層内に含まれる遺物は弥生土器が大半を占めるが、一番新しい土器は古墳時代中期に属する土師器(第47図11～14）であり、この頃に堆積したものと推定される。

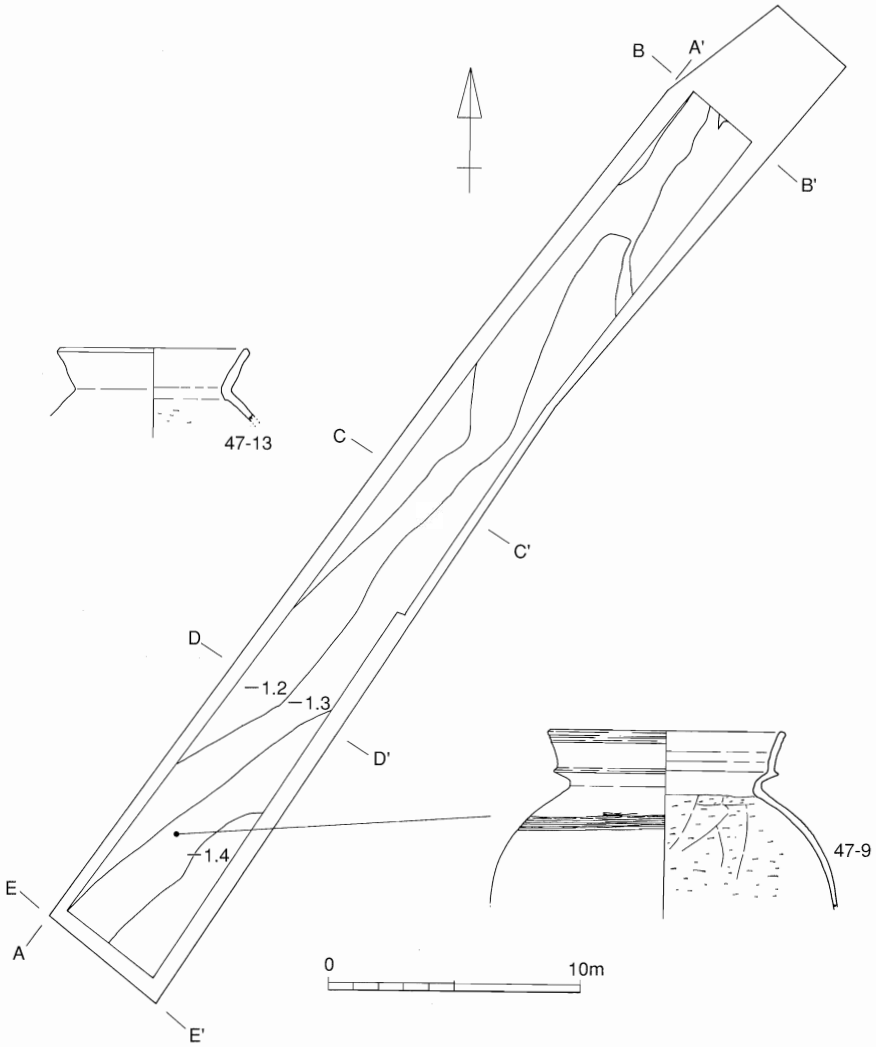
Ａ調査区の粘土層出土遺物（第39～42図）

表土下から砂礫層の間にある粘土層から、須恵器を中心に江戸時代の陶磁器まで出土している。完形品に近い須恵器もあり、付近から投棄されたものであろう。粘土層出土の遺物には弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器があり、古墳時代後半から平安時代初期の頃の土師器、須恵器が多い。新しい時期のものには肥前系の陶磁器(第42図５、６）が存在することより、江戸時代の前半までは川沿いの沼状の場所と考えられる。よって、この場所が水田化されたのは江戸時代中頃以降である(注2)。

第39図の１は弥生時代中期中葉の甕。２は後期末の甕で、５の字状の口縁部をもつ。３は底部。４以下の土器は古墳時代のものである。４～５は土師器の甕。５の口唇部は内に屈曲しており、畿内の布留式土器の影響を受けている。６は高杯の脚部で円形の透かしをもつ。７～10は須恵器。７が蓋杯の蓋、８は身、９は輪状つまみをもつ蓋、10は甕である。11、12は土師器。11は椀、12は甕である。



第34図　Ⅱ区　河川堆積図（ダイヤグラム）

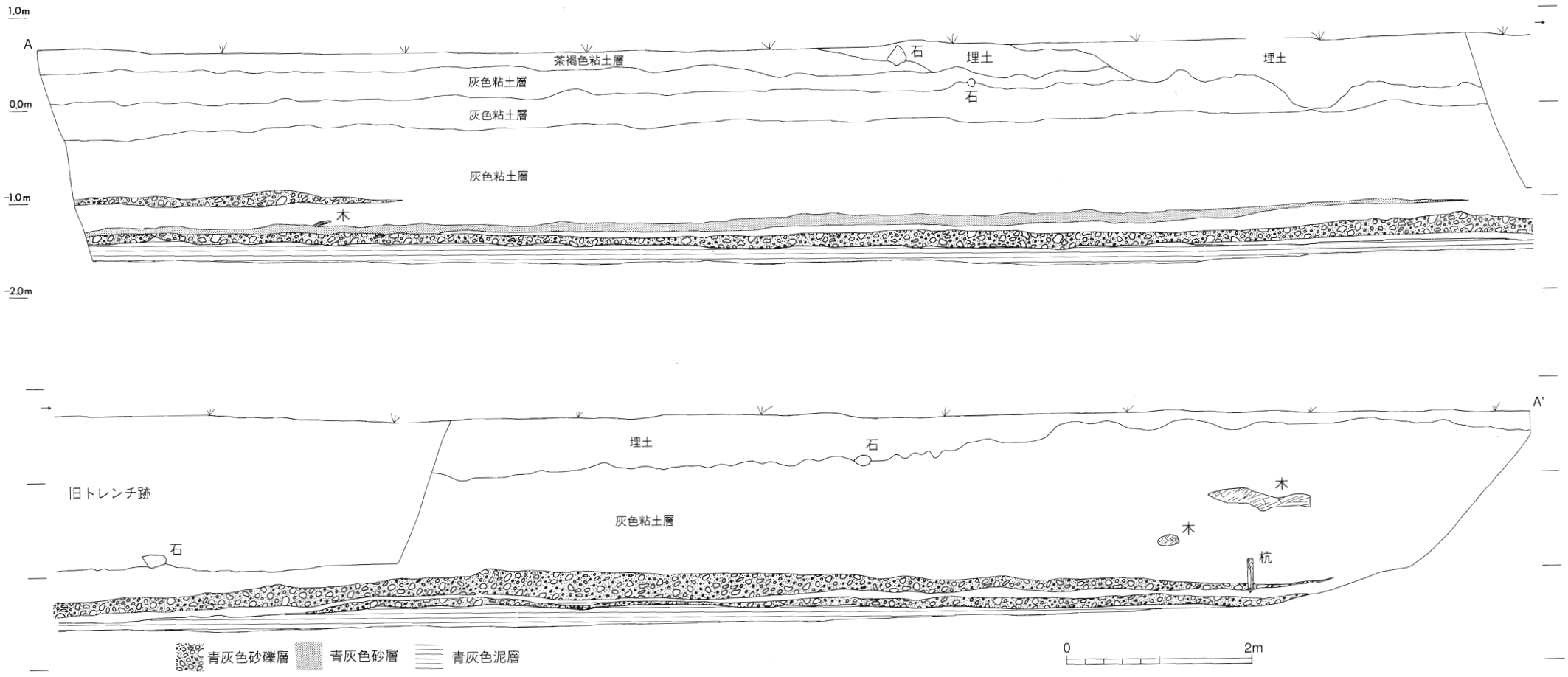


第35図　Ⅱ区（左岸）A調査区　砂礫層測量図（土器の出土位置）

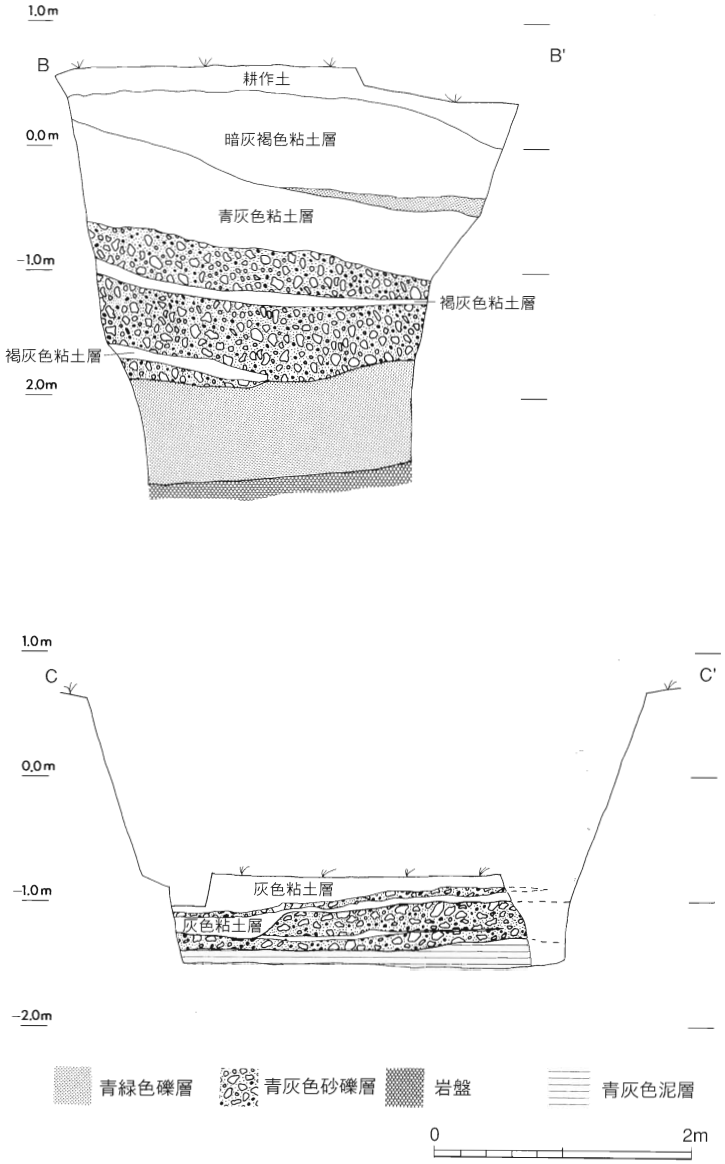
第40図は奈良時代から平安時代初めの土器である。１～７は須恵器で、８は土師器。１は皿、２～５は杯で、１～４は底部外面に糸切り痕をもつ。４と５は低い高台が付く。６と７は壷。６は肩が張り、高台が付くので、長頸壷と考えられる。７は短い頸部をもつ双耳壷である。８は土師器杯で、底部外面には糸切り痕をもつ。

第42図は中世から近世の遺物である。１は中国産で、15世紀後半頃の白磁皿。２以降は日本産。２、３は土師質土器杯で、糸切り底をもつ。２は焼成後に穿孔されている。４は瓦質の摺鉢。底部内面には櫛による直線と弧状の沈線が施されている。戦国時代の防長産か。５は肥前系の陶器皿で、砂目が認められる。６は肥前系の磁器皿で、内面に草文が描かれている。７は陶器の大皿で、口縁部は大きく外開きとなる。５～６は江戸時代中頃以前のものである。

第41図は渡来銭である。１は開元通寶（唐、初鋳年621年）で、背面の上方に月が認められる。２は政和通寶（北宋、初鋳年1111年）で、書体は分楷である。



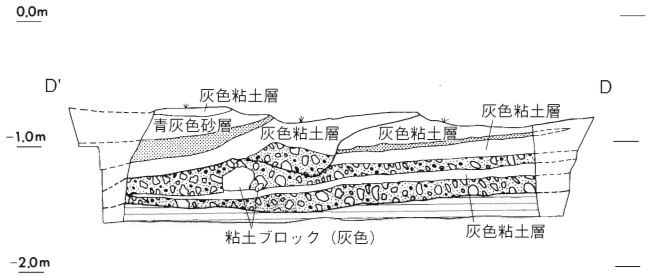
第36図　Ⅱ区（左岸）A調査区　（西壁）土層堆積図

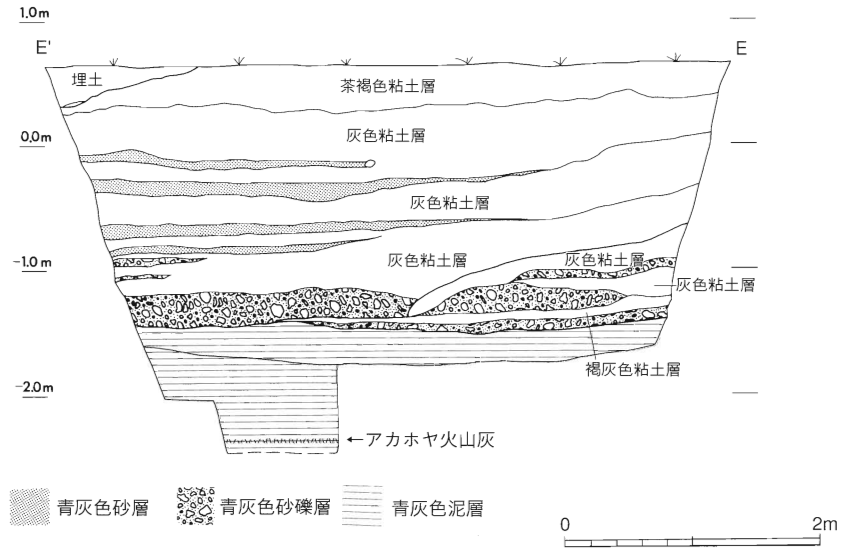


第37図　Ⅱ区（左岸）A調査区　（北壁・北セクションベルト南壁）土層堆積図
（BB'・CC'は第 35 図参照）

表9　Ⅱ区（左岸）A 調査区粘土層出土土器観察表

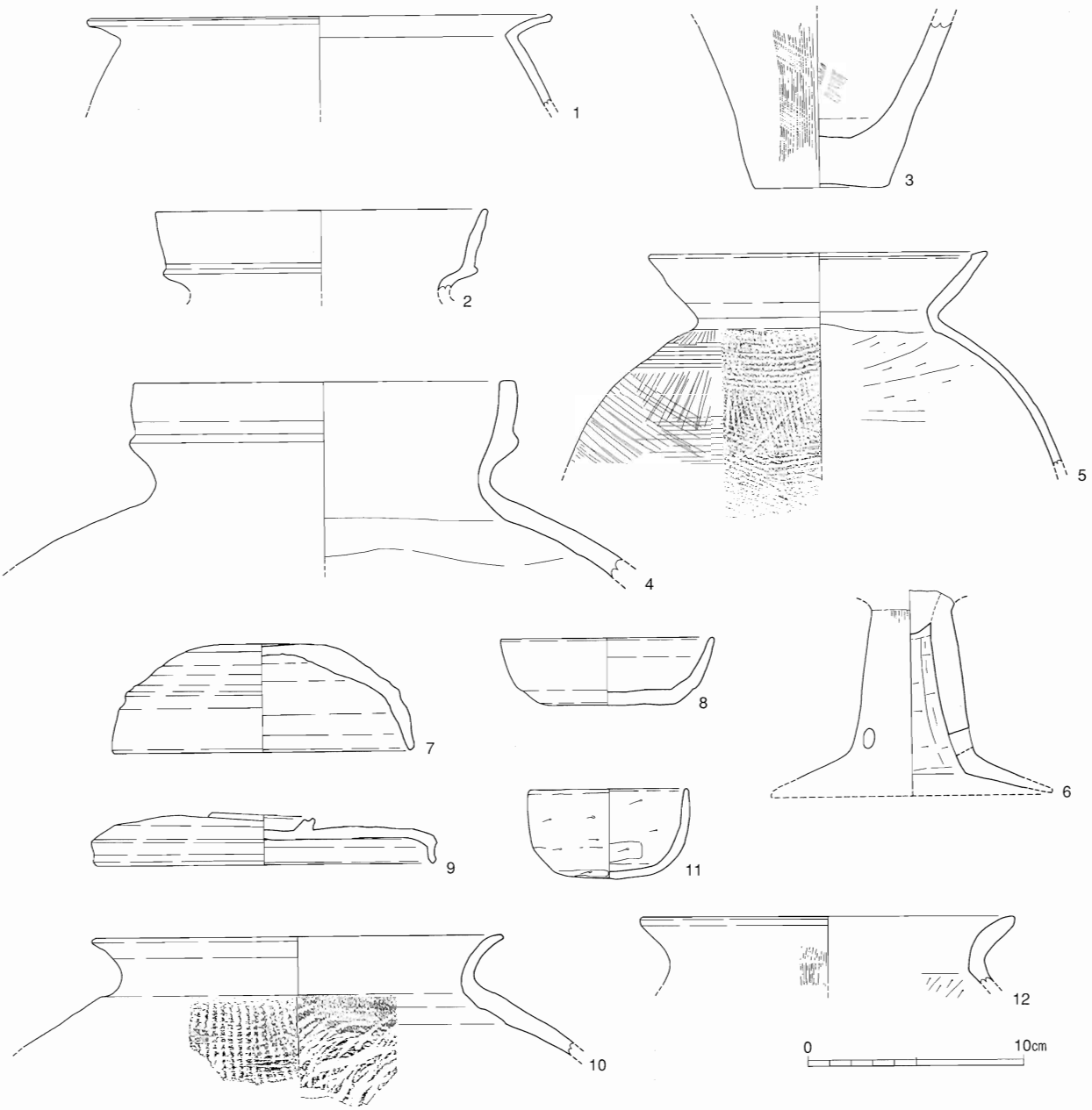
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
39 － 1	弥生　甕	灰褐色粘土	21.5		口縁部はくの字に外反	外内面ともヨコナデ	密	黄褐色	20	口縁部外面スス付着
39 － 2	甕	灰色粘土	15.4		口縁部は５の字	外内面ともヨコナデ	細砂含む	肌色	5	
39 － 3	(底部)	灰褐色粘土	底径 6.2			外面　ハケ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	外面 黄褐色 内面 黒色	完存	
39 － 4	土師器 甕	暗褐色粘土	17.8		５の字口縁部が退化する	外内面ともヨコナデ	密	茶褐色	55	
39 － 5	甕	暗褐色粘土	15.7		口唇部が内側に内傾する	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヘラケズリ	細砂含む	茶灰色	30	





第38図　Ⅱ区（左岸）A調査区（南セクションベルト北壁・南壁）土層堆積図
（BB'・EE'は第 35 図参照）

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
39 － 6	高杯(脚部)	青褐色粘土			八の字に開く 三方に円形の透かしを持つ	外面　ハケメ　ヘラミガキ 内面　ヘラケズリ	細砂含む	褐色	60	
39 － 7	須恵器杯蓋	暗褐色粘土	13.8 天井径 4.2	5.0	外面に段	外面　回転ナデ　回転ヘラケズリ 内面　回転ナデ　ナデ	密	灰色	30	
39 － 8	杯身	暗褐色粘土	10.0 底径 6.0	3.1	口縁部は外へ少し開く	外面　ヘラケズリの後ナデ 内面　ナデ	密 白色粒子	青灰色	30	小形品
39 － 9	杯蓋	暗褐色粘土	15.5 天井径 4.7	2.5	天井の中央部に輪状つまみが付く　口縁部は下垂	外面　回転ヘラケズリ　回転ナデ 内面　ナデ　回転ナデ	細砂含む	外面 茶褐色 内面 暗青灰色	90	外面自然釉付着
39 － 10	甕	耕作土	18.8	5.6	口縁部はくの字に外反する	外内面とも回転ナデ　タタキ	粗砂少量含む	暗青褐色～灰白色	10	

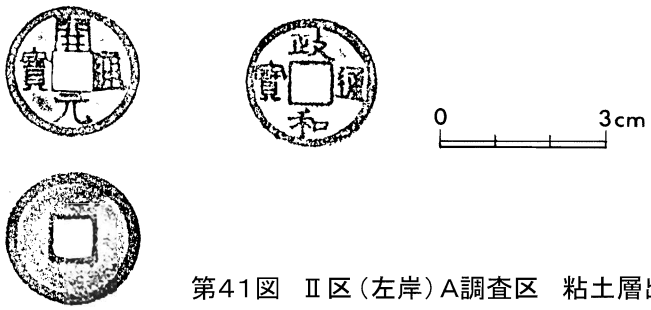


第39図　Ⅱ区（左岸）A調査区　粘土層出土土器実測図（1）

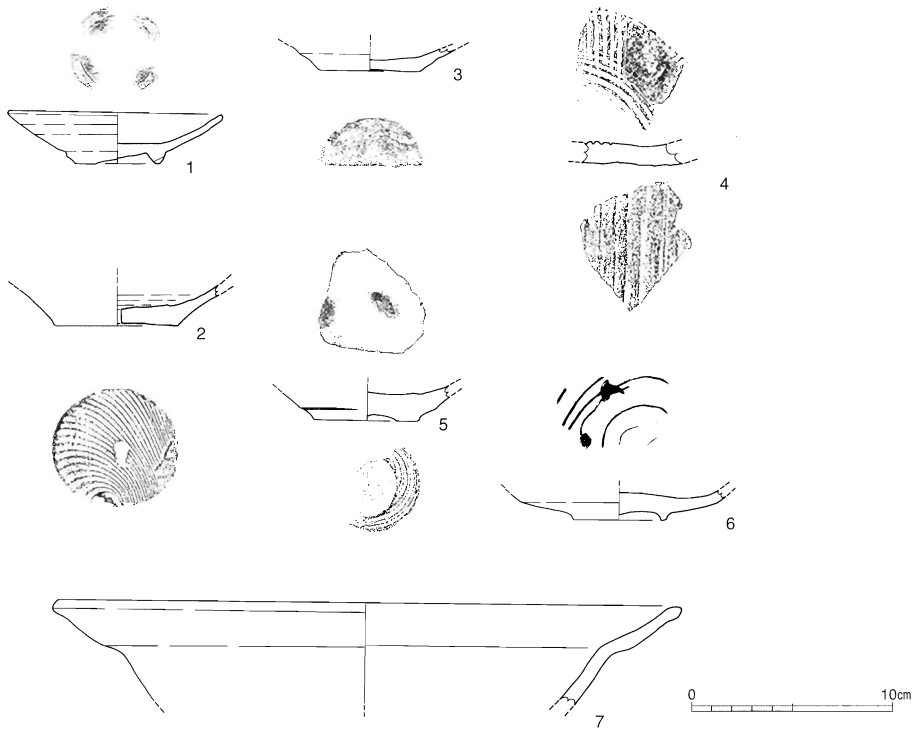
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
39－11	土師器　椀	暗褐色粘土	7.4 底径3.5	4.2	口縁部はまっすぐ立ち上がる	外内面ともヘラケズリ	細砂多量含む	外面淡褐色 内面暗橙色	90	小形品
39－12	甕	灰褐色粘土	19.4		口縁部はくの字に開く	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	細砂含む	黄褐色	10	外面スス付着
40－1	須恵器　皿		13.9 底径7.6	2.3	口唇部は短い 回転糸切り	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　ナデ	粗砂含む	淡青褐色	25	
40－2	杯		13.4 底径7.6	4.3	口縁部は短く屈曲する 静止糸切り	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　ナデ	粗砂含む 白色粒子	外面 暗青灰色 内面 灰白色	40	
40－3	杯		11.2 底径6.4	5.1	口縁部の外面にかすかに段　回転糸切り	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　ナデ	細砂含む	暗青灰色	完存	

第40図　Ⅱ区（左岸）A調査区　粘土層出土土器実測図（2）

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
39－11	土師器　椀	暗褐色粘土	7.4 底径 3.5	4.2	口縁部はまっすぐ立ち上がる	外内面ともヘラケズリ	細砂多量含む	外面淡褐色 内面暗橙色	90	小形品
39－12	甕	灰褐色粘土	19.4		口縁部はくの字に開く	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	細砂含む	黄褐色	10	外面スス付着
40－1	須恵器　皿		13.9 底径 7.6	2.3	口唇部は短い 回転糸切り	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　ナデ	粗砂含む	淡青褐色	25	
40－2	杯		13.4 底径 7.6	4.3	口縁部は短く屈曲する 静止糸切り	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　ナデ	粗砂含む 白色粒子	外面 暗青灰色 内面 灰白色	40	
40－3	杯		11.2 底径 6.4	5.1	口縁部の外面にかすかに段　回転糸切り	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　ナデ	細砂含む	暗青灰色	完存	



第41図　Ⅱ区（左岸）A調査区　粘土層出土銭貨（拓本）



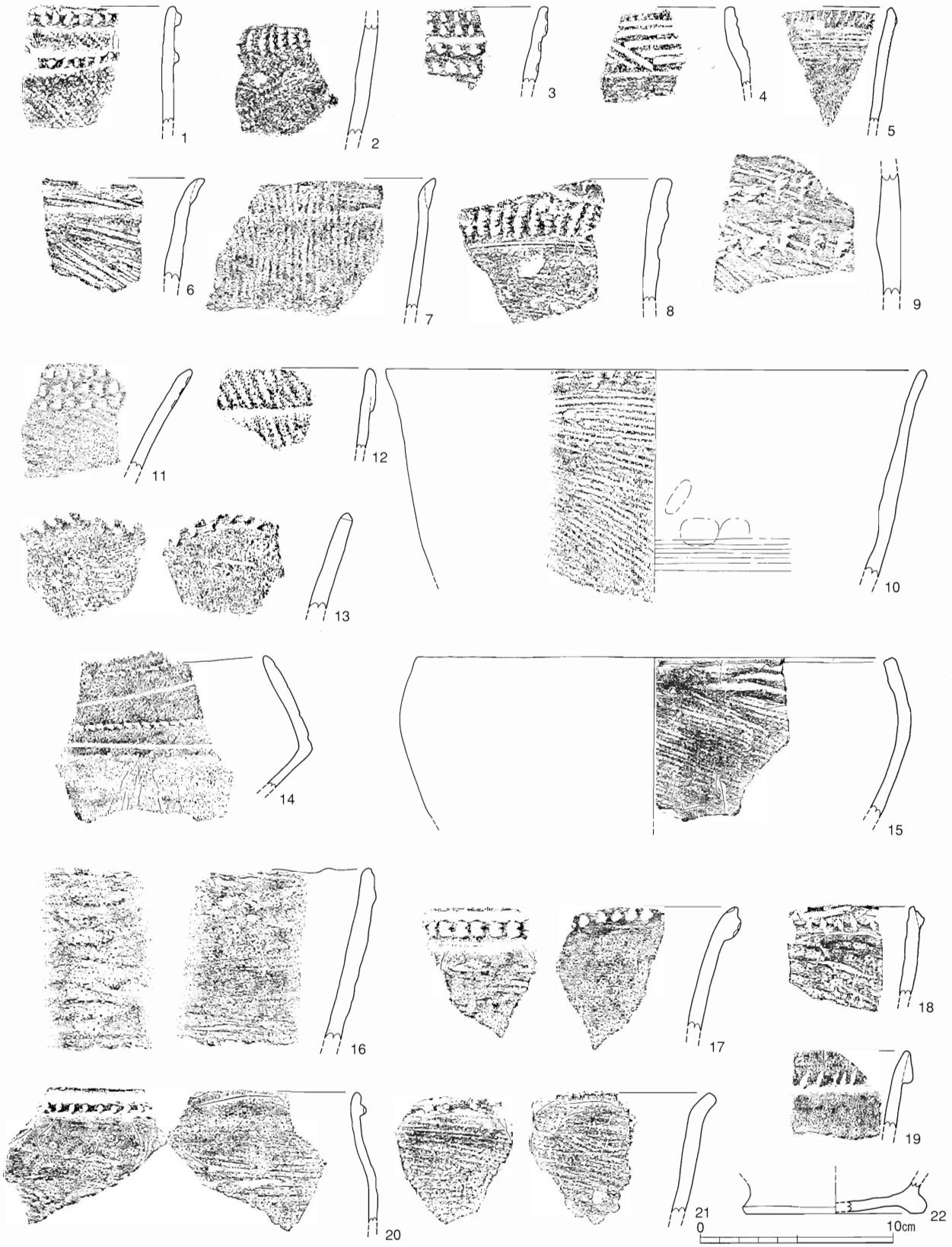
第42図　Ⅱ区（左岸）A調査区 粘土層出土土器・陶磁器実測図

表10　Ⅱ区（左岸）A 調査区粘土層出土銭貨観察表

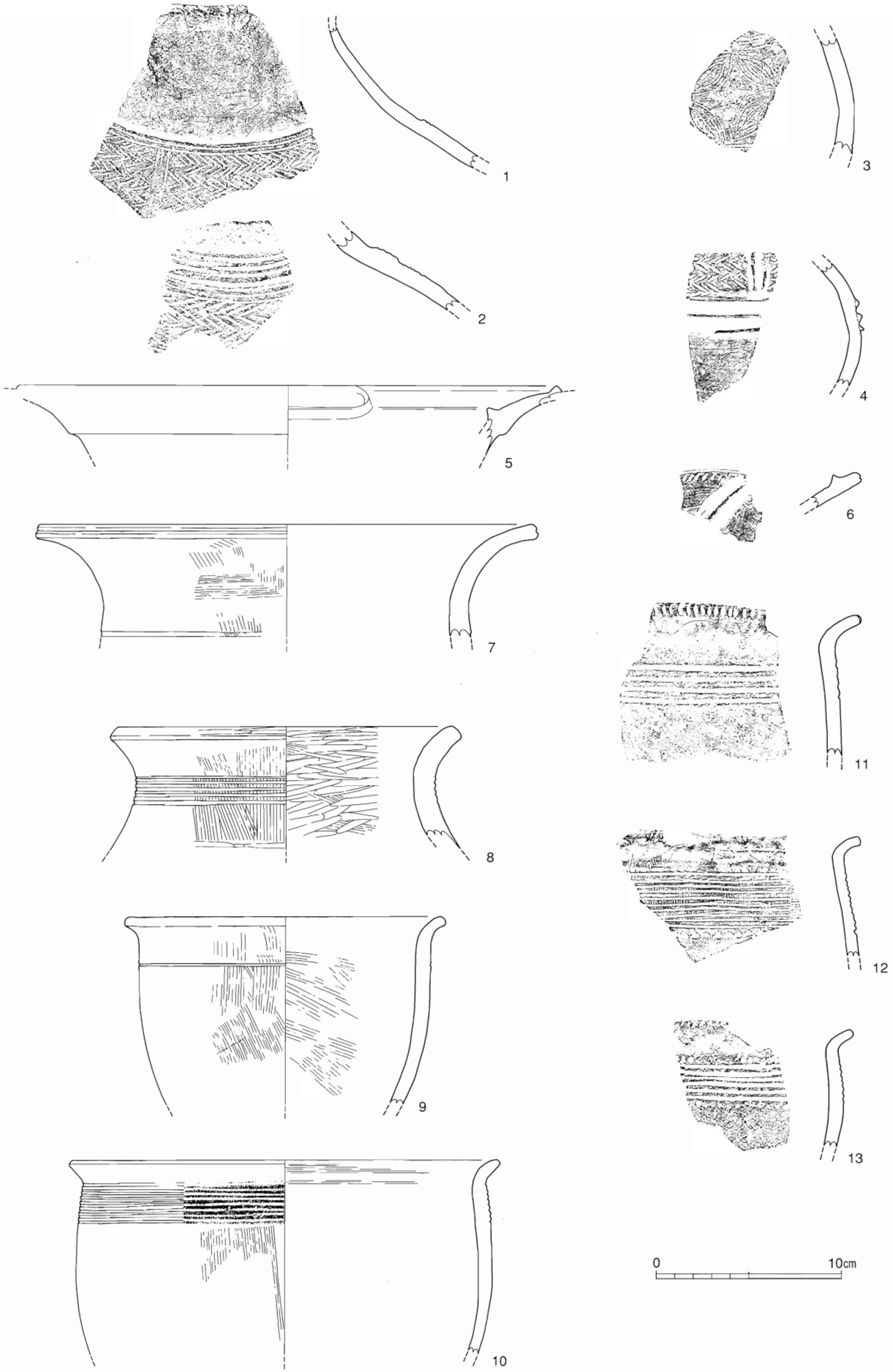
挿図番号	名　称	初　鋳　年	銭径（A）／銭径（B）(mm)	内径（C）／内径（D）(mm)	銭　厚 (mm)	量　目 (g)
41－1	開 元 通 寶	621年 (唐)	24．7／24．9	21．0／20．8	1．0～1．1	2．47
41－2	政 和 通 寶	1111年 (北宋)	24．2／24．2	20．6／20．9	1．2	2．66

表 11　Ⅱ区（左岸）A 調査区粘土層出土土器・陶磁器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
42－1	白磁　皿	粘土混じり砂	9.4 底径 4.3	2.4	内面に砂目痕 高台えぐりあり	外面　ヘラケズリ　ナデ 内面　ナデ	密	釉　白緑色 胎土黄褐色	70	中国産
42－2	土師質土器 杯	粘土	底径 5.6		焼成後穿孔 回転糸切り	外内面とも回転ナデ	密	暗茶褐色	完存	灯明皿に使用
42－3	杯	粘土	底径 4.5		回転糸切り	回転ナデ	密	黄褐色	30	
42－4	瓦器 摺鉢 (底部)	粘土			底部内面に摺目が付く	外面　タタキ痕か 内面　ナデ	細砂含む	黒色		防長系か
42－5	肥前系陶器 皿	粘土	底径 4.6		糸切り	外面　回転ナデ	密	外面赤茶色 内面薄緑色 釉	30	内面に砂目痕 2ヶ所以上　唐津焼
42－6	肥前系磁器 皿	粘土 砂礫	底径 2.0		内面に緑褐色による草文		密	灰白色釉	50	高台の底部に細砂付着 伊万里焼
42－7	陶器　大皿	粘土	27.5		口縁部は大きく外傾する		密	外面薄緑色釉 内面茶褐色釉	15	



第43図　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土土器実測図



第44図　Ⅱ区（左岸）A調査区　砂礫層出土土器実測図（1）

Ａ調査区の砂礫層出土遺物（第43～49・51・52・55・56図）

砂礫層からは土器、石製品、木製品が出土している。土器には縄文土器、弥生土器、土師器があり、弥生土器が中心を占める。弥生土器は前期後葉と中期中葉までのものが多くを占め、後期の土器は僅かである。古墳時代の土師器も僅かに存在し、中期にかかるものが４点（第47図11～14）認められる。なお、須恵器は一点も含まれてはいなかった。

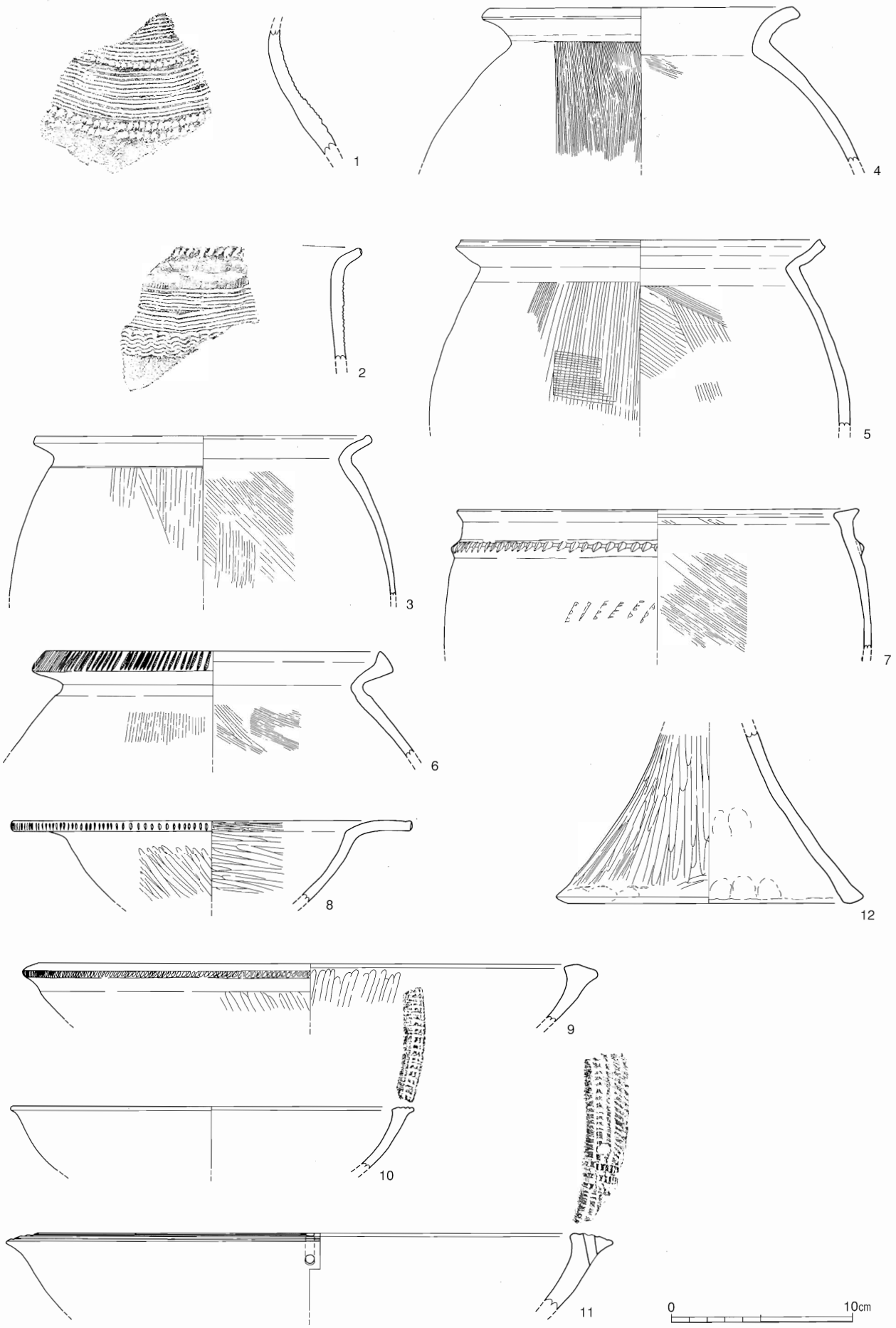
縄文土器は図示したものに第43図９と11、14がある。９は西川津式の深鉢で、胴部に刺突文をもつ。11も西川津式の深鉢で、口縁部外面に刺突文を施す。14は後期中葉の浅鉢で、口縁部はくの字に屈曲し、表面に２条の刺突文と沈線を描く。

弥生土器は前期後葉と中期中葉までのものが多くを占め、後期の土器は僅かである。第44図は前期の土器で、１～８までは壷、９以下は甕である。12、13は、沈線が多条化しているが、ヘラによるため前期の範疇とした。１は頸と胴部の破片で、ヘラによる２条の平行直線文と羽状文を３段以上描く。２も頸部と胴部の破片で、段部分を突帯状にし、ヘラによる３条の平行直線文を引く。さらに、その下には貝殻による３条の平行直線文と２段の羽状文を描く。３は胴部の破片で、貝殻で木葉文を描く。４も胴部の破片で、ヘラによる羽状文を３段以上に描き、縦に突帯を付けて区画する。さらに、下方に３条の突帯を付けている。５と６は口縁部の破片で、内側に突帯を付けている。９～11の甕は、口縁部の下にヘラによる平行直線文を１条から８条まで引く。12は口縁部の下にヘラで平行直線文を10条引き、さらに上下に三角形刺突文を１列入れる。13は口縁部に刻目を入れ、口縁部の下にヘラによる平行直線文を６条引き、さらに上下に竹管文を１条ずつ描く。12、13は、沈線が多条化して入る。

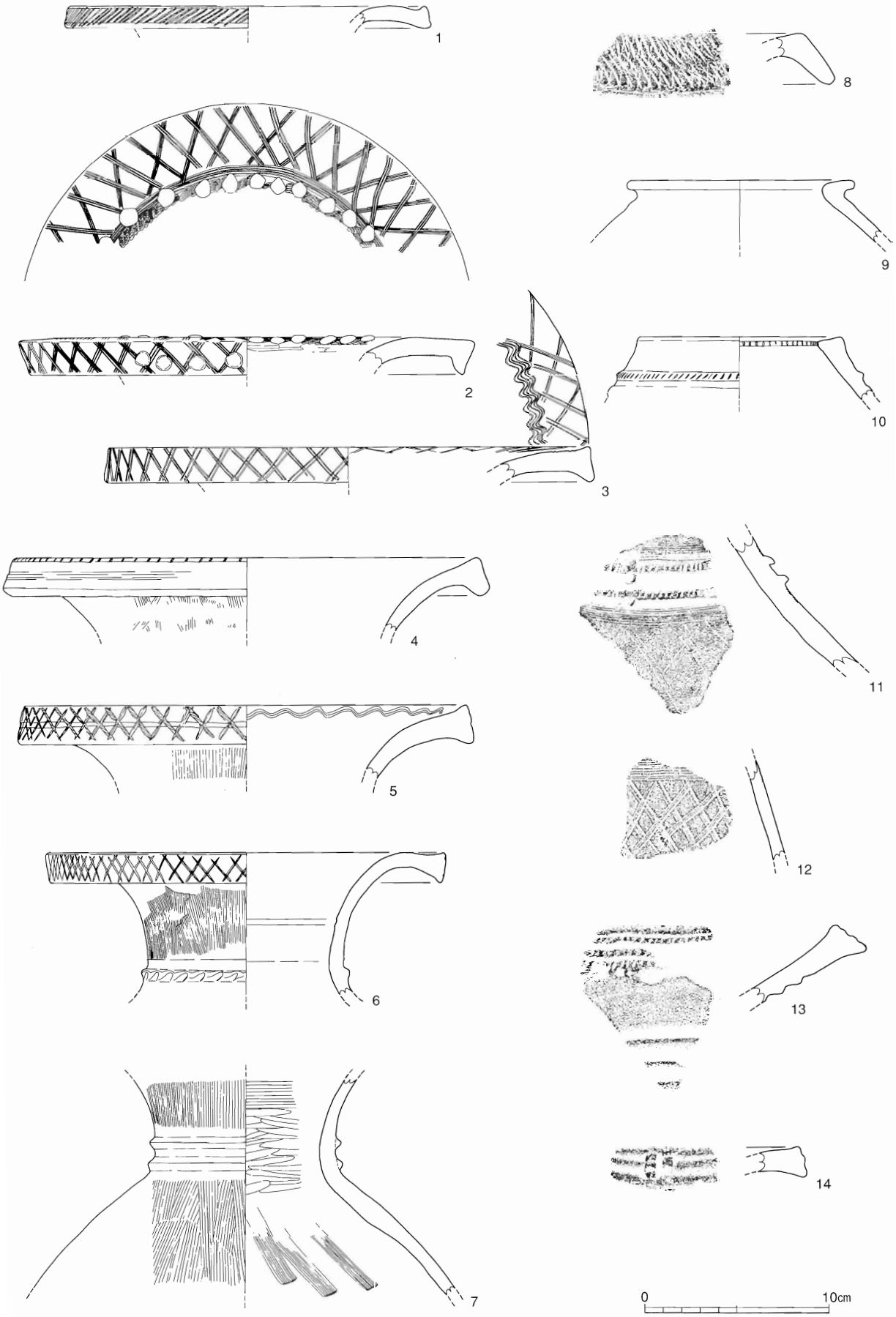
第45、46図は中期の土器である。第45図１は壷の頸部から胴部の破片で、櫛による直線文を引き、三角形の刺突文を中程に１条と下方に２条入れる。２～６は甕。２は甕の口縁部の破片。口縁部に刻目を入れ、下方に櫛による直線文と波状文を引く。３の口縁部は大きく外反する。４と５の口縁部はくの字に屈曲する。６の口縁端部はかなり広くなり、ハケ原体により刻目を入れる。７は鉢で、口縁部の先端は肥厚して平たくなり、口縁部の下方に刻みをもつ突帯が付き、さらに櫛による刺突文がある。８以下は高杯。８は杯部が球形を呈し、口縁部は水平となる。９～11は口縁端部が肥厚して平たくなり、10と11には４条の凹線と刻目を入れる。12は高杯の脚部で、ハの字に開く。第46図の１～８は壷で、頸部が大きく朝顔状に開くもので、口縁部の拡張部に櫛などで斜格子文、波状文を描き、円形浮文を貼り飾っている。さらに、頸部と肩部の境には６では指頭圧痕文帯を、７では断面三角形突帯を巡らす。９、10は無頸壷。10は刻目をもつ突帯を付ける。11、12は壷の肩部。櫛による直線文や斜格子文を描き、11は刻目をもつ２条の突帯を巡らす。13、14には口縁部外面に凹線を２、３条入れる。13の頸部には３条の断面三角形突帯を巡らす。

第47図は弥生時代中期後葉以降の弥生土器と古墳時代の土師器である。１～６は弥生時代の甕。１～５は口縁部がくの字に屈曲し、端部は少しづつ拡張し、その外面に凹線を２、３条入れる。６の口縁部は５の字状の複合口縁となる。７以下は土師器。10が器台で、他は甕である。７～９は５の字状を呈する口縁部をもち、弥生時代末から古墳時代初めの土器である。10は鼓形器台の破片。11～14は、５の字状の複合口縁が退化したもので、外面の稜が徐々に丸くなる。古墳時代前期末から中期に属する。

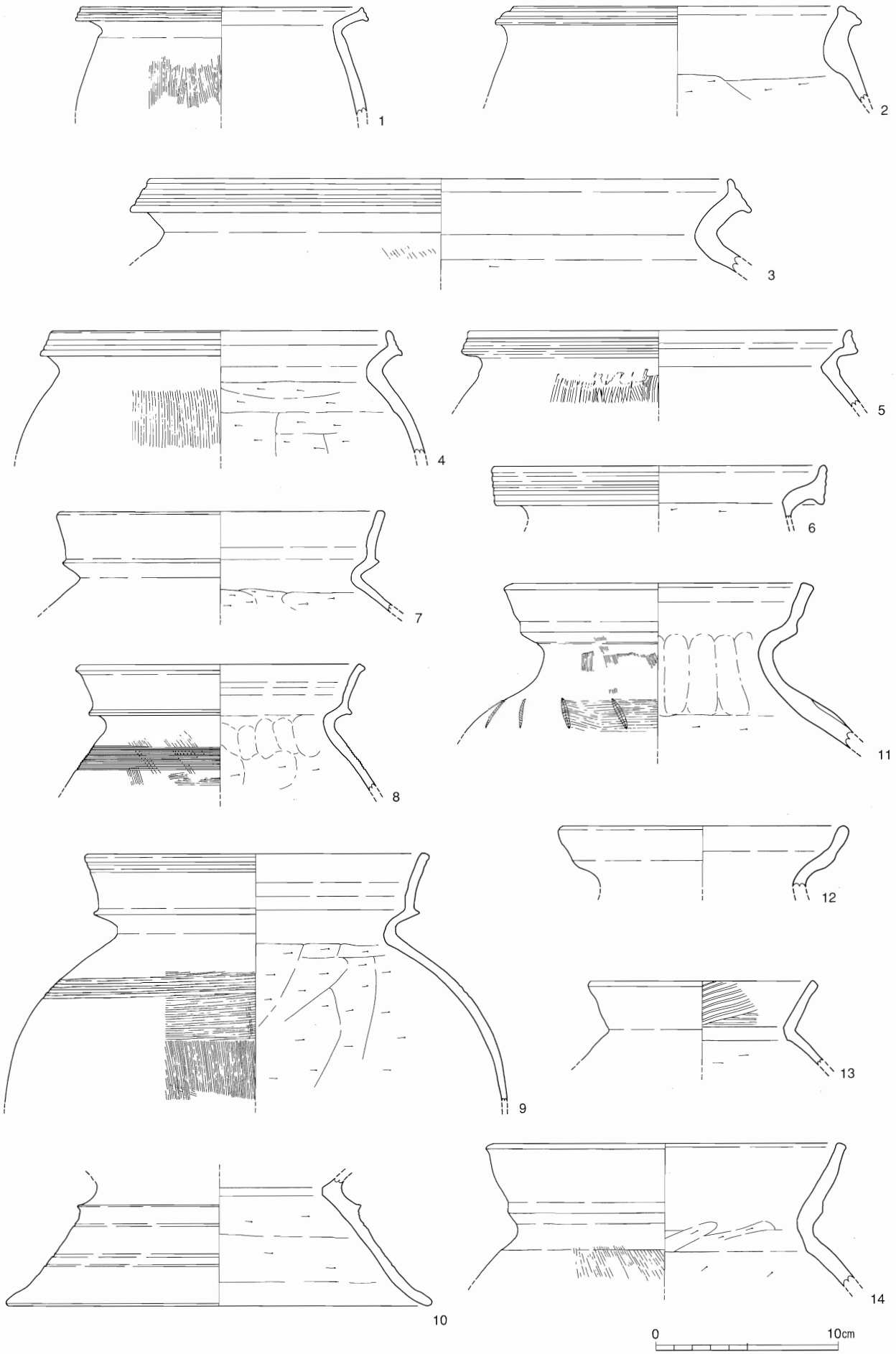
第48図は弥生時代の蓋と壷・甕の底部である。１、２は前期の蓋。傘形。３～８は前期の壷の底



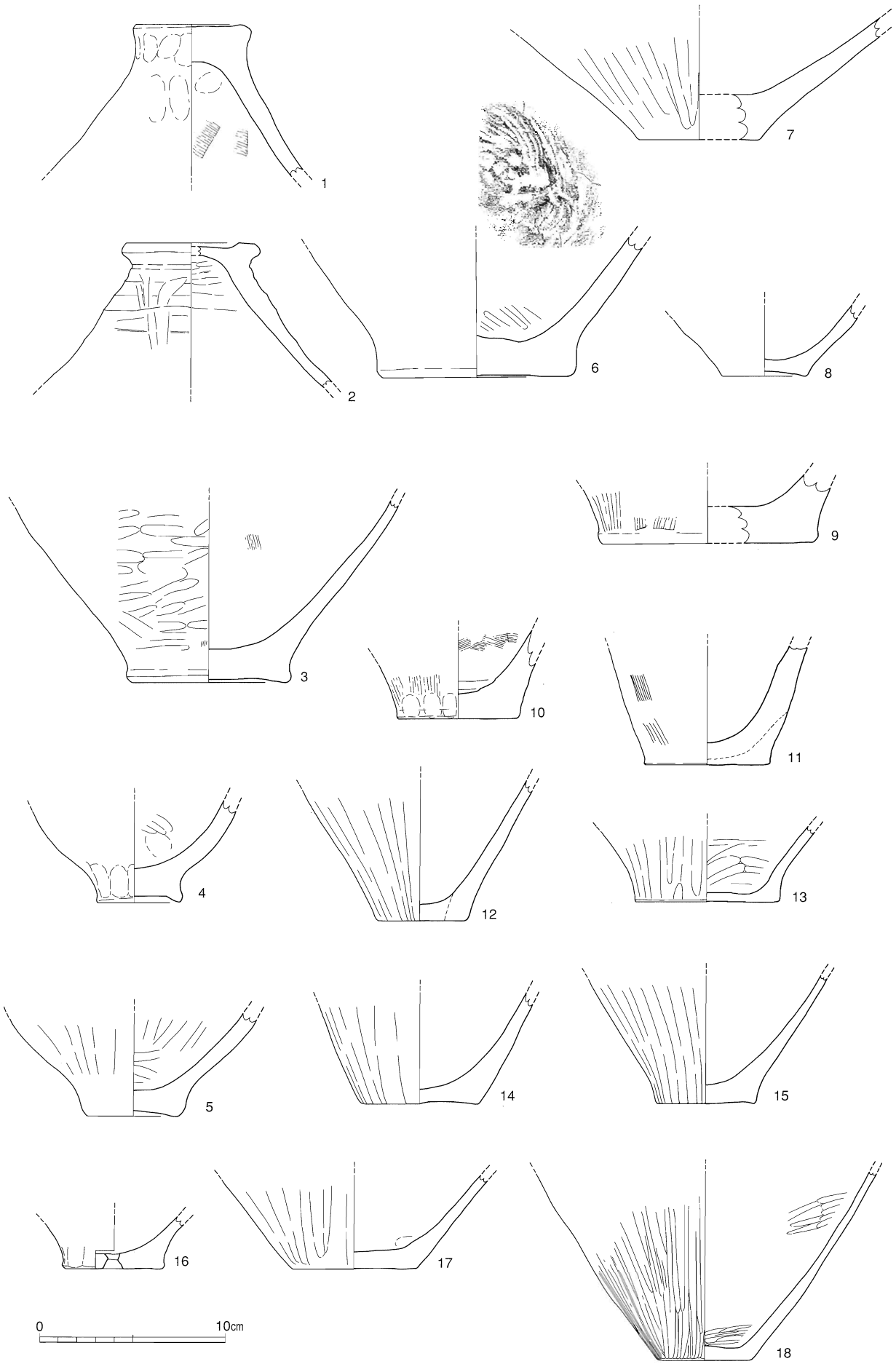
第45図　Ⅱ区（左岸）A調査区　砂礫層出土土器実測図（2）



第46図　Ⅱ区（左岸）A調査区　砂礫層出土土器実測図（3）



第47図　Ⅱ区（左岸）A調査区砂礫層出土土器実測図（4）



第48図　Ⅱ区（左岸）A調査区　砂礫層出土土器実測図（5）

表 12　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	調査区・層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
43－1	縄文　鉢	B－1・砂礫			貼付突帯上に刻目	外面　縄文 内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	黒褐色		
43－2	鉢	B－1・砂礫			口縁は二枚貝の刺突文 二枚貝の斜行刺突文	内面　条痕	粗砂含む	暗褐色		外面磨滅
43－3	鉢	B－1・砂礫			肥厚帯　刺突文	内面　指頭圧痕　ヨコナデ	細砂含む	外面　黒褐色 内面　褐色		
43－4	鉢	B－1・砂礫			ハッチング状の沈線	外面　条痕 内面　条痕　ヨコナデ	粗砂含む	褐色		磨滅気味
43－5	鉢	B－2・砂礫			肥厚帯上に刺突文	外面　貝殻条痕 内面　ヨコナデ	細砂含む	褐色		
43－6	鉢	B－1・砂礫			肥厚帯	外面　条痕 内面　指頭圧痕　条痕の後ナデ	粗砂含む	褐色		外面スス付着
43－7	鉢	B－1・砂礫			肥厚帯から上下に条痕で文様のようにしている	外面　条痕 内面　条痕　指頭圧痕	細砂含む	黒褐色		
43－8	鉢	B－1・砂礫	16.2		隆帯上に二枚貝の刺突文	外内面とも条痕	粗砂含む	黒褐色		波状口縁
43－9	鉢	A・砂礫			二枚貝の刺突文	外面　条痕 内面　ナデ	粗砂含む	暗褐色		
43－10	鉢	B－1・砂礫	28.0		二枚貝の条痕　口縁部に２連単位の刺突文	外内面とも条痕内面 内面　指頭圧痕	粗砂含む	黒茶色		スス付着
43－11	鉢	A・砂礫			２連単位の連続刺突文３列	外内面とも条痕	細砂含む	外面 灰茶色 内面 黒灰色		内面スス付着
43－12	鉢	D・砂礫			外面に条痕　肥厚帯	内面 ナデ	細砂含む	淡褐色		
43－13	鉢	C・砂礫			口縁部に刻目	外面　ナデ 内面　ケズリ	粗砂含む	灰褐色		磨滅気味
43－14	鉢	A・砂礫			沈線間に刺突文	外面　ナデ 内面　ナデ	細砂含む	暗茶褐色		注口土器か 内面スス付着
43－15	鉢	D・砂礫	24.7		口縁部が丸く内湾する浅鉢	外面　ナデ 内面　ナデ　条痕	粗砂含む	外面 灰褐色 内面 淡黄褐色		
43－16	鉢	B－2・砂礫			口縁部がやや外傾する深鉢	外面　ナデ 内面　ヘラケズリ	粗砂含む	黄褐色 (一部灰褐色)		内面スス付着
43－17	鉢	D・砂礫			外面　２連単位の連続刺突文 内面　円形刺突文	外面　条痕 内面　ケズリ	粗砂含む	淡褐色		
43－18	鉢	B－2・砂礫			刻目突帯	外面　ケズリ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		
43－19	鉢	B－2・砂礫			刻目突帯	外内面ともナデ	細砂含む	褐色		
43－20	鉢	D・砂礫			刻目突帯	外面　ケズリ 内面　条痕	細砂含む	淡黄褐色		
43－21	鉢	D・砂礫			口縁部が短く外傾する深鉢　口縁端部が平坦	外内面とも条痕	粗砂含む	茶褐色		外面スス付着
43－22	鉢(底部)	B－1・砂礫	底径 9.2		低く厚い高台が付く器壁が部分的に薄い	外内面ともナデ	粗砂含む	茶褐色	40	スス付着

表 13　Ⅱ区（左岸）A 調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
44－1	弥生　壷	砂礫			ヘラ描平行直線文 ヘラ描羽状文	外面　ハケの後ミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂多く含む	肌色		胴部表面に黒班
44－2	壷	砂礫			削出し突帯上にヘラ描平行直線文 貝殻平行直線文・羽状文	内面　ヘラミガキ	細砂含む	茶灰色～黄茶色		
44－3	壷	砂礫			貝殻木葉文	外面　ヘラミガキ	粗砂含む	茶褐色		

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
44－4	壺	砂礫			ヘラ描羽状文 貼付突帯３条・縦	外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ヘラミガキ	細砂含む	黄褐色		
44－5	壺	砂礫	31.0(推定)		口縁部内側に楕円形の貼付突帯	外面　ヘラミガキ	粗砂含む	茶褐色	8	
44－6	壺	砂礫			口縁部上面に沈線 内側に突帯	外内面ともナデ	粗砂含む	淡褐色		
44－7	壺	砂礫	26.4		口縁部外面と頸部に沈線１条	外面　ハケの後ナデ 内面　ヨコナデ	粗砂含む	茶灰色	10	
44－8	壺	砂礫	18.0		ヘラ描平行直線文４条	外面　ヨコナデ　ハケ ヘラミガキ 内面　ハケの後ヘラミガキ	粗砂含む	白灰色	23	
44－9	甕	砂礫	16.8		ヘラ描沈線１条	外内面ともハケ	粗砂含む	茶灰色	20	
44－10	甕	砂礫	23.0		ヘラ描平行直線文８条	外面　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケ	粗砂含む	暗茶色	15	外内面炭化物付着
44－11	甕	砂礫			ヘラ描平行直線文４条 口縁にヘラ刻目	外面　コナデ　ハケ 内面　ナデ　ハケ　ヨコナデ	粗砂含む	淡茶色		外内面スス付着
44－12	甕	砂礫			ヘラ描平行直線文10条 三角形刺突文	外面　ハケ 内面　ハケの後ナデ	細砂含む	黄褐色		
44－13	甕	砂礫			竹管文　ヘラ描平行直線文６条　口縁部ヘラ刻目	外面　ヨコナデ　ハケの後ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	茶褐色		
45－1	壺	砂礫			櫛描直線文６条単位 三角形刺突文	内面　ナデ　指頭圧痕	細砂含む	暗茶褐色		
45－2	甕	砂礫			ヘラ刻目　櫛描直線文６条単位×２　櫛描波状文	外面　ハケ 内面　ハケ　ヨコナデ	細砂含む	茶褐色		
45－3	甕	砂礫	18.5		口縁部外反	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ハケの後ナデ　ヨコナデ	微砂含む	淡茶色	24	外面スス付着
45－4	甕	砂礫	16.8		口縁部くの字に屈曲	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ハケの後ナデ	微砂含む	暗灰褐色	21	磨滅が著しい
45－5	甕	砂礫	20.4	11.4	口縁部くの字に屈曲	外面　ハケ　ナデ 内面　ナデ　ハケメ	細砂含む	淡肌色	25	
45－6	甕	砂礫	18.6		口縁部外面にハケ原体による斜行刺突文	外内面ともヨコナデ　ハケ	細砂含む	茶褐色	15	
45－7	鉢	砂礫	22.0		粘土紐貼付後ヘラ刻目 櫛描刺突文	内面　ハケ　ヨコナデ	細砂含む	茶灰色	20	胴部に黒班
45－8	高杯	砂礫	22.0		ヘラ刻目	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	微砂含む	灰褐色	12	内面に黒斑
45－9	高杯	砂礫	28.4		口縁部に刻目	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	茶灰色	10	外面に黒班
45－10	高杯	砂礫	20.3		凹線文４条後に櫛刻目	外内面ともナデ	微砂含む	茶褐色	10	
45－11	高杯	砂礫	29.2		口縁部に刻目と凹線文４条　口縁部に孔	ヨコナデ　口縁部に孔がある	微砂含む	黒灰色	10	外内面スス付着
45－12	高杯(脚部)	砂礫	底径 15.6		ハの字に開く	外面　ヘラミガキ　指頭圧痕 内面　ハケの後ナデ	細砂含む	白灰色	26	
46－1	壺	砂礫	19.0		口縁外面にハケ原体による斜行文	内面　ヨコナデ	微砂含む	茶灰色	13	
46－2	壺	砂礫	24.5	2.2	口縁外内面に円形浮文 櫛描斜格子文	外面　ハケ　ナデ 内面　ヘラミガキ？	粗砂含む	外面暗橙色 内面黒褐色	35	
46－3	壺	砂礫	25.8		口縁外内面に櫛描斜格子文　口縁内面に櫛描波状文	ヨコナデ	微砂含む	灰褐色	14	
46－4	壺	砂礫	24.6		ヘラ刻目	外面　ハケの後ナデ　指頭圧痕後ヨコナデ 内面　ヨコナデ	細砂含む	黄褐色	17	
46－5	壺	砂礫	23.6		外面　浅い凹線文の後ハケ原体による格子文 内面　櫛描波状文３条	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ヘラミガキ	微砂少量含む	灰褐色	12	
46－6	壺	砂礫	21.6	7.7	外面　口縁に斜格子文 指頭圧痕文帯 内面　凹線文１条	外面　ハケ　ナデ	微砂少量含む	外面 褐色 内面 暗褐色	35	口縁部内面に黒班

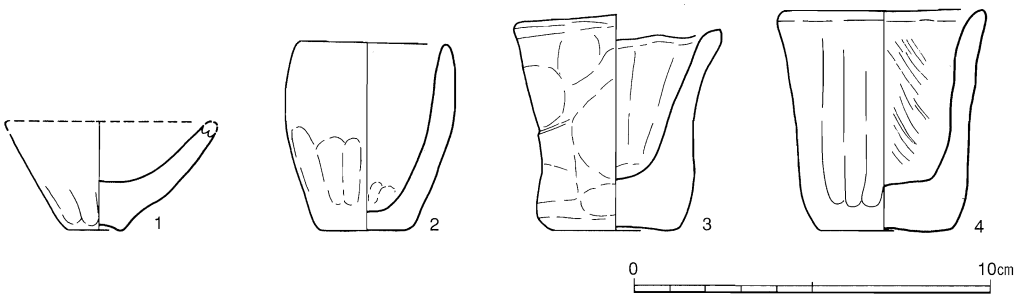
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
46－7	壷	砂礫			貼付突帯２条	外面　ハケの後ナデ 内面　ヘラミガキ　ナデ	細砂含む	灰褐色	85	
46－8	壷	砂礫			口縁部外面にヘラ刻目を多く入れる	外面　ナデ 内面　ヘラミガキ	微砂含む	茶褐色		
46－9	壷	砂礫	11.8		無頸壷　口縁部は短く上面は平坦	ヨコナデ	微砂含む	茶灰色	15	磨滅が著しい
46－10	壷	砂礫	10.8		無頸壷　貼付突帯上に刻目 口縁部内面に刻目	外面　ヨコナデ 内面　ナデ	微砂含む	灰褐色	10	
46－11	壷	砂礫			櫛描直線文６条 刻目突帯２条　斜格子文	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ナデ　指頭圧痕	微砂含む	灰褐色		
46－12	壷	砂礫			櫛描直線文・斜格子文	不明	微砂含む	茶灰色		
46－13	壷	砂礫			口縁部外面に凹線文３条　突帯３条	不明	微砂含む	暗茶色		
46－14	壷	砂礫			口縁部外面に凹線文２条	不明	微砂含む	茶褐色		
47－1	甕	砂礫	15.4		口縁部外面に凹線文２条	外面　ハケの後ナデ 内面　ヨコナデ　ナデ	微砂含む	暗茶色	15	
47－2	甕	砂礫	18.0		口縁部外面に凹線文２条	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	細砂含む	灰褐色	15	
47－3	甕	砂礫	31.8		口縁部外面に凹線文３条	外面　ヨコナデの後ナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ？	細砂含む	淡茶色	10	
47－4	甕	砂礫	18.4		口縁部外面に凹線文３条	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	細砂含む	茶褐色	15	外面スス付着
47－5	甕	砂礫	21.0		口縁部外面に凹線文３条　突帯貼付の後刻目	外面　ナデ　ハケ 内面　ヨコナデ	微砂含む	乳灰色	18	
47－6	甕	砂礫	18.0		口縁部外面に凹線文４条	内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	細砂含む	外面 淡黄褐色 内面 暗灰色	15	
47－7	土師器　甕	砂礫	17.8		５の字口縁	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	細砂含む	茶褐色	19	
47－8	甕	砂礫	15.3		５の字口縁 肩部に櫛描直線文	外面　ヨコナデ　ハケの後ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	細砂含む	灰褐色	15	
47－9	甕	砂礫	18.2		５の字口縁 櫛描直線文４条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	細砂含む	茶褐色	28	
47－10	器台	砂礫	22.9		鼓形	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	微砂含む	灰褐色	10	
47－11	甕	砂礫	15.9		肩部にハケ原体による刺突文	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	粗砂含む	茶褐色	26	
47－12	甕	砂礫	15.4		口縁部下方に段	外内面ともヨコナデ	微砂含む	淡茶褐色	10	外面スス付着
47－13	甕	砂礫	12.6	4.7	口縁部は外に開く	内面　ナデ　ヘラケズリ	粗砂含む	褐色	40	
47－14	甕	砂礫？	19.0		口縁部下方に段	外面　ヨコナデ　ハケの後ナデ 内面　ヨコナデ　ナデ　ヘラケズリ	細砂含む	茶灰色	17	
48－1	弥生　蓋	砂礫	天井径6.3		傘形	外面　ハケの後ナデ　指頭圧痕 内面　指頭圧痕　ハケの後ナデ	粗砂含む	茶褐色	完存	
48－2	蓋	砂礫	天井径7.0		傘形	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ ヘラケズリ 内面　ナデの後ミガキ	粗砂含む	茶褐色	20	
48－3	壷(底部)	砂礫	底径8.8			外面　ヘラミガキ 内面　ハケ　ナデ	粗砂含む	灰褐色	完存	黒斑 磨滅する
48－4	壷(底部)	砂礫	底径4.3			外面　指頭圧痕　ヘラミガキ 内面　ナデ　ヘラミガキ	粗砂含む	茶褐色	90	
48－5	壷(底部)	砂礫	底径5.0			外内面ともヘラミガキ	細砂含む	淡灰褐色	完存	
48－6	壷(底部)	砂礫	底径10.4			内面　ヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色	完存	黒斑 内面スス付着 ミガキの工具痕

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
48－7	壷(底部)	砂礫	底径6.6			外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	黒褐色	20	外内面スス付着 磨滅する
48－8	壷(底部)	砂礫	底径4.6			外内面ともナデ	粗砂含む	灰褐色	75	磨滅する
48－9	甕(底部)	砂礫	底径11.6			外面　ハケ　ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	灰褐色	25	
48－10	甕(底部)	砂礫	底径6.6			外内面ともハケ 指頭圧痕	粗砂含む	淡灰褐色	完存	外面スス付着
48－11	甕(底部)	砂礫	底径6.8			外面　ハケ 内面　ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	淡灰褐色	5	
48－12	(底部)	砂礫	底径4.9			外面　ヘラミガキ 内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	外面 淡灰色 内面 灰褐色	完存	外面スス付着
48－13	(底部)	砂礫	底径7.8			外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　底部ナデ	細砂含む	灰褐色	60	外内面スス付着
48－14	(底部)	砂礫	底径6.3			外面　ヘラミガキ　ナデ 内面　ナデ	細砂含む	外面 黄灰色 内面 黒褐色	50	内面スス付着
48－15	(底部)	砂礫	底径5.2			外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	細砂含む	外面 灰褐色 内面 黒色	95	全体スス付着
48－16	(底部)	砂礫	底径6.8		孔は上下から穿孔	外内面ともナデ	細砂含む	外面 灰白色 内面 暗灰色	80	内面スス付着
48－17	(底部)	砂礫	底径6.8			外面　ヘラミガキ 内面　指頭圧痕　ナデ	細砂含む	灰褐色	60	外面スス付着
48－18	(底部)	砂礫	底径5.2	10.3		外内面ともヘラミガキ	細砂含む	暗灰褐色	完存	外面に黒班

部。９～11は前期の甕の底部。12～18は中期の土器の底部。16は焼成後内外から穿孔されている。

ミニチュア土器には第49図１、２がある。１は鉢形で、底径1.7cm、残存高3.1cmを測る。底部は小さく、体部から口縁部にかけて大きく開く。２はコップ形で、口径4.1cm、高さ5.3cmを測る。平底の底部をもち、体部はやや丸くカーブを描き、口縁部にかけて真っすぐに立ち上がる。

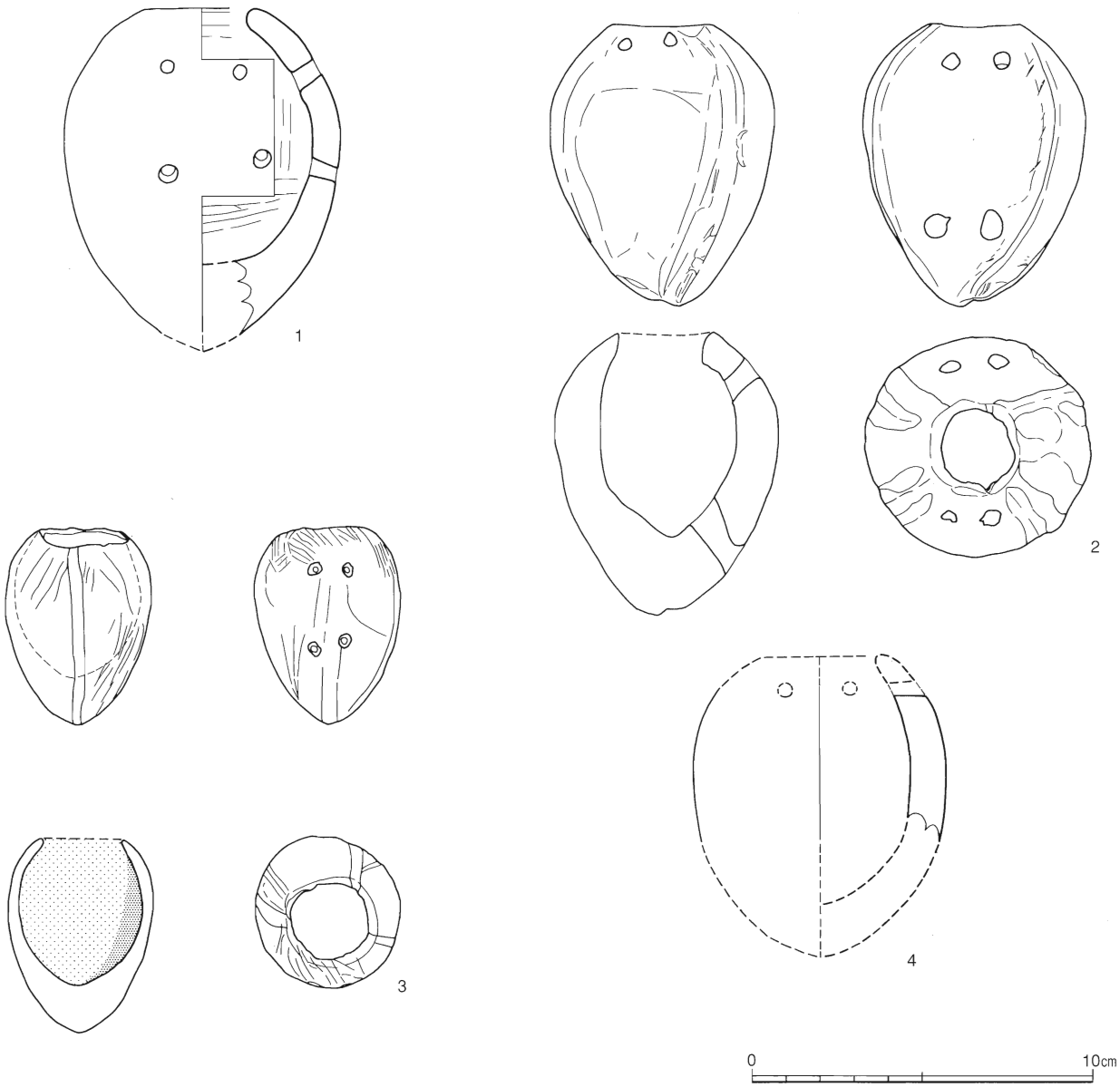
土製品には土錘と紡錘車がある。第51図３の土錘は棒状で、重さ6.7ｇを測る。第52図４の紡錘車は孔を内外から開けている。中期の弥生土器の再利用である。



第49図　Ⅱ区（左岸）出土ミニチュア土器実測図

表 14　Ⅱ区（左岸）A・B調査区出土ミニチュア土器観察表

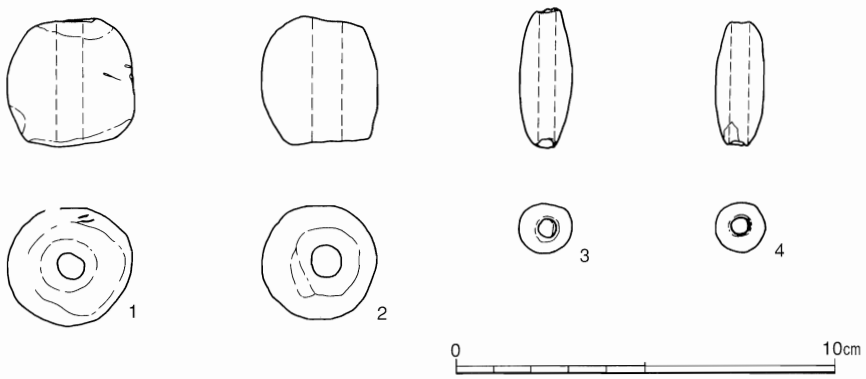
挿図番号	器　種	調査区・層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
49－1	ミニチュア土器	A・砂礫	底径1.7	(3.1)	鉢形	外内面ともナデ	細砂含む	茶灰色	完存	外面に黒班 手捏ね
49－2	ミニチュア土器	A・砂礫	4.1 底径2.4	5.3	コップ形	外面　ナデ　ヘラミガキ？ 内面　ナデ　底部指頭圧痕	微砂含む	茶灰色	完存	手捏ね？
49－3	ミニチュア土器	B－1・砂礫	5.8 底径3.6	6.7	鉢形	外面　指頭圧痕　ヘラ状圧痕　底部ナデ 内面　ヘラ状工具でえぐる　底部ナデ	細砂含む	褐色	完存	
49－4	ミニチュア土器	B－2・砂礫	5.6 底径3.8	6.2	鉢形	外面　ヘラによるナデ 内面　ハケ　ナデ	粗砂含む	淡褐色	完存	



第50図　Ⅱ・Ⅲ区出土土笛実測図（3のアミは砂礫、細いアミは粘土である）

表 15　Ⅱ・Ⅲ区出土土笛観察表

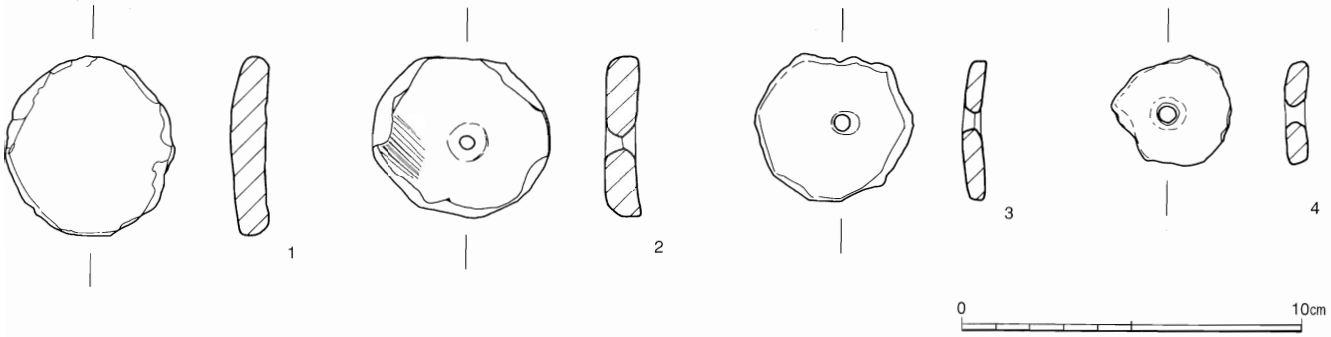
挿図番号	器　種	調査区・層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
50－1	土笛	ⅡB－1・砂礫2	3.0(推定)	10.0	上段に径5㎜　下段に径6㎜の孔が4個ある	内面　ナデ	微砂含む	茶褐色	40	丁寧な仕上げ磨滅する
50－2	土笛	ⅡB－2・砂礫3	2.2	8.0	上段に径5㎜　下段に径6㎜　裏に径4㎜の孔が6個ある 上下に4条の突起	外内面ともナデ	粗砂含む	黄褐色	完存	外面底部に黒班
50－3	土笛	ⅢB・粘土		5.8	径3～4㎜の孔が上下2個ずつある　上下に2条の平行線が引かれる	外面　ハケの後ナデ 内面　ナデ	細砂含む	黄褐色	完存	内部に1㎜大の細砂が入っている　壁面から底部は青灰色粘土
50－4	土笛	ⅢC・砂礫(下層)	胴部径7.4	8.8	2個の孔が認められる	外内面ともナデ	粗砂含む	淡褐色	10	外面に黒班



第51図　Ⅱ区（左岸）出土土錘実測図

表 16　Ⅱ区（左岸）出土土錘観察表

挿図番号	器　種	調査区・層位	長さ(cm)	最大径(cm)	孔の径(cm)	重さ(g)	調　　整	胎　土	色　調	備　考
51－1	土錘	D・砂礫3	3.4	3.4	0.6	40.0	ナデ	密	明褐色 (一部淡褐色)	
51－2	土錘	6T・粘土	3.4	3.0	0.8～0.9	38.2	表面ナデ 上下面はヘラで切る	密	青灰色	須恵質
51－3	土錘	A・粘土混じり砂	3.7	1.4	0.5	6.7	ナデ	密	赤褐色	
51－4	土錘	D・粘土	3.3	1.3	0.5	5.3	ナデ	密	淡褐色	



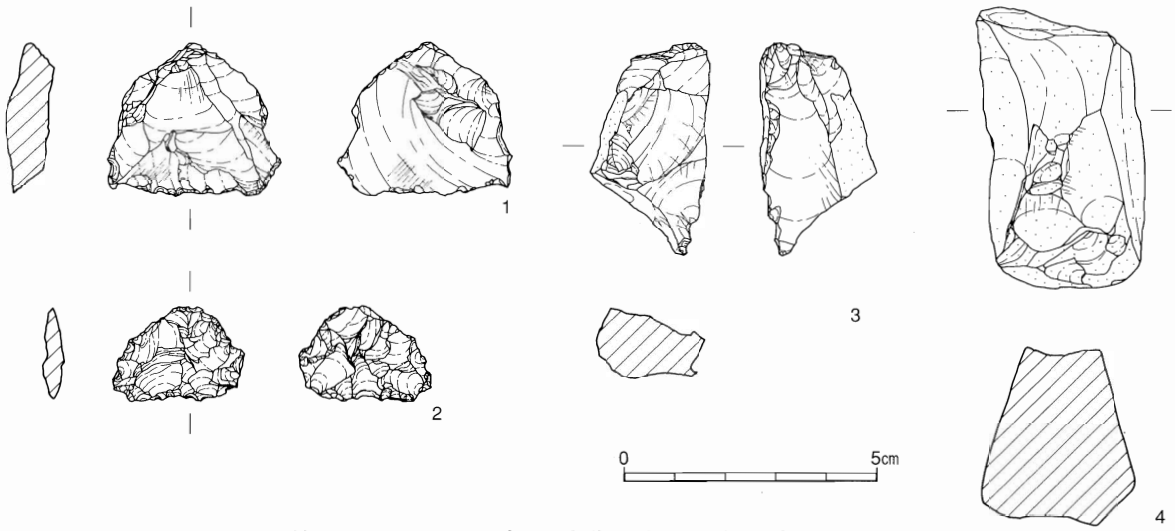
第52図　Ⅱ区（左岸）出土円形土製品・紡錘車実測図

表 17　Ⅱ区（左岸）出土円形土製品・紡錘車観察表

挿図番号	器　種	調査区・層位	径(cm)	厚さ(cm)	孔の径(cm)	重さ(g)	形態	調　　整	胎　土	色　調	備　考
52－1	円形 土製品	C・砂礫（上層）	5.0	0.6		30.9	円形	両面ともナデ	粗砂含む	淡褐色・黒褐色？	土器片再利用
52－2	紡錘車	B－1・砂礫2	5.0	0.8	0.4	28.7	円形 両面から 穿孔	両面ともハケの後ナデ	細砂含む	表　黒褐色 裏　黄褐色	
52－3	紡錘車	B－2・砂礫2	4.5	0.5	0.4	16.2	円形 両面から 穿孔	ナデ	細砂含む	黒褐色	スス付着 土器片再利用
52－4	紡錘車	A・砂礫2	3.5	0.5	0.5	7.0	両面から 穿孔	表　ミガキ	微砂含む	表　灰褐色 裏　黒褐色	スス付着

石製品としては石錘(第55図６、７）がある。偏平な円礫の両端を打ち欠いたもの。

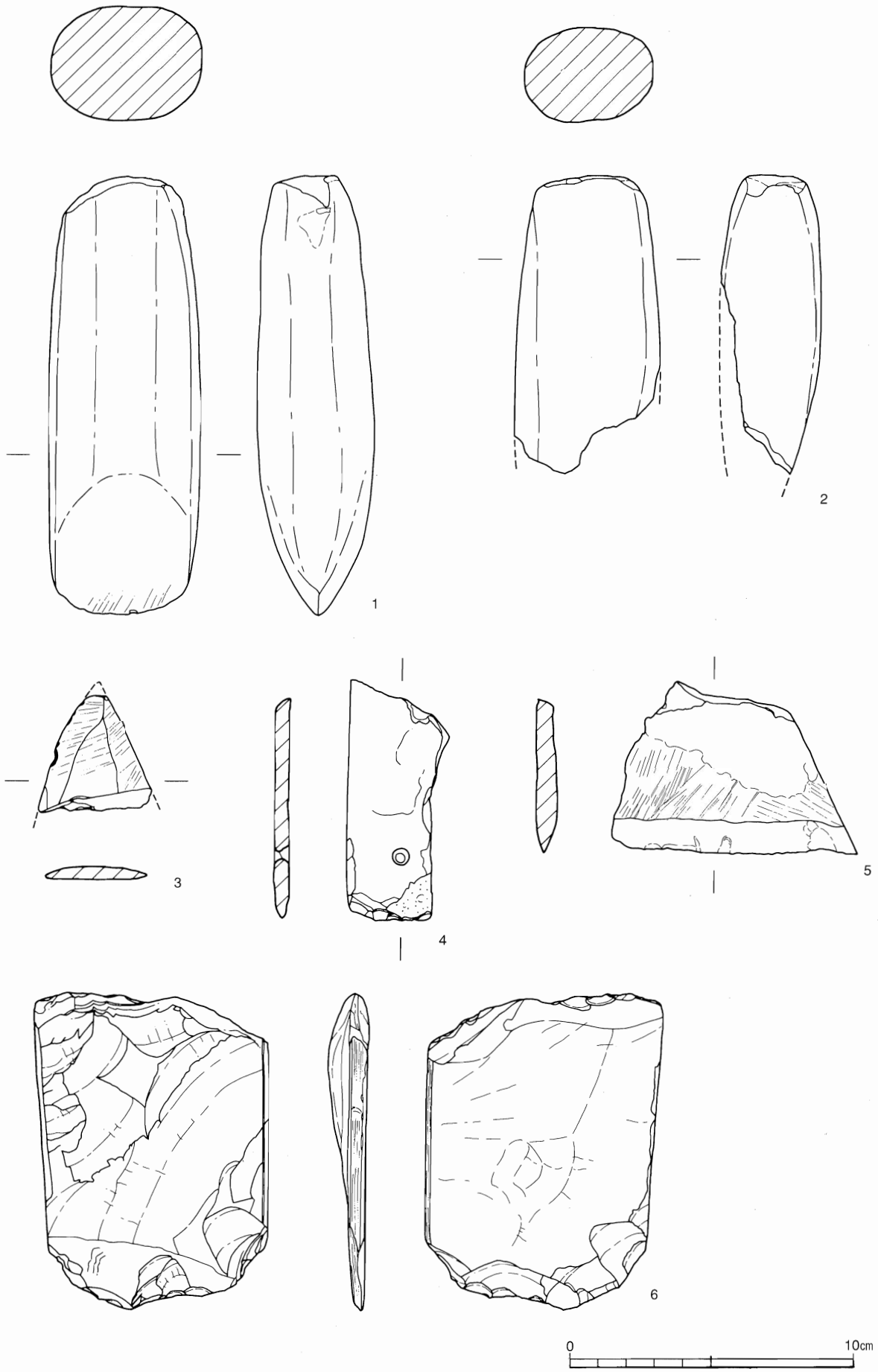
木製品には、第56図４、６の棒状木製品がある。４は現存長13.2cmで、径1.5cm、中程で折れている。表面はきれいに削られている。先端には径0.5cmの孔があり、両面から穿たれている。紐を通していたであろうが、使途不明。６は現存長19.1cmで、径1.7cm、先端の長さ1.0cmはほぞ状に加工され、細くなっている。中程からは削られておらず、生木のままであるが、先端にかけて二次的に火を受けている。使途不明(注3)。



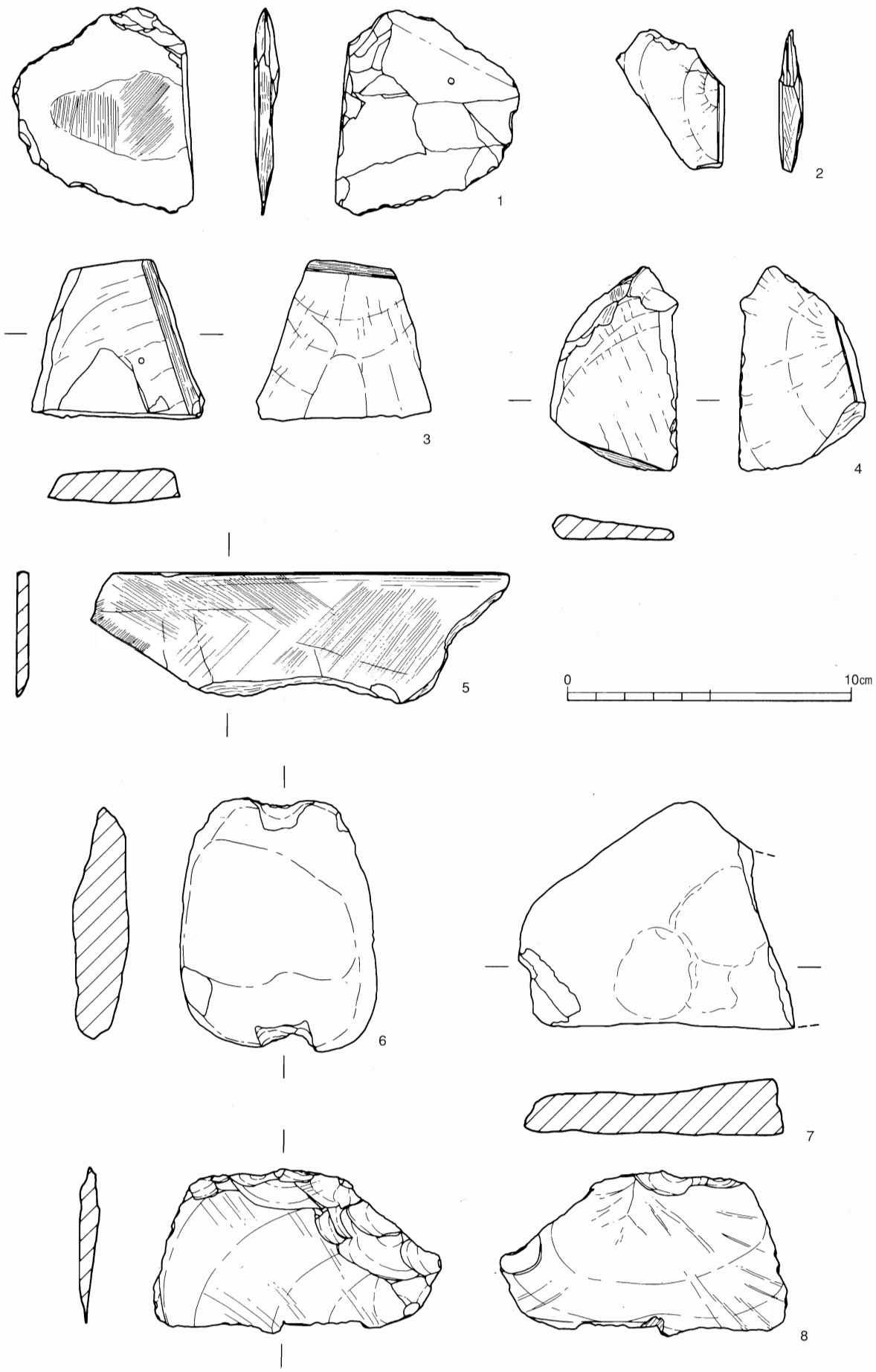
第53図　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土石製品実測図（1）

表 18　Ⅱ区（左岸）出土石製品観察表

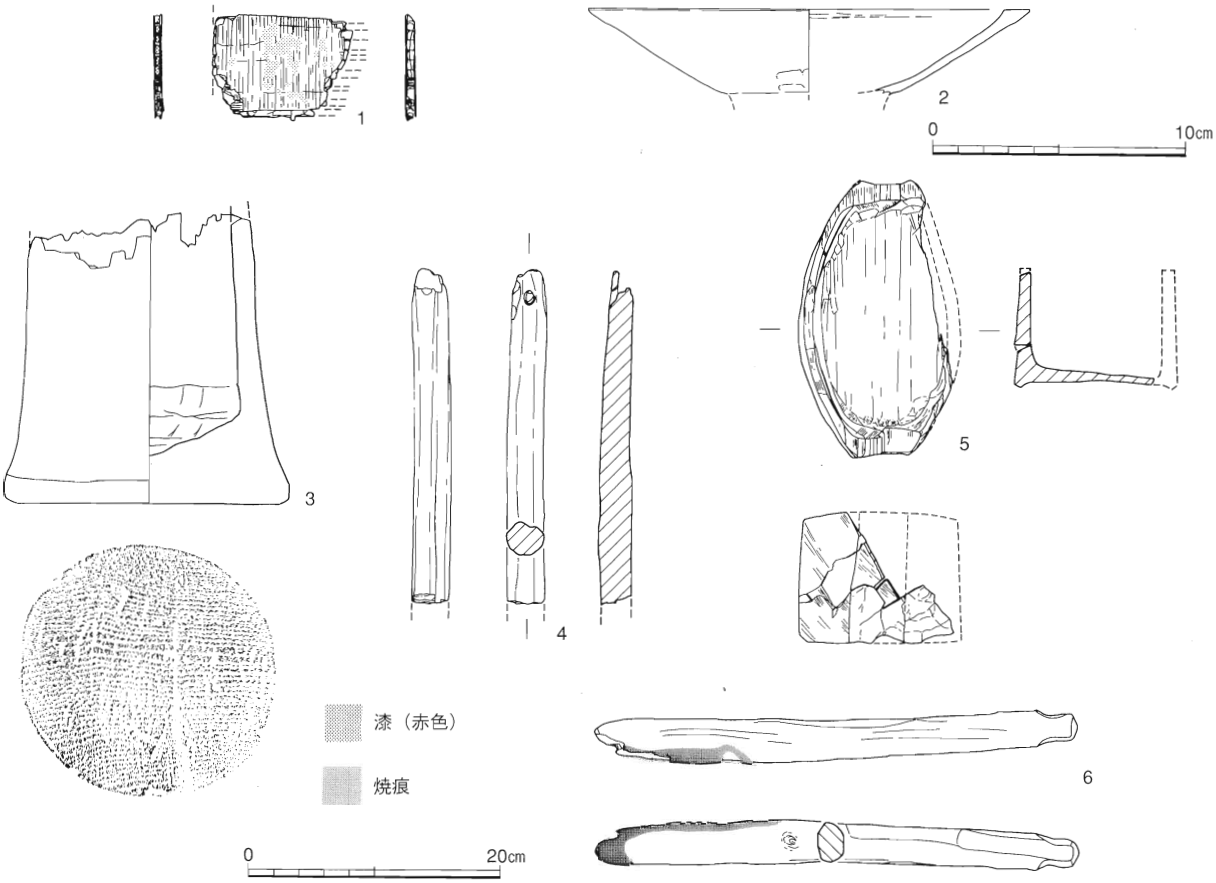
挿図番号	種　別	調査区・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備　考
53－1	剥片	B－1・砂礫 1	3.0	3.4	0.8	9.0	黒曜石	調整あり
53－2	剥片	B－1・砂礫 1	1.9	2.6	0.4	2.0	黒曜石	調整あり
53－3	石核	B－1・砂礫 1	(4.2)	2.3	1.3	12.3	黒曜石	残核 ?
53－4	原石	D・砂礫 3	5.6	3.3	3.5	78.6	黒曜石	
54－1	太形蛤刃石斧	B－1・岩盤直上	15.6	5.4	4.1	639.4	蛇紋岩	
54－2	石斧	B－2・砂礫 3	(10.6)	(5.2)	3.4	272.2	蛇紋岩	
54－3	磨製石剣	B－2・砂礫 2	(4.1)	(4.0)	0.5	7.5	緑色凝灰岩	
54－4	穂摘み具 ?	C・砂礫 2	(8.6)	(3.6)	0.5	26.7	玄武岩	使途不明・両面から穿孔・節理面あり
54－5	石鏃	B－1・砂礫 2	(6.1)	(8.6)	0.7	53.9	頁岩	
54－6	板状未製品 ?	D・砂礫 3	11.2	8.4	1.1	125.0	頁岩	両側面擦切痕
55－1	剥片	B・砂礫	7.4	6.4	0.8	39.4	頁岩	擦切痕・小円形凹
55－2	剥片	B－2・砂礫 2	(4.9)	(3.8)	0.8	11.4	流紋岩	擦切痕
55－3	剥片	D・砂礫 3	(5.7)	(6.1)	1.1	54.1	流紋岩	擦切痕　・小円形凹
55－4	剥片	D・褐灰色粘土	(7.3)	(4.5)	0.8	26.0	流紋岩	擦切痕
55－5	穂摘み具未製品 ?	B－1・砂礫 2	4.6	(14.8)	0.4	45.2	流紋岩	擦切痕
55－6	石錐	A・砂礫	9.0	6.9	(2.0)	166.0	不明	
55－7	石錐	A・砂礫	4.9	(9.7)	2.0	183.6	流紋岩	
55－8	剥片	D・砂礫 3	5.9	10.1	0.7	45.6	玄武岩	調整あり



第54図　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土石製品実測図（2）



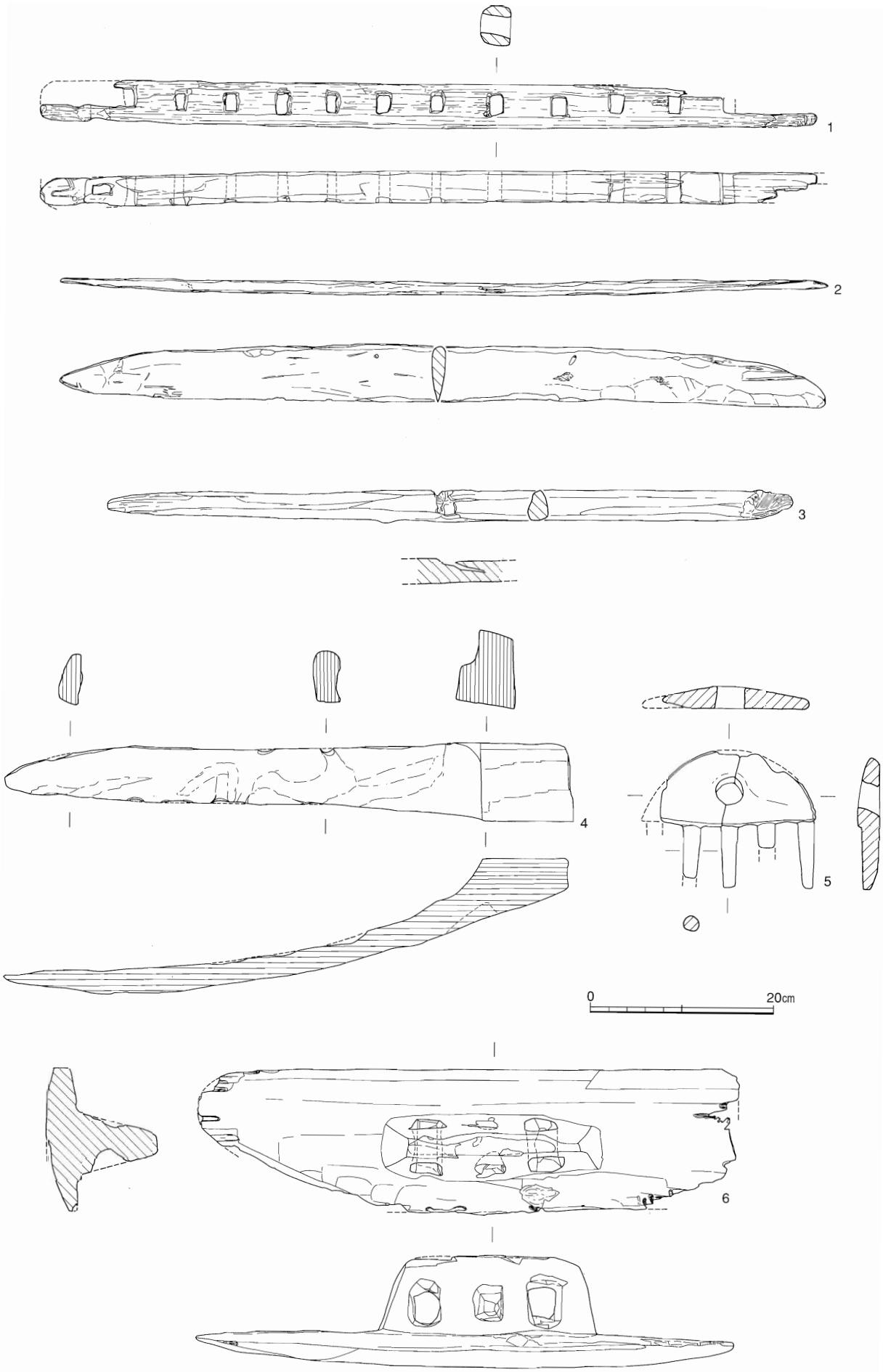
第55図　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土石製品実測図（3）



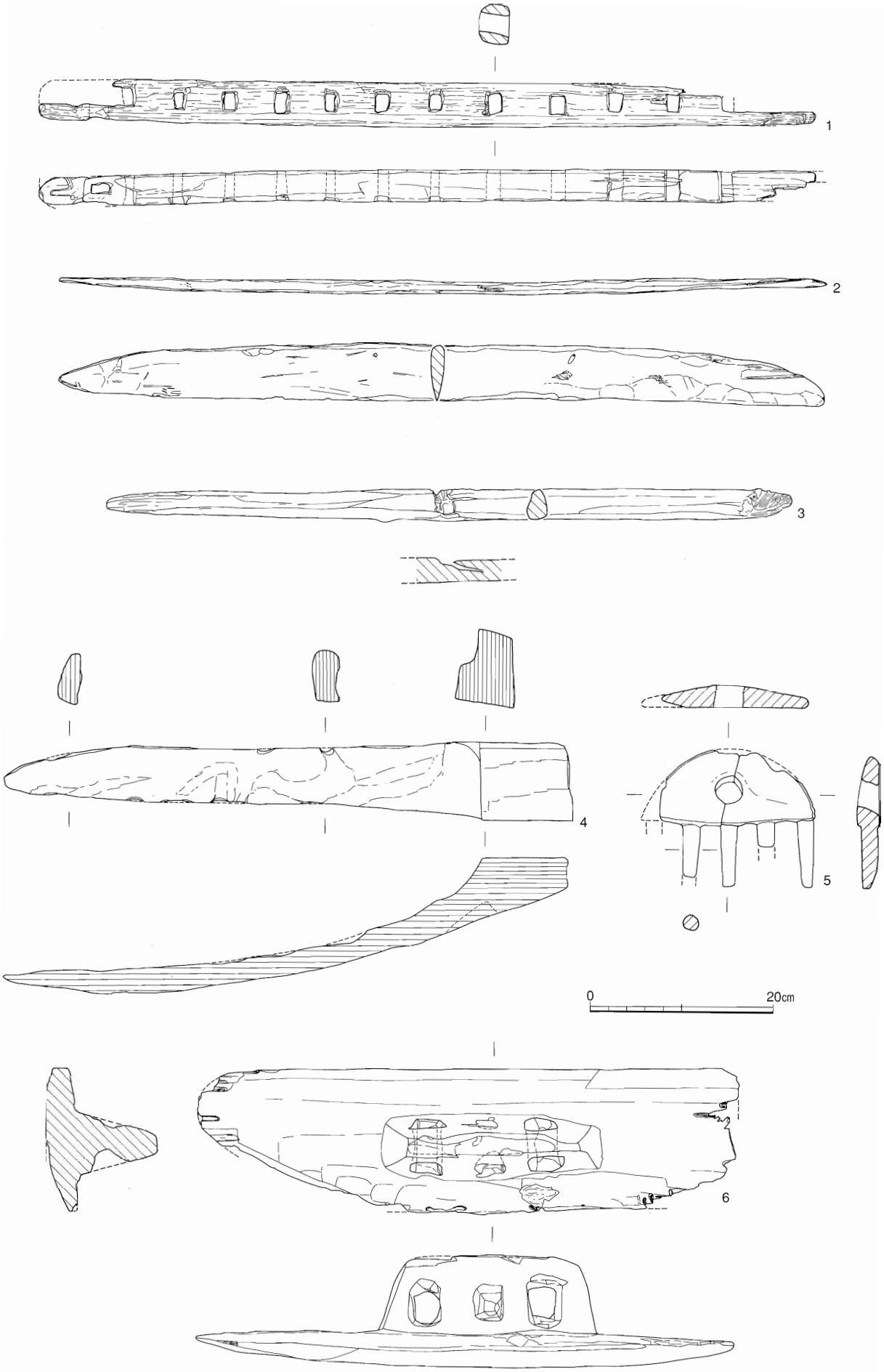
第56図　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土木製品実測図（1）

表 19　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土木製品観察表

挿図番号	種　別	調査区・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ／太さ(cm)	形態・手法の特徴	木取	備　考
56－1	漆塗縦櫛	B－1・砂礫 2	5.5	4.1	0.4	結歯式　歯11本残存	－	
56－2	高坏	B－2・砂礫	口径 35.0	高(6.8)		一木式　精製	柾目	
56－3	容器	C・砂礫 3	底径 11.3	高 11.5		底面に加工痕	柾目	
56－4	棒状木製品	A・砂礫	13.2	径 1.5		表面加工　先端に小穴	板目	中程で欠損
56－5	容器	B－2・砂礫	22.0	12.0	高 10.4	一木式	柾目	クスノキ
56－6	棒状木製品	A・砂礫	19.1	径 1.7		一端を加工	芯持	一部炭化
57－1	棒状木製品	B－2・砂礫	85.0	4.1	3.5	角孔が 12 並ぶ	柾目	マツ
57－2	緯打具	B－2・砂礫 3	83.9	6.3	1.2		柾目	ツバキ
57－3	棒状木製品	C・砂礫 4	74.7	3.3	2.3	中央に抉りあり	芯持	
57－4	角状木製品	B－2・砂礫	62.1	8.4	2.6	緩やかに湾曲	柾目	スギ
57－5	直柄又鍬	D・砂礫 3	15.0	16.0	2.5	歯５本	板目	
57－6	鍑	B－1・砂礫	58.7	15.7	10.3	把手は磨り板上面のやや後方・把手孔２	柾目	二葉マツ



第57図　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土木製品実測図（2）



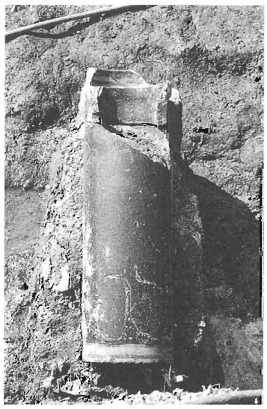
第57図　Ⅱ区（左岸）砂礫層出土木製品実測図（2）

（2） B調査区

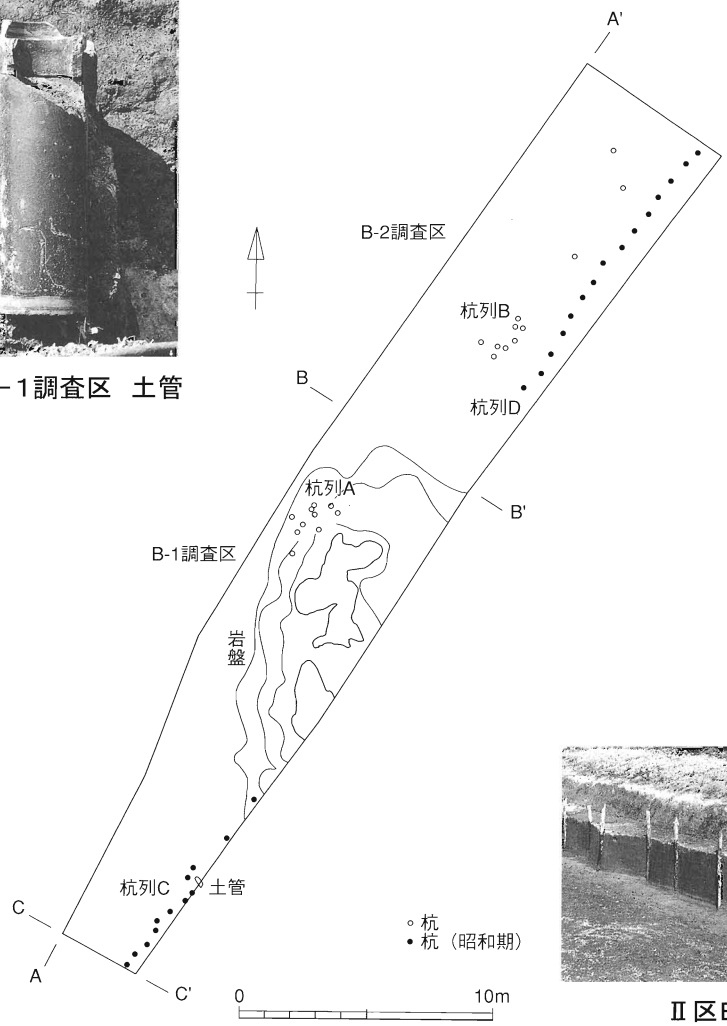
調査区はⅡ区左岸の中程に当たり、南北40m×東西3.5～6.5mの大きさである。表土から２～３mの深さまで掘り下げた。

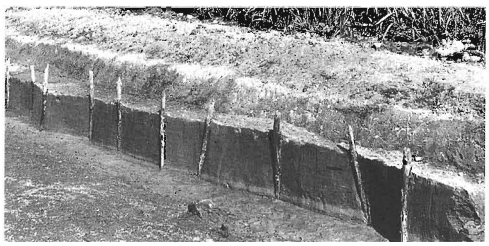
この区の中央東寄りには岩盤が存在し、市道を挟んで東にある尾根から延びたものである。風化の進んだ玄武岩で、その頂部は標高プラス20cmである。調査区はこの岩盤の頂部北側にベルトを東西に残し、南側をＢ－１調査区、北側をＢ－２調査区と呼び区別した。砂礫層はこの岩に直接重なり岩盤の西側を取り巻くように厚く堆積し、多くは弥生時代前期後葉から中期中葉の堆積物とみられる。北側のＢ－２調査区の砂礫層の３層は弥生時代前期後葉に堆積したと推定される。この時期には岩盤の頂部は表面が露出していた。なお、河川は東西ベルトの土層堆積状況より、砂礫層が堆積した後は西から東に移動したと考えられる。

遺構としては、杭列が４ケ所で認められた。Ｂ－１とＢ－２の調査区東端に並ぶ杭列(杭列Ｃ、杭列Ｄ）は、長さ約１ｍ、径10cm程の松材で、同様な杭列は原の前遺跡Ⅱ区でも検出されている、昭和期の護岸用の杭である。地元の年配の人によると、戦後の早い時期にこれらの松杭を自分たちも打ったことがあると言う。Ｂ－１調査区の杭列Ｃの数は12本あった。さらに、水田の排水を調査区



Ⅱ区Ｂ－１調査区　土管



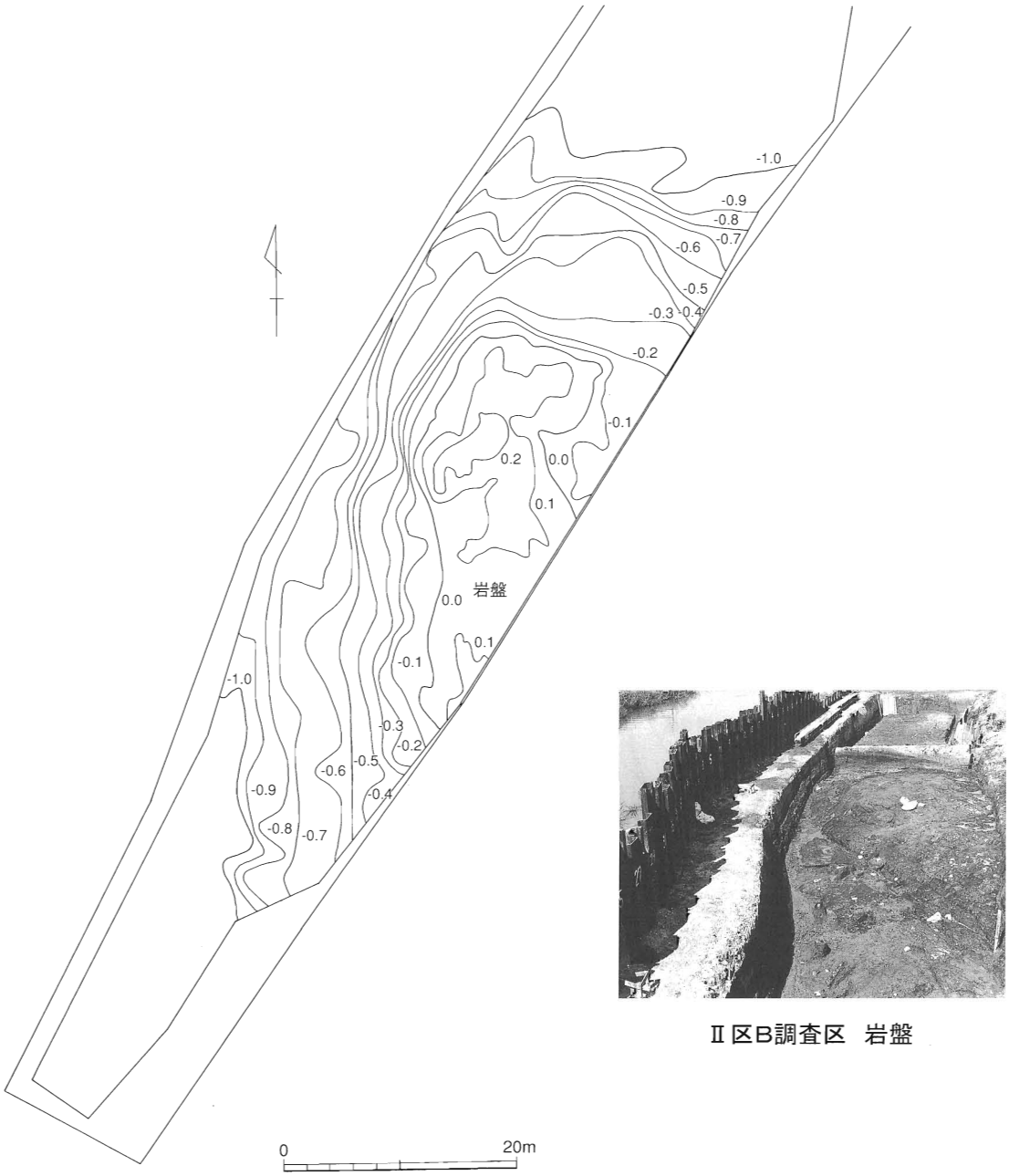


Ⅱ区Ｂ－２調査区　杭列

第58図　Ⅱ区（左岸）Ｂ調査区杭出土位置図

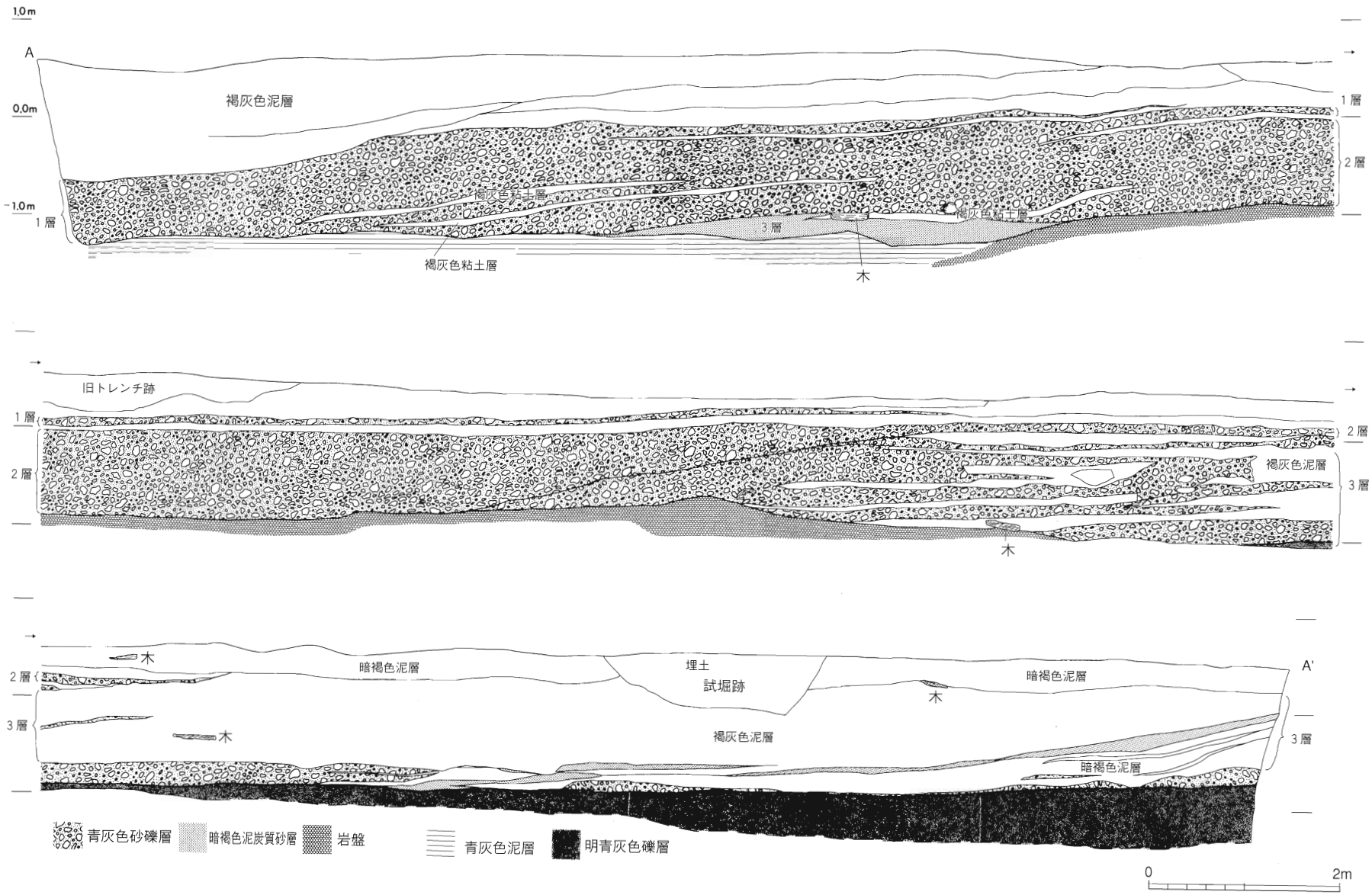
の東にあった河川（市道部分が20年前までの朝酌川である）に流す陶器製の土管も杭列とは直交して２個存在した。Ｂ－２調査区の東端の杭列Ｄは一列に半間間隔で15本が打たれている。なお、この間に杭が存在しないのは、岩盤があるためと思われる。また、他の杭列としては、岩盤の北の杭列Ｂと西側の杭列Ａが検出されている。前者(第64図）は径がほぼ10cmで、８本存在する。総て青灰色粘土層に打たれており、中世以降のものである。後者(第63図）は10本あり、残っている部分が砂礫層より下に存在するので、弥生時代中期頃の杭と推定される。径は５～10cmとまちまちである。

砂礫層は標高０ｍからマイナス150cmの間に存在する。岩盤の北側にあたる上流は薄い層が何枚にも堆積しているが、南の下流部分は２、３層で、厚く堆積している。この層に含まれる遺物は弥生時代前半の土器が大半を占める。一番新しい土器は弥生時代後期のもので、この頃に上層が堆積したものと推定される。

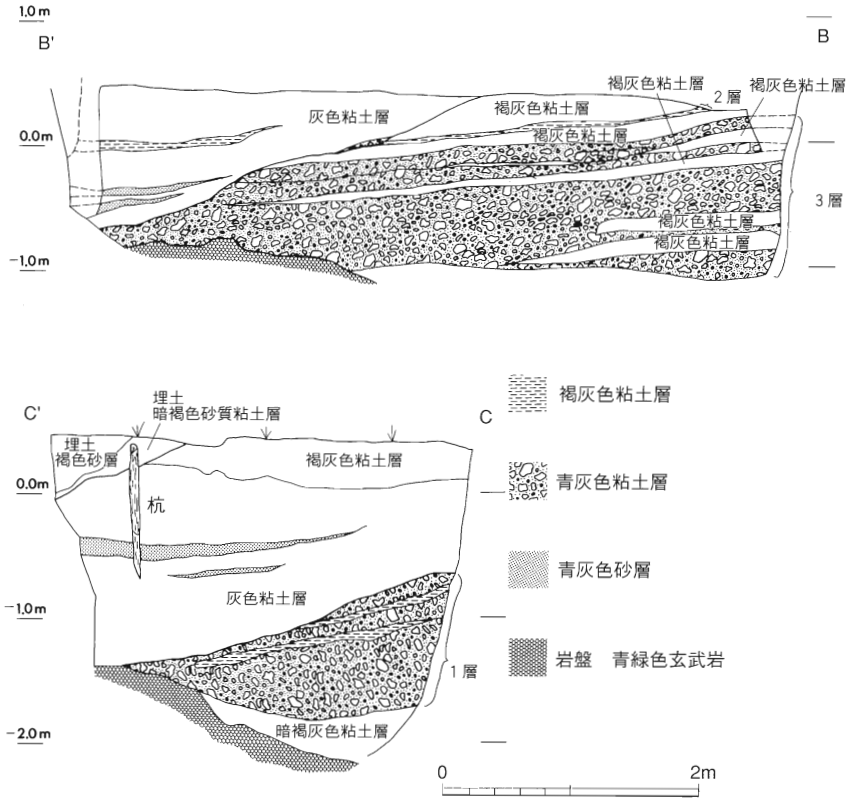


Ⅱ区B調査区　岩盤

第59図　Ⅱ区（左岸）B調査区　岩盤測量図



第60図　Ⅱ区（左岸）B調査区（西壁）土層堆積図（AA'は第 58 図参照）



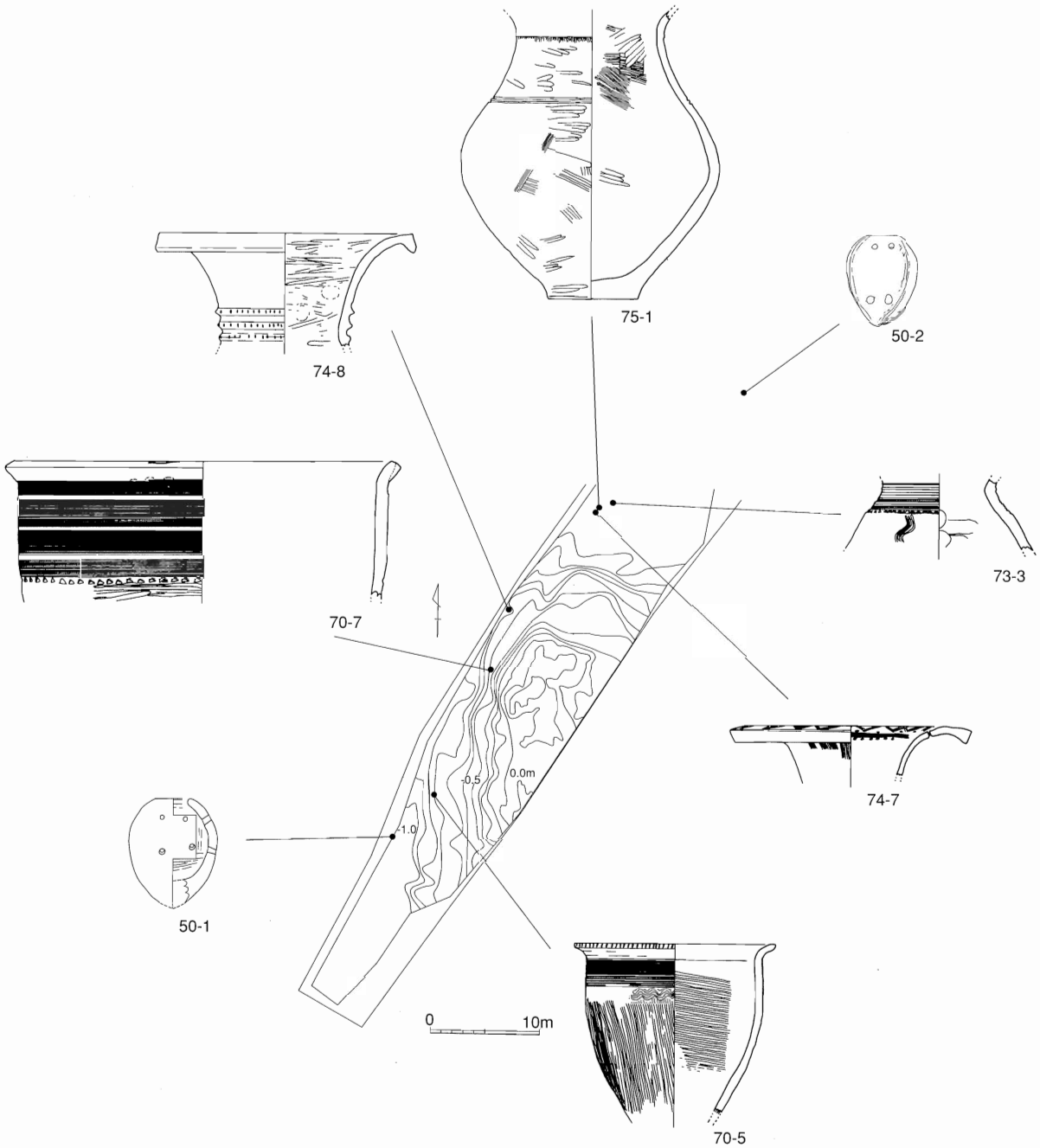
第61図　Ⅱ区（左岸）B調査区（セクションベルト南壁・南壁）土層堆積図
（BB'・CC'は第 58 図参照）

B調査区の粘土層出土遺物（第65～67図）

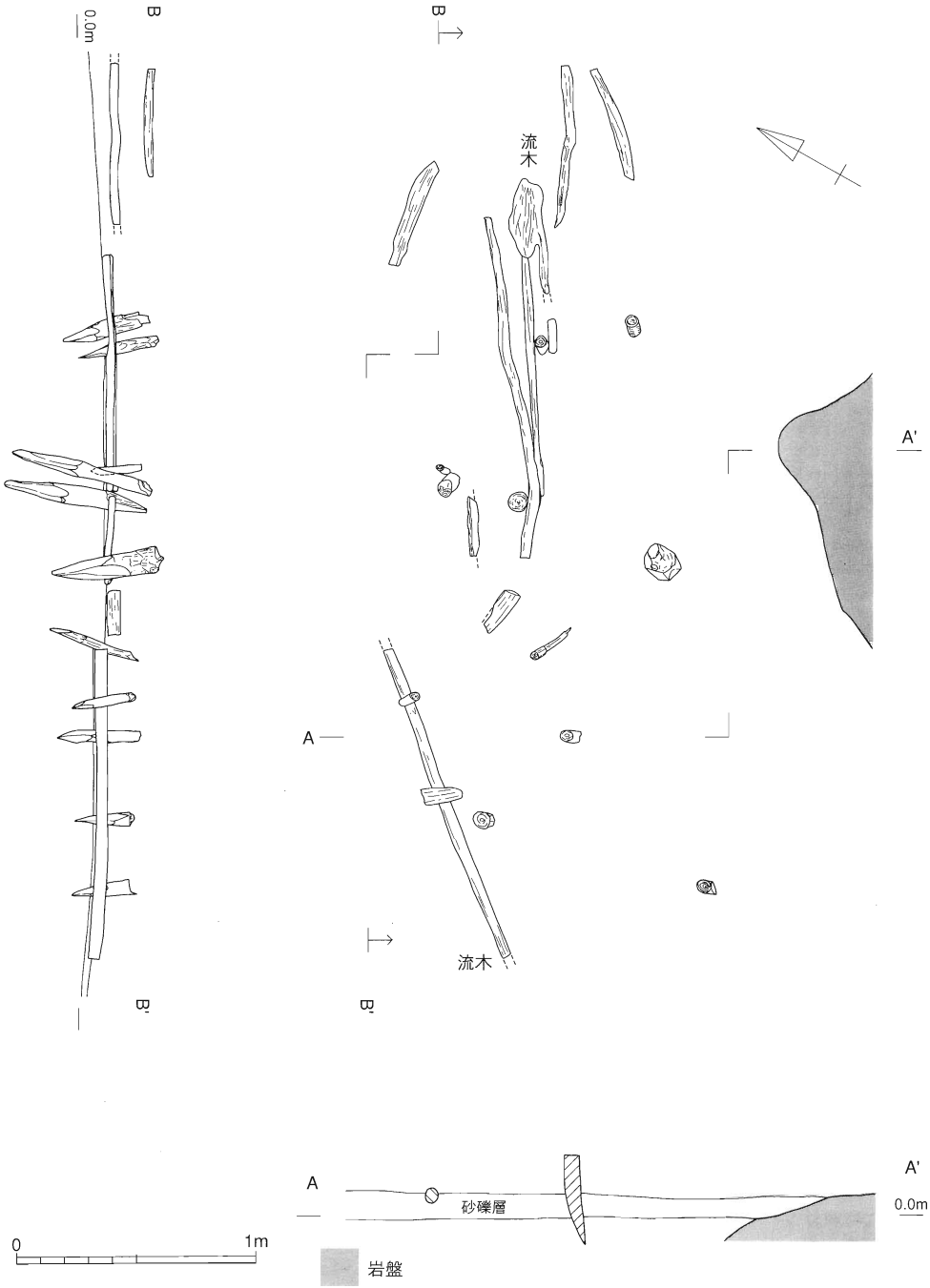
表土と砂礫層の間にある粘土層からは土師器と須恵器を中心に土器と木製品が出土している。

第65図１は弥生時代前期の無頸壷。口縁部に２個の孔を穿つ。２～４は古墳時代中期の土師器。２は壷の体部で、肩に横方向のハケ調整があり、平行直線文状となる。３、４は高杯。３は杯部で、底部と体部の境には稜が入る。４は脚部で、ハの字に開く。５、６は中期の土師器の高杯か。杯は丸く立ち上がり、脚部はハの字に開く。７は、口縁部が大きく反る土師器の甕である。８～11は古墳時代末の須恵器。８は蓋杯の杯で、小形品である。９は口縁部が直立する。10、11は蓋杯。10は輪状のつまみをもち、11は開く高台が付く。12、13は奈良時代の須恵器杯。底部外面は回転糸切である。14は、口縁部がくの字になる須恵器の甕である。なお、B－１調査区の粘土層と砂礫層との境において古墳時代前期の土師器の壷が出ている（第66図１）。５の字状の口縁部で、外面に竹管文を施す。

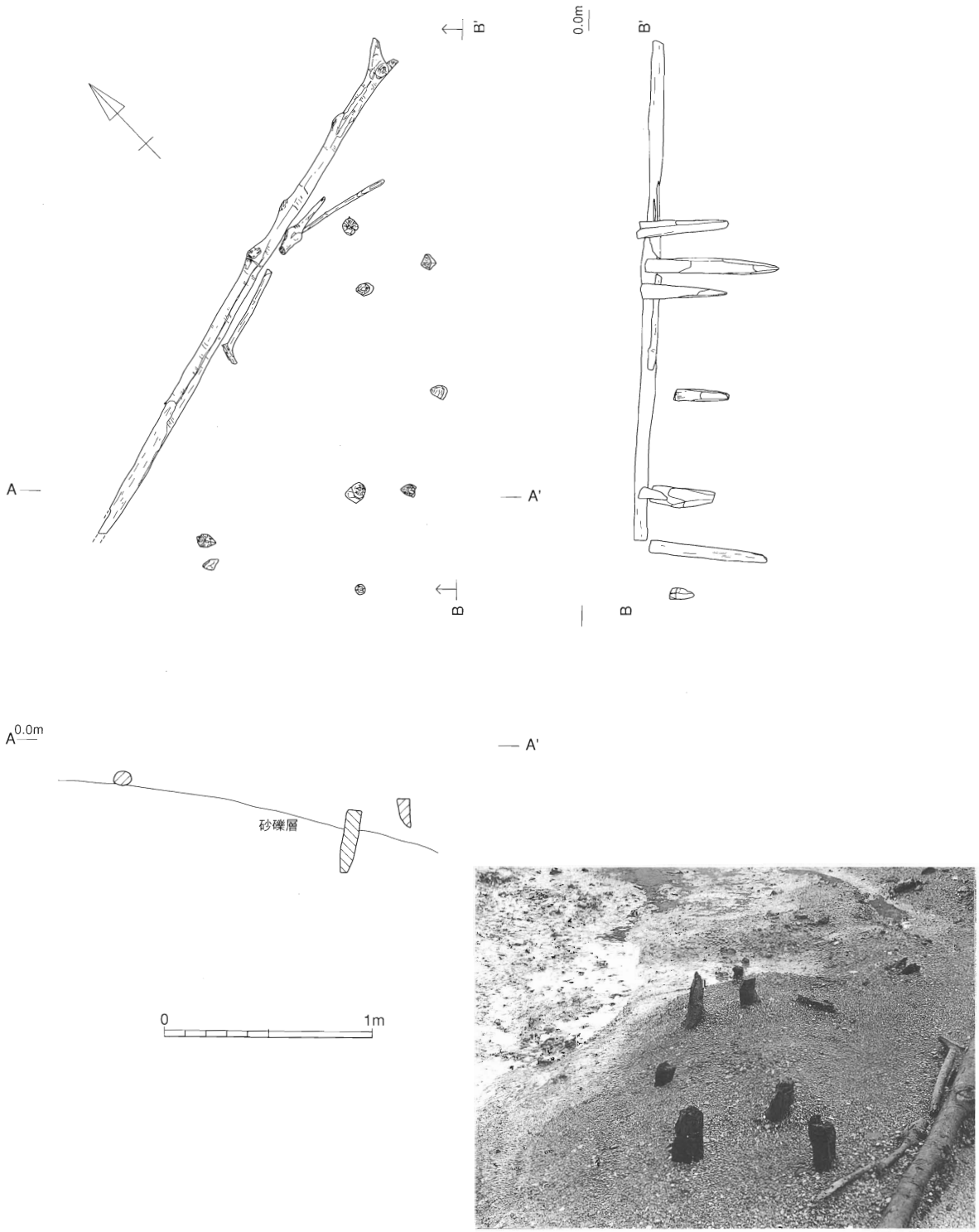
木製品には把手と栓がある。第67図１は把手で、芯持ち材を長さ10.3cm、太さ4.2cmに切り整え、中央にほぞ孔を穿っている。ほぞ孔は長辺2.7cm、短辺2.0cmを測る。２は栓と考えられる。全長10.5cmで、頭部分は2.3cmと短い。円形を呈し、径は2.7cmを測る。差し込み部は長さ8.2cmで、方形となる。



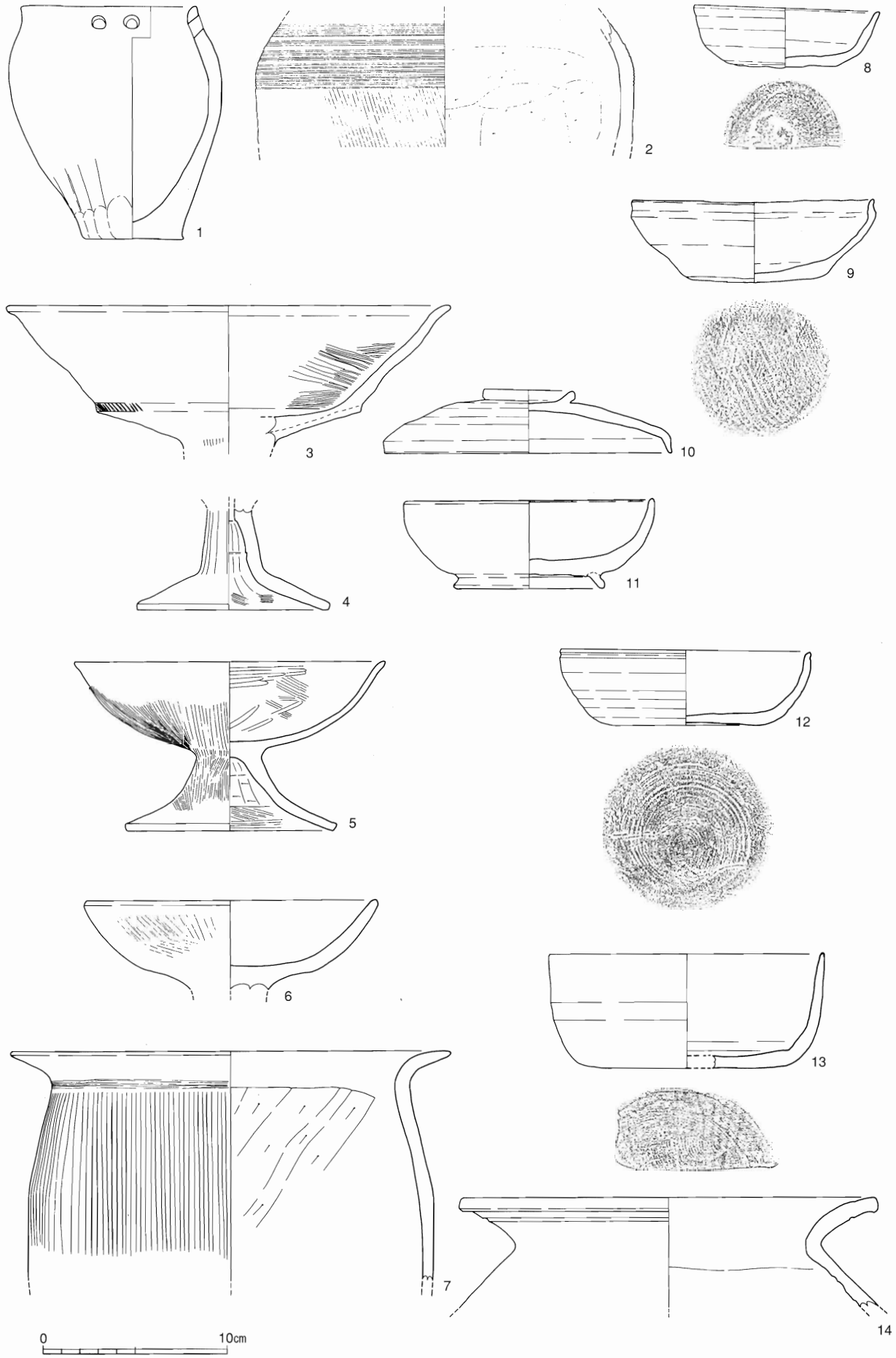
第62図　Ⅱ区（左岸）B調査区　遺物出土位置図



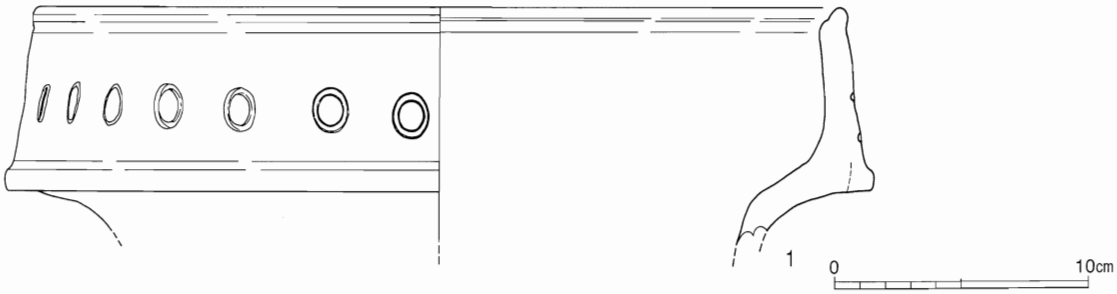
第63図　Ⅱ区（左岸）Ｂ－１調査区　杭列A実測図



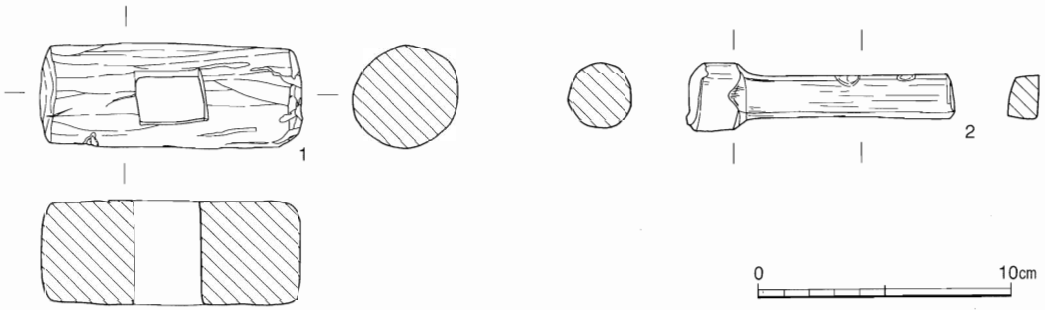
第64図　Ⅱ区（左岸）　B－2調査区杭列B実測図



第65図　Ⅱ区（左岸）B調査区　粘土層出土土器実測図



第66図　Ⅱ区（左岸）B－1調査区　砂礫層（上面）出土土器実測図



第67図　Ⅱ区（左岸）B調査区　粘土層出土木製品実測図

表 20　Ⅱ区（左岸）B調査区粘土層出土土器観察表

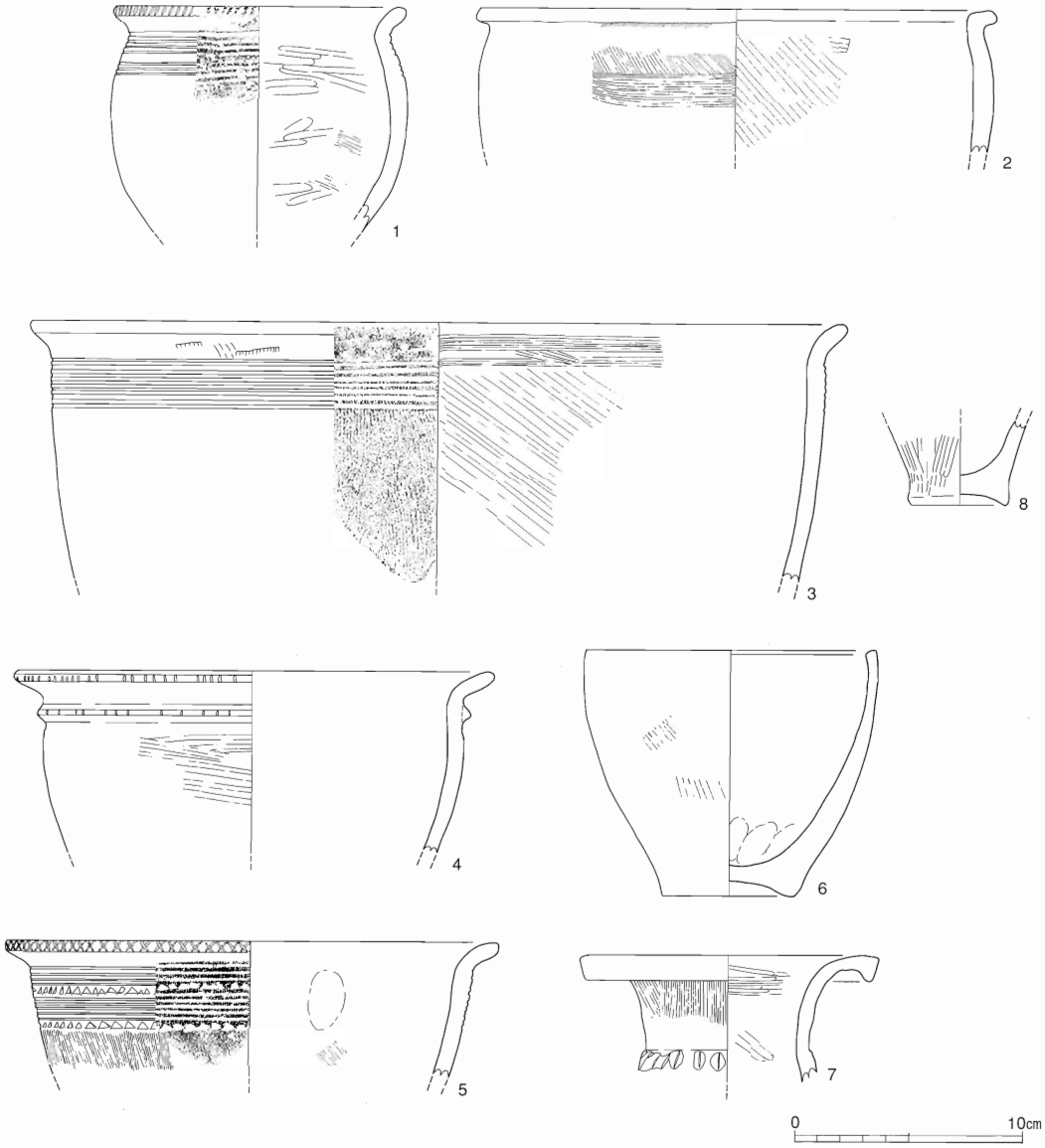
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
65－1	弥生　壺	粘土	9.4 底径 5.3	12.7	無頸壺 口縁に孔２つ	外面　指頭圧痕 内面　ナデ	粗砂含む	黄灰色	66	外面スス付着
65－2	土師器　壺	粘土			外面肩部に横方向にハケが入り平行直線文状となる	外面　ハケ 内面　ヘラケズリ	粗砂含む	褐色		
65－3	高杯（杯部）	粘土	24.2		底部と体部の境に稜	外内面ともナデ　ハケ	細砂含む	淡橙色	25	
65－4	高杯（脚部）	粘土	脚径 10.5	5.5	ハの字状に開く	外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ	細砂含む	赤橙色	完存	
65－5	高杯	粘土	17.0 脚径 11.4	9.3	丸く立ち上がる杯部にハの字に開く脚をもつ	外面　ヨコナデ　ハケ　ヘラミガキ 内面　ハケの後ヘラミガキ 脚部内面ヘラケズリ　ハケ	細砂含む	淡灰褐色	60	
65－6	高杯（脚部）	粘土	16.0		杯部は丸く立ち上がる	外面　ハケの後ナデ　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラミガキ	細砂含む	外面黄褐色 内面茶褐色	65	
65－7	甕	粘土	24.0		口縁部は大きく外反する	外面　回転ナデ　ハケ 内面　回転ナデ　ヘラケズリ	細砂含む	黄灰色	25	外面スス付着
65－8	須恵器 杯身	粘土	10.1 底径 5.9	3.5	口縁部はやや外開きに外傾する	外面　回転ナデ　底部回転ヘラケズリ 内面　回転ナデ　底部ナデ	密	灰色	50	小形品
65－9	杯身？	粘土	13.2 底径 7.6	4.5	口縁部がまっすぐ立ち上がる　静止糸切り	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　指ナデ	細砂含む	青灰色	完存	
65－10	杯蓋	粘土	15.7 天井径 4.9	3.6	輪状のつまみをもつ	外面　回転ナデ　回転ヘラケズリ 内面　指ナデ　回転ナデ	粗砂含む	青灰色	55	
65－11	杯身 （高台付）	粘土	13.4 底径 7.8	4.8	低い高台をもち体部は丸く立ち上がる	外面　ナデ　底部ヘラケズリの後ナデ 内面　指ナデ　ナデ	微砂含む	青灰白色	25	
65－12	杯	粘土	13.6 底径 8.5	4.2	口縁部は外に屈曲する 回転糸切り	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　底部ナデ	密	暗青灰色	95	
65－13	杯	粘土	15.0 底径 9.0		口縁部はまっすぐ立ち上がる　回転糸切り	外面　ナデ　ヘラケズリ 内面　ナデ　指ナデ	細砂含む	青灰色	40	
65－14	甕	粘土	22.5		口縁部はくの字に外反する	内面　回転ナデ　同心円のタタキ	密	暗青色	30	外面濃緑色の自然釉

表 21　Ⅱ区（左岸）B－1調査区砂礫層上面出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
66－1	弥生　壺	砂礫	31.4	7.5	５の字口縁 外面に竹管文	外内面ともナデ	粗砂含む	淡白橙色	20	口縁外面に黒斑 内面炭化物付着

表 22　Ⅱ区（左岸）B調査区粘土層出土木製品観察表

挿図番号	種　別	層　位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ／太さ(cm)	形態・手法の特徴	木取	備　考
67－1	把手	粘土	10.3	径4.2		中央に長方形のほぞ孔	芯持	
67－2	栓	粘土	10.5	頭径2.7	差込幅1.2	長方形の差込部　縦方向に加工	芯持	頭部自然面



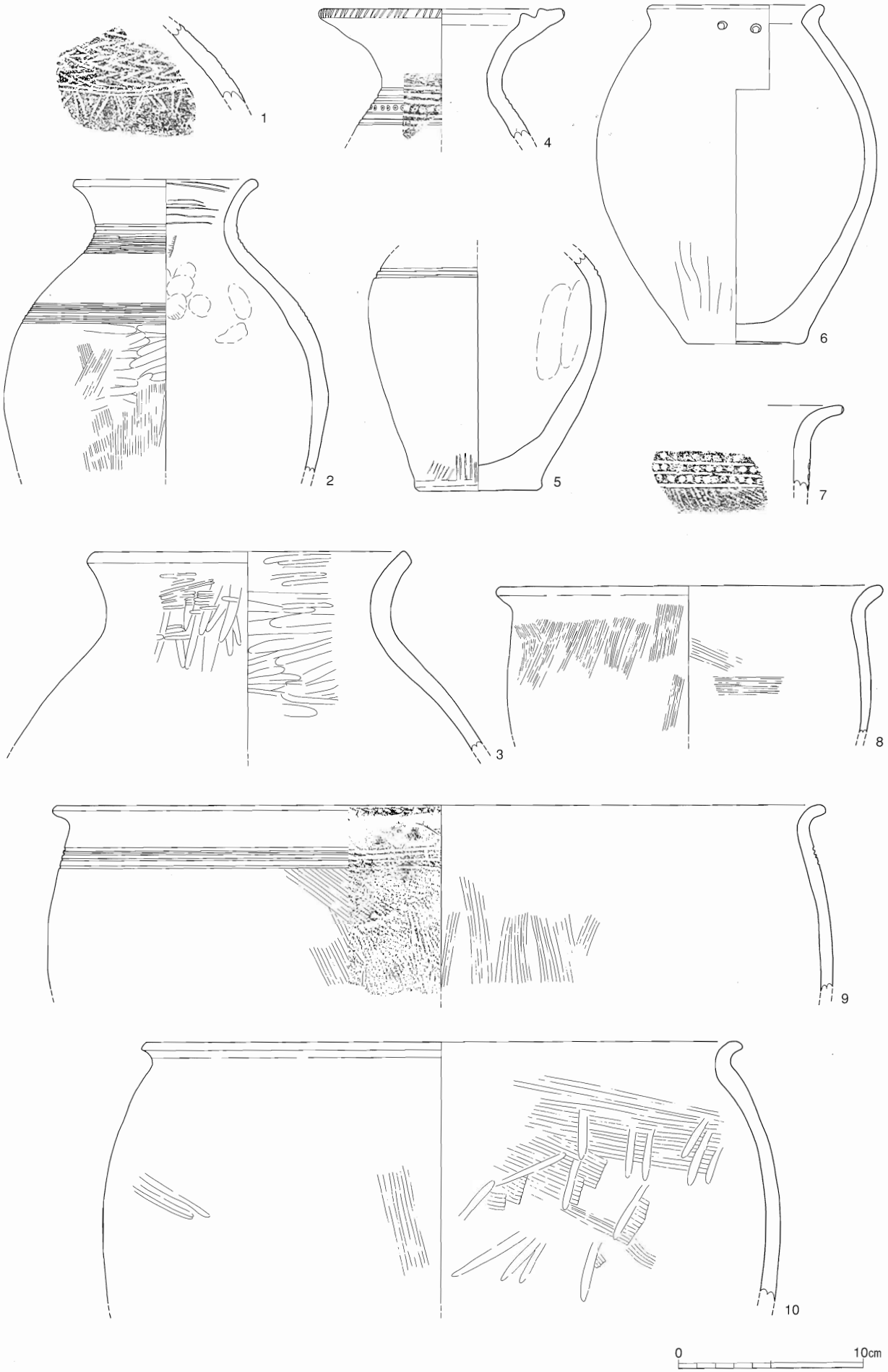
第68図　Ⅱ区（左岸）B－1調査区　砂礫層（1層）出土土器実測図

B－1調査区の砂礫層出土遺物（第43・49・50・52～57・68～72図）

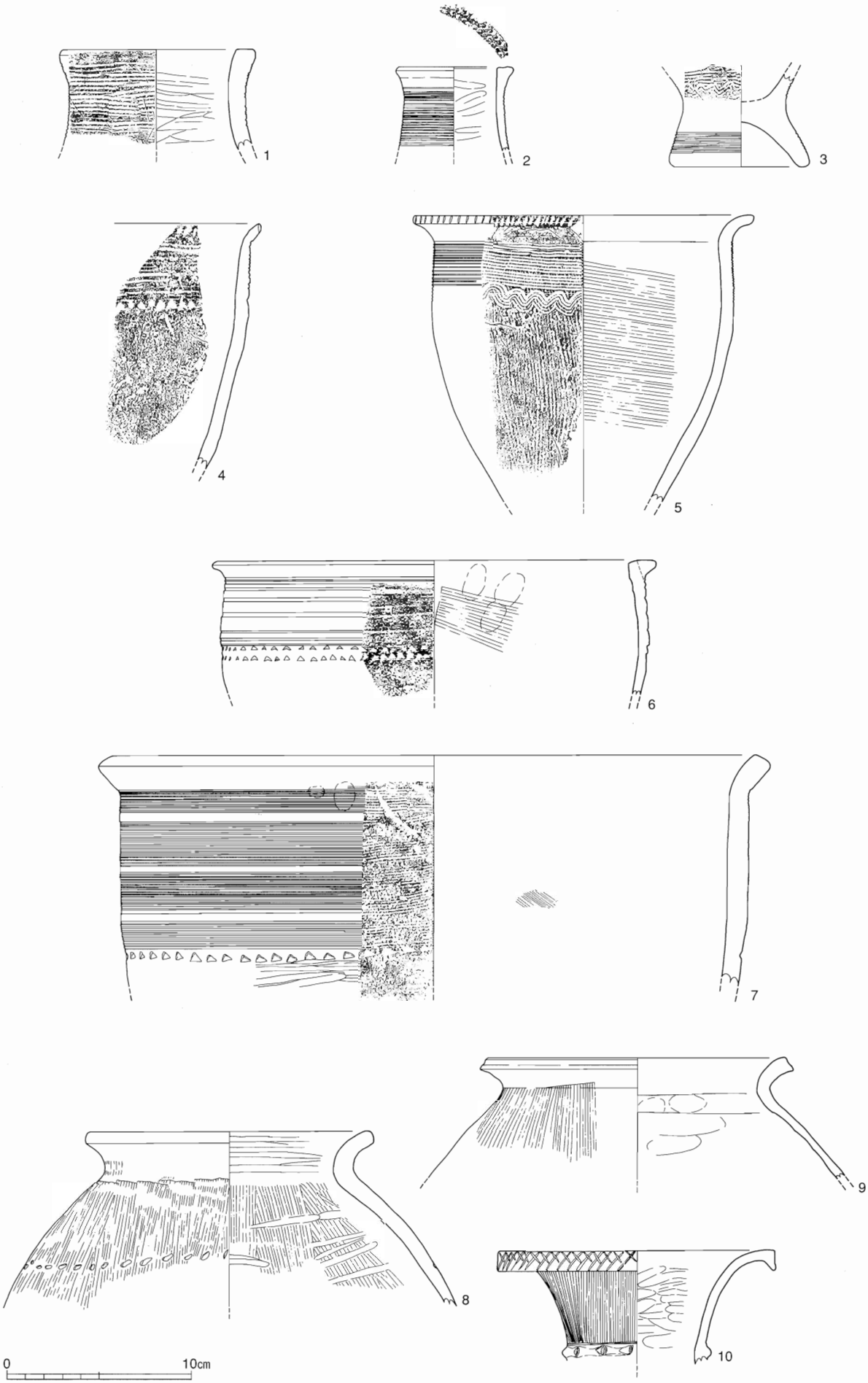
砂礫層からは土器、石製品、木製品が出土している。土器には縄文土器、弥生土器があり、弥生土器が大部分を占める。弥生土器は前期後葉と中期中葉までのものが多くを占める。

縄文土器は、図示したものには第43図1～4、6～8、10、22がある。1は早期の深鉢で、繊維が入る。2～4、6、7、10は西川津式で、前期前半のもの。22は鉢の底部であるが、時期は不明。

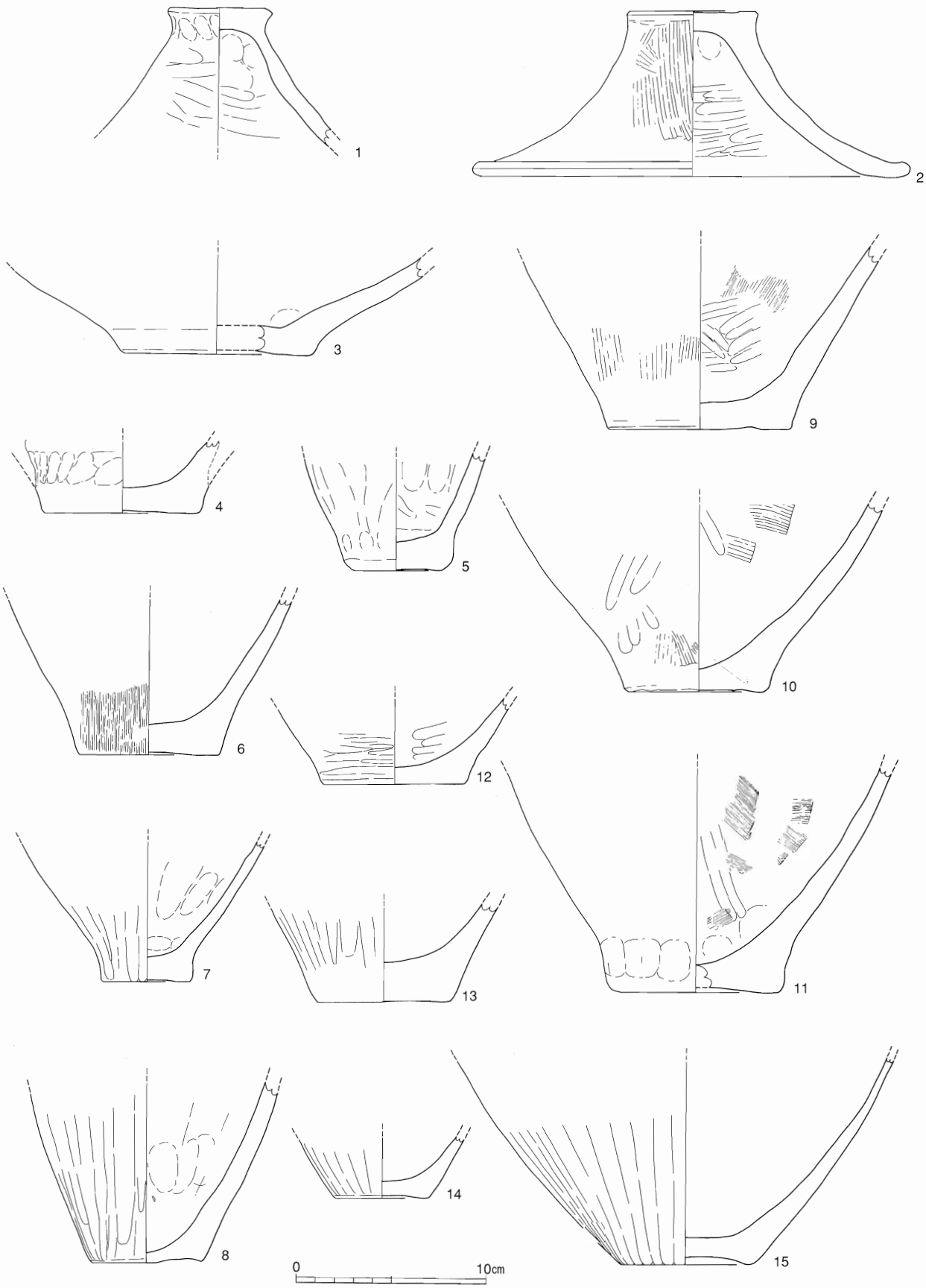
弥生土器は前期後葉と中期中葉までのものが多くを占め、後期の土器は認められない。第68図は1層の土器。1は前期の壷で、肩部にヘラによる平行直線文を8条入れる。2～5は前期の甕。3はヘラによる平行直線文を7条入れる。4は刻目をもつ突帯が巡る。5は外面にヘラによる平行直線文と三角形刺突文を2段に施す。6は無頸壷。7は中期中葉の壷で、頸部から口縁部にかけて大



第69図　Ⅱ区（左岸）B－1調査区　砂礫層（2層）出土土器実測図（1）



第70図　Ⅱ区（左岸）B－1調査区　砂礫層（2層）出土土器実測図（2）



第71図　Ⅱ区（左岸）　B－1調査区　砂礫層（2層）出土土器実測図（3）

きくラッパ状に開き、頸部と肩部の境には指頭圧後ヘラによる刻目突帯を巡らす。８は前期の土器底部。

第69～71図は２層の土器。第69図は前期の土器である。１～６は壷。１は壷の肩部で、貝殻で羽状文や平行直線文を描く。２、３の口縁部は短く、外反する。２には頸部と肩部にヘラで平行直線文を描く。４は口縁部が大きく外反し、内部には２条の突帯が付く。外面頸部には平行直線文と竹管文が施されている。５は肩部にヘラによる２条の平行直線文が入る。７～10は甕。７は外面にヘラによる平行直線文を入れ、その間に円形の刺突文を３列に巡らす。９は口縁部に刻目を施し、肩部にヘラによる４条の平行直線文を入れる。第70図は中期の土器である。１～７は中期前葉、８～10は中期後葉。１、２は長頸壷で、頸部外面に櫛描直線文を入れる。３は台付きの底部。外面に櫛による直線文と波状文を描く。４、５は甕。４には肩に櫛による直線文と三角形刺突文を、５には櫛描直線文と波状文を描く。６、７は鉢。６の口縁部は外に肥厚して平たくなり、口縁部の下方に櫛描直線文と三角形刺突文が２列に入る。７の口縁部はくの字に開き、口縁部の下方に櫛描直線文が４段と三角形刺突文が入る。８、９は短く外反する口縁部に、球形の胴部をもつ。８は肩に円形の刺突文が入る。10は頸部から口縁部にかけて大きくラッパ状に開き、頸部と肩部の境には指頭圧痕文帯を巡らす。第71図は弥生土器の蓋と底部。１、２は傘形を呈する甕用の蓋。３～15は底部で、３～11が前期、12～15が中期に属する。第72図は３層の土器。１は前期の小形壷で、口縁部は短い。２、３は底部で、２は前期、３は中期に属する。

その他の土製品としてはミニチュア土器(第49図３)、土笛(第50図１)、紡錘車(第52図２）がある。ミニチュア土器は鉢形で、砂礫層から出土している。土笛は二分の一程残り、４個孔をもつ。砂礫層(２層）出土。流されたのか、表面はかなり磨滅している。稜線や沈線はもたない。紡錘車は土器を加工したもの。

石製品としては第53図１～３の黒曜石のものがある。今回の調査区では全体に黒曜石はかなりの量出土したが、小さめの剥片などが多く、製品や大きな剥片などは少ない。１は一部調整と使用痕のある剥片。２は両面に細かな調整が加えられた小形の石器で、掻器または楔形石器とみられる。３は剥離面をもち、自然面を残すやや大きい石材である。黒曜石以外の石製品は３点図示した。第54図１は全長15.6cmを測る蛇紋岩の太形蛤刃石斧である。５は石鎌で、片面が研磨され、刃部をもつ。第55図５は13.5cmほどの長い擦り切り痕があり、両面を研磨される。磨製穂摘具の未製品の可能性がある。

木製品としては第56図１の櫛と第57図６の鏝(こて)がある。櫛は弥生時代の結歯式縦櫛である。頭部が残り、歯は欠損している。頭部の幅は現在長5.5cm、幅は4.1cm、厚さ0.4cmを測る。竹ひごを並べ、繊維で固定し、朱漆で塗り固めている。鏝は長さ58.7cm、幅は15.7cm、厚さ10.3cmを測る大形品である。取手は少し後方に付き、長さ27.0cm、幅は8.0cm、厚さ9.5cmを測る。取手孔は前後に２個存在し、縦は5.6cm、横4.0cm、奥行6.6cmである。取手孔の間も両側から抉られ、窪んでいる。片方の側面は弧状となり、薄く仕上げ加工され、表面にノミの痕が僅かに観察される。なお、フナクイムシが付けた穴が部分的にあり、川に流されて水面に浮かんでいた時期があったことが窺える。

Ｂ－２調査区の砂礫層出土遺物（第43・49・50・52・54～57・73～76図）

砂礫層からは土器、石製品、木製品が出土している。土器には縄文土器、弥生土器があり、弥生土器が大部分を占める。弥生土器は前期後葉と中期中葉までのものが多い。

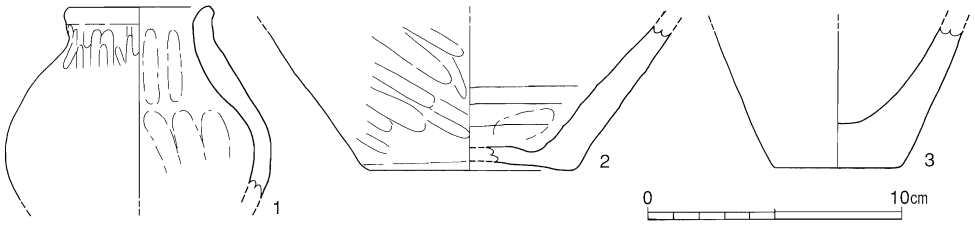
縄文土器には、第43図５・16・18・19の鉢がある。時期は晩期に属し、18・19には刻目をもつ突帯が付く。弥生土器は前期後葉と中期中葉までのものが多くを占め、後期の土器は認められない。第73図は１層の弥生土器。１、２は前期、３～５は中期の土器である。１は甕で、外面にヘラの沈線を１条引く。２は底部の破片。３は壷の肩部で、櫛描直線文と三角形刺突文、さらに下方に櫛描波状文を縦に入れる。４は小形の甕で、外面にヘラ描直線文と三角形刺突文を描く。５は中期中葉の甕で、大きく屈折する口縁部をもつ。

第74図は２層の弥生土器。１は前期後葉の壷で、口縁部がくの字に開き、頸部にヘラによる12条の平行直線文を入れる。２は前期の無頸壷で、口縁部に孔が開く。３、４は前期の壷の底部。５は前期の甕の底部。６は中期前葉の甕で、５条のヘラ描直線文と三角形刺突文を入れる。７、８は中期中葉の壷で、頸部から口縁部にかけて大きくラッパ状に開く。７は口縁部内面に櫛による斜格子文とゆるやかに曲がる平行線を描き、円形の刺突文も入れる。８は頸部に刻目の入った３条の断面三角形突帯を巡らす。第75図は３層の弥生土器で、前期のもの。１～５は壷。１は、頸部には段が付き、肩部にはヘラの平行直線文を２条引く。２は１と同形の壷で、頸部には沈線が巡る。３は口縁部が大きく外反し、外面にヘラの沈線を１条引き、内面に円形の刺突文を２列に施す。４は頸部から肩部の破片で、ヘラの平行直線文を頸部に７条と肩部に８条入れる。５は壷の肩部の破片。貝殻により２条の突帯の刻目、羽状文、直線文を描く。６、７は甕。６は外に大きく開く口縁部をもち、口縁部外面にヘラの沈線を１条引き、上下に刻目を入れる。体部には、ヘラの平行直線文を横に引き、さらに６条の平行直線文を斜めに描く。７は口縁部下方にヘラの沈線を１条引く。８は高杯の破片。杯部と脚部の境の外面には４条の突帯があり、その間には刺突文が施されている。第76図は壷、甕などの底部。１～４、11は壷の底部と考えられる。

土製品としてはミニチュア土器(第49図４)、土笛(第50図２)、紡錘車(第52図３）がある。ミニチュア土器は鉢形で、砂礫層から出土している。土笛は完形品で、体部に４個と２個の孔をもつ。砂礫層(３層）出土。突起状の稜を四方に付けている。紡錘車は土器を加工したもの。ススが付着しており、甕片の再利用か。

石製品には第54図２の石斧と３の磨製石剣および第55図２の剥片がある。石斧は中程から基部しか残っていないが、おそらく蛤刃石斧であろう。石剣は緑色凝灰岩製で、切っ先とみられる。

木製品には第56図２の高杯、５の容器、第57図１の棒状木製品、２の緯打具、４の角状木製品がある。高杯は杯部で、口径35.0cm、高さ6.8cmを測る。底部から口縁部はゆるやかに立ち上がり、口縁部の上面は平坦になる。容器は平面が楕円形を呈し、径縦22.0cm、最大横幅12.0cm、高さ10.4cm、厚さは側板1.2cm、底板0.9cmを測る。側板は丸く削られ、小口側は窪み、稜が付く。棒状木製品は現存長85.0cm、幅は上部3.5cm・下部4.1cm、高さ3.5cmを測る細長いものである。断面は台形を呈し、上部が丸く、下部は平らである。両側の先端部を欠く。縦2.0cm、横1.2cm、深さ3.5cmの方形のほぞ穴が12個穿たれ、さらに両端には横から縦1.9cm、横1.1cm、深さ1.3cmの方形の穴が２個穿たれている。使途は不明。緯打具は長さ83.9cm、幅は6.3cmで、両端が尖った板材である。長辺の一方を刃状に仕上げている。背は丸く縁取り、その厚さは1.2cmである。刃状の部分には加工痕が残る。角状木製品は、何かの部材の一部と考えられる。長さ62.1cm、幅8.4cm、厚さ2.6cmで、角状にカーブし、先端は尖る。手前は１辺8.5cmの方形になり、裏側には縦5.5cm、横3.8cmの方形で、深さ1.6cmの窪みがある。

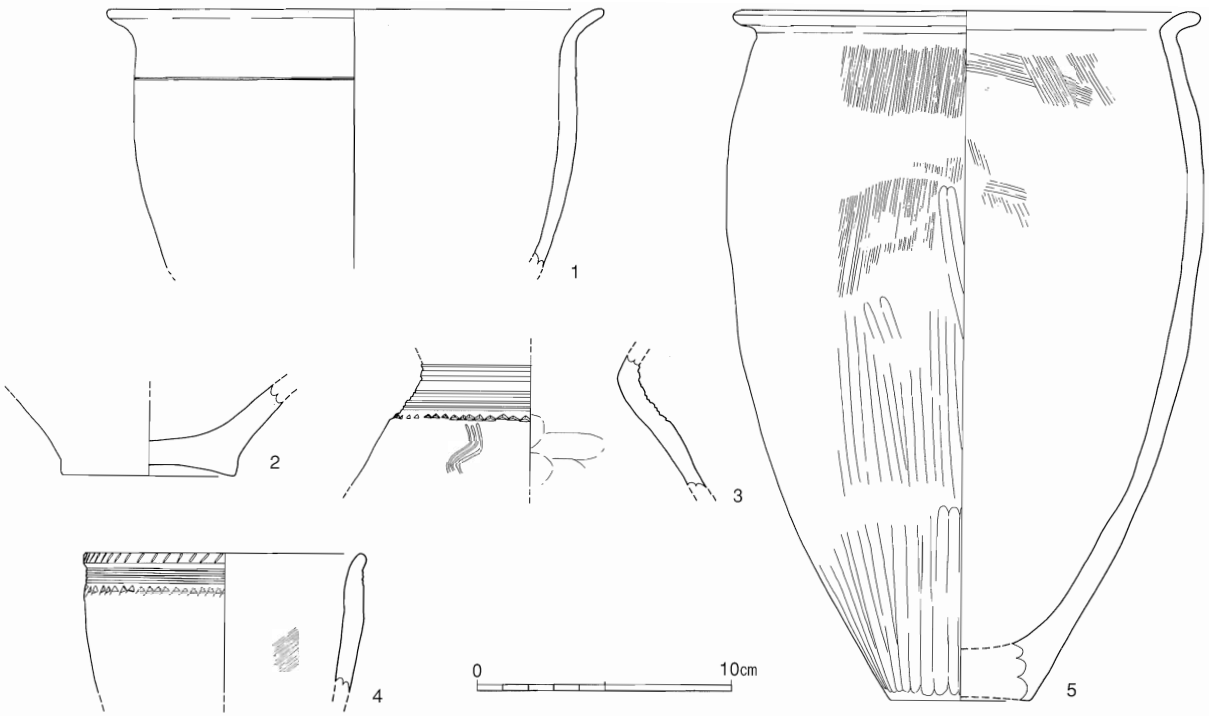


第72図　Ⅱ区（左岸）Ｂ－１調査区　砂礫層（3層）出土土器実測図

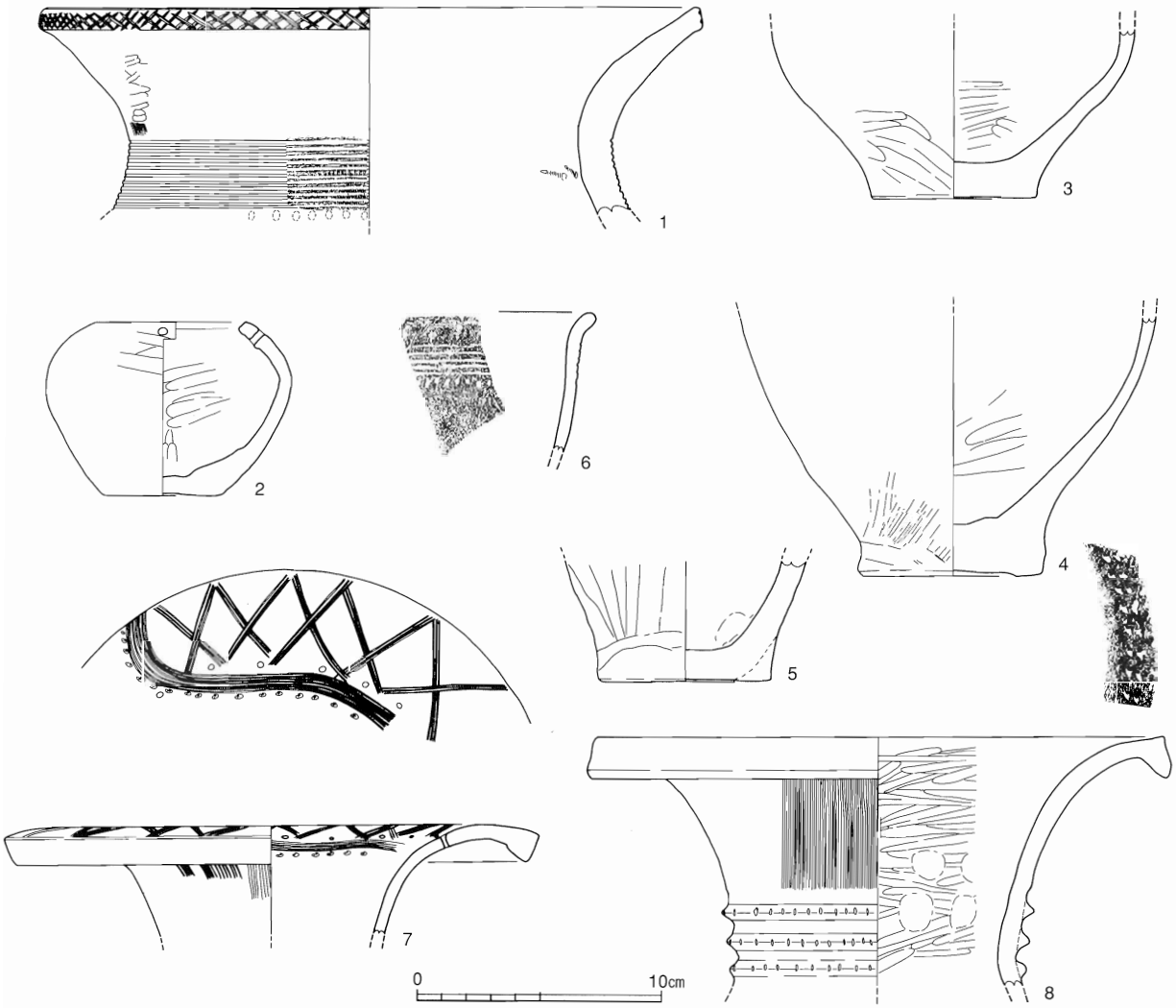
表 23　Ⅱ区（左岸）Ｂ－１調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
68－1	弥生　壷	砂礫1	12.6		ヘラ描平行直線文8条刻目	外面　ヨコナデ　ナデ 内面　ヨコナデ　ハケの後ヘラミガキ	微砂含む	褐色	20	
68－2	甕	砂礫1	22.6		口縁部は短く　水平に折れる	外面　回転ナデ　ハケ 内面　ハケ	細砂含む	淡褐色	15	
68－3	甕	砂礫1	35.7		ヘラ描平行直線文7条	外内面ともハケ	粗砂含む	淡褐色	15	
68－4	甕	砂礫1	21.2		口縁端部と貼付突帯上に刻目	外面　ヨコナデ　ハケの後ナデ 内面　ヨコナデ　ナデ　ハケの後ナデ	粗砂含む	黄褐色	15	
68－5	甕	砂礫	21.8		×形の刻目　ヘラ描平行直線文　三角形刺突文2列	外面　ハケ 内面　ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	褐色	10	
68－6	壷	砂礫1		10.9	無頸壷　口縁部はまっすぐ立ち上がる	外面　ハケ　ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	淡灰褐色	完存	外内面スス付着
68－7	壷	砂礫1	13.1		口縁部は大きく外反する頸部に指頭圧痕後刺突文突帯	外面　ハケ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	黒色	20	外面一部剥離
68－8	甕(底部)	砂礫1	底径4.2		上げ底状	外面　ヘラミガキ　ヨコナデ　底部ハケ 内面　ナデ	細砂含む	淡褐色	完存	小形品
69－1	壷	砂礫2			貝殻羽状文4列・平行直線文2条・山形文2条		粗砂含む	赤褐色		磨滅する
69－2	壷	砂礫2	10.1		ヘラ描平行直線文7条・6条	外面　ヨコナデ　ハケ　ヘラミガキ 内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	淡褐色	20	
69－3	壷	砂礫2	16.8		口縁部はくの字に外反する	外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ヨコナデ	粗砂含む	淡褐色	25	
69－4	壷	砂礫2	13.0		外面　刻目　ヘラ描平行直線文6条　竹管文 内面　突帯2条	外面　ナデ？ 内面　強いヨコナデ？	粗砂含む	褐色	40	外面は硫黄のため黄色
69－5	壷	砂礫2	底径6.9		ヘラ描平行直線文2条	外面　ハケ　ヘラミガキ？ 内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	灰褐色	完存	外面スス付着
69－6	壷	砂礫2	9.6 底径6.3	18.7	短い口縁部の下方に2個の孔を2ヶ所につける	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	密	黄褐色	完存	外面は硫黄のため黄色
69－7	甕	砂礫2			ヘラ描平行直線文3条 円形刺突文3列　刻目	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ハケ	粗砂含む	淡褐色		磨滅する
69－8	甕	砂礫2	20.7		口縁部はくの字に外反する	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ナデ　ハケ	粗砂含む	黄褐色	15	
69－9	甕	砂礫2	42.0		ヘラ描平行直線文4条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ハケ	粗砂含む	淡褐色	8	外面一部磨滅する
69－10	甕	砂礫2	32.0		短い口縁部は外へ屈曲する	外面　ハケ　ヨコナデ　ヘラミガキ 内面　ハケ　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	20	外内面スス付着
70－1	壷	砂礫2	10.3		長頸壷 櫛描直線文16条以上	内面　ヘラミガキ	密	褐色	20	
70－2	壷	砂礫2	6.0		長頸壷 櫛描直線文6条×3	内面　ヘラミガキ　ハケ　ナデ	細砂含む	茶褐色	25	
70－3	(底部)	砂礫2	底径7.4		櫛描直線文3条・7条 櫛描波状文3条		粗砂含む	淡褐色	完存	内面磨滅

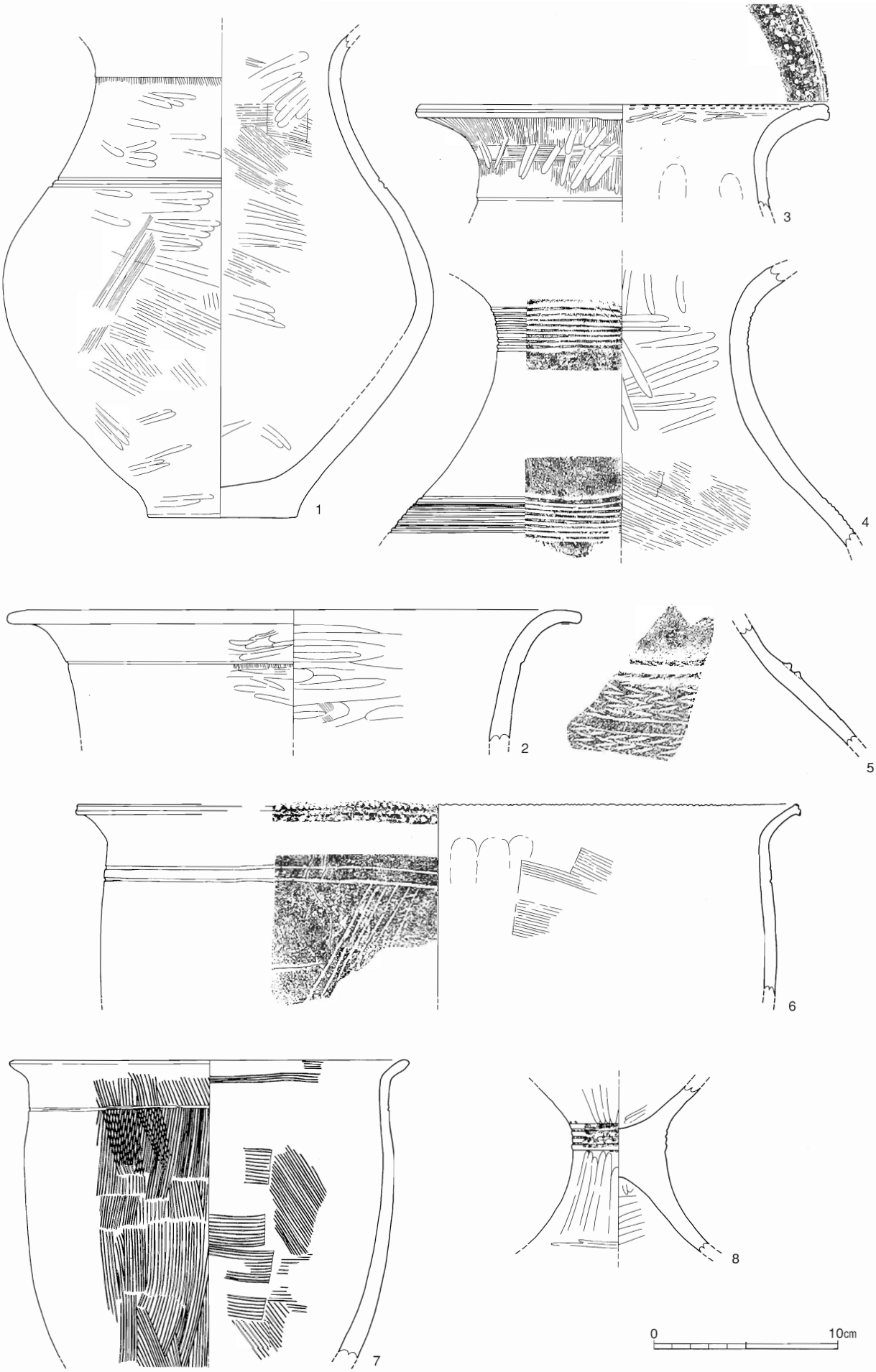
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
70－4	甕	砂礫2			刻目　櫛描直線文14条 三角形刺突文1列	外面　ハケ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕	細砂含む	淡褐色		外面一部スス付着
70－5	甕	砂礫2	18.4		櫛描直線文15条 櫛描波状文5条　刻目	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ハケの後ナデ　ヨコナデ	粗砂含む	茶褐色	20	外面は硫黄のため黄色
70－6	鉢	砂礫2	23.9		櫛描直線文8条 三角形刺突文2列	内面　指頭圧痕　ハケの後ナデ	粗砂含む	外面橙褐色 内面黄灰色	10	
70－7	鉢	砂礫2	34.8		櫛描直線文8条×6 三角形刺突文1列	外面　ヘラミガキ　ナデ　ヨコナデの後指頭圧痕	粗砂含む	淡褐色	10	
70－8	甕	砂礫2	15.0		ヘラによる円形刺突文	外面　ハケの後ナデ　ヨコナデ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	外面 褐色 内面 淡褐色	30	
70－9	甕	砂礫2	16.0		口縁部外面に凹線文1条	外面　ヨコナデ　ハケの後ナデ 内面　指頭圧痕	粗砂含む	茶褐色	25	
70－10	甕	砂礫2	15.0		指頭圧痕文帯 ×形刻目	外面　ハケ 内面　ヘラミガキ　ヨコナデ	微砂含む	黒褐色	20	
71－1	蓋	砂礫2	天井径5.3		傘形	外内面とも指頭圧痕　ヘラミガキ	粗砂含む	淡灰黄色	完存	
71－2	蓋	砂礫2	23.1 天井径6.9	8.8	傘形	外面　ハケの後ヨコナデ　指頭圧痕 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕	粗砂含む	茶褐色	完存	スス付着
71－3	(底部)	砂礫2	底径10.2			内面　ナデ　指頭圧痕？	細砂含む	淡灰褐色	30	
71－4	(底部)	砂礫2	底径8.2			外面　接合面に指頭圧痕　ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	暗灰褐色	完存	内面は硫黄のため黄色
71－5	(底部)	砂礫2	底径4.7			外面　ナデ　指頭圧痕 内面　ナデ	細砂含む	外面淡黄灰色 内面黒茶褐色	完存	外面器壁凹凸著しい　スス付着 内面黒斑
71－6	(底部)	砂礫2	底径7.4			ハケ	粗砂含む	灰黄褐色	完存	磨滅する
71－7	(底部)	砂礫2	底径4.6			外面　ヘラミガキ 内面　指頭圧痕　ナデ	微砂含む	黒褐色	完存	外内面スス付着
71－8	(底部)	砂礫2	底径5.8			外面　ヘラミガキ 内面　ナデ　指頭圧痕	細砂含む	茶褐色	完存	外面スス付着 磨滅する
71－9	(底部)	砂礫2	底径9.6			外面　ハケ 内面　ハケ　ヘラミガキ	粗砂含む	外面 灰褐色 内面 乳灰色	完存	磨滅する スス付着
71－10	(底部)	砂礫2	底径7.5			外面　ヘラミガキ　ハケ 内面　ハケの後ヘラミガキ	粗砂含む	黄茶褐色	完存	外面に黒斑
71－11	(底部)	砂礫2	底径8.9			外面　ヘラミガキ？ 指頭圧痕 内面　ハケ　ヘラミガキ 指頭圧痕	粗砂含む	茶褐色	50	
71－12	(底部)	砂礫2	底径7.4			外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ハケ	粗砂含む	外面灰褐色 内面灰黄褐色	65	外面底部スス付着
71－13	(底部)	砂礫2	底径7.0			外面　ヘラミガキ　ハケ 内面　ナデ	粗砂含む	灰黄褐色	75	磨滅する
71－14	(底部)	砂礫2	底径5.0			外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	細砂含む	茶褐色	完存	磨滅する
71－15	(底部)	砂礫2	底径6.5			外面　ヘラミガキ　ナデ 内面　ナデ	細砂含む	外面黒褐色 内面淡黄褐色	完存	外面黒色塗彩
72－1	壷	砂礫3	5.6		口縁部は短くまっすぐ立ち上がる	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	外面黄灰色 内面黒色		小形品 外面一部黒斑 内面全体黒斑 硫黄のため黄色
72－2	(底部)	砂礫3	底径8.1			外面　ヘラミガキ　ヨコナデ ナデ 内面　指頭圧痕　ヨコナデ	粗砂含む	黄褐色	25	
72－3	(底部)	砂礫3	底径5.0			内面　ヘラケズリか	粗砂含む	灰褐色	完存	磨滅する



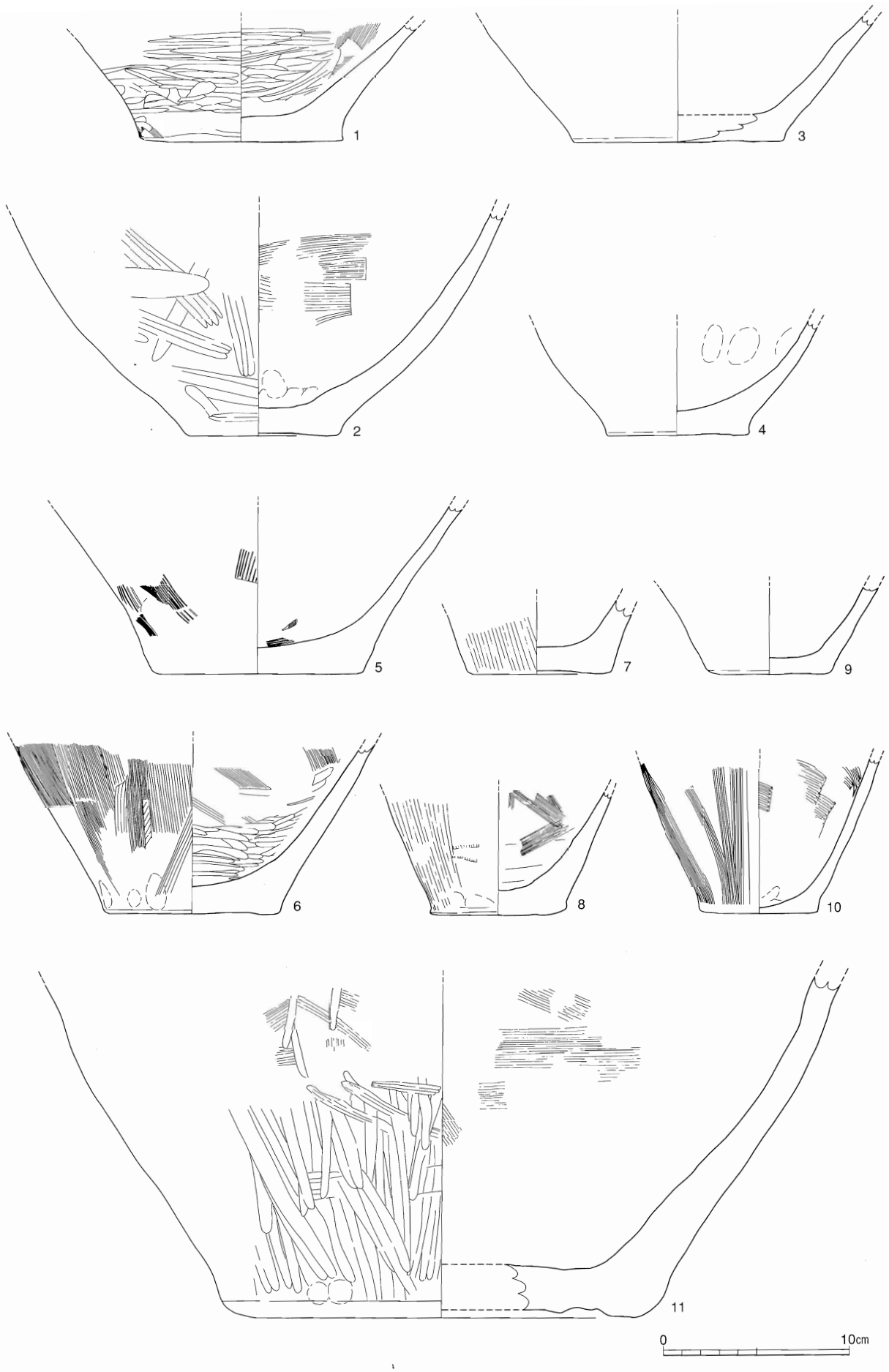
第73図　Ⅱ区（左岸）Ｂ－2調査区　砂礫層（1層）出土土器実測図



第74図　Ⅱ区（左岸）Ｂ－2調査区　砂礫層（2層）出土土器実測図



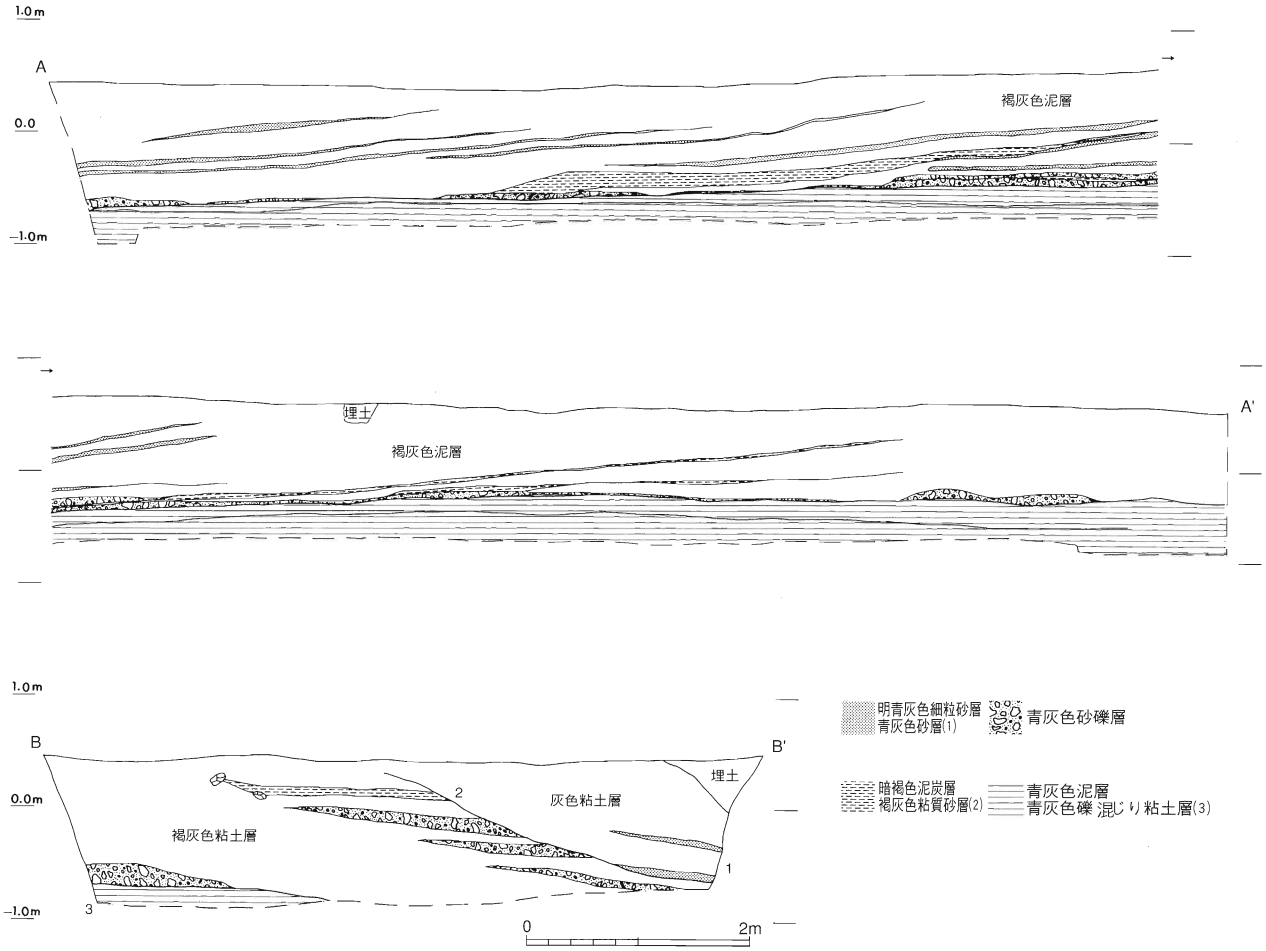
第75図　Ⅱ区（左岸）B－2調査区　砂礫層（3層）出土土器実測図（1）



第76図　Ⅱ区（左岸）B－2調査区　砂礫層（3層）出土土器実測図（2）

（3） C調査区

Ⅱ区左岸の北側に当たり、南にはB調査区がある。調査区は南北21m×東西7～7.5mの大きさで、表土から2.5mの深さまで下げたが、遺構は認められなかった。



第77図　Ⅱ区（左岸）C調査区（西壁・北壁）土層堆積図（AA'・BB'は第82図参照）

表24　Ⅱ区（左岸）B－2調査区砂礫層出土土器観察表

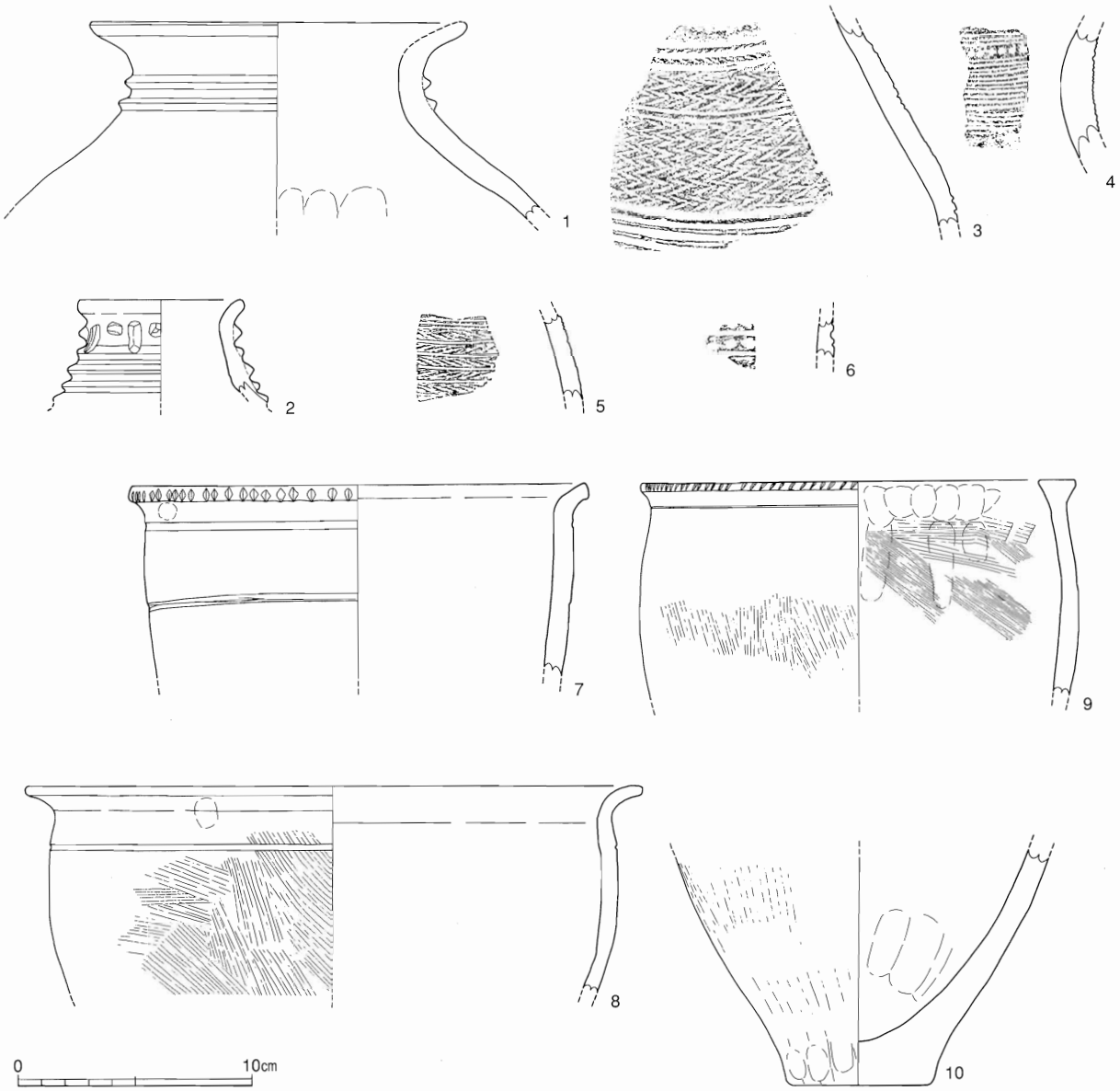
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
73－1	弥生　甕	砂礫1	19.6	10.3	ヘラ描沈線1条	外面　ナデ 内面　ナデ　ハケ	粗砂含む	灰褐色	25	口縁下部に炭化物付着
73－2	（底部）	砂礫1	底径6.8		上げ底気味	外面　ハケの後ナデ 底部ナデ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	灰褐色	完存	磨滅する
73－3	壷	砂礫1			櫛描直線文6条単位 三角形刺突文1列 櫛描波状文（縦）	外面　ナデ　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕	細砂含む	灰褐色		
73－4	甕	砂礫1	10.8		口縁部に刻目 ヘラ描平行直線文3条 三角形刺突文1列	外面　ナデ？ 内面　ハケ	細砂含む	黒褐色	15	小形品　磨滅する
73－5	甕	砂礫1	17.4 底径5.4	27.5	高さのある甕　口縁部は大きく外へ屈折する	外面　ナデ 内面　ハケの後ナデ	細砂含む	黄褐色	60	外内面スス付着
74－1	壷	砂礫2	26.6	8.6	口縁部外面ヘラ描斜格子文 ヘラ描平行直線文12条	外面　ナデ　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ナデ　ハケの後ヘラミガキ	細砂含む	肌色	10	
74－2	壷	砂礫2	6.2 底径5.0	7.2	無頸壷 口縁部に孔	外面　ハケの後ヘラミガキ ナデ 内面　ヘラミガキ　ナデ	密	淡褐色	90	
74－3	壷(底部)	砂礫2	底径6.8			外内面ともヘラミガキ	細砂含む	淡褐色	完存	磨滅する　スス付着
74－4	壷（底部）	砂礫2	底径7.2			外面　ハケ　ナデ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色	完存	磨滅する
74－5	甕（底部）	砂礫2	底径7.2	5.0		外面　ハケ　ナデ 内面　ハケ？　指頭圧痕	粗砂含む	灰褐色	30	一部赤変

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
74－6	甕	砂礫2			ヘラ描平行直線文5条 三角形刺突文1列	外内面ともヨコナデ	粗砂含む	淡褐色		磨滅する
74－7	壷	砂礫2	22.0	4.5	内面　櫛描斜格子文・ 平行曲線文　穿孔 口縁内面に刺突文2列	外面　ハケ　ナデ　ヨコナデ 指頭圧痕 内面　ナデ	粗砂含む	淡橙色	30	
74－8	壷	砂礫2	23.4		貼付突帯上に刻目3条	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　指頭圧痕　ヘラミガキ	細砂含む	黄褐色	90	
75－1	壷	砂礫3	底径8.2		頸部に段 ヘラ描平行直線文2条	外面　ハケ　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ハケ	細砂含む	黄褐色	90	口縁部を欠く
75－2	壷	砂礫3	31.5		頸部に沈線	外内面とも　ハケの後ヘラミガキ　ヨコナデ	粗砂含む	淡褐色	15	
75－3	壷	砂礫3	22.0		外面　口縁部にヘラ沈 線1条 内面　円形刺突文	外面　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕 ヨコナデ	粗砂含む	淡褐色	40	
75－4	壷	砂礫3			ヘラ描平行直線文 7条・8条	外面　ヨコナデ　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ハケ	粗砂含む	外面淡灰色 内面淡褐色		
75－5	壷	砂礫3			刻目突帯2条 貝殻羽状文3段 ヘラ描平行直線文2条 貝殻羽状文2段以上	外面　ヘラミガキ 内面　ナデの後ヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色		
75－6	甕	砂礫3	39.4		口縁にヘラ描沈線・刻目 ヘラ描平行直線文2条 斜めのヘラ描平行直線文6条	外面　ナデ 内面　ナデ　ハケ	細砂含む	外面暗肌色 内面暗黄褐色	15	
75－7	甕	砂礫3	11.0	16.5	ヘラ描沈線	外面　ハケ 内面　ハケ　ヨコナデ　ハケの後ナデ	粗砂含む	暗灰褐色	10	口縁周囲に炭化物付着
75－8	高杯	砂礫3	頸部径5.1		突帯4条の間に刺突文	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	60	
76－1	壷(底部)	砂礫3	底径11.0			外面　ハケの後ナデとミガキ 内面　ハケの後ナデとヘラミガキ	細砂含む	淡灰褐色	完存	
76－2	壷(底部)	砂礫3	底径10.5			外面　ハケ　ナデ 内面　ハケの後ヘラミガキ	粗砂含む	外面淡茶黄色 内面茶褐色	40	外面スス付着
76－3	壷(底部)	砂礫3	底径11.4			外面　ナデ　ヨコナデ 内面　ナデ	細砂含む	外面茶褐色 内面暗褐色	40	
76－4	壷(底部)	砂礫3	底径7.6			外面　ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	細砂含む	淡灰色	完存	外面に黒斑
76－5	(底部)	砂礫3	底径11.9			外面　ハケの後ナデ　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	暗黄褐色	完存	底部外面削ってある
76－6	(底部)	砂礫3	底径9.6			外面　ハケ　指頭圧痕　ナデ 内面　ハケの後ナデ　後ヘラミガキ	粗砂含む	淡灰褐色	70	
76－7	(底部)	砂礫3	底径7.7			外面　ハケ 内面　ナデ	粗砂含む	淡灰色	完存	
76－8	(底部)	砂礫3	底径7.2			外面　ハケの後ナデ　指頭圧痕 内面　ハケ	粗砂含む	外面暗灰色 内面黒灰色	完存	
76－9	(底部)	砂礫3	底径6.8			外面　指頭圧痕 内面　指ナデ	粗砂含む	淡灰褐色	完存	
76－10	(底部)	砂礫3	底径6.4			外面　ハケ 内面　ハケ　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	外面暗肌色	完存	
76－11	壷(底部)	砂礫3	底径20.0			外面　ハケ　ハケの後ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	外面黒褐色 内面黄褐色	20	大形品

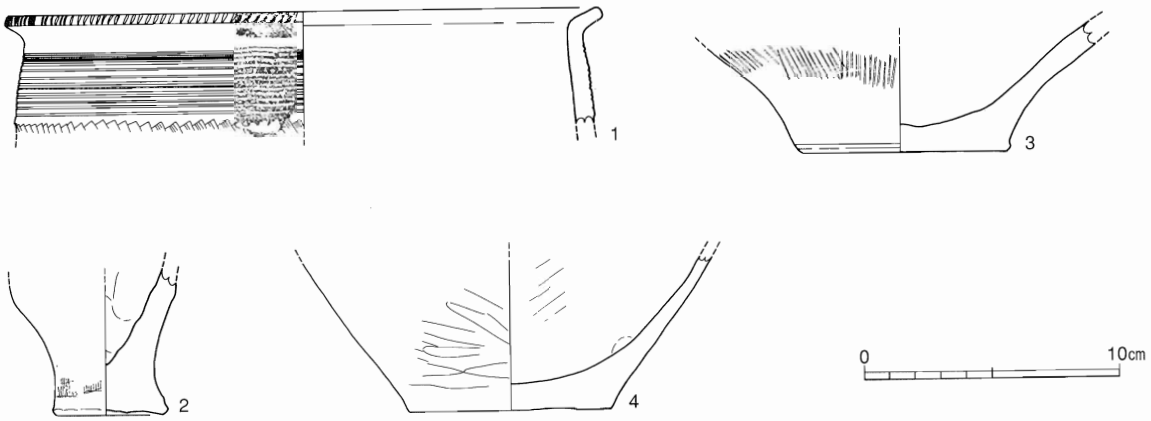
土層を見ると、河川堆積層は東に傾斜しており、A、B調査区同様に河川は西から東に移動したとみられる。調査区南壁の土層堆積（第77図）では砂礫層は上下3層確認される。しかし、西壁では1層となり、厚さも薄い。なお、砂礫層を取り除いた底部分は標高マイナス50～70cmである。

この層内に含まれる遺物は弥生土器が大半を占める。新しい土器は弥生時代中期に属し、この頃に堆積したものと推定される。

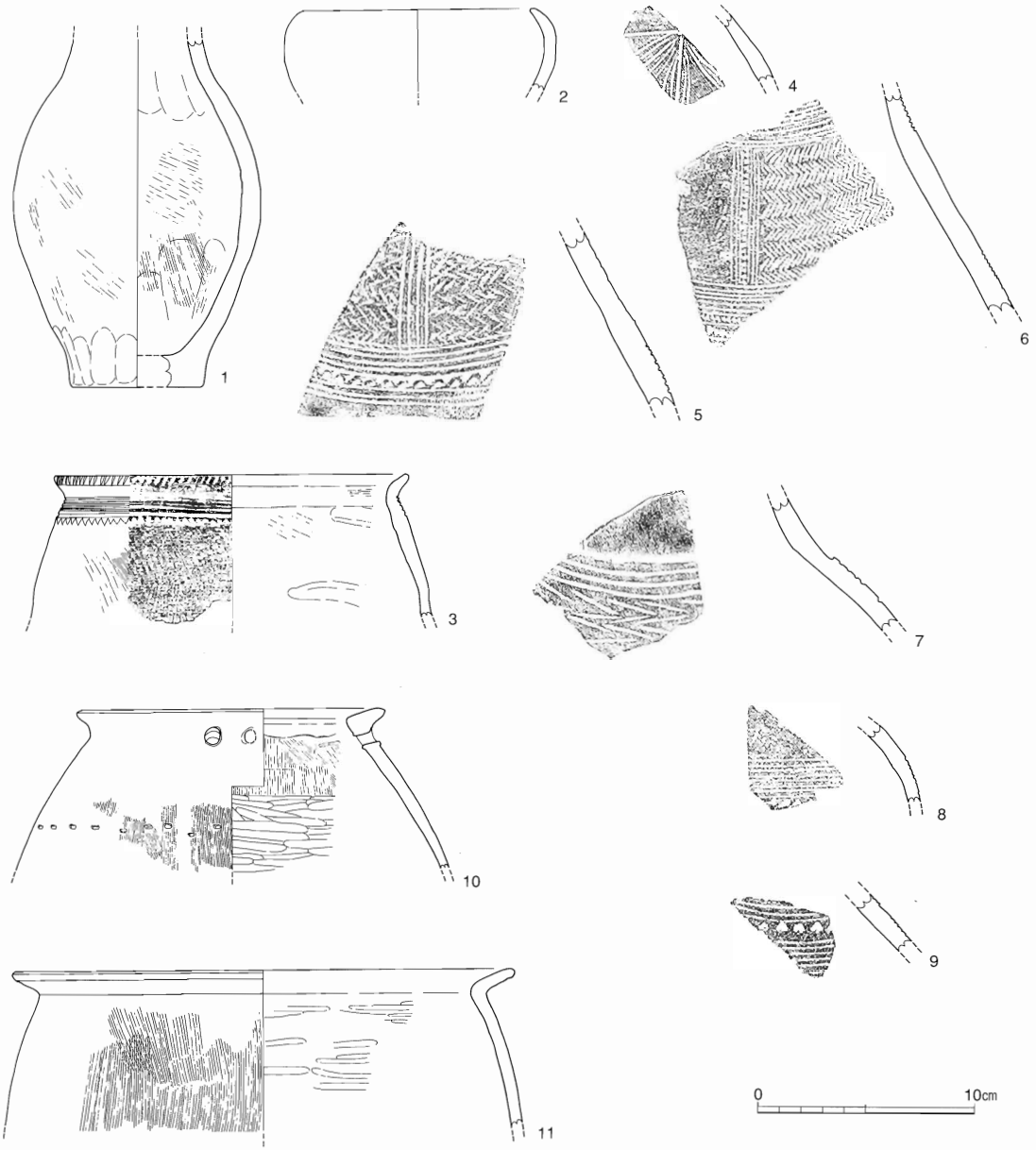
縄文土器には、第43図13がある。後期の鉢で、口縁部には刻目が入る。 弥生土器は前期後葉と中期中葉までのものが多く、後期の土器は認められない。第78図は1層の弥生土器。1～5は前期の壷。1は、口縁部が大きく外反し、頸部に2条の断面三角形突帯を巡らす。2は小形の壷。頸部を



第78図　Ⅱ区（左岸）C調査区　砂礫層（1層）出土土器実測図

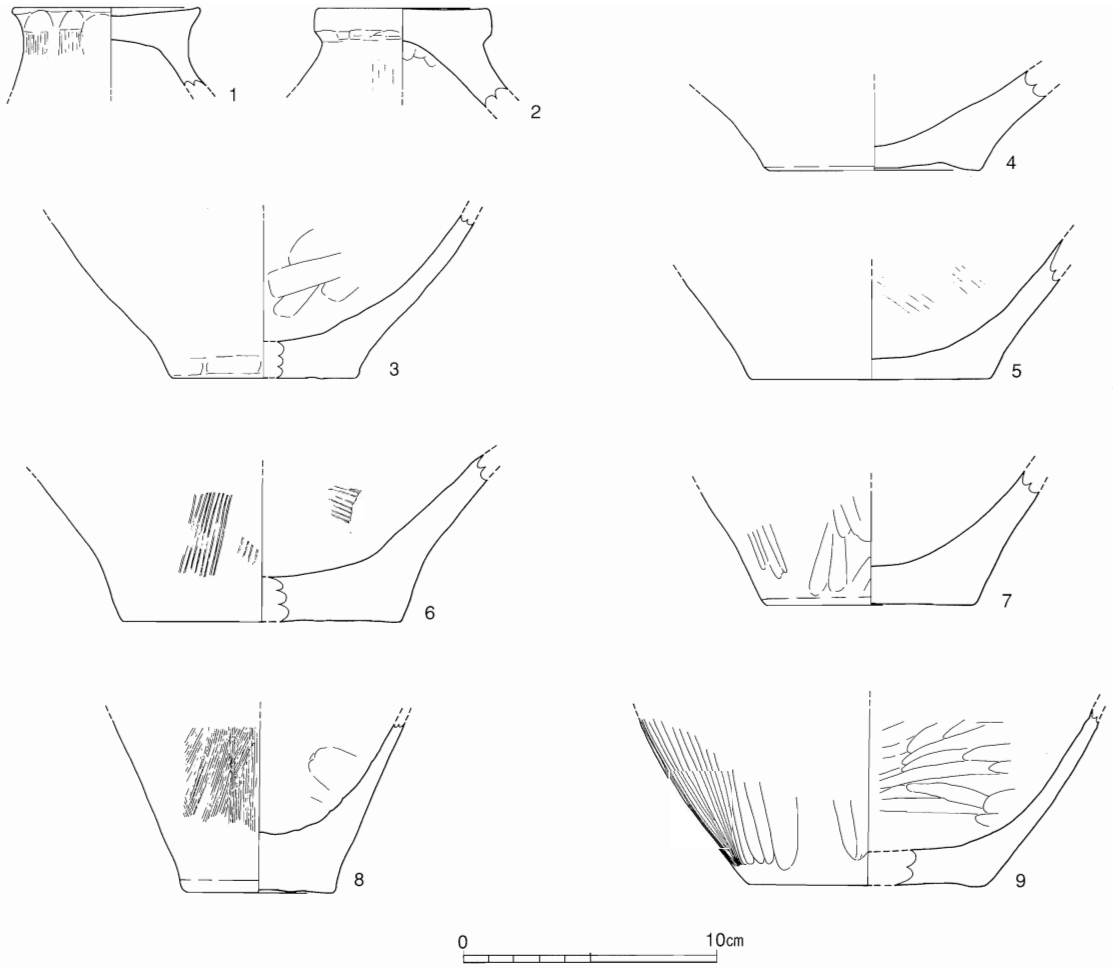


第79図　Ⅱ区（左岸）C調査区　砂礫層（2層）出土土器実測図



第80図　Ⅱ区（左岸）C調査区　砂礫層（3層）出土土器実測図（1）

棒状や円形の浮文で飾り、肩部に４条の断面三角形突帯を巡らす。３は肩部に貝殻で羽状文や平行直線文を２段に描き、上部に２条の突帯を、下部に３条のヘラ描平行直線文を巡らす。４は頸部に円形の刺突文を施し、上下にヘラ描平行直線文を巡らす。５は胴部にヘラによる平行直線文と貝殻の羽状文を巡らす。６～８は甕。６はヘラ描平行直線文の間に円形の刺突文を２列程入れる。７は口縁部外面に刻目を施し、下方にヘラによる沈線を引く。さらに、下方の接合面も段状になる。８の口縁部は大きく外反し、下方にヘラによる沈線を引く。９は鉢で、口縁部が内外面に肥厚し、平坦面をつくる。口縁部外面に刻目を施し、下方にヘラによる沈線を引く。10は底部の破片。第79図は２層の土器。１は中期前葉の甕で、櫛描直線文と三角形刺突文を入れる。２～４は底部の破片。２は前期の小形品、３は前期の壷の底部である。第80図は３層の土器で、１～９は弥生時代前期、10、11は中期中葉の土器。１は小形の壷。２は小形の無頸壷で、口縁部は内傾する。３は壷で、口縁部の下方にヘラによる平行直線文と三角形刺突文を入れる。４は壷の肩部で、ヘラによる木葉文を描く。５は壷の肩部で、貝殻による羽状文を描き、縦にヘラによる４条の平行直線文で区画する。さらに、下方に５条と３条のヘラによる平行直線文を描き、その間の上下に三角形刺突文を入れる。



第81図　Ⅱ区（左岸）C調査区　砂礫層（3層）出土土器実測図（2）

表 25　Ⅱ区（左岸）C調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
78－1	弥生　壺	砂礫1	15.0		頸部に突帯2条	外面　ヨコナデ 内面　ヘラミガキ？ 指頭圧痕	粗砂含む	淡褐色	20	口縁内面一部剥離
78－2	壺	砂礫1	6.8		頸部に楕円・円形浮文 肩部に突帯4条	外内面ともヨコナデ	粗砂含む	灰褐色	50	小形品 磨滅する
78－3	壺	砂礫1			刻目突帯2条　貝殻平行直線・羽状文　ヘラ描平行直線文3条	内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡黄褐色		
78－4	壺	砂礫1			ヘラ描平行直線文3条・14条　円形刺突文1列	内面　ヨコナデ	細砂含む	灰褐色		
78－5	壺	砂礫1			ヘラ描平行直線文9条 貝殻有軸羽状文	内面　ヘラミガキ	粗砂含む	青灰色		
78－6	甕	砂礫1			ヘラ描平行直線文2条 円形刺突文2列	内面　ナデ	細砂含む	黒褐色		
78－7	甕	砂礫1	19.4		刻目　ヘラ描沈線	外面　ヨコナデ　指頭圧痕	細砂含む	褐色	20	磨滅する
78－8	甕	砂礫1	26.2		ヘラ描沈線1条	外面　ヨコナデ　指頭圧痕 ハケ 内面　ヨコナデ	粗砂含む	褐色	10	外内面硫黄付着 磨滅する
78－9	鉢	砂礫1	18.4		刻目　ヘラ描沈線1条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕 ハケ	粗砂含む	淡褐色	20	スス付着　磨滅する
78－10	(底部)	砂礫1	底径6.3			外面　ハケ？　ヘラミガキ？ 内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	外面淡茶褐色 内面暗茶褐色	完存	内面スス付着
79－1	甕	砂礫2	23.3		刻目　櫛描平行直線文12条　三角形刺突文1列	内面　ヨコナデ　ナデ	粗砂含む	淡褐色	10	磨滅する
79－2	(底部)	砂礫2	底径4.5			外面　ハケの後ナデ　底部外面ケズリ 内面　指頭圧痕	粗砂含む	灰白色	完存	小形品 外面に黒斑

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
79－3	壷(底部)	砂礫2	底径8.4			外面　粗いハケ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	外面黄灰褐色 内面黒灰色	完存	内面スス付着
79－4	(底部)	砂礫2	底径8.0			外面　ヘラミガキ 内面　ナデの後ヘラミガキ ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	外面淡灰色 内面淡灰褐色	50	
80－1	壷	砂礫3	底径6.0			外面　ハケ　指頭圧痕 ヨコナデ 内面　指頭圧痕　ハケ	粗砂含む	褐色	30	小形品
80－2	壷	砂礫3	10.5 (推定)		小形無頸壷 口縁部は大きく内湾する	外内面ともヨコナデ	密	黒褐色		表面黒色塗彩
80－3	壷	砂礫3	16.4		ヘラ描平行直線文 三角形刺突文	外面　ハケ　ヨコナデ 指頭圧痕 内面　ヨコナデ　ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	黒褐色	20	
80－4	壷	砂礫3			ヘラ描木葉文・沈線	外面　ヘラミガキ 内面　ハケ	細砂含む	淡黄褐色		
80－5	壷	砂礫3			貝殻羽状文(有軸1段) ヘラ描平行直線文(縦) 4条・5条　三角形刺突文	内面　指頭圧痕　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		内面一部スス付着
80－6	壷	砂礫3			ヘラ描平行直線文・縦 三角形刺突文 ヘラ描羽状文	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		
80－7	壷	砂礫3			ヘラ描平行直線文3条・羽状文	内面　ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色		内面一部スス付着
80－8	壷	砂礫3			ヘラ描平行直線文8条 三角形刺突文1列	外面　ナデ 内面　ヨコナデ	微砂含む	外面灰褐色 内面淡黄褐色		
80－9	壷	砂礫3			貝殻平行直線文 三角形刺突文	内面　ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色		
80－10	壷	砂礫3	13.6		無頸壷 円形刺突文1列 口縁部下方に孔2個	外面　ハケ　ナデ 内面　ハケ　ヘラミガキ	微砂含む	白褐色	15	
80－11	甕	砂礫3	22.9			外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	褐色	25	一部スス付着
81－1	蓋	砂礫3	天井径7.4		傘形	外面　ハケ　指頭圧痕 内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	外面淡灰褐色 内面黒褐色	完存	
81－2	蓋	砂礫3	天井径6.6		傘形	外面　ヘラミガキ	粗砂含む	灰白色	60	内面に調整具痕
81－3	(底部)	砂礫3	底径7.3			外面　指頭圧痕　ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	灰白色	50	スス付着
81－4	(底部)	砂礫3	底径8.5			内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	灰白色	25	
81－5	(底部)	砂礫3	底径9.6			外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	灰褐色	完存	磨滅する
81－6	(底部)	砂礫3	底径11.0			外内面ともハケの後ナデ	粗砂含む	淡黄褐色	45	磨滅する
81－7	(底部)	砂礫3	底径8.2			外面　ヘラミガキ　ハケ 内面　底部に爪痕	粗砂含む	外面黄灰褐色 内面赤褐色	完存	磨滅する
81－8	(底部)	砂礫3	底径6.0			外面　ハケ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	淡黄灰色	完存	
81－9	(底部)	砂礫3	底径9.4			外内面ともヘラミガキ　ナデ	密	淡灰褐色	45	スス付着

6は壷の肩部で、ヘラによる平行直線文の下にヘラによる羽状文を描き、縦にヘラで5条の平行直線文と三角形刺突文を施して区画する。さらに、下方にヘラによる7条の平行直線文を描き、沈線と三角形刺突文を交互に入れる。7は壷の肩部で、頸部と胴部の境に段があり、下方に3条の平行直線文とヘラによる大きな羽状文を描く。8は壷の胴部で、8条のヘラによる平行直線文と三角形刺突文を描く。10と11は中期中葉の土器。10は無頸壷で、口縁端部が拡張して上面がフラットになるものである。肩部には刺突文があり、口縁部下方には2個の孔が開く。11は口縁部がくの字に外に開く甕である。

第81図は蓋と、壷と甕の底部である。１、２は前期の蓋で、天井部の破片。傘形。３～９は底部の破片で３～８は前期で、９は中期である。

その他の土製品としては、土器を加工した円形土製品（第52図１）がある。砂礫層上層出土。

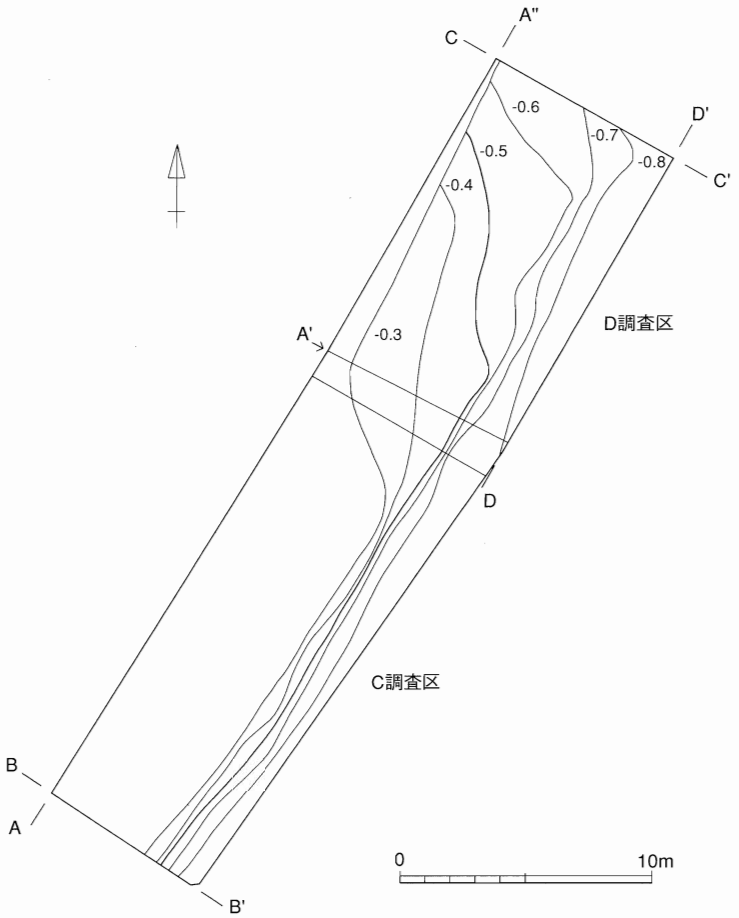
石製品としては第54図４の穂摘具とみられるものがある。研磨されてはいないが、両面から穿たれた孔がある。

木製品には第56図３の容器と第57図３の棒状木製品がある。容器はコップ状を呈し、底の外径は11.3cm、高さ11.5cmである。上部は破損している。底部内面は粗く削られているが、外面は丁寧に仕上げられ、柾目には幅1.2mmのノミ痕が残る。棒状木製品は長さ74.7cm，厚さ3.3cmで、両先端は尖っている。なお、中央部では幅2.0cm、深さ0.8cm程抉られ、凹状となる。使途不明。

（4）Ｄ調査区

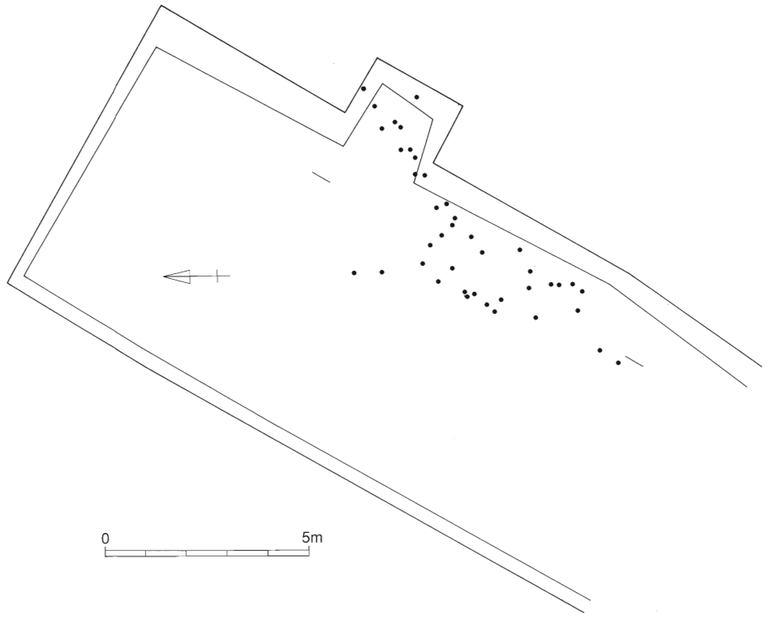
Ⅱ区左岸の北端に位置し、学園橋の東詰に当たる。調査区は南北13m×東西８mの大きさで、表土から2.5mの深さまで下げた。

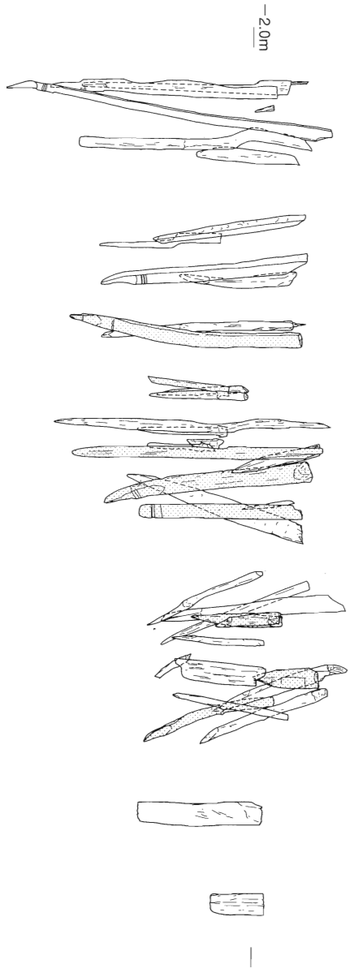
調査区の東端において青灰色粘土層に大小40本程の杭が打たれていた（第83図）。これらの中には、皮付きの生木の片面を削ったところへ墨書した塔婆がある。(注4) 木の材質は松が多く、落葉樹も混じる。枝は切り落とされている。上部は三角に尖らせ、塔婆を表す刻みを入れ、それらを墨で塗るものもある。表28のように、三角に尖らせるのみのもの(△で表す）と、刻みを２本横に入れるもの（〓で表す）とがある。長さは先が折れており、はっきりしないが、現存長で130cm程のものもある。太さはまちまちで、大きいのは径10cm以上のものも混じる。この中で、打たれた年代を知り得るものは２本ある。その内の１本(第90図３）に「天明八年(1788）九月十三日」の墨書がある。また、「□徳□未年」が認められ(第90図２)、正徳乙未年とすると正徳５年(1715）と考えられる。２本とも18世紀代で、江戸時代中期のものである。塔婆の墨書は最初に梵字が記され、大きな字によりそれぞれ経文や念仏にかかわる文字が書かれ、さらに細い字で、故人の名前や建てた時期および理由を説明している。第90図３には妙貞という女性の三回忌に関係者が集まり、後生を願ったとある。多くの塔婆はこの様に死者の供養のためのものと推定される(表28)。墓地や寺院に建てるのではなく、川の土手(第89図）に打っているのが注目される。(注5)



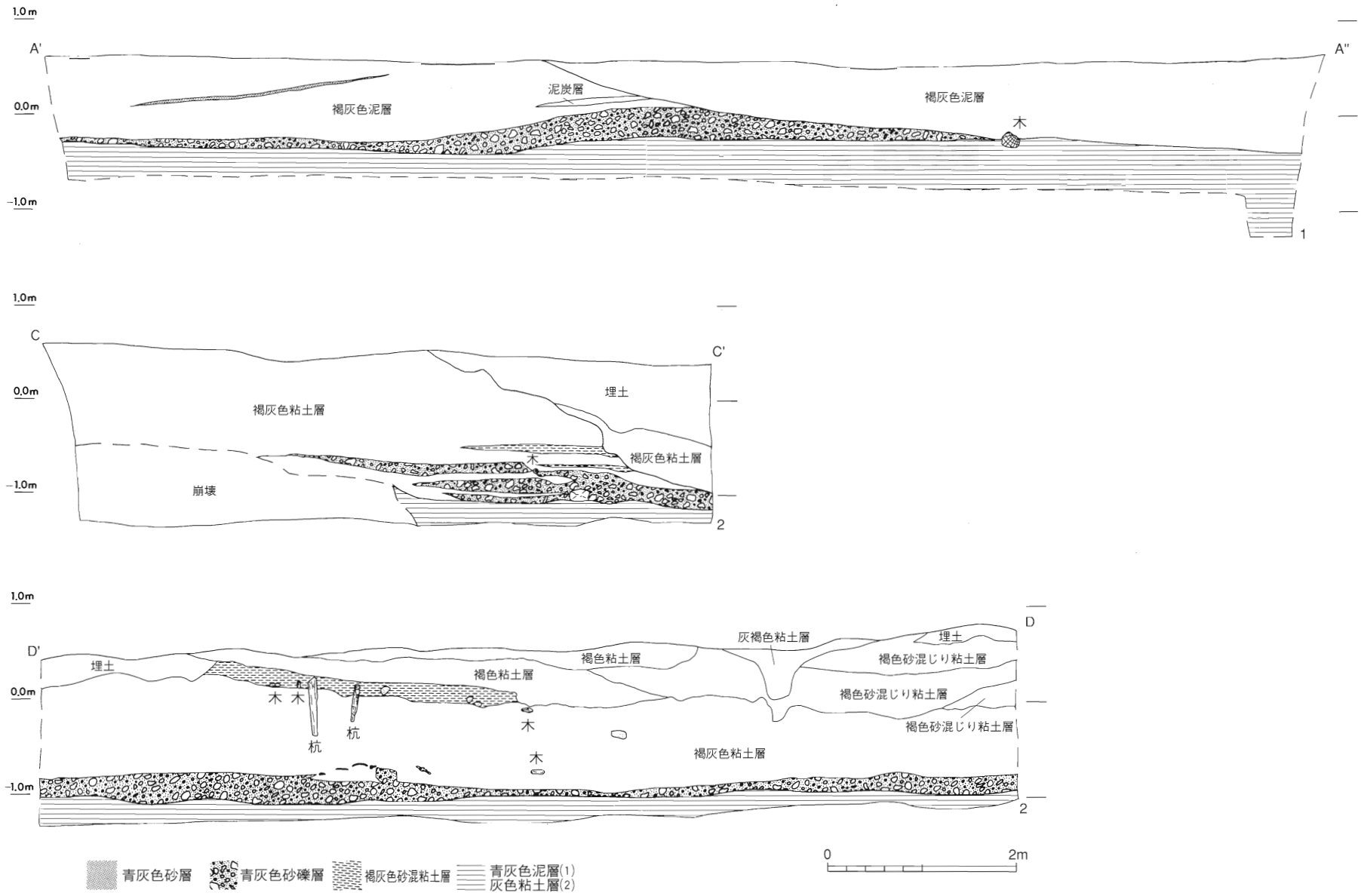
第82図　Ⅱ区（左岸）C・D調査区　位置図・調査区測量図

塔婆検出状況（番号5）





第83図　Ⅱ区（左岸）D調査区　杭・塔婆出土状況実測図　（右上の図は調査区全体を示す　●は杭と塔婆である）

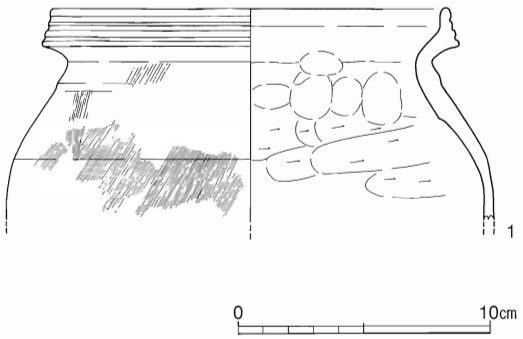


第84図　Ⅱ区（左岸）D調査区（西壁・北壁・東壁）土層堆積図（AA'・CC'・DD'は第 82 図参照）

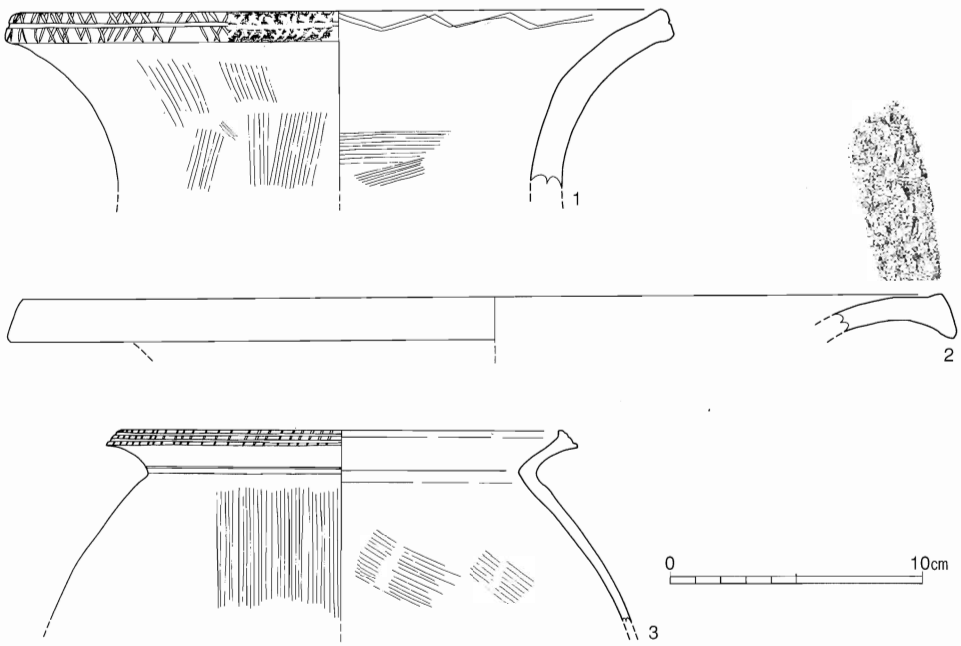
層理面は東に傾斜している。西壁北部分では、河川の削り面の傾斜が反対になっている。見かけ上、流向が大きく変わったように見えるが、壁の方向と地層の走向が近いためで、流れ方は大きく変わっていない。青灰色泥層は下部では礫層に変化する。礫層は同じⅡ区Ｂ調査区北部分にも続いている。礫の種類は玄武岩礫と砂岩礫のみで、朝酌川の堆積物と明らかに異なる。調査区が川津小学校のある谷の出口に位置し、この谷には玄武岩、砂岩が分布することより、この谷から出た堆積物と考えられる。なお、東端部分には新しい川の切り込みがあり、上部には現代の埋土や杭が存在する。

第85図１は泥層から出土した弥生時代後期前葉の甕である。口縁部は複合口縁で、外面に３条の凹線文が入る。

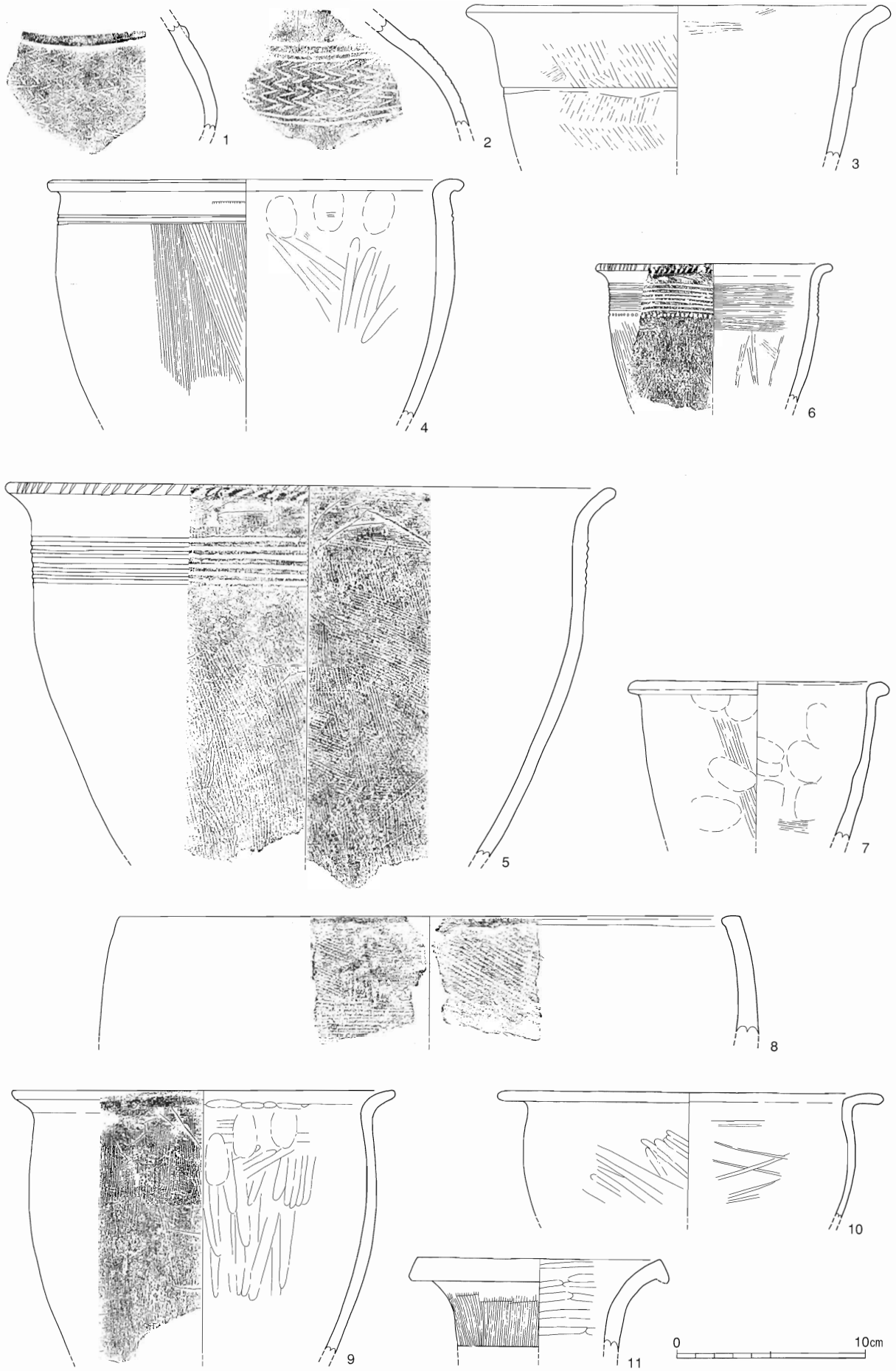
第86図は砂礫層の２層から出土した弥生土器である。１は前期の壷で、口縁部外面にヘラによる１条の沈線を巡らし、さらに×印を描く。また、内面にも貝殻で山形状に２条の平行直線文を巡らす。２は中期中葉の壷で、頸部から口縁部にかけて大きくラッパ状に開く。口縁部の内面に櫛によ



第85図　Ⅱ区（左岸）D調査区　泥層出土土器実測図



第86図　Ⅱ区（左岸）D調査区砂礫（2層）出土土器実測図

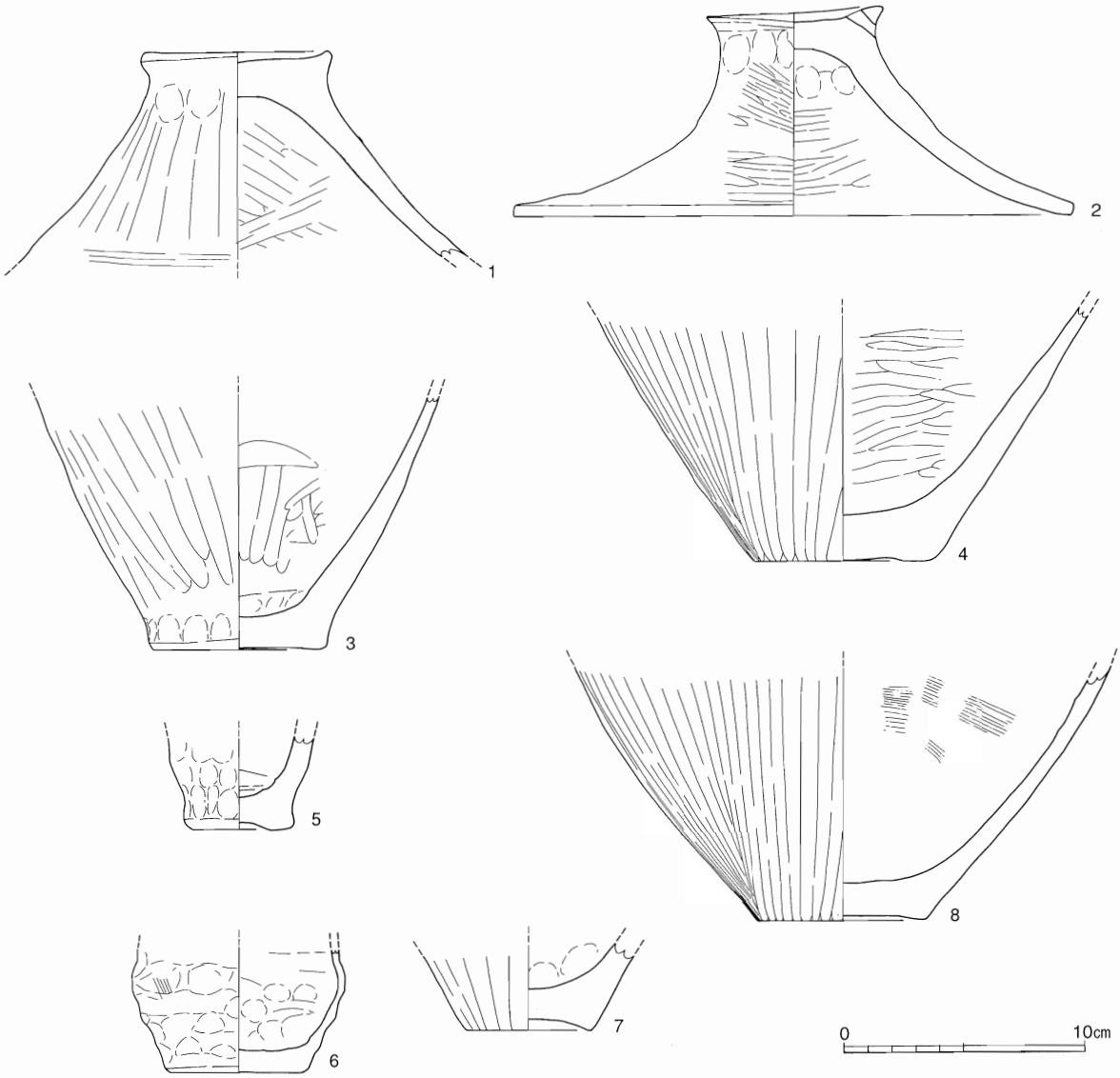


第87図　Ⅱ区（左岸）D調査区砂礫層（3層）出土土器実測図（1）

る文様を施す。３は中期後葉の甕である。口縁端部は拡張し、外面に２条の凹線と刻目を入れる。

第87・88図は砂礫層の３層から出土した弥生土器である。第87図１～８は前期、９～11は中期に属する。１、２は壷。１は肩から胴部の境に突帯を巡らし、下方に貝殻による羽状文を施す。２は肩から胴部の境は段となり、下方に貝殻による２条の平行直線文を上下に巡らし、その間に貝殻による羽状文を施す。３～６は甕。３は、口縁部がゆるやかに屈曲し、下方に段を設ける。４は、口縁部が大きく屈曲し、下方に２条の平行直線文を入れる。５は大形品。口縁部はゆるやかに屈曲し、口縁端部に刻目を入れる。また、下方にヘラで６条の平行直線文を巡らす。６は小形品。口縁部はゆるやかに屈曲し、口縁端部に刻目を入れる。また、下方にヘラで７条の平行直線文と１列の円形の刺突文を巡らす。７は小形の鉢で、口縁部は短く、屈曲する。８は大形の鉢で、口縁部はやや内傾し、端部は内側に少し肥厚する。９は甕で、口縁部はゆるやかに屈曲する。10は甕で、口縁部は大きく外反する。11は中期中葉の壷で、口縁部が短く、ゆるやかに外反する。端部は下方に肥厚する。

第88図は弥生土器の蓋と壷、甕などの底部である。１、２は傘形を呈する甕用の蓋。２では、三方向に孔が天井部から外面に向かって斜めに開く。３～８は底部。３～６は前期、７、８は中期に属する。５は小形の甕で、６は手捏ね土器である。



第88図　Ⅱ区（左岸）D調査区砂礫層（3層）出土土器実測図（2）

表 26　Ⅱ区（左岸）D調査区泥層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
85－1	弥生　甕	泥層	15.6		口縁部外面に凹線文３条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕 ヘラケズリ	粗砂含む	褐色	20	外内面とも硫黄により黄色

表 27　Ⅱ区（左岸）D調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
86－1	弥生 壺	砂礫２	25.6		口縁部外面　ヘラ描×形刻目上に沈線１条 口縁部内面　貝殻山形平行直線文２条	外面　ハケの後ナデ 内面　ナデ　ハケ	粗砂含む	黄褐色	15	
86－2	壺	砂礫２	36.6		口縁部内面　櫛描文	外面　ハケ	細砂含む	淡褐色		磨滅する
86－3	甕	砂礫２	17.5		刻目上に凹線文２条	外面　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケの後ナデ	細砂含む	茶褐色	25	スス付着
87－1	壺	砂礫３			突帯　貝殻羽状文	内面　ハケの後ヘラミガキ	粗砂含む	茶褐色		外面硫黄付着
87－2	壺	砂礫３			貝殻平行直線文・羽状文	外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ナデ	粗砂含む	淡褐色		
87－3	甕	砂礫３	21.6		段がつく	外面　ハケの後ナデ　ヨコナデ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	淡褐色	15	
87－4	甕	砂礫３	21.3		ヘラ描平行直線文２条	外面　ハケの後ヨコナデ 内面　指頭圧痕　ヨコナデ ヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色	15	外面一部黒斑
87－5	甕	砂礫３	32.3		口縁部外面に刻目 ヘラ描平行直線文６条	外面　ハケの後ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ハケ	粗砂含む	淡赤褐色	15	大形品
87－6	甕	砂礫３	12.3		口縁部外面に刻目 ヘラ描平行直線文７条 円形刺突文１列	外面内ともヨコナデ　ハケ	粗砂含む	白褐色	20	小形品 外面一部黒斑
87－7	鉢	砂礫３	13.9		口縁部は外面に水平に折れる	外面　指頭圧痕　ハケの後ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	淡褐色	30	小形品 外面スス付着
87－8	鉢	砂礫３	33.2		口縁部は少し内傾する	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ハケ	粗砂含む	黒色	5	大形品
87－9	甕	砂礫３	20.3			外面　ヨコナデ指頭圧痕　ハケ 内面　ヘラミガキ　ヨコナデ 指頭圧痕	密	茶褐色	10	外面スス付着
87－10	甕	砂礫３	19.9			外面　ハケの後ナデ　ヘラミガキ 内面　ヨコナデ　ハケの後ナデ後ミガキ	密	灰褐色	15	
87－11	壺	砂礫３	12.9		口縁部緩やかに外反する	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヘラミガキ	微砂含む	淡褐色	20	
88－1	蓋	砂礫３	天井径7.7		傘形	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ 指頭圧痕 内面　ナデ　ヘラミガキ	粗砂含む	外面淡黄色 内面淡灰色	90	内面に黒斑
88－2	蓋	砂礫３	23.1 天井径8.6	9.2	傘形 三方に孔あり	外面　ヘラミガキ　指頭圧痕 ナデの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕	粗砂含む	灰白色	70	黒斑
88－3	(底部)	砂礫３	底径7.2			外面　ヘラミガキ　指頭圧痕 内面　ヘラミガキ　ナデ 指頭圧痕	粗砂含む	淡灰褐色	完存	外内面スス付着
88－4	(底部)	砂礫３	底径7.6			外内面とも　ヘラミガキ　ナデ	粗砂含む	灰褐色	45	磨滅する
88－5	甕(底部)	砂礫３	底径4.2			外面　指頭圧痕 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	外面灰白色 内面灰黄色	完存	小形品
88－6	(底部)	砂礫３	底径5.6			外内面とも指頭圧痕　ナデ	細砂含む	灰褐色	95	手捏ね土器
88－7	(底部)	砂礫３	底径5.2		上げ底	外面　ヘラミガキ　ハケの後ナデ 内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	外面茶褐色 内面黒褐色	95	内面スス付着 硫黄により黄色 底部赤化
88－8	(底部)	砂礫３	底径7.0			外面　ヘラミガキ　底部ナデ 内面　ハケ　ナデ	密	淡黄灰色	完存	

第89図　Ⅱ区付近の明治期の切図（写）（●は塔婆の位置を示す）

その他の土製品としては土錘（第51図１、４）がある。１は砂礫層、４は粘土層から出土している。１は球形を、４は棒状を呈す。前者は40ｇ、後者は5.3ｇ。

石製品には黒曜石の原石や板状未製品及び剥片がある。第54図６は大きな剥片。片面は節理面を残し、他の面は粗い剥離面のままであるが、一側面に擦切り痕をもつ。第55図３の剥片は二側面に擦切り痕をもち、背面に径１㎜の円形の凹がある。

木製品には又鍬（第57図５）がある。頭部は半月形で、柄孔に突起はない。歯は５本であるが、欠損したものもある。歯の長さは7.1㎝。

（注）

(1) 土笛の出土数は全国で75点。うち、西川津遺跡からは25点出土している。『夏季特別展「海」－海流に乗った古代の恋物語』島根県立八雲立つ風土記の丘　1999 を参照。

(2) 江戸時代の西川津村と菅田村では18世紀から19世紀にかけて新田開発が盛んに行われた。西川津村の場合、慶安５年（1652）と元禄14年（1701）では田畑の面積はさほど変わらないが、明治９年（1876）になると元禄14年の約2.63倍となる（川津公民館『川津郷土誌』1982による）。上記の記述の該当する場所は朝酌川下流域のタテチョウ遺跡周辺であろう。しかし、上流部の西川津遺跡などがある河川敷の一部でも水田化されたことが出土品からみてとれ、その時期は18世紀代と推定される。

(3) 木製品の名称は奈良国立文化財研究所『木器集成図録　近畿古代篇』1985による。

(4) 杭形塔婆に供養文が書かれた例には群馬県の二之宮東遺跡がある。杭形塔婆６点の他に、墨書木札４点、板塔婆２点、蘇民将来符３点などが発見され、杭形塔婆には、延享三年（1746）の年号があり、18世紀中頃のものと考えられている。

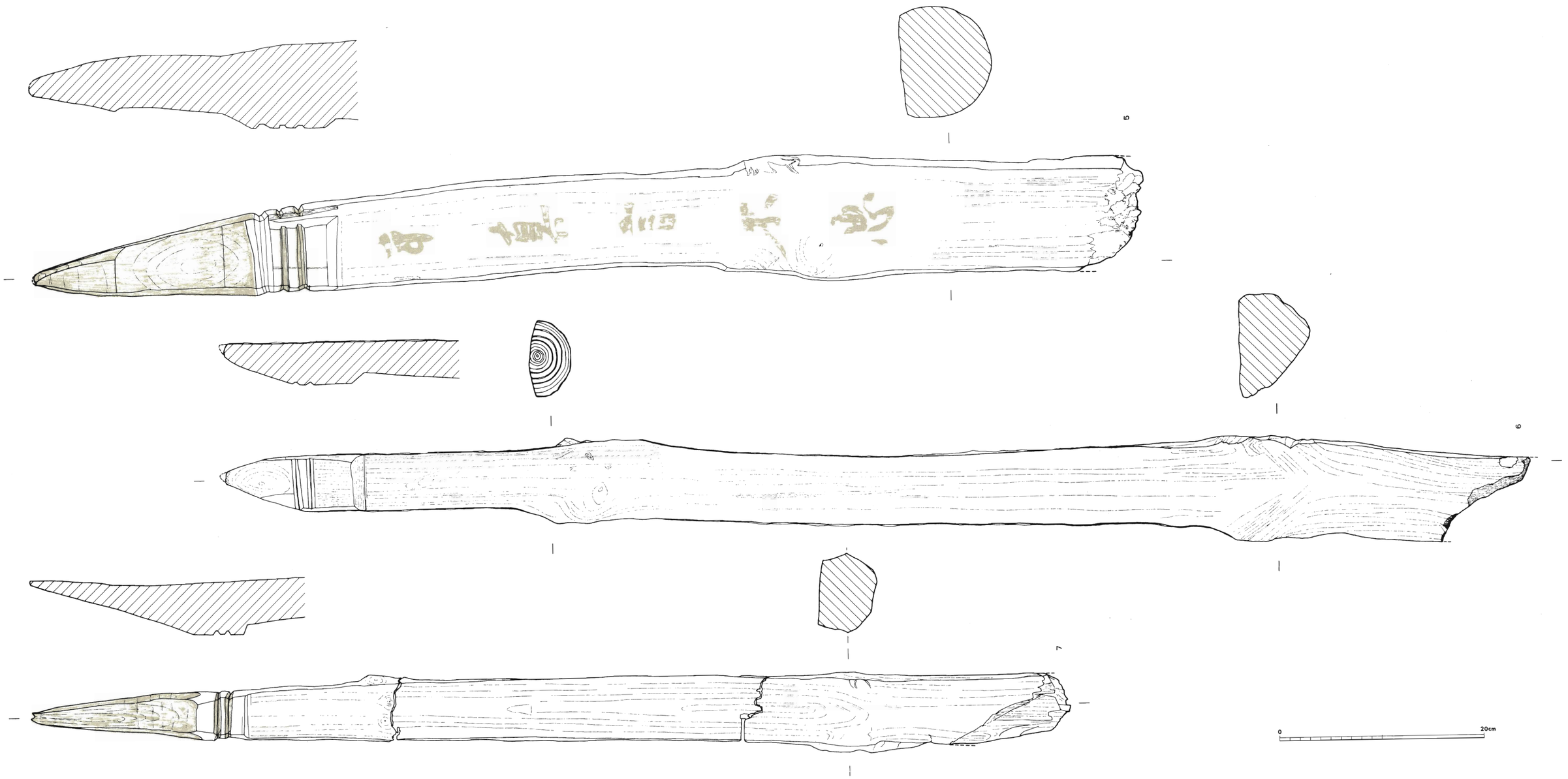
（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団『二之宮東遺跡発掘調査報告書』1993

杭形塔婆を川岸に打つ例としては静岡県土橋遺跡がある。堰部分の杭の中に、塔婆が14本認められている。時期は近世後半で、祭祀的性格と考えられている。

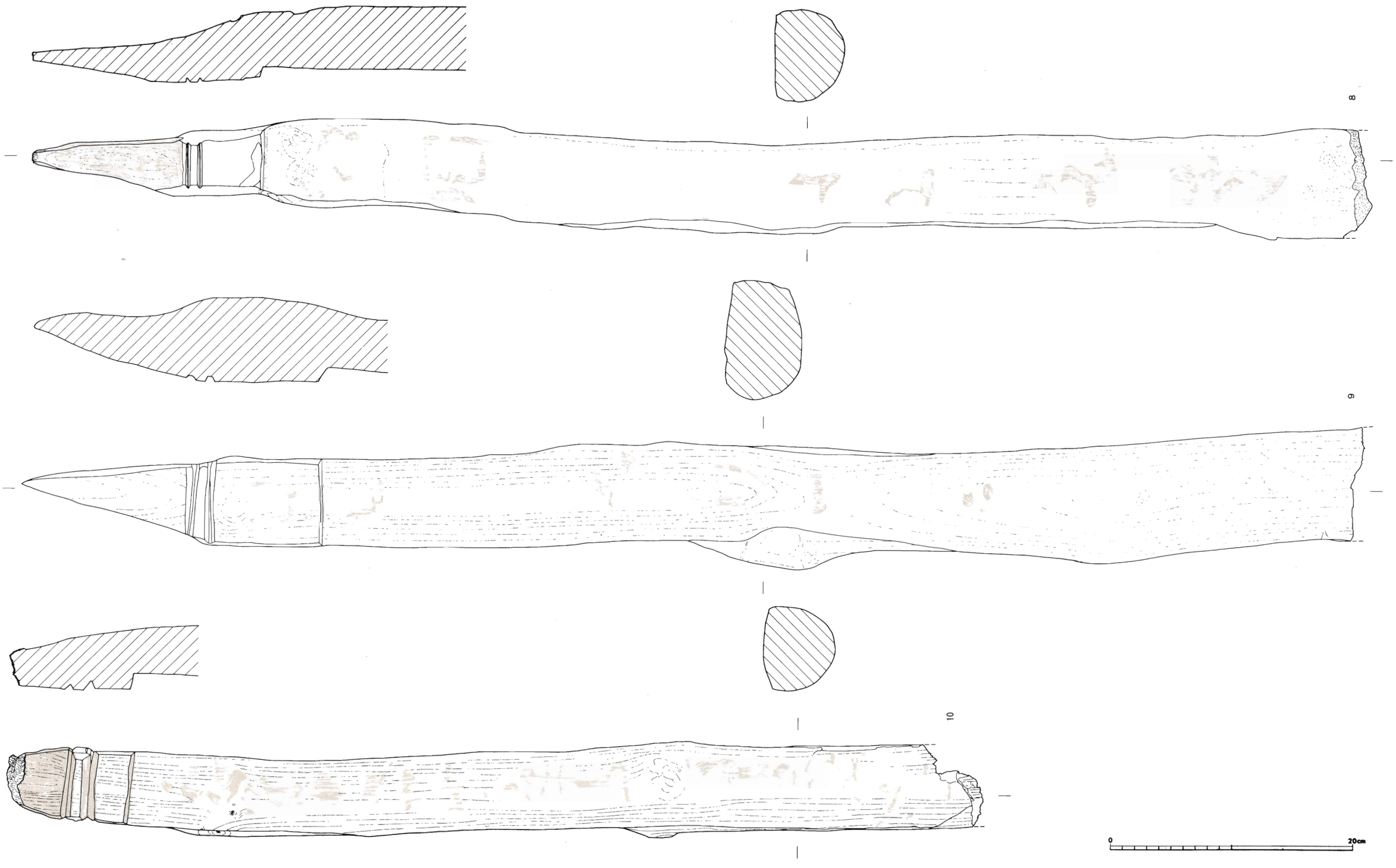
静岡県教育委員会ほか『一般国道１号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書　土橋遺跡－基礎資料編－』1985

(5) 西川津町の真言宗霊感寺の過去帳には、西川津村で天明八年の該等者はなかった。住職吉松栄祐氏の教示による。

第90図　Ⅱ区（左岸）D調査区　塔婆実測図（1）



第91図　Ⅱ区（左岸）D調査区　砂礫実測図（2）



第92図　Ⅱ区（左岸）D調査区　塔婆実測図（3）

表28　Ⅱ区（左岸）D調査区　塔婆釈文一覧表

番号	形状	釈文	径(cm)	現存長(cm)
1	△	タラーク 是［	7.4	42.5
2	△	□□□□□ □（正カ）徳未年□□ 六□	9.6	55.0
3	△	尊趣者 〔意カ〕 天明八年九月十三日□□物故妙眞禅尼第三廻（ママ）忌之［ 共養所集功徳奉□伏願偖□利生 □□□□□□［	8.1	93.2
4		カーン 不動明王無□住所但住衆生一念心中 □□□□□□□［	7.6	98.1
5	△＝	バン 真言不忠［	10.7	108.4
6	△＝		10.0	127.2
7	△＝		7.7	101.5
8	△＝	梵字□　□□□［	7.6	110.6
9	△＝	梵字　□□□［	9.8	110.6
10	△＝	梵字□　□□□［	6.9	83.0

〔形状は△は先端を尖しただけの杭、△＝は先端の手前に２条の刻目を入れた杭である。〕

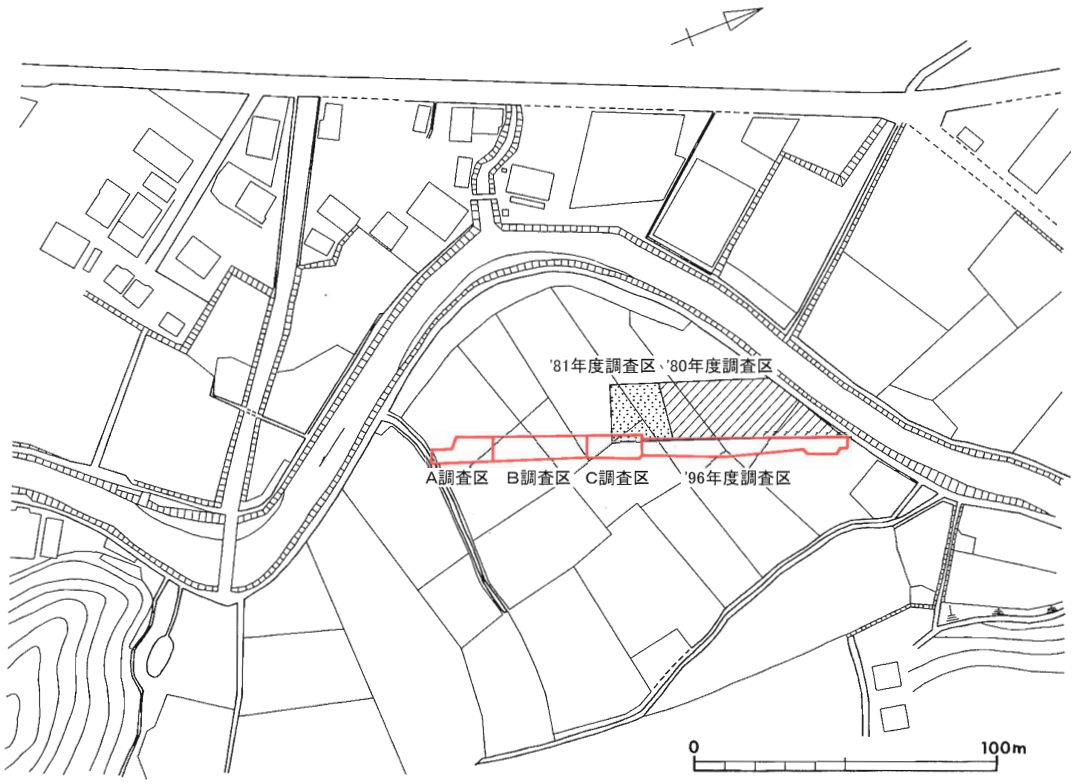
第５章　Ⅲ区左岸の調査

第１節　調査経過と調査概要

調査経過

西川津遺跡Ⅲ区は学園橋の上流部で、大内谷集落の出口にある嵩見橋との間の河川敷に位置する。発掘調査は、暫定掘削に先立って1980(昭和55) 年度と1981(昭和56) 年度に実施され、弥生時代の土器、石製品、木製品が多量に出土している。(注1) この度の調査対象地は、1981年度調査地(現在流れている川部分) の両岸の河川敷である。1994(平成６) 年度の調査範囲は左岸の下流部とし、南北50.0m、幅は最大6.5m、最小3.0mの調査区を設定した。場所は松江市立川津小学校のグラウンドの北側に当たる。この調査区の南端は戦後まで川付近であったため、トレンチ調査に留め、その北側から本格的調査を行った。よって、トレンチ部分をＡ調査区、その北側をＢ調査区とした。さらに、翌年の1995年度も引き続き北側を調査対象とした。この区はＣ調査区と呼ぶこととした。なお、この調査区の残りの部分は1996年度に本調査が実施されている。(注2)

調査は下流部のＡ調査区から始め、他の調査区同様に水田の耕作土と客土を重機により除去した。その下部にある青褐色粘土層から遺物を含む砂礫層までを人力で掘り下げた。



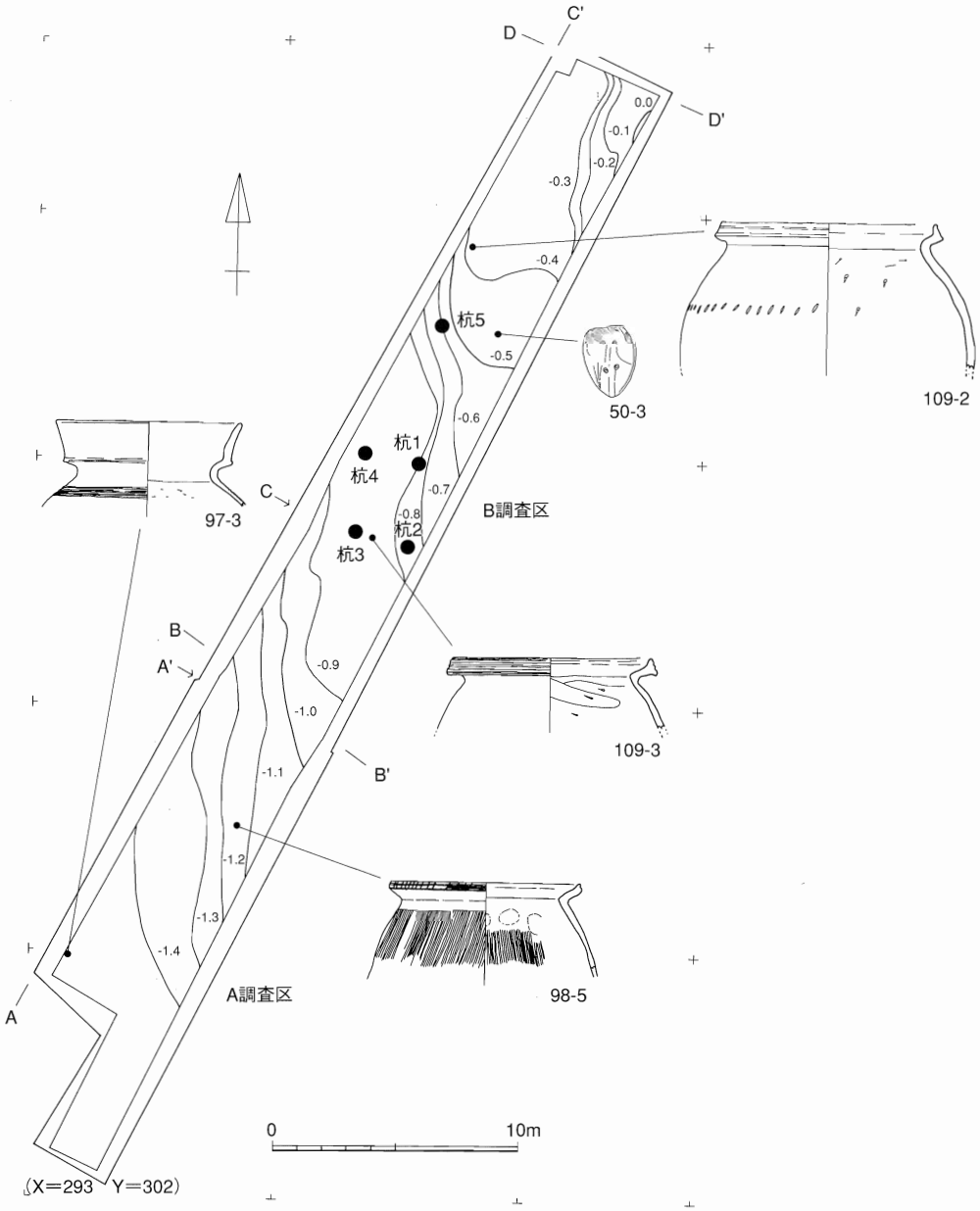
第93図　Ⅲ区（左岸）調査区位置図

調査概要

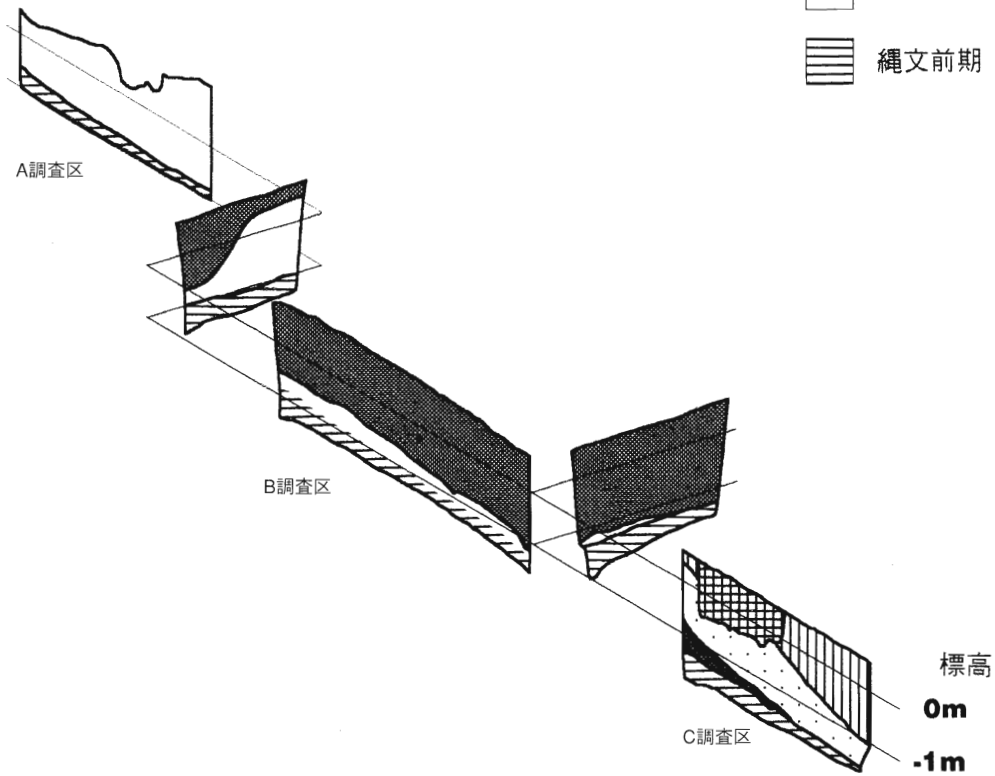
弥生時代の河道跡とこれを削り込んでいる古墳時代の河道跡を検出した。河道跡は北東から南西の方向に認められるが、弥生時代前期から中期の砂礫層が厚く堆積していた。その層は厚く、洪水時の強い水流で運搬され、堆積していた。河川堆積層は最下層を除いて西に傾斜しており、河川は東から西に移動したとみられる。最下層に堆積させたのは、網状河川に近い性格をもつ礫質の河川で、その後泥質の蛇行河川に移行したと考えられる。なお、青灰色泥層にはアカホヤ火山灰が挟まれる。この泥層はⅡ区へ連続するが、上流側ほど有機質に富み褐色を呈するようになる。

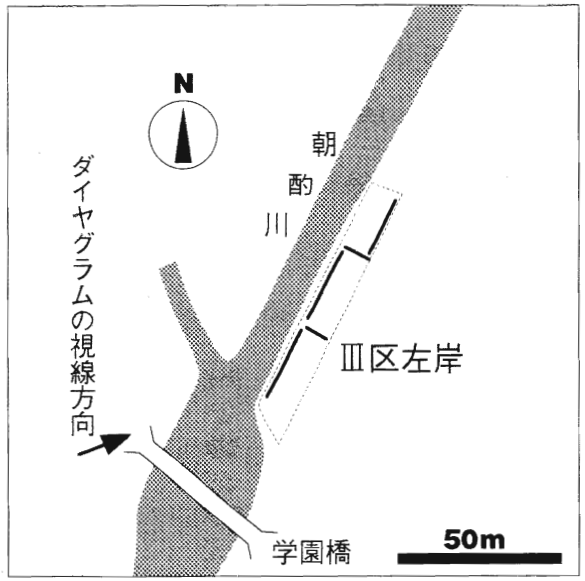
Ｂ区で検出された杭列は砂礫層中に存在しており、古墳時代に打たれたものである。他には遺構は存在しない。

遺物としては、Ｂ・Ｃ調査区の厚い砂礫層中から弥生時代の土器が大量に出土している。土器はコンテナ68箱分出ている。土器以外の遺物では石製品と木製品があり、特異なものとしては弥生時代の木製品の橇(そり)や杵、石製の重りがある。



第94図　Ⅲ区（左岸）A・B調査区　砂礫層上面測量図・遺物出土位置図





第95図　Ⅲ区（左岸）河川堆積図（ダイヤグラム）

Ⅲ区（左岸）砂礫層層序関係

	A調査区	B調査区	C調査区
古墳時代前期	上層		
弥生時代後期	下層	上層	
中期		中層	上層 中層
		下層	下層 下々層

第２節　各調査区の遺構と遺物

（１）Ａ調査区

Ⅲ区左岸の南側に当たり、南端は学園橋東詰に接する。調査区は南北20m×東西６ｍを設定したが、西端から５ｍは南半分しか掘れなかった。西側が最近までの川跡であったため、堆積土が軟弱のため、調査時に壁が崩壊した。しかし、調査区中程では、標高マイナス150cmの所で、厚さ10cmの砂礫層を検出した。この層が堆積したのは出土した土器より弥生時代後期末の頃である。なお、砂礫層は東になるほど立ち上がり、さらに２、３層に薄く分かれる。川の侵食面の始まる所である。

この区では遺構は認められなかった。昭和50年代まで蛇行していた朝酌川の流路に接しているため、学園橋南詰付近は最近まで沼状であった。Ⅱ区の西端で行った試掘時の土層図（第96図）でも、川岸に見られる泥層が斜めに堆積していた。さらに、調査区の南側には30年前までは馬込山といわれた低丘陵(川津小学校や県立松江東高等学校がある高台）があったが、ここから流れ出た小川もＡ調査区の近くを流れ、朝酌川に注いでいた。

Ａ調査区の砂礫層出土遺物（第97～100図）

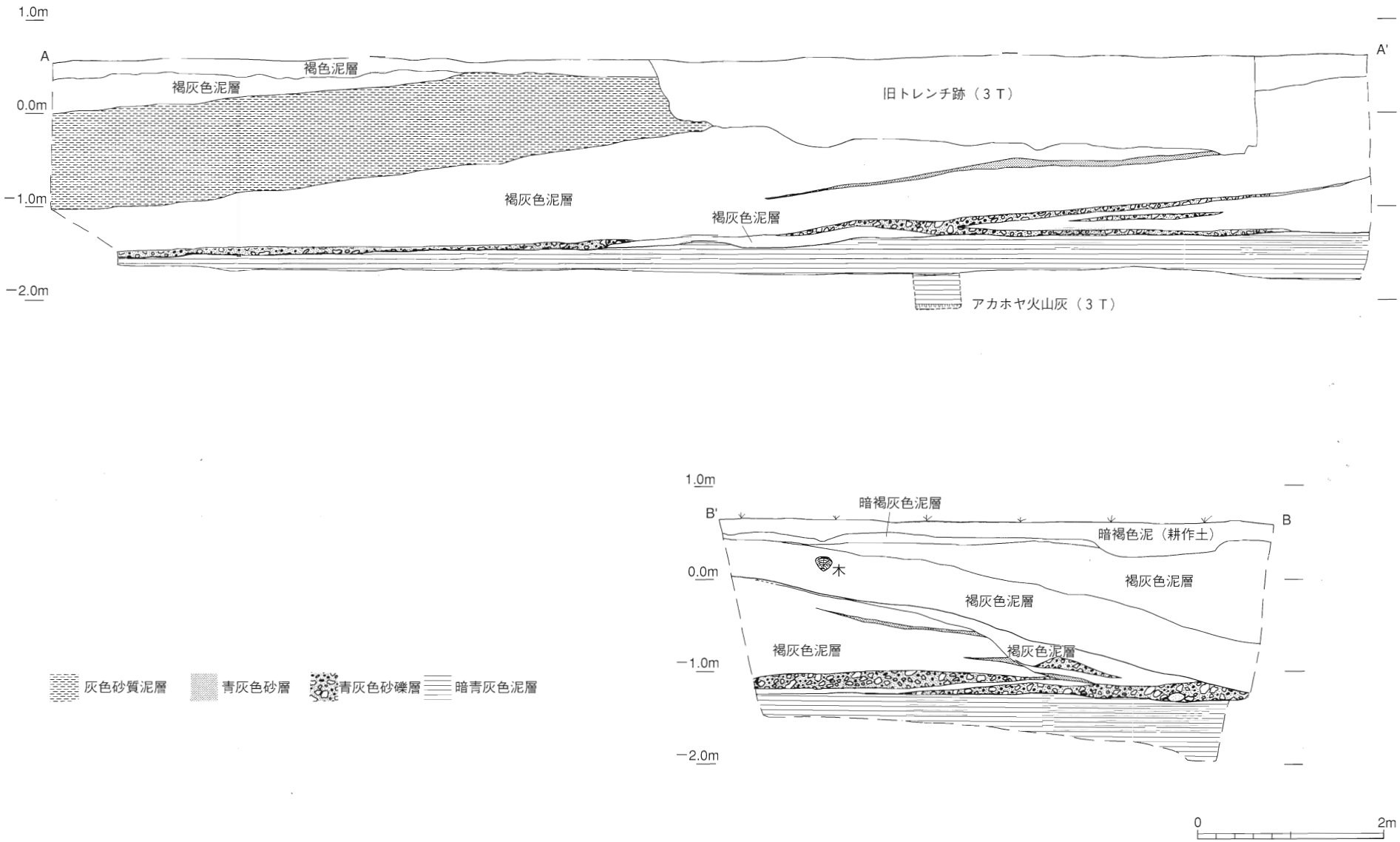
砂礫層からは土器が出土している。

土器には、縄文土器と弥生土器がある。縄文土器は第99図２、８。２は早期末から前期初めの中山式の鉢である。口縁部外面には突帯が付く。８は前期の鉢で、破片の周りが二次加工されている。土器片錘か。表面にはハッチング状の押し引き刺突文を施す。弥生土器は中期から後期のものである。第97図１は高杯で、杯部の破片。口縁部は内側に肥厚し、上面は平坦になる。２は壷で、口縁部は立ち上がり、外面には５条の沈線が入る。３、４は５の字の複合口縁をもつ。肩には櫛による直線文が入る。第98図は下層の土器である。１～３は中期の壷、４は鉢、５～８は後期の甕、９は前期の壷の底部、10は蓋である。１は、口縁部が短く外反する。２は、外反する口縁部の端部は拡張し、頸部には粗雑な指頭圧痕文帯を巡らす。３は、口縁部が斜めに開く広口壷で、端部には２条の凹線文が入る。頸部には刻みを付けた突帯を巡らす。４は口縁端部が拡張して、上面が水平になる。５は、胴が張る甕で、くの字に開く口縁部の端部には凹線と刻目を入れる。６は口縁部が拡張した甕で、外面に４条の凹線が入る。７は甕で、口縁部はやや外傾し、幅広く立ち上がる。外面に４条の凹線文が入る。８は甕で、櫛による直線文と波状文を入れる。10は傘形の蓋である。

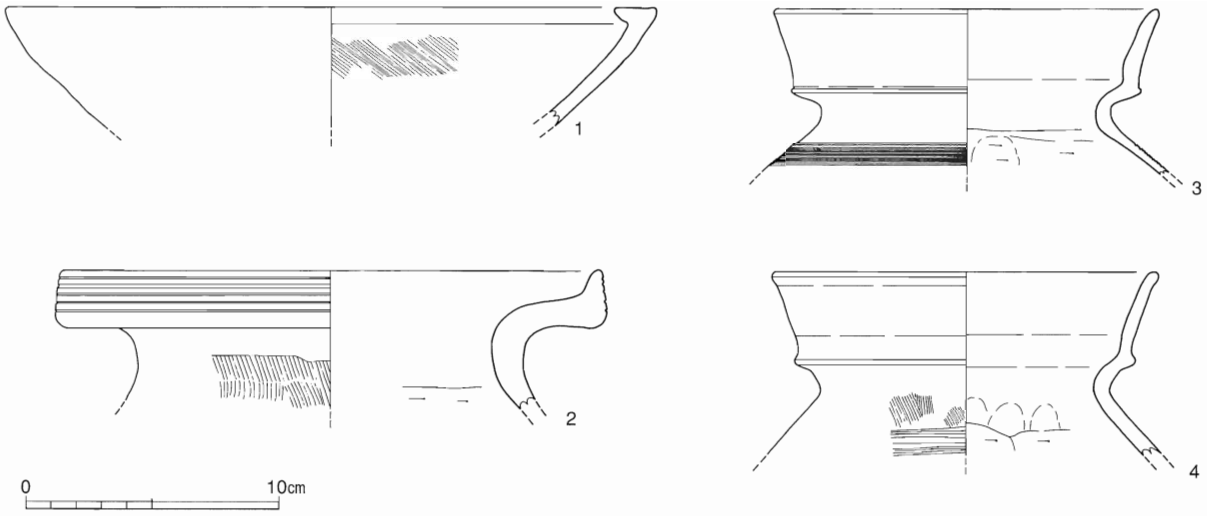
（２）Ｂ調査区

Ａ調査区の東側に接し、南端は土手を挟んで川津小学校のグラウンドがある。調査区は南北30m×東西6.0mに設定した。標高マイナス150cmの場所で、厚さ10cmの砂礫層を検出した。この層が堆積したのは出土土器より弥生時代後期末の頃である。なお、砂礫層は東になるほど立ち上がり、さらに２、３層に薄く分かれる。川の侵食面の始まる所である。アカホヤ火山灰を標高マイナス190cmで検出した。火山灰が古宍道湖の湖底に積もり、その後、湖岸が後退して、陸化したことが分かる。

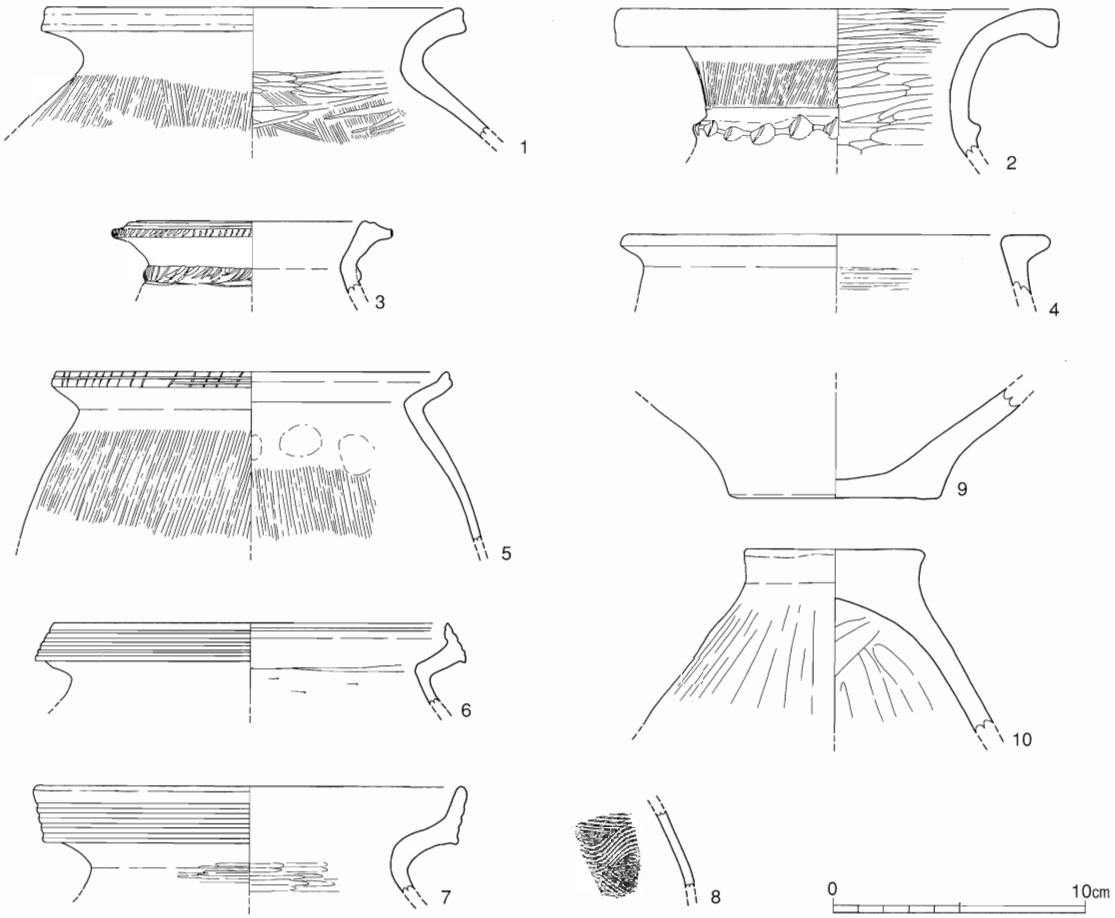
この調査区では、中央部において杭が５本、二列に並んでいた。打たれた時点のレベルは０ｍであり、水中に存在した可能性が高い。杭の間隔は２ｍである。大きい杭は、長さ約100cm、太さ12～13cmで、松材である。杭の先は砂礫層中に存在している。流水で押され、下流に傾くか、押し倒されている。打たれた場所が、砂礫層が中州状になった端部分である。また、４本が等間隔に並び、



第96図　Ⅲ区（左岸）A調査区（西壁・北壁）土層堆積図（AA'･BB'は第 94 図参照）



第97図　Ⅲ区（左岸）A調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図

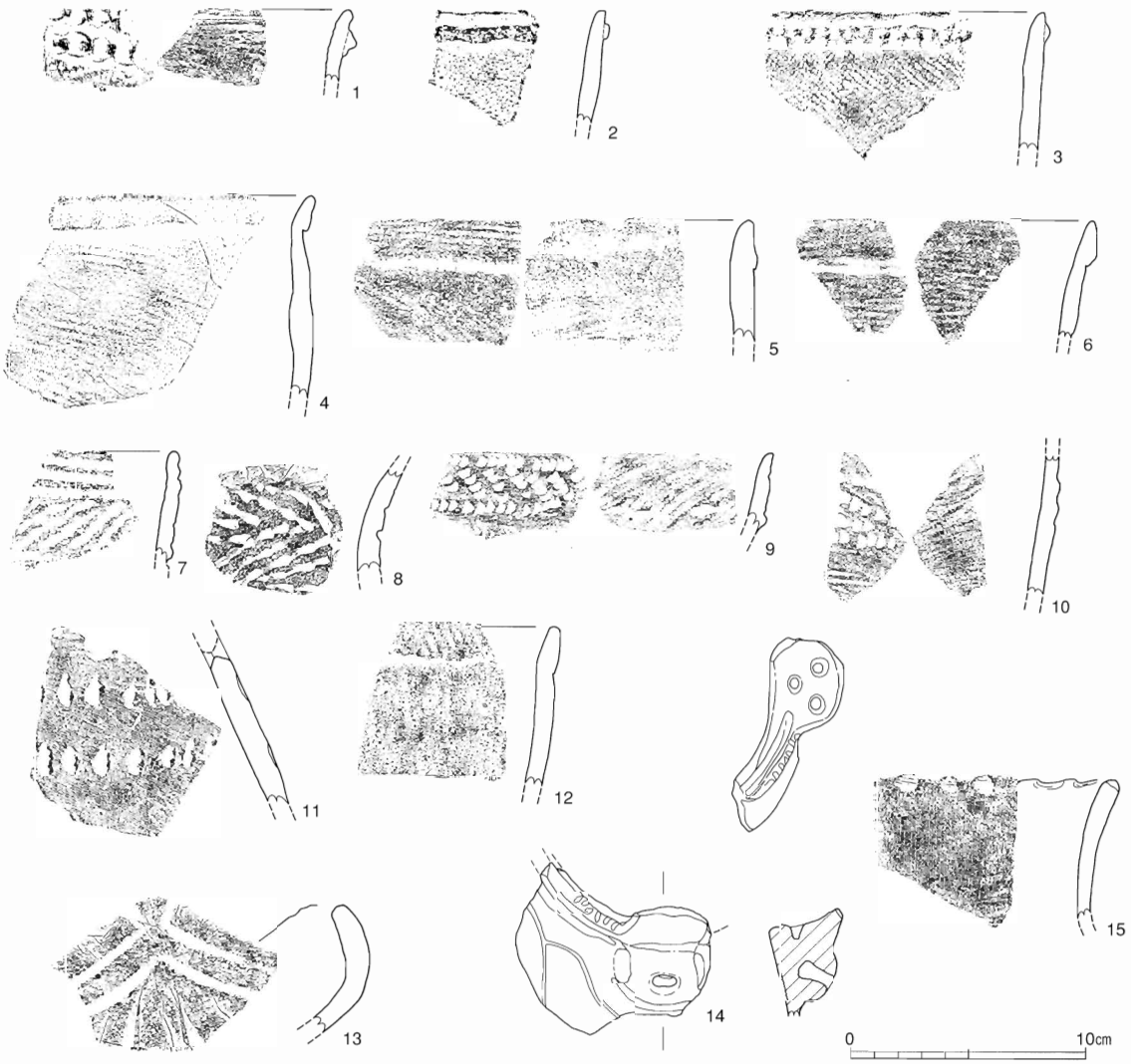


第98図　Ⅲ区（左岸）A調査区　砂礫層（下層）出土土器実測図

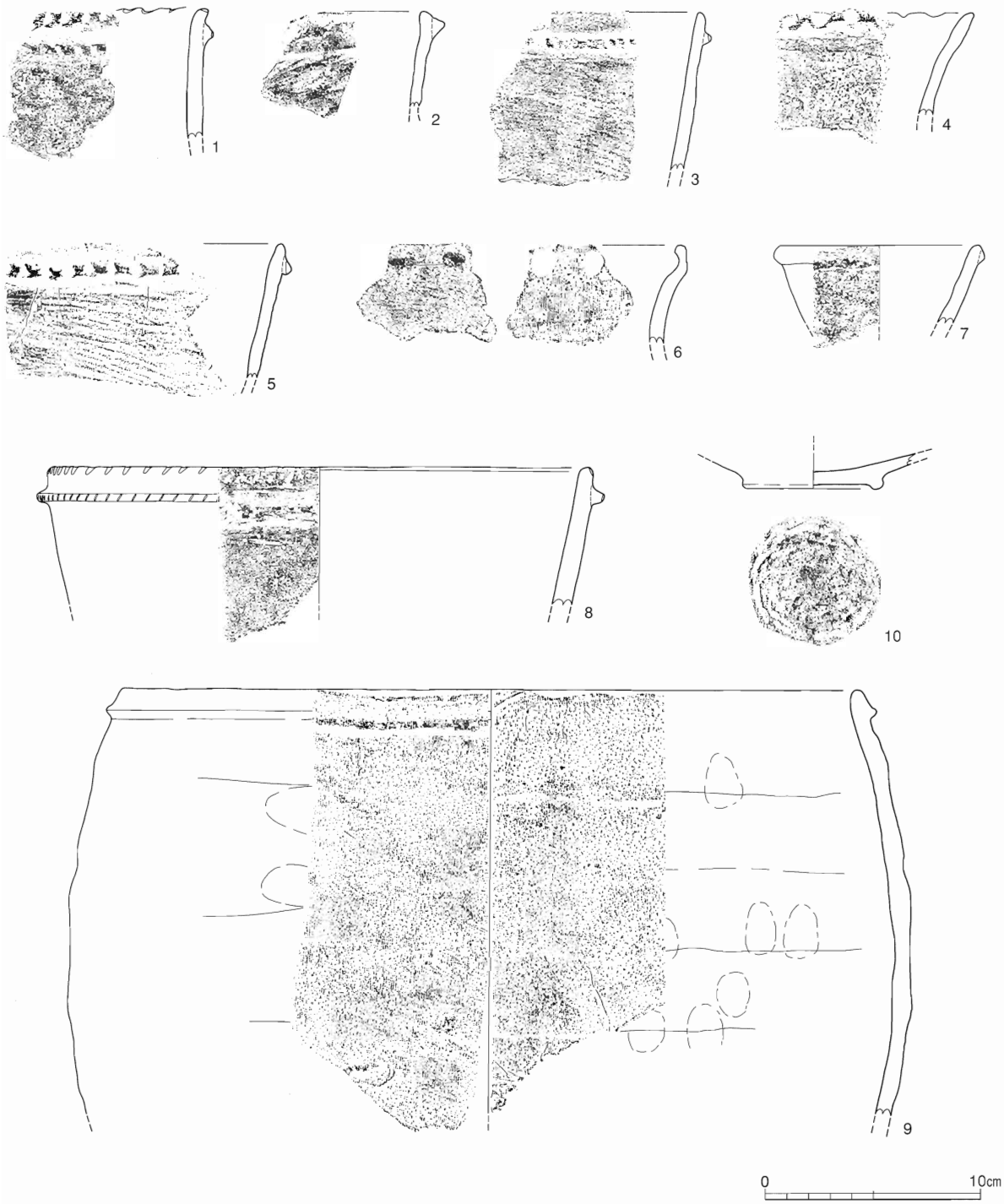
表 29　Ⅲ区（左岸）A 調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
97－1	弥生 高杯（杯部）	砂礫（上層）	22.3		口縁部は肥厚し上面水平となる	外面　ナデ 内面　ナデ　ハケ	微砂含む	外面黄褐色 内面灰褐色	10	外面に黒班
97－2	壺	砂礫（上層）	21.1		口縁部外面に沈線５条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	粗砂含む	黄褐色	15	
97－3	甕	砂礫（上層）	14.9		複合口縁 櫛描直線文９条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ	細砂含む	淡褐色	22	

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
97－4	甕	砂礫(上層)	15.0		複合口縁	外面　ハケ　ヨコナデ　ハケの後ナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ　指頭圧痕	微砂含む	外面茶褐色 内面灰褐色	10	
98－1	壺	砂礫(下層)	16.2		口縁部外反する	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデの後ナデ ナデの後ヘラミガキ	微砂含む	灰褐色	25	
98－2	壺	砂礫(下層)	17.0		頸部に指頭圧痕文帯	外面　ナデ　指頭圧痕　ハケ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色	30	
98－3	壺	砂礫(下層)	8.8		広口壺 凹線文2条　刻目 頸部に刻目突帯	外面　ナデ 内面　ヨコナデ　ナデ	密	黄褐色	15	
98－4	鉢	砂礫(下層)	16.4		口縁部上面水平となる	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕 ハケ	粗砂含む	灰褐色	10	
98－5	甕	砂礫(下層)	15.4		口縁部外面に刻目・凹線文	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケ　ナデ 指頭圧痕	密	外面淡灰色 内面黄褐色	25	
98－6	甕	砂礫(下層)	15.6		複合口縁 口縁部外面に凹線文4条	内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	細砂含む	黄褐色	15	
98－7	甕	砂礫(下層)	16.8		複合口縁 口縁部外面に凹線文4条	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ 内面　ヨコナデ　ヘラミ	細砂含む	灰褐色	13	
98－8	甕	砂礫(下層)			肩部に櫛描直線文4条・波状文8条	外面　ハケの後ナデ 内面　ヘラケズリ	微砂含む	淡褐色		
98－9	壺（底部）	砂礫(下層)	底径8.0			外面　ハケの後ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕 ハケ　の後ナデ	粗砂含む	黄褐色	5	磨滅する
98－10	蓋	砂礫(下層)	天井径7.0		傘形	外面　指頭圧痕　ハケの後ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	外面灰褐色 内面灰白色	完存	外内面とも黒斑



第99図　Ⅲ区（左岸）A・B調査区　砂礫層出土土器実測図（1）



第100図　Ⅲ区（左岸）A・B調査区　砂礫層出土土器実測図（2）

皮が付いた材を打ち込んでいることも考慮すると、舟杭か船着き場の施設(簡単な小屋掛け）の柱とも推定される。今後の資料の増加に待ちたい。

土層図(第102図）でも、川岸に見られる泥層が斜めに堆積していた。

B調査区の砂礫層出土遺物（第50・99・100・103～119図）

砂礫層からは土器、土笛、石製品、木製品が出土している。

土器には、縄文土器と弥生時代前期から中期の弥生土器がある。第103図は砂礫層の土器で、１～６は弥生時代前期の土器。１は小形の鉢である。口縁部は外に肥厚し、外面下方にはヘラによる５条の平行直線文が巡る。２は壷で、広口の口縁部は大きく外反する。口縁部外面には貝殻による羽状文が、頸部にはヘラによる10条以上の平行直線文が巡る。３、４は甕である。３は口縁部外面に

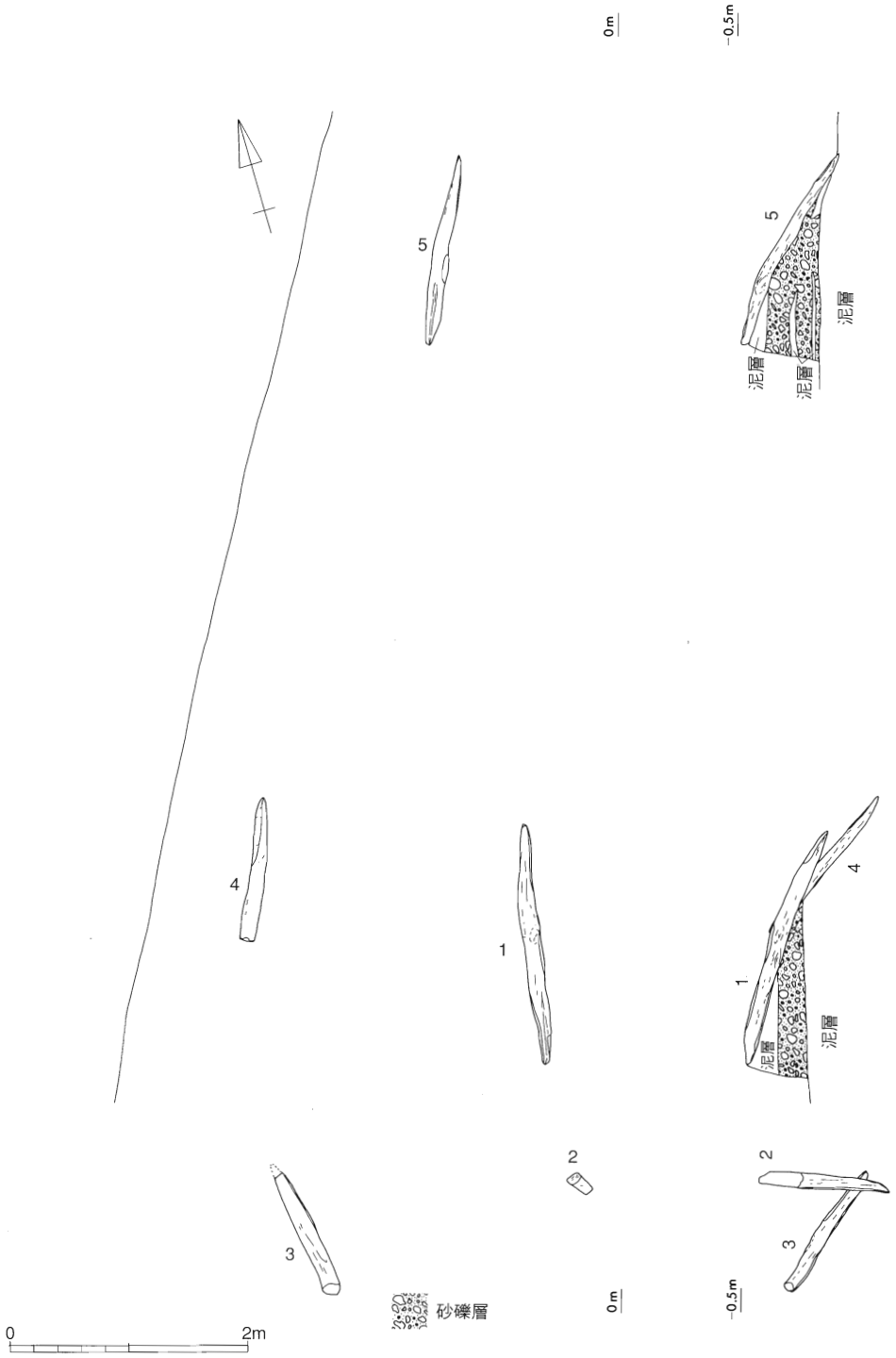
表 30 Ⅲ区（左岸）A・B調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	調査区・層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
99－1	縄文　鉢	B・砂礫（下層）			外面　地文は縄文　刻目突帯　二枚貝刺突文 内面　二枚貝条痕		粗砂含む	黒褐色		
99－2	鉢	A・砂礫			突帯	外面　ナデ 内面　条痕	粗砂含む	外面茶褐色 内面黒褐色		中山式
99－3	鉢	B・砂礫（下々層）			地文は縄文　突帯上に貝による刺突文	外面　突帯の下に指頭圧痕 内面　ナデ	細砂含む	黒褐色		中山式
99－4	鉢	B・砂礫（下層）			肥厚帯	外面　条痕　指頭圧痕 内面　ナデ　条痕				内面スス付着
99－5	鉢	B・砂礫（下層）			肥厚帯	外内面とも条痕	細砂含む	黒褐色		
99－6	鉢	B・砂礫			外面　肥厚帯　凹線？	外面　条痕　ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	灰褐色		
99－7	鉢	B・砂礫（下層）			肥厚帯　斜行する押し引きの刺突文	外面　ナデ　条痕	粗砂含む	淡茶褐色		
99－8	鉢	A・砂礫			ハッチング状の押し引き刺突文	内面　指頭圧痕の後ハケ	細砂含む	淡褐色		外面スス付着 土器片錘か
99－9	鉢	B・砂礫（下層）			肥厚帯上に爪形文	内面　ナデ　条痕	粗砂含む	茶褐色		内面に接合面
99－10	鉢	B・砂礫（下層）			D字形の刺突文　ヘラ描平行直線文	内面　条痕	微砂含む	褐色		
99－11	鉢	B・砂礫			穿孔　二枚貝刺突文	外面　条痕 内面　ヘラケズリ	粗砂含む	淡褐色		
99－12	鉢	B・砂礫（下々層）			肥厚帯　縄文	内面　ナデ	粗砂含む	黒褐色		磨滅する
99－13	鉢	B・砂礫（下層）			磨消縄文	外内面ともナデ	粗砂含む	淡暗褐色		福田K２式の５段階 黒曜石片を含む
99－14	壷又は注口	B・砂礫					細砂含む	茶褐色		
99－15	鉢	B・砂礫	36.8		波状口縁　D字形の大きな刻目	外内面とも条痕後ナデ	粗砂含む	外面淡褐色 内面暗褐色		
100－1	鉢	B・砂礫			波状口縁?　刻目突帯	外面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		突帯文土器
100－2	鉢	B・－			突帯	外内面ともナデ	粗砂含む	淡褐色		突帯文土器 内面スス付着
100－3	鉢	B・砂礫（下々層）			刻目突帯	外面　ナデ　条痕 内面　条痕	粗砂含む	暗褐色		突帯文土器
100－4	鉢	B・砂礫（中層）			波状口縁	外内面ともナデ	粗砂含む	外面淡褐色 内面暗褐色	10	内面スス付着
100－5	鉢	B・砂礫（下層）			刻目突帯	外面　ナデ　条痕 内面　条痕	細砂含む	淡褐色		突帯文土器
100－6	鉢	B・砂礫（下々層）			内面に円形刺突文 外面突出	外内面ともナデ	粗砂含む	淡褐色		
100－7	鉢	B・砂礫（下々層）	9.3				細砂含む	淡褐色		突帯文土器
100－8	鉢	B・砂礫（中層）	25.0		口唇部に刻目 突帯に刻目	外内面ともナデ	粗砂含む	外面褐色 内面茶褐色	10	突帯文土器
100－9	鉢	B・砂礫（下層）	34.3			外内面ともヨコナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	20	突帯文土器
100－10	（底部）	B・砂礫（中層）	底径 6.4		突帯	ナデ	粗砂含む	暗褐色	完存	

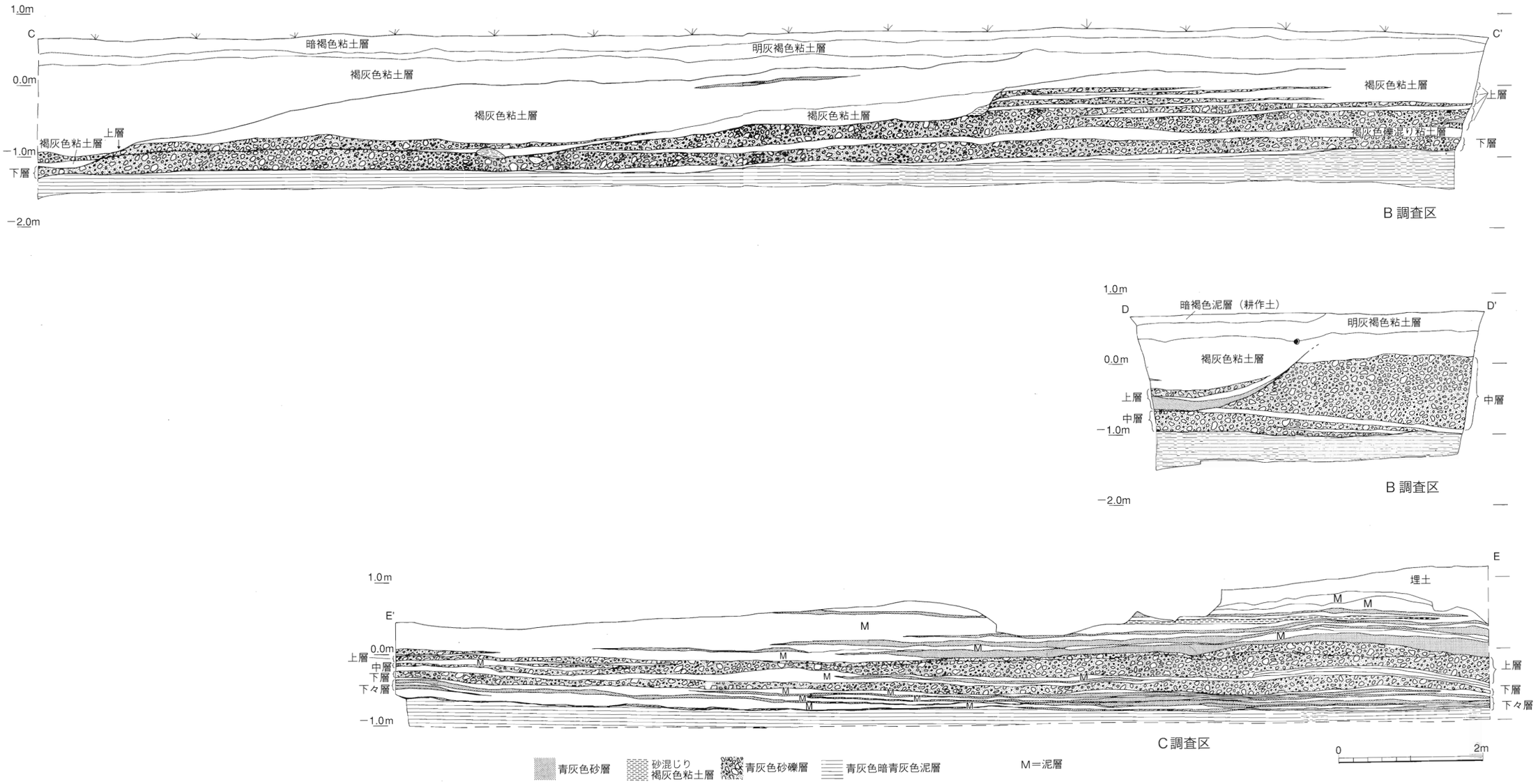
は貝殻の刻目を施し、下方にある段の上にヘラによる平行直線文と円形の刺突文を施す。４は口縁部外面には貝殻の刻目を施し、下方にヘラによる２条の平行直線文とその間に楕円形の刺突文を施す。５は無頸壷で、口縁部外面に刻目を、肩部にヘラによる９条の平行直線文を入れる。６は壷の肩部の破片。外面には、ヘラによる平行直線文が２段に巡り、その下方に三角形の刺突文が付く。７、８は中期中葉の壷で、頸部から口縁部にかけて大きくラッパ状に開く。７は口縁部外面に櫛による羽状文と円形浮文が付く。内面には櫛による斜格子文と重弧文を描く。８は口縁部外面に櫛による羽状文を描き、内面に指頭圧痕文帯が付く。９は壷肩部の破片。外面に２条の突帯文を貼り付け、下方に櫛による斜格子文を描く。10は、口縁部が朝顔状に開く広口壷で、口縁部内外面に２条の凹線文を入れ、内面には、さらに櫛による波状文を描く。11は甕。口縁部外面に３条の凹線文を入れ、頸部に指頭圧痕文帯が付く。肩部には２列の刺突文を巡らす。12、13は、口縁部外面に２条の凹線文を入れた甕。12は頸部に突帯が付く。14は底部で、上げ底となる。15は台付きの底部。16は前期の底部か。

第104図は砂礫層の中層の土器。１～５は弥生時代前期、６～12は中期、13、14は後期の土器である。１は壷の肩部の破片。貝殻による平行直線文と三角文および羽状文を施す。２は小形の甕。口縁部は僅かに外反し、その下方にヘラで３条の平行直線文を入れる。３、４は小形の甕で、口縁部は外反する。３は外面に貝殻で上下二段に３条の平行直線文を巡らし、その間に円形の刺突文を入れる。５は口縁部が外反する甕。口縁部外面には刻目を入れ、下方に７条の平行直線文を巡らす。６は広口壷で、頸部には櫛による直線文を入れる。７～10は鉢。７は屈折する口縁部をもつ鉢で、外面下方に刺突文を巡らす。８は逆Ｌ字状の口縁部をもち、外面下方に櫛による直線文と波状文を描く。９は直行する口縁部をもつ鉢で、外面下方に１条の突帯を巡らし、さらに櫛による刺突文を施す。10は、口縁部が前後に肥厚し、外面下方に刺突文をもつ。11は壷で、頸部から口縁部にかけて大きくラッパ条に開く。口縁部外面には×印の模様を描く。12は大形の鉢で、口縁部はやや内傾し、外面には指頭圧痕文帯が付く。13は高杯の口縁部の破片。口縁部は屈折して、直立気味に立ち上がる。端部には３条の凹線文が入る。14、15は甕。14の口縁部はくの字に屈曲し、端部に１条の凹線文が入る。15の口縁部は、端部が上下に拡張され、５条の凹線文が入る。16は底部の破片。焼成後に、内外面から穿孔している。17は前期の底部。18は中期の底部で、上げ底になる。

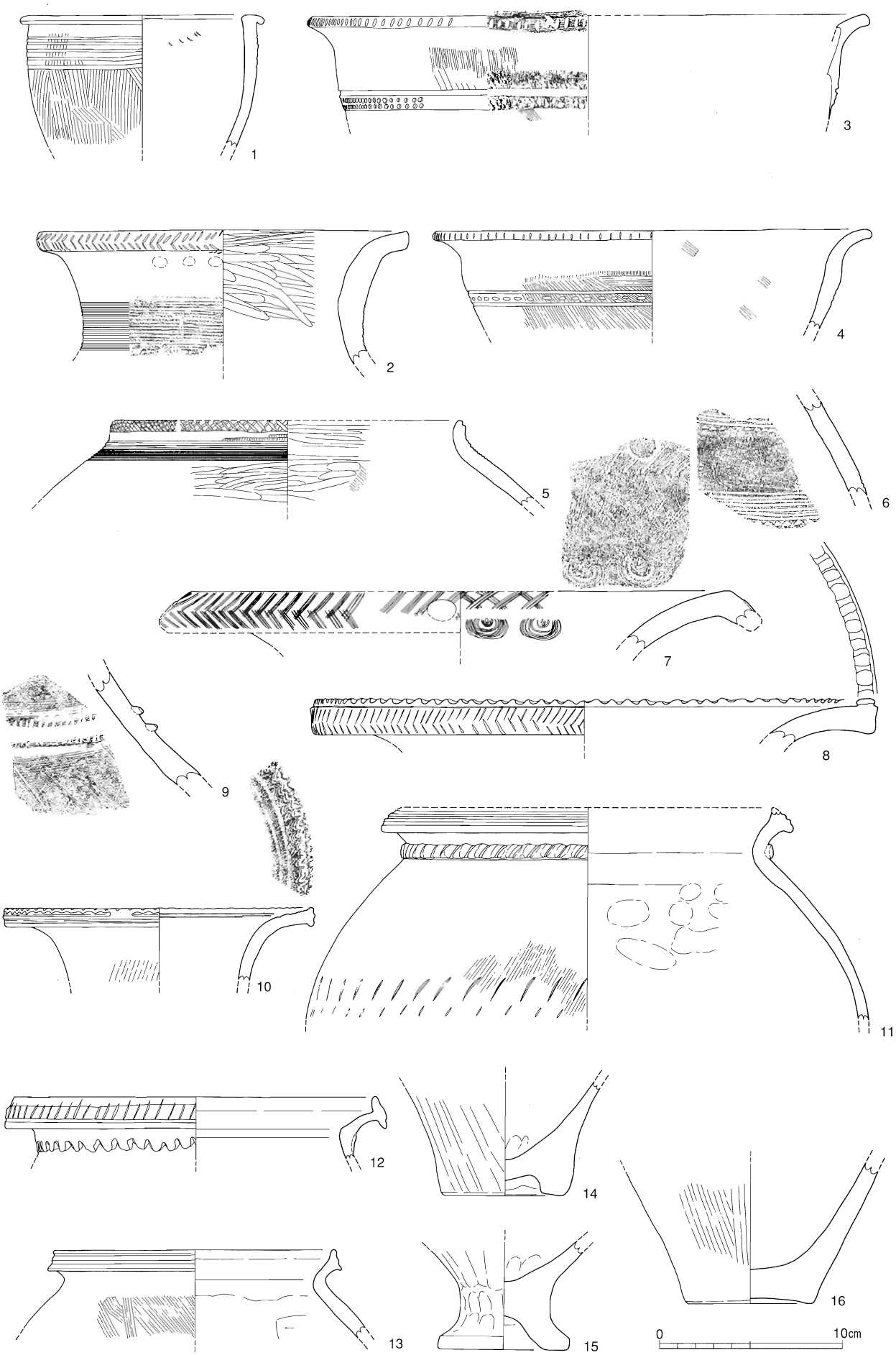
第105図は砂礫層の下層の弥生時代前期の土器。１～10は壷、11は甕、12～14は鉢である。１～７は広口壷で、大きく外反する口縁部をもつ。１は頸部にヘラによる４条の平行直線文を巡らす。胴部には貝殻による、３条の平行直線文とその下方に羽状文を描き、４条の縦線で区画をする。２は頸部にヘラによる４条の平行直線文を巡らし、その下方に円形の刺突文を施す。３は頸部に断面３角形の突帯を貼り付ける。５は突帯を貼り付け、さらにその上に竹管文を施す。６は頸部にヘラによる２条の平行直線文を巡らす。７は頸部にヘラによる９条の平行直線文を巡らす。８は小形の広口壷で、頸部に２個の対になる孔をもつ。９は無頸壷。10は無頸壷で、口縁部が拡張し、上面が平坦になる。11は甕で、頸部にヘラによる２条の平行直線文を巡らす。12は甕で、口縁部外面に刻目を入れ、下方にヘラによる４条の平行直線文を巡らす。さらに、４本の縦軸と三角文を部分的に施す。13は、体部が斜めに立ち上がる鉢で、器壁は厚い。14は大形の鉢。口縁部の下方に耳（瘤状突起）をもつ。



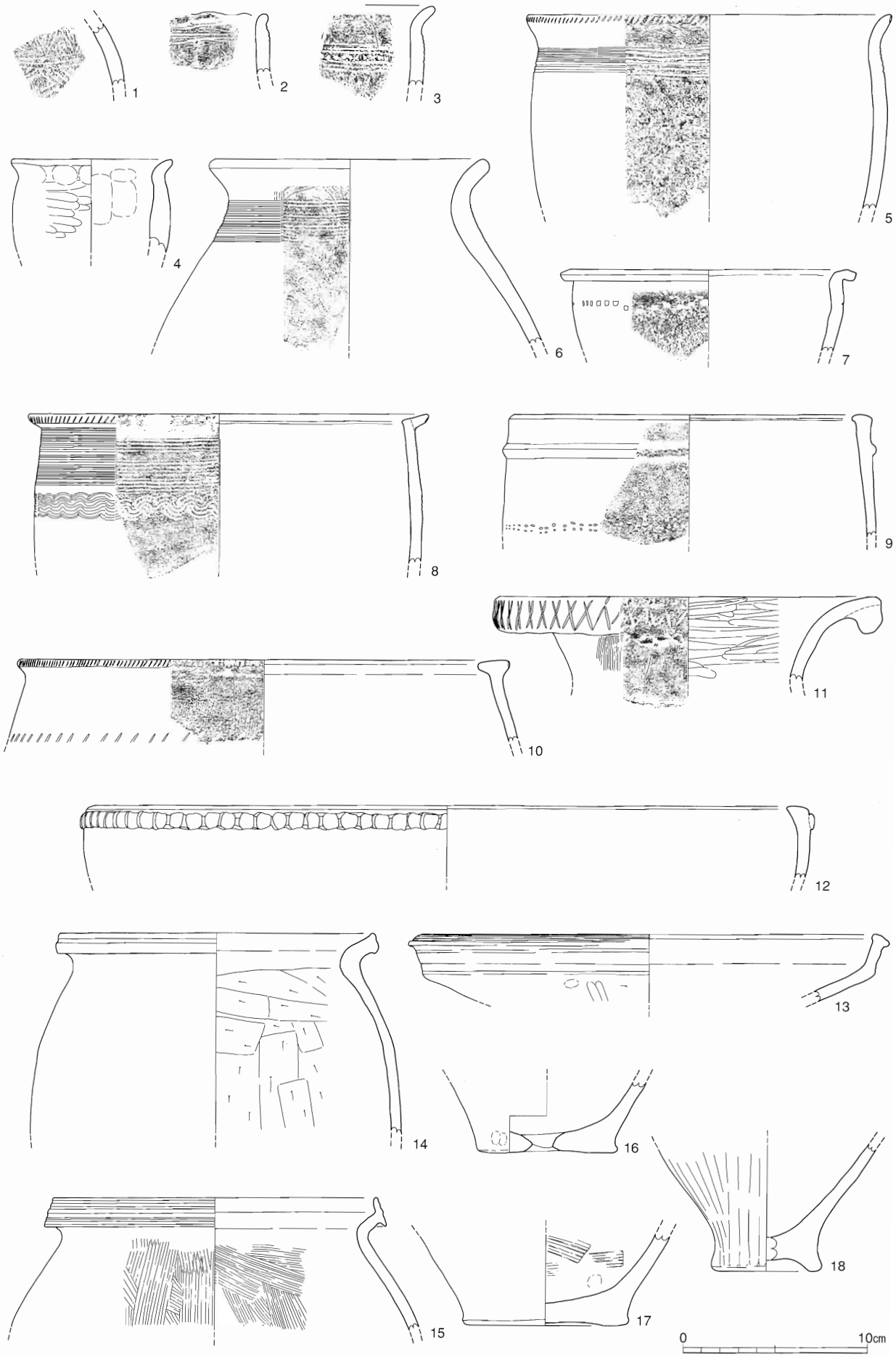
第101図　Ⅲ区（左岸）B調査区　杭列実測図



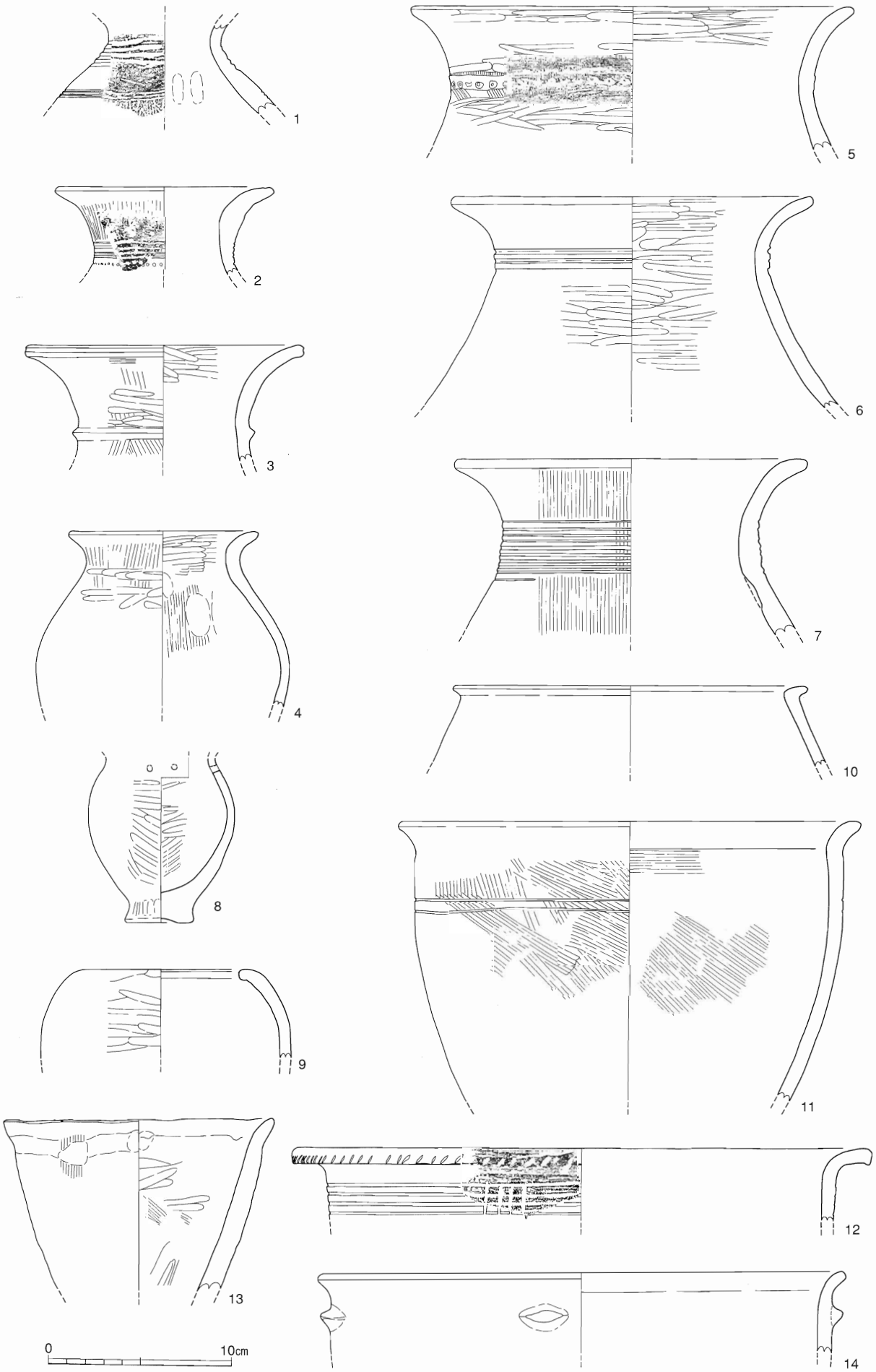
第102図　Ⅲ区（左岸）B調査区（西壁・北壁）・C調査区（東壁）土層堆積図　（CC'・DD'第 94 図、EE'は第 120 図参照）



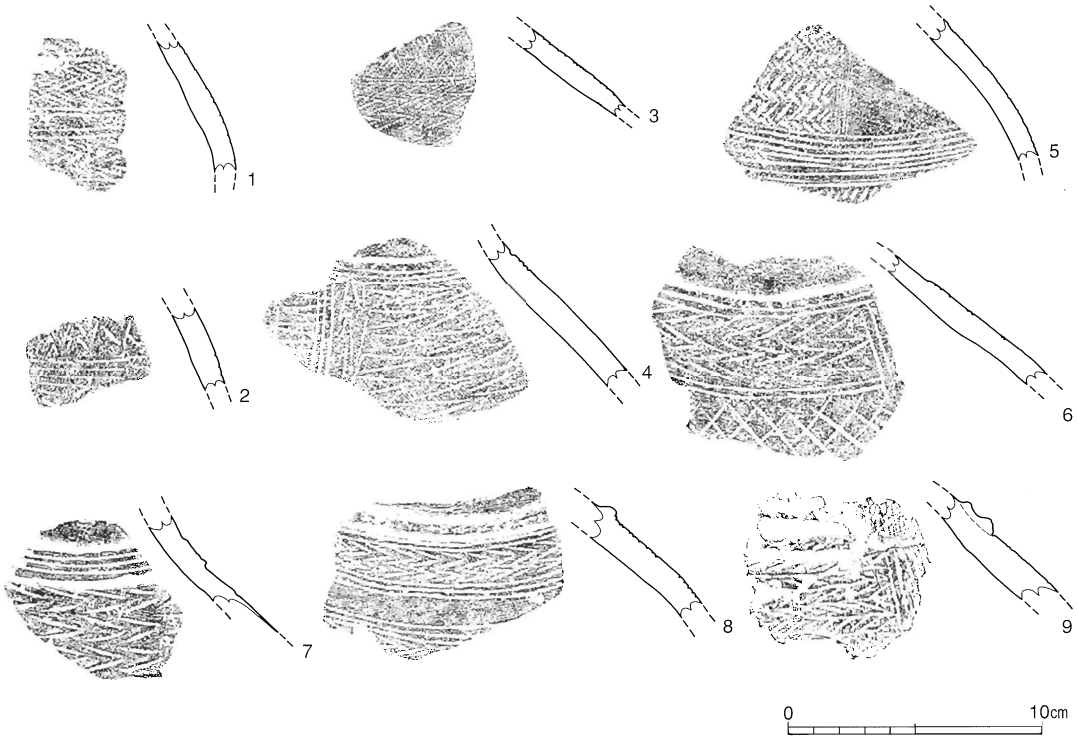
第103図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図



第104図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層（中層）出土土器実測図

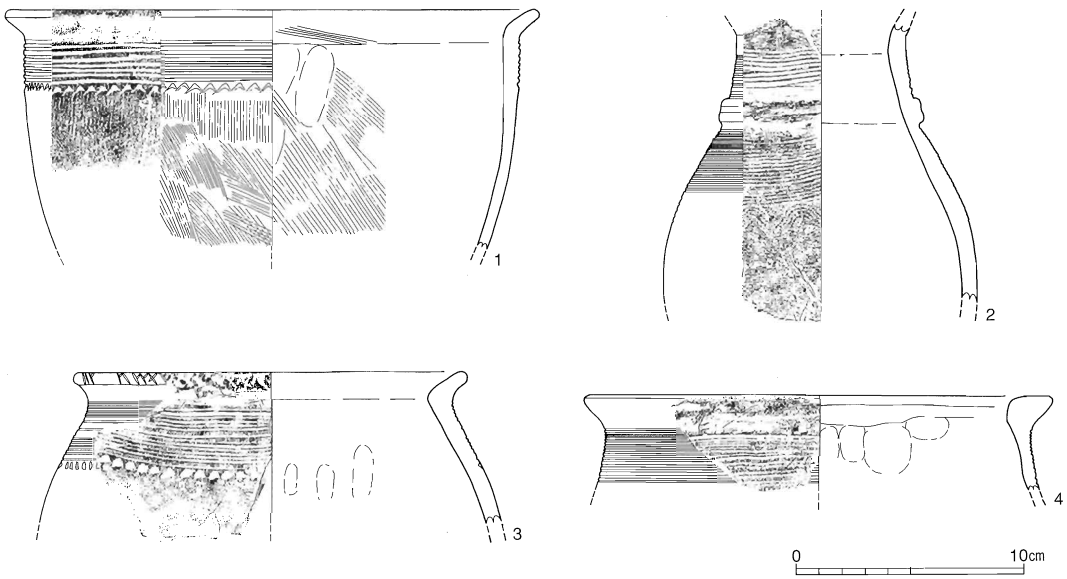


第105図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層（下層）出土土器実測図（1）

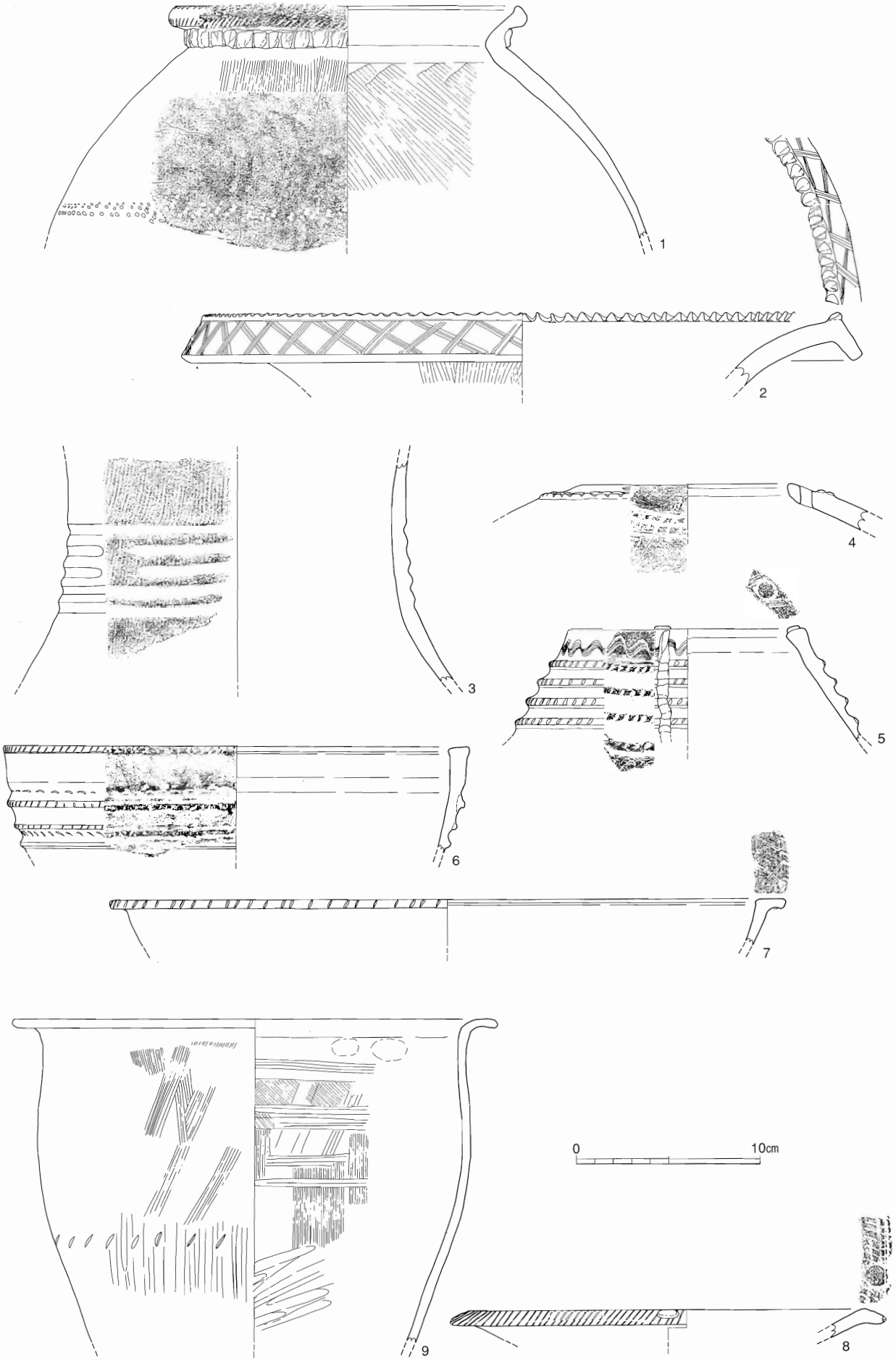


第106図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層（下層）出土土器実測図（2）

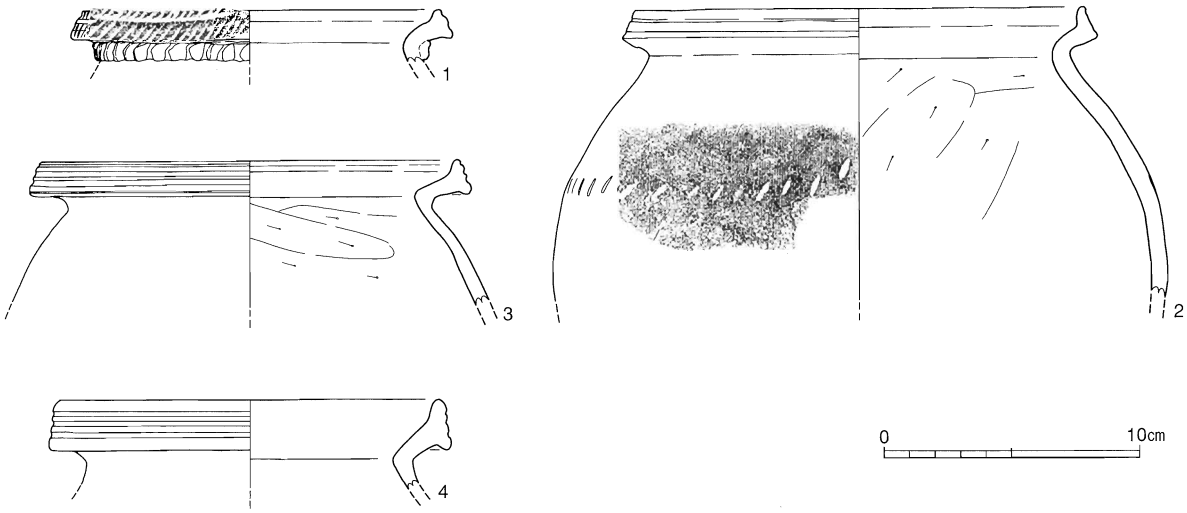
第106図は砂礫層の下層から出土した弥生時代前期の壷肩部の破片である。１は、貝殻による羽状文と４条の平行直線文を、２はヘラによる羽状文と５条の平行直線文を施す。３は貝殻による鋸歯文と２条の平行直線文と羽状文を描く。４はヘラによる３条の平行直線文を巡らし、下方に縦横に羽状文を描き、さらに３条の平行直線文を縦に引き、区画する。５は貝殻で羽状文を施し、ヘラにより３条の平行直線文を縦に引き、区画する。さらに下方に８条の平行直線文と刺突文を巡らしている。６は、ヘラで２条の平行直線文を上下２段に巡らし、その間に羽状文を施し、さらに下方に斜格子文を描く。７は削り出し突帯に３条の平行直線文を巡らし、下方に羽状文を入れる。８は貼付突帯に刻目を付け、下方に羽状文と３条の平行直線文を巡らす。９は２条の断面三角形の貼付突帯に刻目を入れ、その下方に貝殻による有軸羽状文を描き、５条以上の平行直線文を縦に引き、区画する。



第107図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層（下層）出土土器実測図（3）



第108図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層（下層）出土土器実測図（4）



第109図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層（下層）出土土器実測図（5）

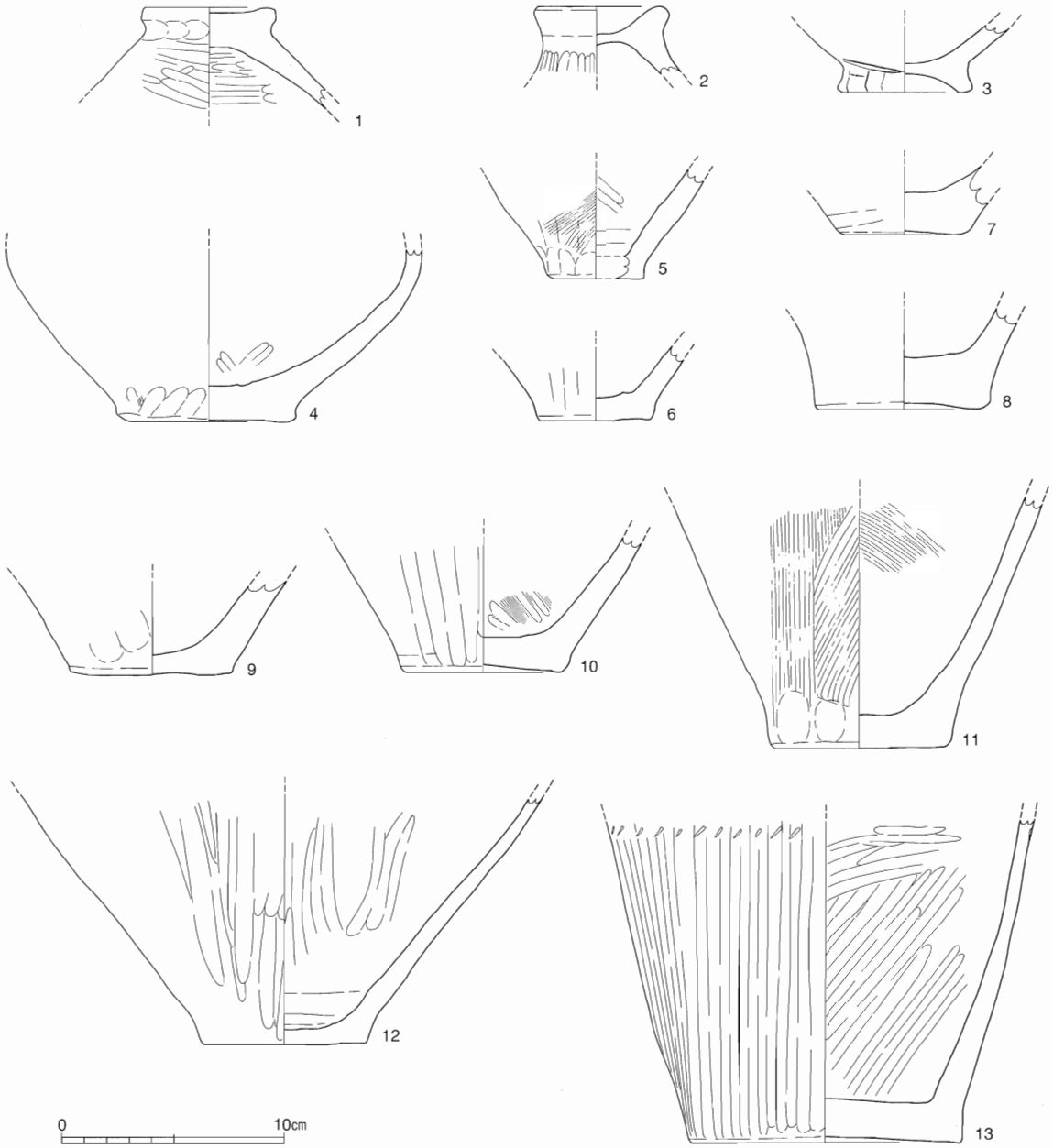
第107図は砂礫層の下層から出土した弥生時代前期末と中期前葉の土器である。１は前期の甕で、口縁部の下方にヘラによる平行直線文と三角形の刺突文を巡らしている。２は小形の壷である。頸部には突帯を貼付け、その上下に５条単位の櫛による直線文を巡らし、下方に波状文を描く。３は広口壷である。くの字に開く口縁部外面には×印の刻目を入れ、下方には７条単位の櫛による直線文を巡らし、さらに三角形の刺突文を入れる。４は無頸壷で、口縁部上端に平坦面をつくり、外面下方に櫛による直線文を巡らす。

第108図は砂礫層の下層から出土した弥生時代中期中葉の土器である。１は口縁部が大きく外傾し、外面端部には上下に刻目を入れる。頸部には指頭圧痕文帯が、胴部には櫛による刺突文が付く。２は、口縁部が大きく朝顔状に開く壷で、口縁部外面には櫛による斜格子文を描き、内面には指頭圧痕文帯が付く。３は壷の頸部で５条の凹線文が入る。４は無頸壷で、口縁部の下の２条の突帯には刻目が付く。突帯の上に孔がある。５は無頸壷で、口縁部の外面に円形浮文と櫛による直線文がある。口縁部の下方には櫛による波状文が描かれ、さらに刻目をもつ４条の突帯と棒状浮文が付く。６は鉢で、口縁部の端部は平坦で、下方には刻目をもつ２条の突帯が付く。７と８は高杯の杯部の破片。７は口縁部の端部は平坦で、刻目と櫛による斜格子文が入る。８の口縁部の端部は平坦で、３条の平行直線文と刻目および円形浮文が付く。９は甕で、口縁部は大きく外反する。胴部には刺突文が入る。

第109図は砂礫層の下層から出土した弥生時代後期の甕である。１の口縁部は大きく外傾し、外面には２条の凹線文と刻目が入る。頸部には指頭圧痕文帯が付く。２の口縁部は大きく外傾し、端部は真っすぐに立ち上がる。外面には２条の凹線文が入る。肩部には刺突文が入る。３は口縁部は大きく外傾し、外面には３条の凹線文が入る。４は複合口縁で、外面に３条の凹線文が入る。

第110図は砂礫層の下層から出土した弥生時代の蓋と底部の破片である。１は傘形の蓋の天井部である。２は丁寧に調整された蓋の天井部である。３、４は前期の壷の底部である。５～11は前期の底部、12、13は中期の底部と推定される。13は胴部に刺突文が入る。

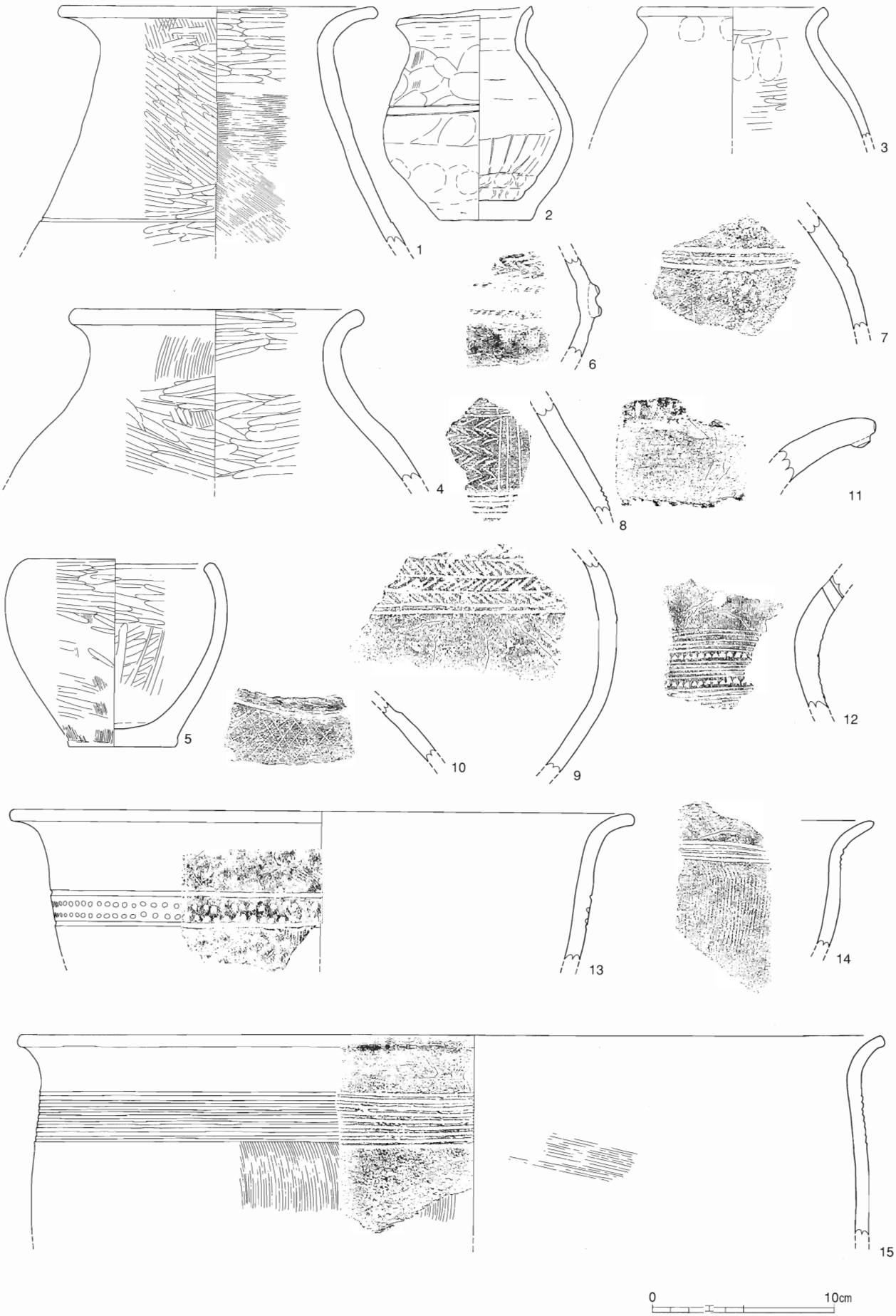
第111図は砂礫層の下々層から出土した弥生時代前期の土器である。１～４は広口壷である。１は、口縁部が大きく外反し、肩部に段が付く。２は小形品で、肩部と胴部の境にヘラによる２条の平行直線文が入る。３、４は、口縁部がくの字に外反する。５は無頸壷で、完形品である。６は壷



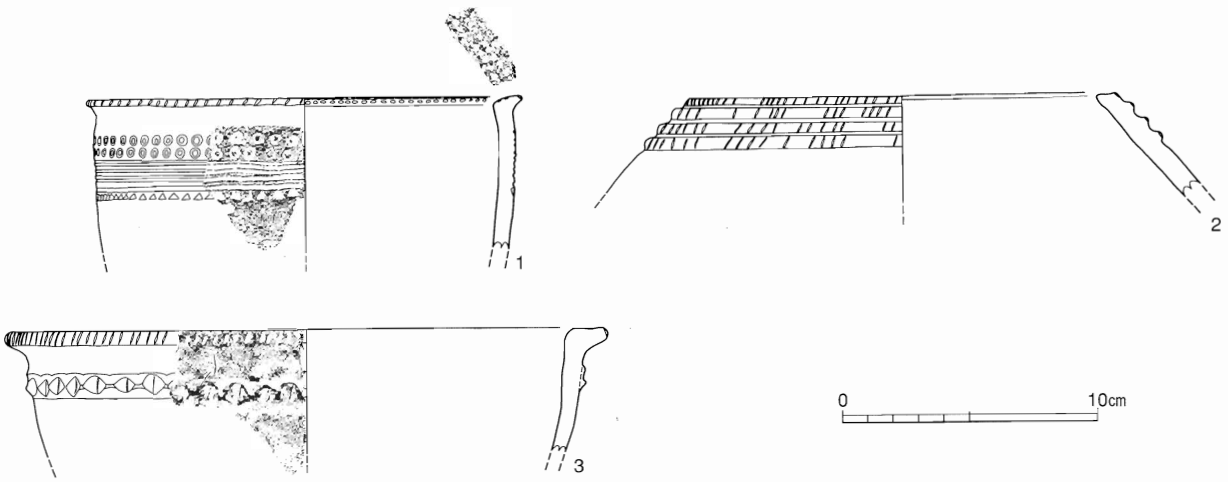
第110図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層（下層）出土土器実測図（6）

の胴部。２条の突帯が貼られ、上方にヘラによる羽状文が付く。７は肩部の破片で、ヘラによる３条の平行直線文を巡らせ、その下方に鋸歯文が認められる。８は肩部の破片で、ヘラによる上下２段に平行直線文を巡らせ、その間にヘラによる羽状文と区画する縦の平行直線文が付く。９は肩から胴部の破片で、ヘラによる平行直線文を上下に巡らせ、その間に貝殻による羽状文を描き、綾杉文状になる。10は壷の肩部で、ヘラによる斜格子文を描く。11は壷の口縁部で、大形品。口縁部の外面に突帯を貼付け、さらに刻目を施す。一見するとヘラによる沈線に見える。12は壷の頸部で、ヘラによる平行直線文と三角形の刺突文が２段に巡る。13～15は甕で、ヘラによる平行直線文や13のような円形の刺突文を描く。なお、頸部外面に耳をもつ壷の破片が１点出土している。耳は半月状であり、小さい孔を２個もつ。また、内部には貼付突帯が付く（図化していない）。

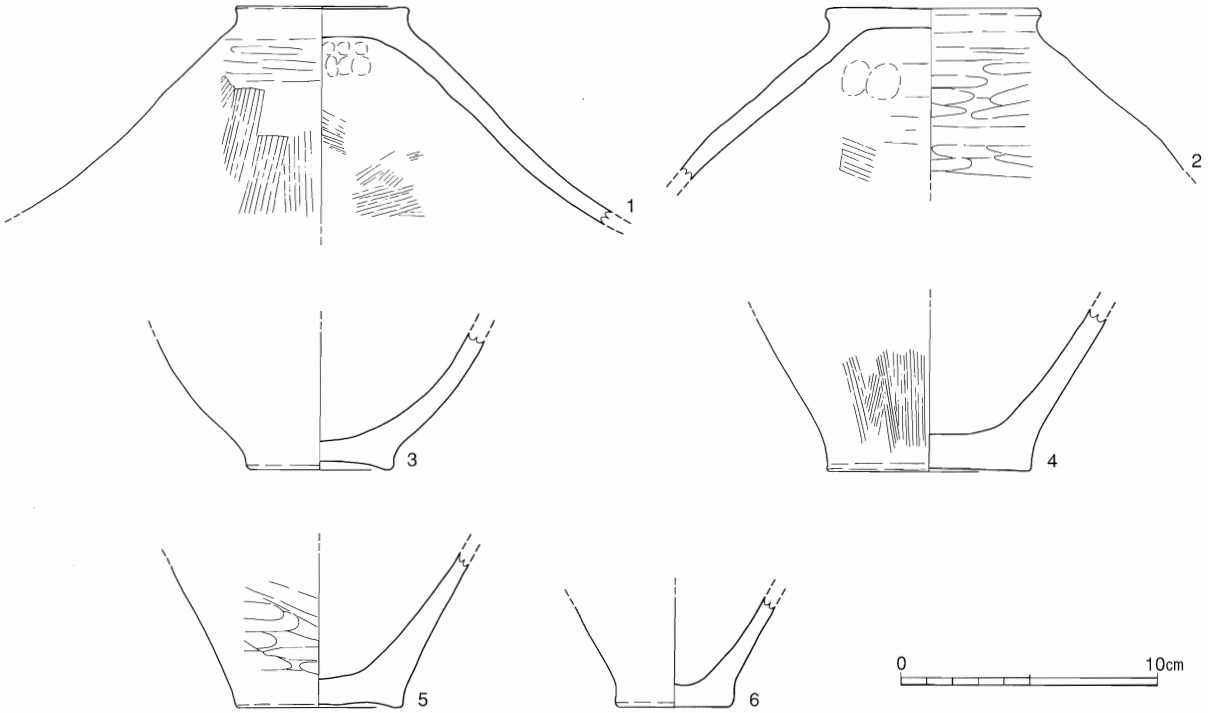
第112図は中期前、中葉の土器である。１は鉢。口縁部の端部が外に肥厚し、平坦面をつくり、２列の円形の刺突文を入れる。口縁部の下方には２列の円形の刺突文と櫛による直線文および三角刺突文を巡らす。２は無頸壷で、口縁部の端部は平坦になり、外面下方には３条の突帯が付き、刻目



第111図　Ⅲ区（左岸）B調査区砂礫層（下々層）出土土器実測図（1）



第112図　Ⅲ区（左岸）B調査区砂礫層（下々層）出土土器実測図（2）



第113図　Ⅲ区（左岸）B調査区砂礫層（下々層）出土土器実測図（3）

を施す。３は鉢で、口縁部の端部が外に肥厚し、平坦面をつくる。口縁部の下方には指頭圧痕文帯が付く。

第113図は弥生土器の蓋と底部の破片。前期と考えられる。１、２は傘形の蓋である。３は壷の底部。

ミニチュア土器には第114図４、６の鉢と13の蓋がある。４は体部にヘラによる鋸歯文とその下方に櫛による刺突文がある。６は体部から口縁部にかけて逆ハの字に開く。蓋は傘形を呈す。土錘は２個(115図３・４)、土玉は１個(115図５)、紡錘車は２個(第116図３、４）あり、弥生土器の再利用である。３は表面に櫛による波状文と直線文が描かれており、中期の土器 。４は小形品。

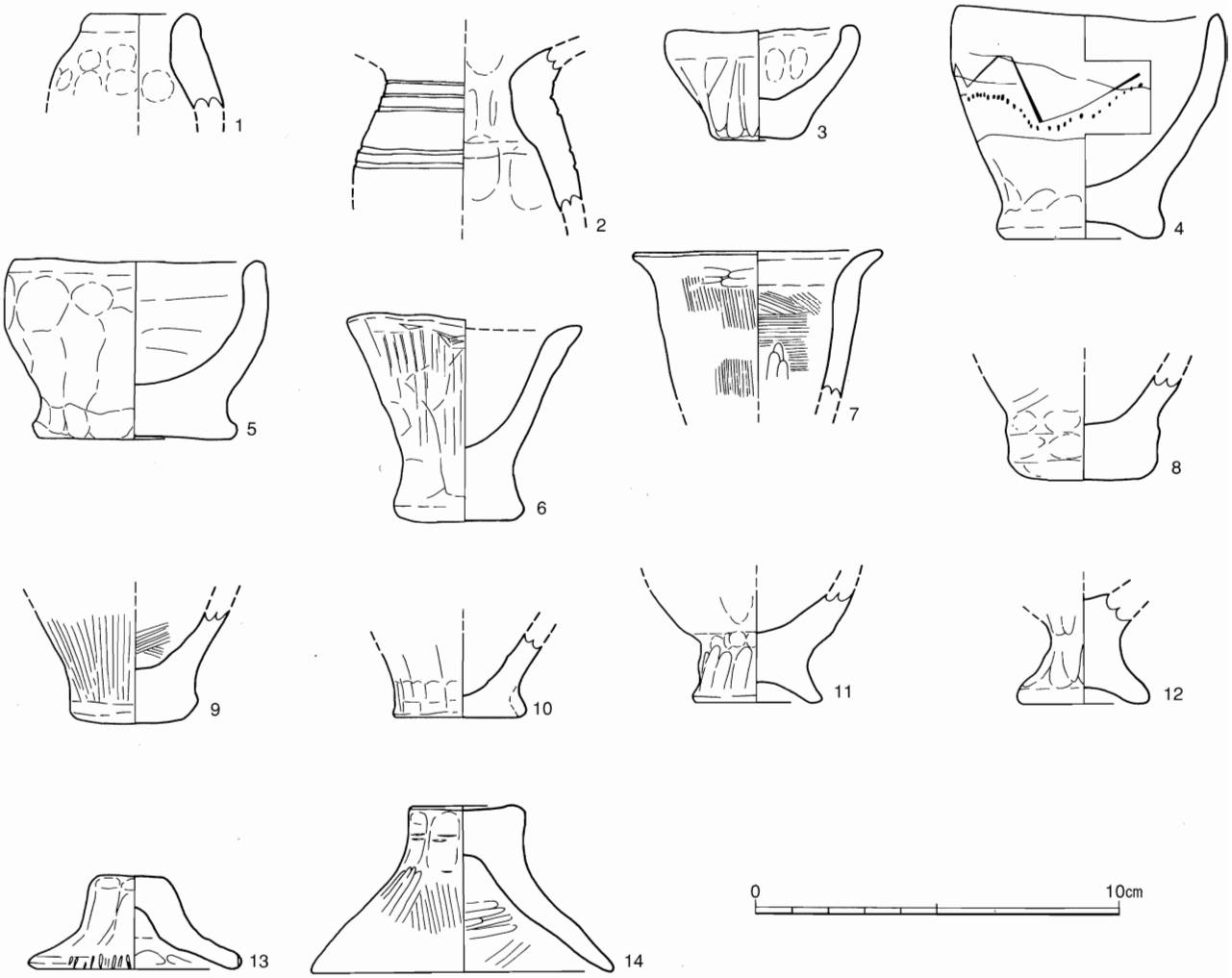
表 31　Ⅲ区（左岸）B調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
103－1	弥生　鉢	砂礫(上層)	11.4		ヘラ描平行直線文５条	外面　ナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ナデ	粗砂含む	褐色	20	小形品 内面爪痕
103－2	壷	砂礫(上層)	20.2		貝殻による羽状の刻目　頸部にヘラ描平行直線文	外面　ナデ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	30	
103－3	甕	砂礫	45.8		貝殻による刻目　ヘラ描沈線円形刺突文２列	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ	粗砂含む	灰褐色	10	
103－4	甕	砂礫(上層)	23.0		貝殻による刻目　ヘラ描平行直線文２条　刺突文１列	外面　ハケの後　ヨコナデ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	淡褐色	10	外面スス付着
103－5	壷	砂礫(上層)	34.2		無頸壷 ヘラ描格子刻目　ヘラ描平行直線文９条	外面　ハケの後ナデ　ヘラミガキ 内面　ハケの後ヘラミガキ	粗砂含む	外面淡褐色 内面橙褐色	10	
103－6	壷	砂礫(上層)			ヘラ描平行直線文７条　三角形刺突文１列	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	淡赤褐色		磨滅する
103－7	壷	砂礫(上層)	40.2		内面　櫛描斜格子文　重弧文 外面　櫛描羽状文　円形浮文	ヨコナデ	粗砂含む	外面淡褐色 内面暗褐色	10	黒班
103－8	壷	砂礫(上層)	32.0		櫛描羽状文 内面　指頭圧痕文帯	外内面ともヨコナデ	粗砂含む	淡褐色	10	
103－9	壷	砂礫(上層)			櫛描直線文・斜格子文２条 刻目突帯２条	外面　ナデ　ハケ 内面　ナデ　指頭圧痕	細砂含む	淡明褐色		
103－10	壷	砂礫(上層)	16.6		広口壷 凹線文 内面　櫛描波状文５条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ	微砂含む	黄褐色	15	
103－11	甕	砂礫(上層)	21.0		凹線文３条　指頭圧痕文帯 肩部に刺突文	外面　ナデ ハケの後ナデ ハケ 内面　ヨコナデ　ハケの後指頭圧痕	微砂含む	淡褐色	5	
103－12	甕	砂礫(上層)	19.8		刻目　凹線文２条　実帯	外面　ヨコナデ　ナデ 内面　ヨコナデ	微砂含む	淡褐色	10	
103－13	甕	砂礫(上層)	15.4		口縁部外面に凹線文２条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　指頭圧痕　ヘラケズリ　ヨコナデ	細砂含む	淡褐色	20	
103－14	(底部)	砂礫(上層)	底径 6.7		上げ底状となる	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黒褐色	完存	
103－15	(底部)	砂礫(上層)	底径 7.1		ハの字状の台が付く	外面　ヨコナデ　ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	灰褐色	50	外面スス付着
103－16	(底部)	砂礫(上層)	底径 6.8			外面　ハケ　ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	黄褐色	完存	内面スス付着
104－1	壷	砂礫(中層)			貝殻三角形文・沈線 ヘラ描平行直線文２条　貝殻羽状文	内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		小形品
104－2	甕	砂礫(中層)			ヘラ描平行直線文 口縁部波状となる	外面　指頭圧痕 内面　ヨコナデ　指頭圧痕	密	淡灰褐色		小形品
104－3	甕	砂礫(中層)			貝殻平行直線文　円形刺突文１列	外内面ともナデ	粗砂含む	淡褐色	10	小形品
104－4	甕	砂礫(中層)	8.7		口縁部はくの字に外反する	外面　ヨコナデ　ハケの後ヘラミガキ　指頭圧痕 内面　指頭圧痕　ヨコナデ	粗砂含む	灰褐色	20	小形品
104－5	甕	砂礫(中層)	19.4		刻目　ヘラ描平行直線文７条	外面　ハケの後ヨコナデ　ハケ 内面　ナデ？	粗砂含む	茶褐色	20	外面スス付着
104－6	壷	砂礫(中層)	14.6		広口壷 櫛描直線文６条単位×２以上	外面　ナデ　ヘラミガキ　ハケの後ナデ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	明褐色	15	磨滅する
104－7	鉢	砂礫(中層)	14.0		口縁部の下方に刺突文	外面　ナデ 内面　ヘラミガキ　ナデ	細砂含む	淡褐色	15	磨滅する
104－8	鉢	砂礫(中層)	22.4		刻目　櫛描直線文18条以上・波状文５条	外面　ナデ　ハケの後ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	淡褐色	10	磨滅する
104－9	鉢	砂礫(中層)	19.1		突帯　櫛描刺突文	外面　ヨコナデ 内面　ナデ	微砂含む	黄褐色	12	
104－10	鉢	砂礫(中層)	26.4		刻目　刺突文	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケの後ナデ	微砂含む	淡褐色	10	
104－11	壷	砂礫(中層)	20.6		口縁部外面に×形刻目	外面　ナデ　指頭圧痕　ハケ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	暗褐色	10	

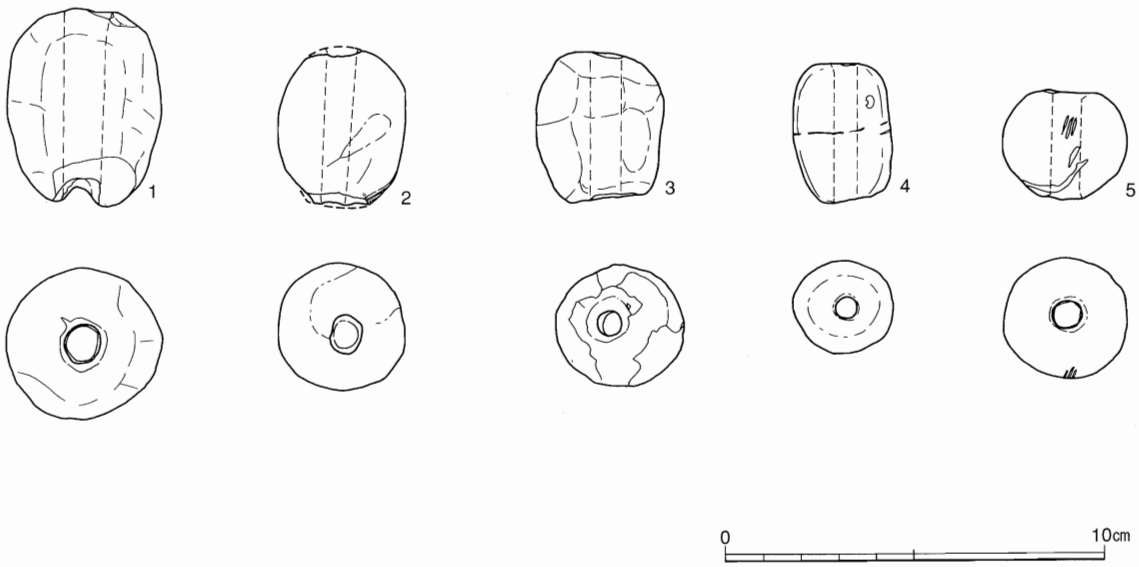
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
104 － 12	鉢	砂礫(中層)	38.4		外面に指頭圧痕文帯	外面　ナデ　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ハケの後ナデ	細砂含む	黄褐色	10	大形品 磨滅する
104 － 13	高杯(杯部)	砂礫(中層)	24.6		口縁部上面に凹線文３条	外面　ナデ　　ヘラミガキ 内面　ヨコナデ　　ナデ	細砂含む	淡褐色	10	外面一部黒班
104 － 14	甕	砂礫(中層)	17.0		口縁部外面に凹線文１条	外面　ナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	粗砂含む	黄褐色	20	外面スス付着
104 － 15	甕	砂礫(中層)	17.4		口縁部外面に凹線文５条	外面　ナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケ	微砂含む	淡褐色	15	外面スス付着
104 － 16	(底部)	砂礫(中層)	底径 7.5		焼成後底部穿孔	外面　ナデ　底部外面ケズリ 内面　ナデ　ハケ	粗砂含む	淡褐色	完存	内面スス付着
104 － 17	(底部)	砂礫(中層)	底径 8.8			外面　ナデ ？ 内面　ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	淡灰褐色	60	
104 － 18	(底部)	砂礫(中層)	底径 6.2		上げ底	ヘラミガキ　指頭圧痕　ナデ	細砂含む	灰褐色	50	内面スス付着
105 － 1	壷	砂礫(下層)			広口壷 ヘラ描平行直線文４条　貝殻平行直線文・縦・羽状文	外面　ハケの後ナデ　ヘラミガキ 内面　指頭圧痕　ナデ	粗砂含む	淡白褐色		
105 － 2	壷	砂礫(下層)	11.6		広口壷 ヘラ描平行直線文４条　小円形刺突文１列	外面　ハケ 内面　ナデ	粗砂含む	黄褐色 一部赤褐色	25	
105 － 3	壷	砂礫(下層)	14.8		広口壷 凹線文１条　突帯	外面　ハケの後ナデ　ヘラミガキ 内面　ヨコナデの後ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	25	
105 － 4	壷	砂礫(下層)	9.9		広口壷 口縁部は外反する	外面　ハケ　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕　ハケ	細砂含む	淡褐色	30	胴部外内面黒色
105 － 5	壷	砂礫(下層)	23.6		広口壷 頸部外面貼付突帯上に竹管文	外面　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色	10	
105 － 6	壷	砂礫(下層)	19.4		広口壷 ヘラ描平行直線文２条	外面　ナデ　ヨコナデ　ナデの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	20	外内面スス付着
105 － 7	壷	砂礫(下層)	18.7		広口壷 ヘラ描平行直線文９～10条	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ヨコナデ	粗砂含む	褐色	20	
105 － 8	壷	砂礫(下層)	5.8 底径 3.5		小形広口壷 ２方に３mm大の孔	外面　ハケの後ヘラミガキ　ヨコナデ 内面　ナデの後ミガキ	粗砂含む	茶褐色	70	
105 － 9	壷	砂礫(下層)	8.8		無頸壷 口縁部は内弯する	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	外面淡白褐色 内面淡褐色	10	
105 － 10	壷	砂礫(下層)	19.0		無頸壷 口縁部は外へ折れ　上面は平坦となる	ヨコナデ　ヘラミガキ	粗砂含む	褐色	10	磨滅する
105 － 11	甕	砂礫(下層)	24.6		ヘラ描平行直線文２条	外内面ともヨコナデ　ハケ	粗砂含む	黄褐色	25	外内面スス付着
105 － 12	甕	砂礫(下層)	31.1		刻目　ヘラ描平行直線文・縦・三角文	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ナデ	粗砂含む	淡褐色	8	
105 － 13	鉢	砂礫(下層)	14.8		体部は外に斜めに開く	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラミガキ	粗砂含む	灰褐色 一部黒色	25	
105 － 14	鉢	砂礫(下層)	28.4		耳	外内面ともナデ	粗砂含む	淡褐色	10	大形品
106 － 1	壷	砂礫(下層)			貝殻平行直線文・羽状文	内面　ナデ	細砂含む	淡褐色		
106 － 2	壷	砂礫(下層)			ヘラ描羽状文・平行直線文５条		細砂含む	外面暗褐色		磨滅する
106 － 3	壷	砂礫(下層)			貝殻平行直線文・鋸歯文・羽状文	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		
106 － 4	壷	砂礫(下層)			ヘラ描平行直線文３条・羽状文・平行直線文(縦)	内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡黄褐色		
106 － 5	壷	砂礫(下層)			ヘラ描平行直線文(縦)・羽状文・平行直線文８条　刺突文	内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	淡褐色		
106 － 6	壷	砂礫(下層)			ヘラ描平行直線文・羽状文・斜格子文・平行直線文(縦)	内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		
106 － 7	壺	砂礫(下層)			削出し突帯上に貝殻平行直線文３条　貝殻羽状文	外面　ハケの後ミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
106－8	壷	砂礫(下層)			貼付突帯上に刻目　貝殻平行直線文・羽状文	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		
106－9	壷	砂礫(下層)			２条貼付突帯上に刻目　貝殻有軸羽状文・平行直線文(縦)	内面　ハケ	粗砂含む	淡白褐色		
107－1	甕	砂礫(下層)	23.0		ヘラ描平行直線文７条　三角形刺突文	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ハケの後ナデ　ハケ	細砂含む	茶褐色	15	外内面スス付着
107－2	壷	砂礫(下層)			貼付突帯　櫛描直線文・波状文	外面　ヨコナデ　ナデ 内面　ヘラミガキ　ナデ	粗砂含む	褐色		小形品
107－3	壷	砂礫(下層)	16.9		広口壷 ×形刻目　櫛描直線文　三角形刺突文１列	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕	粗砂含む	褐色	22	
107－4	壷	砂礫(下層)	20.1		無頸壷 櫛描直線文14条	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕	粗砂含む	淡褐色	15	外面一部スス付着 磨滅する
108－1	壷	砂礫(下層)	18.4		刻目　指頭圧痕文帯 櫛による刺突文	外面　ナデ　ハケ 内面　ナデ　ハケの後ナデ	細砂含む	淡褐色	20	
108－2	壷	砂礫(下層)	35.0		指頭圧痕文帯　櫛描斜格子文	外面　ヨコナデ　ハケの後ヨコナデ 内面　ナデ	細砂含む	灰褐色	15	
108－3	壷	砂礫(下層)			頸部外面に凹線文５条	外面　ハケ 内面　ハケの後ナデ 指頭圧痕	細砂含む	淡黄褐色		
108－4	壷	砂礫(下層)	11.2		無頸壷 刻目突帯上にヘラ描沈線１条 穿孔	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		外面スス付着 磨滅する
108－5	壷	砂礫(下層)	12.8		無頸壷 円形浮文　櫛描直線文・波状文 刻目突帯４条　棒状浮文２本	外面　ヨコナデ 内面　ナデ	密	褐色	15	
108－6	鉢	砂礫(下層)	25.2		刻目　爪形文１列×２　刻目突帯２条	外内面ともナデ	細砂含む	淡褐色	10	
108－7	高杯(杯部)	砂礫(下層)	36.6(推定)		刻目　櫛描斜格子文	ヨコナデ	微砂含む	外面灰褐色 内面淡黄褐色	5	
108－8	高杯(杯部)	砂礫(下層)	21.2		ヘラ描平行直線文３条　刻目円形浮文	外内面ともナデ	細砂含む	淡褐色	10	
108－9	甕	砂礫(下層)	26.1		胴部に刺突文	外面　ヨコナデ　ハケ ヘラミガキ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕	細砂含む	褐色	15	外面スス付着
109－1	甕	砂礫(下層)	15.1		凹線文上に刻目　指頭圧痕文帯	外面　ナデ 内面　ヨコナデ　ナデ	細砂含む	淡白褐色	10	
109－2	甕	砂礫(下層)	17.5		凹線文２条　肩部に刺突文	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	粗砂含む	褐色	20	外面スス付着
109－3	甕	砂礫(下層)	16.4		凹線文３条	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	粗砂含む	淡褐色	20	外内面スス付着
109－4	甕	砂礫(下層)	14.8		凹線文３条	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ヘラケズリ	微砂含む	淡褐色	10	外内面スス付着
110－1	蓋	砂礫(下層)	天井径5.6		傘形	外面　指頭圧痕　ヘラミガキ ナデ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡灰褐色	完存	外面天井部に黒班 接合面で離れている
110－2	蓋	砂礫(下層)	天井径6.0			外面　ヨコナデ　ヘラミガキ 内面　ナデ	細砂含む	褐色	完存	内面スス付着
110－3	壷(底部)	砂礫(下層)	底径5.9			外面　ナデ　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	暗褐色	完存	
110－4	壷(底部)	砂礫(下層)	底径7.7			外面　ヘラミガキ　指頭圧痕 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	茶褐色	完存	外面スス付着
110－5	(底部)	砂礫(下層)	底径4.3			外面　ハケ　ナデ 内面　ナデ　ハケの後ヘラミガキ	粗砂含む	暗褐色	20	磨滅する
110－6	(底部)	砂礫(下層)	底径5.0			外面　ハケの後ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	暗灰色	完存	外面に黒班
110－7	(底部)	砂礫(下層)	底径4.9			外内面ともナデ	粗砂含む	暗褐色 一部黒褐色	完存	
110－8	(底部)	砂礫(下層)	底径6.8			外面　ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	細砂含む	褐色 一部黒褐色	完存	
110－9	(底部)	砂礫(下層)	底径7.2			外面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	淡赤褐色	50	外面スス付着

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
110 － 10	(底部)	砂礫 (下層)	底径 6.9			外面　ヘラミガキ　ヨコナデ 内面　ヨコナデの後ヘラナデ ハケの後ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色 一部黒褐色	完存	外面に黒斑
110 － 11	(底部)	砂礫 (下層)	底径 7.6			外面　ハケ　指頭圧痕 内面　ハケ　ヨコナデ	粗砂含む	外面灰白色 内面淡褐色	完存	内面スス付着
110 － 12	(底部)	砂礫 (下層)	底径 7.4			外面　ヘラミガキ 内面　ヨコナデの後ヘラミガキ　ヨコナデ	細砂含む	外面黒灰色 内面黄灰色	45	
110 － 13	(底部)	砂礫 (下層)	底径 12.5		胴部に刺突文	外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕	粗砂含む	茶褐色	完存	外面に黒斑 内面硫黄付着
111 － 1	壷	砂礫 (下々層)	17.2		広口壷 肩部に段	外面　ヨコナデ　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ハケの後ナデ	細砂含む	灰褐色	30	
111 － 2	壷	砂礫 (下々層)	7.4 底径 5.2	11.8	小形広口壷 ヘラ描平行直線文２条	外内面ともヨコナデ　ヘラミガキ　ハケの後ナデ　ヘラケズリ　指頭圧痕	細砂含む	灰褐色	完形品	一部に黒斑
111 － 3	壷	砂礫 (下々層)	9.9		広口壷 口縁部は外反する	外面　ハケ　ヨコナデ　ヘラミガキ 指頭圧痕 内面　ヘラミガキ　ヨコナデ　指頭圧痕	細砂含む	茶褐色	35	
111 － 4	壷	砂礫 (下々層)	15.6		広口壷 口縁部は大きく外反する	外面　ナデ　ハケの後ナデヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	20	
111 － 5	壷	砂礫 (下々層)	10.3	10.5	無頸壷 口縁部は内弯する	外面　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	黄褐色	完存	外内面黒色塗彩
111 － 6	壷	砂礫 (下々層)			ヘラ描羽状文　貼付突帯上に刻目	外面　ナデ　指頭圧痕 内面　ナデ	粗砂含む	外面淡褐色 内面黒色		黒斑
111 － 7	壷	砂礫 (下々層)			ヘラ描平行直線文３条・鋸歯文	外内面ともヨコナデ	粗砂含む	淡褐色		
111 － 8	壷	砂礫 (下々層)			ヘラ描平行直線文・(縦)・羽状文	ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		
111 － 9	壷	砂礫 (下々層)			ヘラ描平行直線文　貝殻羽状文	外面　ヘラミガキ 内面　ヨコナデ　ハケ	粗砂含む	淡褐色		
111 － 10	壷	砂礫 (下々層)			肩部にヘラ描斜格子文	外面　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色		
111 － 11	壷	砂礫 (下々層)			口唇部に刻目突帯	外面　ナデ　ヘラミガキ 内面　ミガキ？	粗砂含む	明褐色		大形品 内面磨滅する
111 － 12	壷	砂礫 (下々層)			ヘラ描平行直線文　三角形刺突文	外面　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		
111 － 13	甕	砂礫 (下々層)	33.4		ヘラ描平行直線文２条　円形刺突文２列	外面　ナデ　ハケの後ナデ ハケ 内面　ナデ　ハケの後ナデ	粗砂含む	明白褐色	10	外面スス付着
111 － 14	甕	砂礫 (下々層)			ヘラ描平行直線文４条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ハケ　ヨコナデ	粗砂含む	褐色		
111 － 15	甕	砂礫 (下々層)	49.4		ヘラ描平行直線文８条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ ハケの後ナデ	粗砂含む	褐色	10	
112 － 1	鉢	砂礫 (下々層)	17.0		外面　口唇部に刻目 円形刺突文 櫛描直線文　三角形刺突文 内面　円形刺突文	外内面ともナデ	粗砂含む	茶褐色		磨滅する
112 － 2	壷	砂礫 (下々層)	16.7		無頸壷 口唇部に刻目　刻目突帯３条	外面　ヨコナデ 内面　ナデ	微砂含む	淡褐色		
112 － 3	鉢	砂礫 (下々層)	23.4		刻目　指頭圧痕文帯	外面　ヨコナデ　ナデ 内面　ナデ	微砂含む	黄褐色		
113 － 1	蓋	砂礫 (下々層)	天井径 6.6		傘形	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ ハケ 内面　ハケ　ナデ	粗砂含む	灰褐色	完存	外内面スス付着
113 － 2	蓋	砂礫 (下々層)	天井径 8.2		傘形	外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ 指頭圧痕	粗砂含む	灰褐色	完存	外面に黒斑
113 － 3	壷(底部)	砂礫 (下々層)	底径 5.4			外面　ヘラミガキ？　ナデ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色		
113 － 4	(底部)	砂礫 (下々層)	底径 8.0			外面　ハケ 内面　ナデ	粗砂含む	茶褐色	完存	
113 － 5	(底部)	砂礫 (下々層)	底径 6.6			外面　ヘラミガキ　ヨコナデ 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	外面灰褐色 内面黒色	完存	内面スス付着
113 － 6	(底部)	砂礫 (下々層)	底径 4.2			外内面ともナデ	粗砂含む	黄褐色		外面に黒斑 外内面スス付着



第114図　Ⅲ区（左岸）砂礫層出土ミニチュア土器実測図



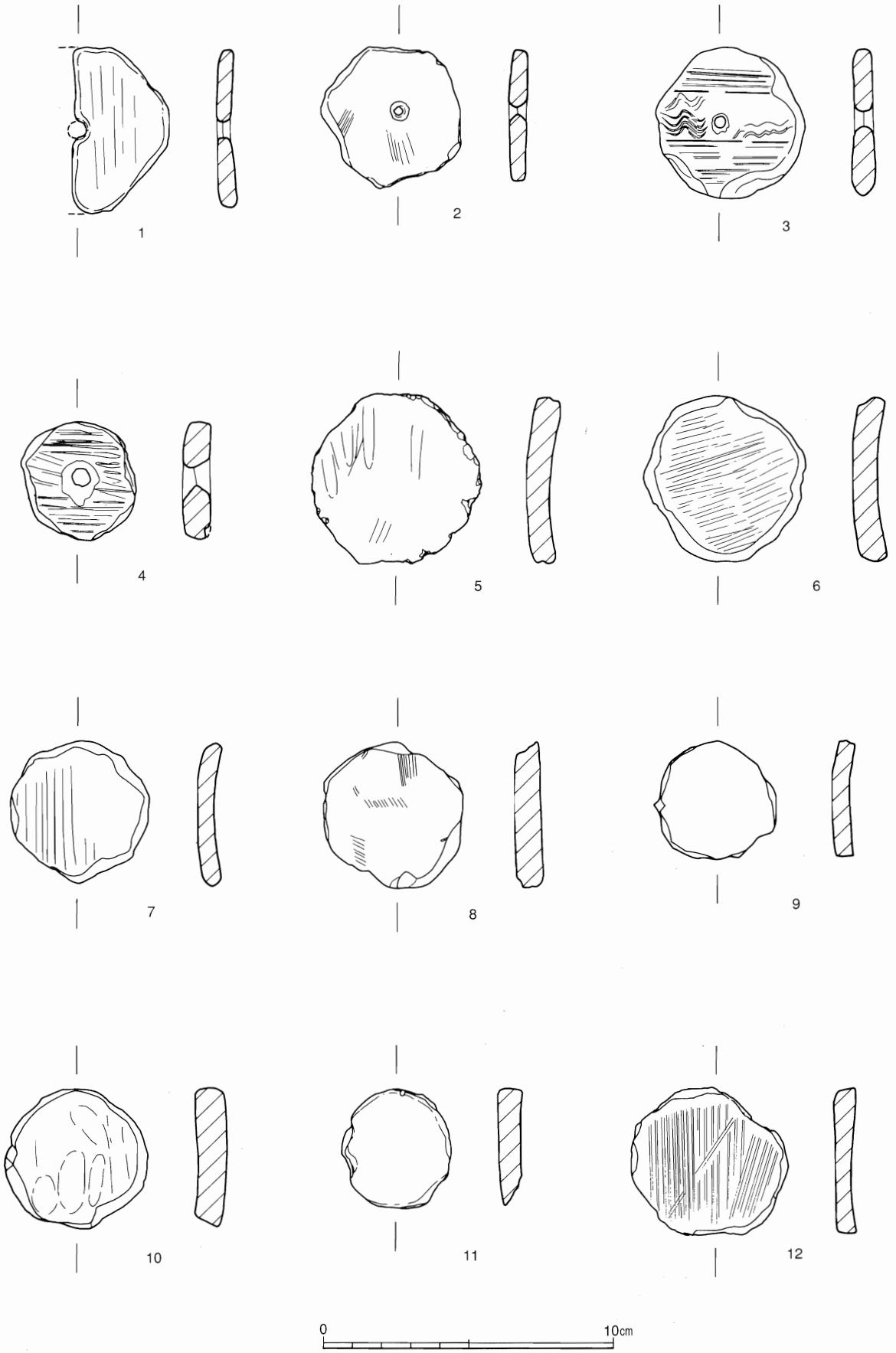
第115図　Ⅲ区（左岸）砂礫層出土土錘・土玉実測図

表 32　Ⅲ区（左岸）砂礫層出土ミニチュア土器観察表

挿図番号	器　種	調査区・層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
114－1	ミニチュア土器　壷	C・砂礫（上層）	2.8		広口壷	外内面ともナデ　指頭圧痕	細砂含む	褐色	20	手捏ね土器
114－2	ミニチュア土器　壷	C・砂礫（上層）			広口壷　ヘラ描平行直線文頸部３条・肩部２条	外面　ヨコナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	淡褐色		
114－3	ミニチュア土器　鉢（底部）	C・砂礫（上層）	5.1 底径 2.5	3.0		外面　ナデ　指頭圧痕 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色	90	手捏ね土器
114－4	ミニチュア土器　鉢	B・砂礫（下層）	7.2 底径 4.5	6.1	胴部にヘラによる鋸歯文　櫛による刺突文ヘラ描平行直線文２条	外面　ナデ 内面　ヘラによるナデ	細砂含む	茶褐色	60	
114－5	ミニチュア土器　鉢	C・砂礫（下々）	6.8 底径 5.2	4.9		外内面ともナデ　指頭圧痕	細砂含む	黄褐色	20	手捏ね土器
114－6	ミニチュア土器　鉢	B・砂礫（下層）	6.4 底径 3.6	5.6		外面　ヘラで成形の後ハケ　指頭圧痕 内面　ナデ	細砂含む	赤褐色	完形品	手捏ね土器
114－7	ミニチュア土器　鉢	C・砂礫（上層）	6.8			外面　ハケ 内面　ナデ　ハケ	粗砂含む	外面淡褐色 内面黄褐色	20	外面磨滅する
114－8	ミニチュア土器（底部）	C・砂礫（上層）	底径 4.1			外内面ともハケ	細砂含む	灰褐色	40	手捏ね土器
114－9	ミニチュア土器（底部）	C・砂礫（上層）	底径 3.5			外面　ハケ　ナデ 内面　ナデ　ハケ　ナデ	粗砂含む	黄褐色	40	
114－10	ミニチュア土器（底部）	C・砂礫（上層）	底径 3.6		底部に粘土紐を巻き厚くする	外内面ともナデ	粗砂含む	淡褐色	完存	外面黒班に籾痕
114－11	ミニチュア土器（底部）	C・砂礫（上層）	底径 3.5		脚付	外内面ともナデ	粗砂含む	黄褐色	20	手捏ね土器
114－12	ミニチュア土器（底部）	C・砂礫（上層）	底径 3.4		脚付	外面　ヘラミガキ　ナデ 内面　ナデ	細砂含む	黄褐色	完存	
114－13	ミニチュア土器　蓋	B・砂礫（下層）	5.8 天井径 1.8	2.6	傘形　口縁端部に刻目	外面　ヘラによるナデ 内面　ナデ　指頭圧痕？	密	灰褐色	80	外面に黒班
114－14	ミニチュア土器　蓋	C・砂礫（下々層）	8.3 天井径 3.2	4.6	傘形	外面　ハケの後ヘラミガキ　ヘラケズリ 内面　ハケの後ヘラミガキ	粗砂含む	褐色	80	

表 33　Ⅲ区（左岸）砂礫層出土土錘・土玉観察表

挿図番号	器　種	調査区・層位	長さ(cm)	最大径(cm)	孔の径(cm)	重さ(g)	調　整	胎　土	色　調	備　考
115－1	土錘	C・砂礫（上層）	5.2	4.1	0.9	72.9	ナデ	細砂含む	褐色	一部黒班
115－2	土錘	C・砂礫（下々層）	(4.1)	3.3	0.8	42.6	ナデ	粗砂含む	淡褐色一部黒色	両端欠損　一部黒班
115－3	土錘	B・砂礫（上層）	4.0	3.4	0.7	45.4		粗砂含む	黒褐色	
115－4	土錘	B・砂礫（下々層）	3.7	2.7	0.6	24.6	穿孔？	細砂含む	灰褐色	完形品　紐の痕？
115－5	土玉	B・砂礫（下層）	2.9	3.2	0.7	24.7		微砂含む	淡褐色一部黒灰色	



第116図　Ⅲ区（左岸）砂礫層出土紡錘車・円形土製品実測図

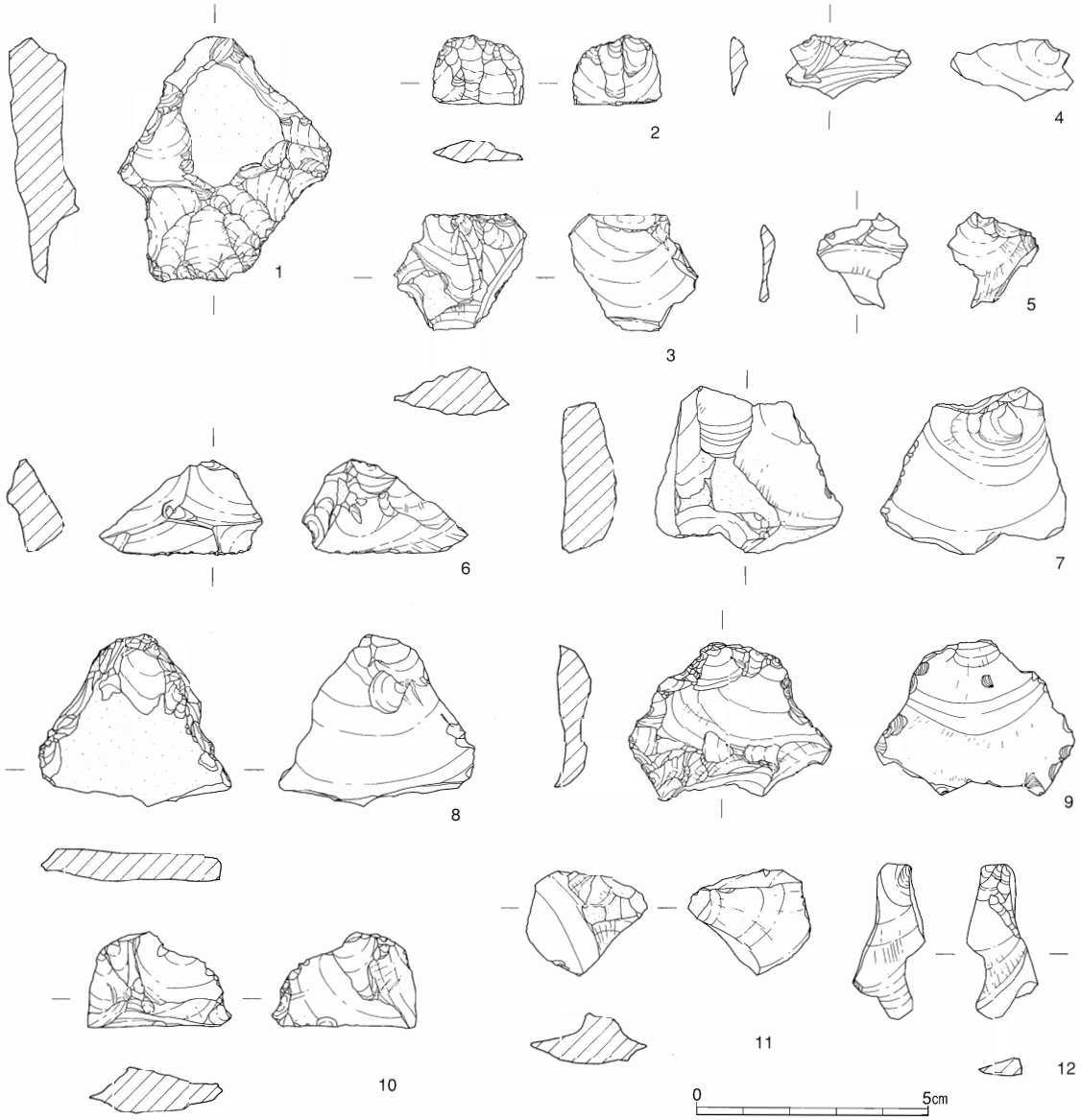
表 34 Ⅲ区（左岸）砂礫層出土紡錘車・円形土製品観察表

挿図番号	器　種	調査区・層位	径(cm)	厚さ(cm)	孔の径(cm)	重さ(g)	形　態	調　　整	胎　土	色　調	備　考
116－1	紡錘車	C・砂礫(上層)	5.7	0.6	(0.6)	11.6	両面から穿孔	両面ともヘラミガキ	密	淡褐色	残存度50％
116－2	紡錘車	C・砂礫(上層)	4.7	0.6	0.3	14.3	両面から穿孔	両面ともハケ	粗砂含む	淡褐色	
116－3	紡錘車	B・砂礫(上層)	5.1	0.8	0.5	18.7	櫛描直線文・波状文 穿孔	外面　ナデ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色	
116－4	紡錘車	B・砂礫(上層)	4.1	0.9	0.6	16.9	穿孔　縁部も丁寧に加工	外面　ハケ 内面　ナデ	粗砂含む	黄褐色	小形品
116－5	円形土製品	C・砂礫(下々層)	5.7	0.9		32.8		外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	淡褐色	
116－6	円形土製品	C・砂礫(下々層)	5.7	0.9		33.6		外面　ハケ 内面　ナデ	細砂含む	暗褐色	内面スス付着 甕片利用
116－7	円形土製品	C・砂礫(下層)	5.2	0.7		16.8		外面　ヘラミガキ 内面　ヨコナデ	細砂含む	黄褐色	
116－8	円形土製品	C・砂礫(中層)	5.5	0.9		25.3		外面　ハケ 内面　ナデ？	細砂含む	灰褐色	
116－9	円形土製品	C・砂礫(下々層)	4.0	0.6		14.9		外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	灰褐色	
116－10	円形土製品	C・砂礫(下々層)	4.9	1.0		29.5		外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	灰褐色	壺片利用
116－11	円形土製品	C・砂礫(溝)	4.1	0.8		12.9		外面　ヘラミガキ 内面　ハケ	粗砂含む	灰褐色	
116－12	円形土製品	C・砂礫(上層)	5.1	0.6		20.8		外面　ハケ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	褐色	外面スス付着

石製品は22点を図示した。第117図は全て黒曜石。１は片面中央に節理面を残すが、ほぼ全周に外側からの調整が加えらている。裏面の剥離はやや粗い。２は欠損するが、縦長剥片の基部に細かな調整が加えられており、楔形石器とみられる。３～12は剥片で、８、９は細かな調整または敲打が加えられている。

第118図１は長さ3.1cmの小形の片刃石斧で、頁岩製。全面が研磨されているが、基部面に窪んだ敲打跡が残る。２は局部磨製石斧で、自然面を残す。３は破片で、柱状（片刃）の石斧の刃先である。４、５は穂摘具とみられる。６は緑色凝灰岩製で全面を研磨され、幅約１cmの棒状に石材を擦切る途中のもの。片面中央に３mmほどの擦切り溝を残す。側面は、一方が擦切りで、もう一方は研磨面。７は２側面を破損するが、全面を研磨されたとみられる板状の流紋岩製。８は石錘で、中央に一条の敲打溝がある。９・10は剥片。

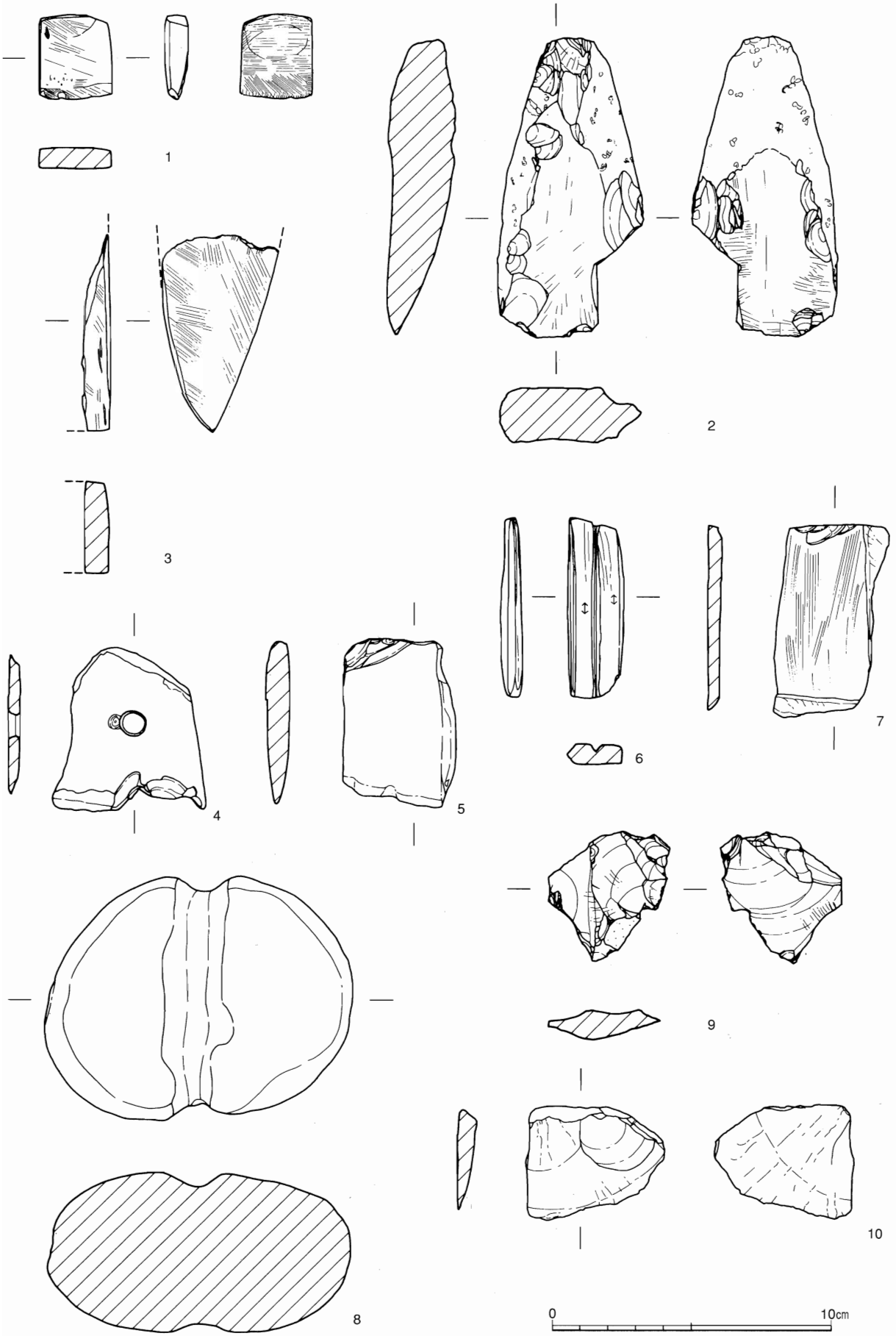
木製品には匙が砂礫層から２個出土している。第119図４は身の残りは良いが、柄の先端を欠く。身の平面形は円形で、口縁部は柄の付け根の上面よりも一段高くなっている。柄と身は鈍角に付く。５は柄の残りは良いが、身の口縁部の一部を欠く。４と同様に身の平面形は円形で、口縁部は柄の付け根の上面よりも一段高くなっている。柄と身は鈍角に付き、手元は屈曲する。



第117図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層出土石製品実測図（1）

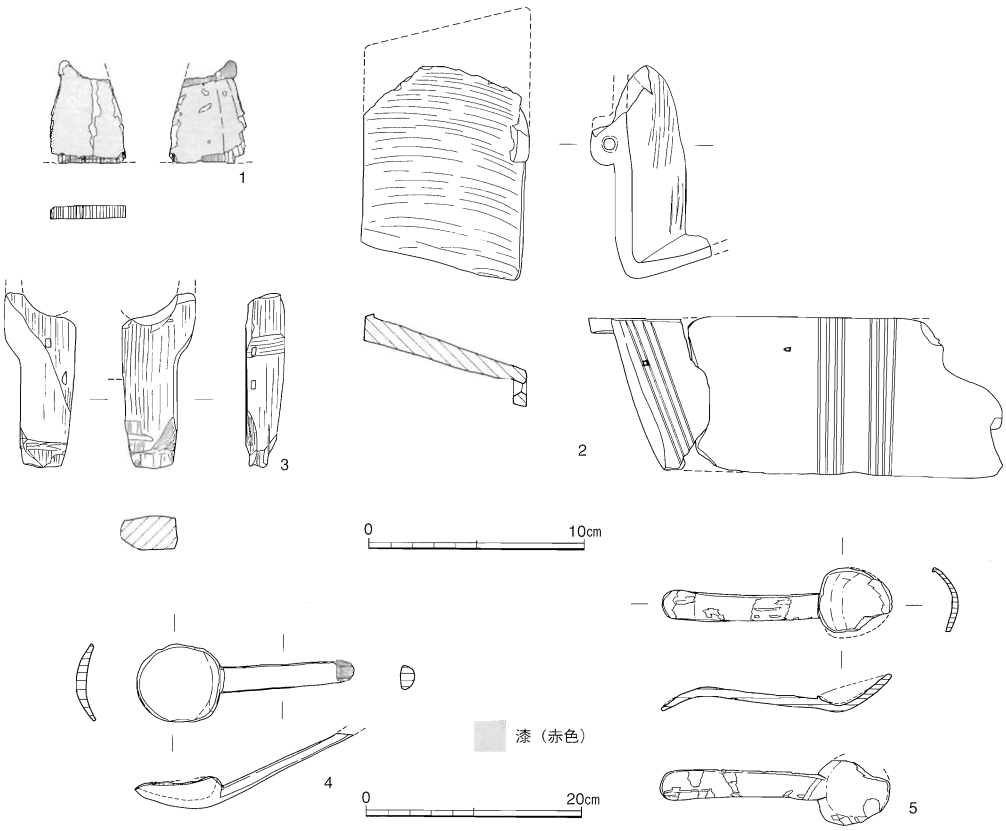
表 35　Ⅲ区（左岸）B調査区砂礫層出土石製品観察表

挿図番号	種　別	層　位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備　考
117－1	掻器？	砂礫	5.4	4.6	1.2	29.0	黒曜石	自然面あり
117－2	楔形石器	砂礫（下層）	(1.5)	(1.9)	(0.5)	1.7	黒曜石	
117－3	剥片	砂礫	(2.5)	(2.8)	1.0	5.8	黒曜石	使用痕あり
117－4	剥片	砂礫（下層）	1.3	2.7	0.4	0.9	黒曜石	自然面あり
117－5	剥片	砂礫（下層）	(2.1)	(1.9)	0.3	1.0	黒曜石	使用痕あり
117－6	剥片	砂礫	2.0	3.5	0.9	6.0	黒曜石	調整あり
117－7	剥片	砂礫（下層）	(3.6)	4.0	1.1	14.8	黒曜石	自然面あり
117－8	剥片	砂礫	(3.8)	(4.2)	0.6	15.8	黒曜石	自然面・調整あり
117－9	剥片	砂礫（下層）	(3.4)	(4.4)	0.7	8.9	黒曜石	調整 あり
117－10	剥片	砂礫	(2.0)	(3.1)	1.0	5.6	黒曜石	調整 あり
117－11	剥片	砂礫	(2.3)	2.6	1.1	5.0	黒曜石	節理面
117－12	剥片	砂礫（下層）	(3.4)	(1.6)	0.4	1.8	黒曜石	



第118図　Ⅲ区（左岸）B調査区　砂礫層出土石製品実測図（2）

挿図番号	種　別	層　位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備　考
118－1	小形石斧	砂礫	3.1	2.6	0.8	12.6	頁岩	片刃
118－2	局部磨製石斧	砂礫（下層）	10.8	(5.7)	2.0	154.4	玄武岩	
118－3	柱状片刃石斧	砂礫（下層）	(7.6)	(1.0)	(3.3)	32.4	粘板岩	破片
118－4	穂摘み具	砂礫（下層）	(5.9)	(6.0)	0.5	23.5	頁岩	
118－5	石鎌？	砂礫（下層）	6.1	(4.0)	0.9	30.5	頁岩	
118－6	棒状未製品？	砂礫（下層）	7.5	2.0	0.7	16.6	緑色凝灰岩	擦切痕・溝
118－7	板状未製品	砂礫（下層）	(7.0)	(4.1)	0.5	24.6	流紋岩	両面研磨
118－8	石錘	砂礫（下層）	8.9	11.0	5.8	555.7	デーサイト	
118－9	剥片	砂礫	(4.7)	(4.3)	1.0	18.4	珪質岩	調整あり
118－10	剥片	砂礫（下層）	4.1	(5.0)	0.6	14.7	流紋岩	使用痕あり？



第119図　Ⅲ区（左岸）B・C調査区砂礫層出土木製品実測図

表 36　Ⅲ区（左岸）B・C調査区砂礫層出土木製品観察表

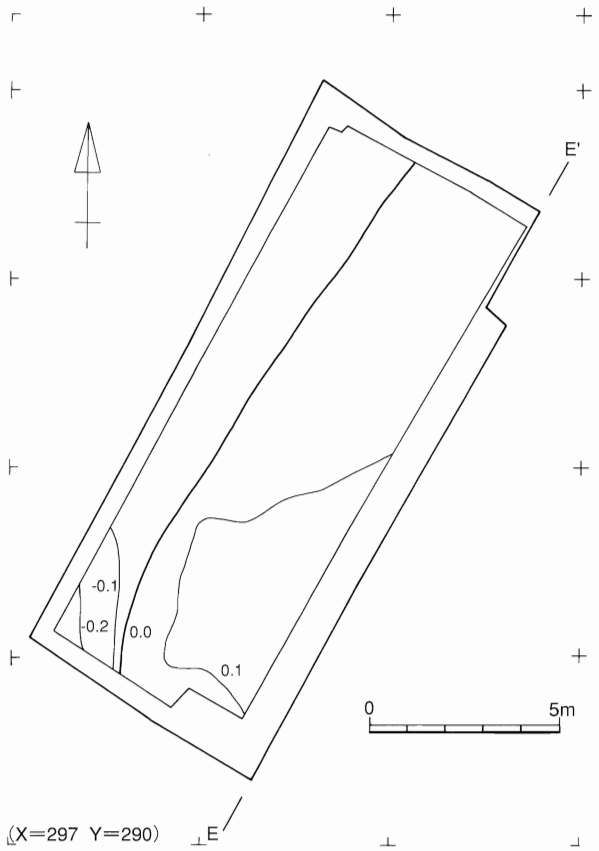
挿図番号	種　別	調査区・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ／太さ(cm)	形態・手法の特徴結歯	木取	備　考
119－1	漆塗縦櫛	C・砂礫	4.7	3.9	0.6	結歯式　歯27本	－	朱漆重塗
119－2	箱	C・砂礫(下々層)		高7.6	1.1	一木式　紐孔突起あり 外面に4条の沈線	板目	黒色塗彩
119－3	部材	C・砂礫（上層）	8.1	3.1	1.3	一側角に2孔 上部は円弧状？	柾目	
119－4	匙	B・砂礫	20.0	7.1	2.9	表面磨き？	柾目	
119－5	匙	B・砂礫	21.1	6.0	高3.6	柄端は下方に湾曲	柾目	

（3） C調査区

B調査区の東側に接しており、さらに調査区の上流部である東部分は1996年度の調査対象地である。前述したように暫定掘削に先立ち発掘が行われたが、今回の調査区の西端において1981年度の調査区の南東の角部分を確認した(第121図)。

調査区は南北17m×東西7.0mを設定した。標高0からマイナス50cmの場所で、厚さ50～100cmの砂礫層を検出した。この層が堆積したのは、土器より弥生時代中期末の頃である。土層(第102図)をみると、砂礫層は中州状に厚く堆積し、層も4層に分かれ、西になる程に立ち上がる。

この調査では遺構は認められなかった。しかし、前期末の完形の土器や木製農具の未製品および木片も多く出土(第122図) しているので、付近にあった集落の一部が洪水で流され、中期に再度、この場所に堆積したものと考えられる。



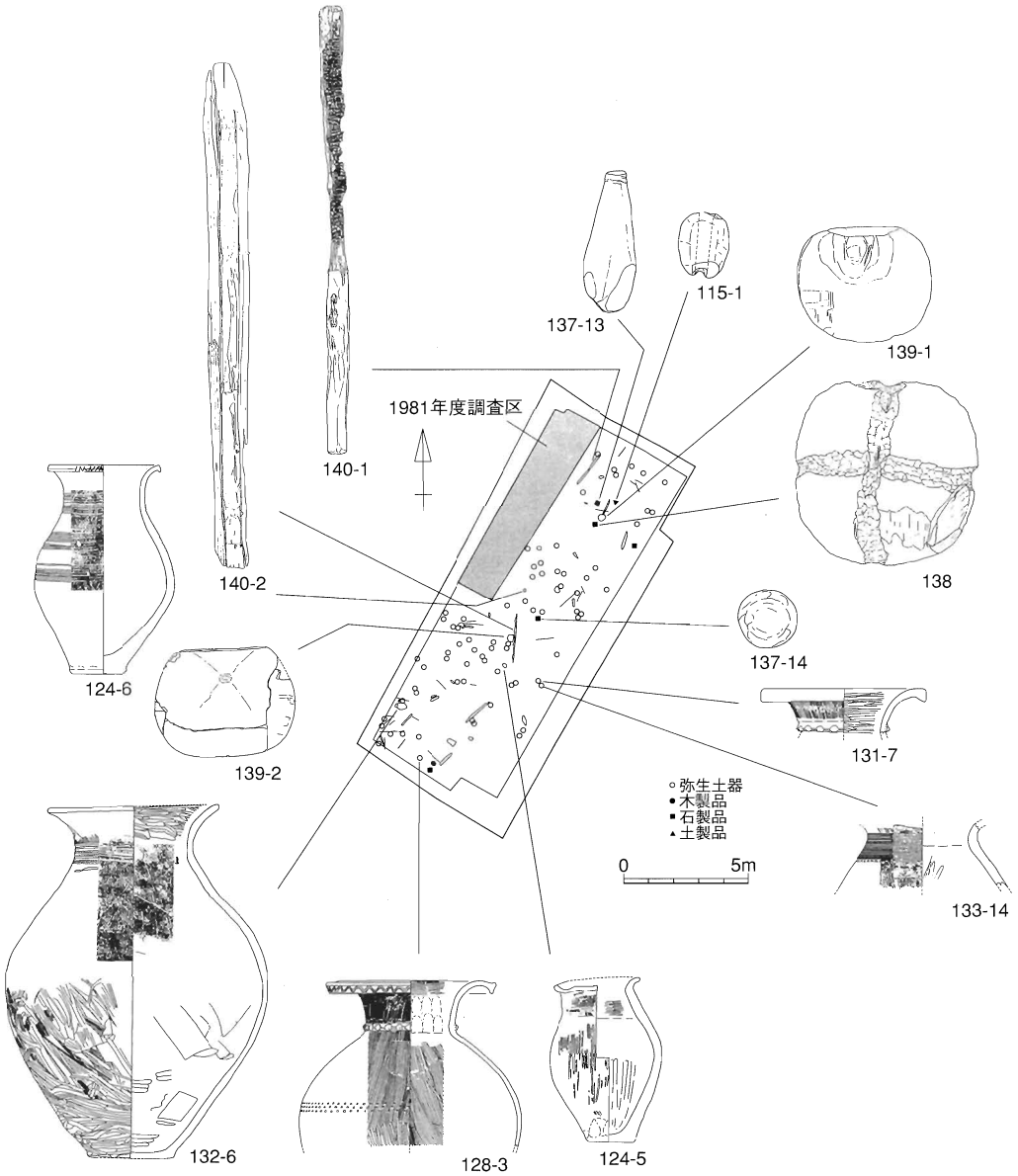
第120図 Ⅲ区(左岸)C調査区 砂礫層(下々層)測量図

C調査区の砂礫層出土遺物 (第50・114～116・119・123～140図)

砂礫層からは土器、土笛、石製品、木製品が出土している。

土器には、縄文土器と弥生時代前期から中期の大量の弥生土器がある。

第123図は砂礫層から出土した縄文土器である。1は口縁部の外面に突帯が付く。長山式で、早期末から前期初めである。2は縄文が施され、繊維が入る。菱根式で、早期である。3は小形の鉢で、口縁部の外面に竹管状の刺突文が巡る。4は口縁部外面の肥厚帯に、貝殻の刺突文が巡る。5は口縁部外面の肥厚帯に、貝殻の刺突文が巡り、その下に押し引きの刺突文を施す。繊維が入る。6は口縁部外面に肥厚帯付近には、平行の刺突文が、その下方には斜めの方向の刺突文を施す。7は口



第121図　Ⅲ区（左岸）C調査区　遺物出土位置図

縁部外面に肥厚帯が付くが、文様はない。８は土器片錘で、内外面に二枚貝の条痕が入る。９は口縁部が波状となり、外面の隆帯の両側に方形の押し引き状の刺突文を重弧状に施す。羽島下層１式の影響を受けている。10は口縁部の外面にＤ字形の爪形文を４列に入れる。12は鉢の口縁部で、外面に入組み文を施す。後期のサルガ鼻式である。13は口縁部が波状になる深鉢である。14は口縁部がくの字に開く深鉢である。15は、口縁部がくの字に開く深鉢で、全体に磨かれている。内面には段をもつ。16は口縁部の外面に２条の凹線文が入り、巻貝の側面による圧痕と刺突文を施す。後期後葉の宮滝式である。17は浅鉢の口縁部で、内面に沈線が入る。18は口縁部が内弯し、端部に刻みを入れる。19は、口縁部が波状になる深鉢で、晩期前半の黒川式である。20～25には口縁部の外面に突帯が付く。20の突帯には二枚貝による刺突文を入れ、地に縄文を施す。22の突帯には巻貝によると考えられる刺突が施されている。26の口縁部の内面には円形の刺突文が施され、その部分の外面まで膨らんでいる。27の外面には重弧文状の多条沈線が施されている。時期不明。

第122図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層遺物出土状況実測図

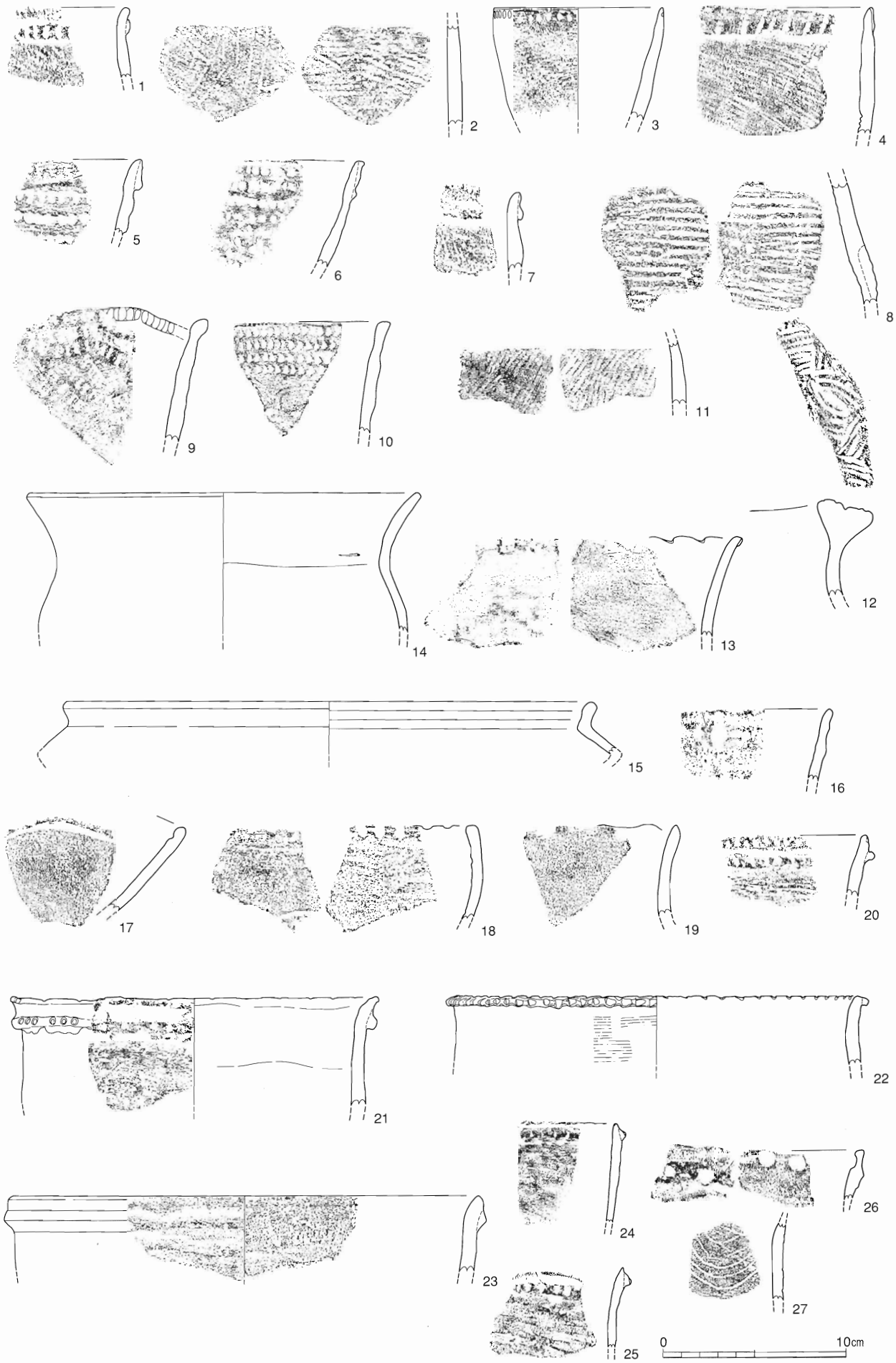
第124図は上層の土器で、弥生時代前期の壷である。１～７は広口壷で、大きく外反する口縁部をもつ。１は小形品で、頸部にヘラによる２条の平行直線文が入る。２は大形品で、頸部にヘラによる２条の平行直線文が入る。３は頸部にヘラによる２条の平行直線文が巡り、その２本線の間に刺突文を入れる。４の口縁部内面には２列の円形の刺突文が巡る。６は完形品で、胴が張る。口縁部外面には刻目を入れ、頸部から胴部にかけてヘラによる平行直線文が３段に巡る。７は頸部の破片。２条の突帯が貼られ、刻目が入る。８～11は無頸壷である。８の口縁部は内側が肥厚する。９、10は口縁部が短く、肩部はハの字に張る。11の口縁部はまっすぐに立ち上がる。

第125図は上層の弥生時代前期の土器。１～５は甕で、６～９は鉢である。１、２は小形品。１は、口縁部が大きく外反する。外面に刻目が入り、下方にはヘラによる４条の平行直線文が巡る。２は、口縁部がほぼ水平に折れ、その下方にヘラによる２条の平行直線文と円形の刺突文が巡る。３、４は大形品で、ヘラによる直線文が、３には１条、４には７条入る。５にはヘラによる３条の平行直線文と楕円形の刺突文が巡る。６～９は鉢。６の口縁部がやや外傾する。７は小形品で、口縁部の上面は平坦になり、外面には刻目が入る。８は口縁部上面が平坦になり、外面の下方にはヘラによる平行直線文が３段に巡る。９の口縁部は大きく外反し、外面には刻目が入る。

第126図は上層の弥生時代前期の文様をもつ壷の破片。１は、肩が強く張り、肩部にヘラによる羽状文と２条の縦の平行直線文で区画している。２は肩部に貝殻による２条の平行直線文を巡らし、上下に羽状文を施す。３は肩部の段の上にヘラで重弧文を、下方に２段に有軸羽状文を施す。４は肩部にヘラによる２条の平行直線文を巡らし、下方に貝殻による羽状文を巡らす。５は、肩部に上方から貝殻による羽状文、ヘラによる５条の平行直線文、２段に三角文、３条の平行直線文を巡らす。６は肩部の段の下方を削り、帯状を呈している。７は肩部の段の下方に貝殻による４条の平行直線文を巡らし、さらにヘラによる羽状文を描く。なお、その間を３条の平行直線文で区画する。８は肩部にヘラによる４条の平行直線文を巡らし、下方に貝殻による羽状文を描く。なお、その間を５条の平行直線文で区画する。９は胴部にヘラによる２条以上の平行直線文を巡らし、下方に２列の円形の刺突文を施す。

第127図は上層の弥生時代中期前葉の土器。１は壷で、口縁部は大きく外反する。口縁部の内面には三角形の刺突文を、外面には×状の刻目を入れる。２は短頸壷で、頸部直下に孔を穿つ。肩部に櫛による直線文と刺突文を交互に入れる。３は壷の肩部で、櫛による直線文と波状文を交互に入れる。４は壷の肩部で、櫛による波状文と直線文を入れ、その間に小さい円形浮文を付ける。５は甕。くの字に外反する口縁部外面に刻目を施し、その下方に櫛による直線文と波状文を入れる。６～８は鉢で、口縁部は外に肥厚し、外面に刻目を入れる。６は口縁部外面の下方に櫛による直線文と三角形の刺突文を入れる。７、８は口縁部外面の下方に櫛による直線文を入れる。

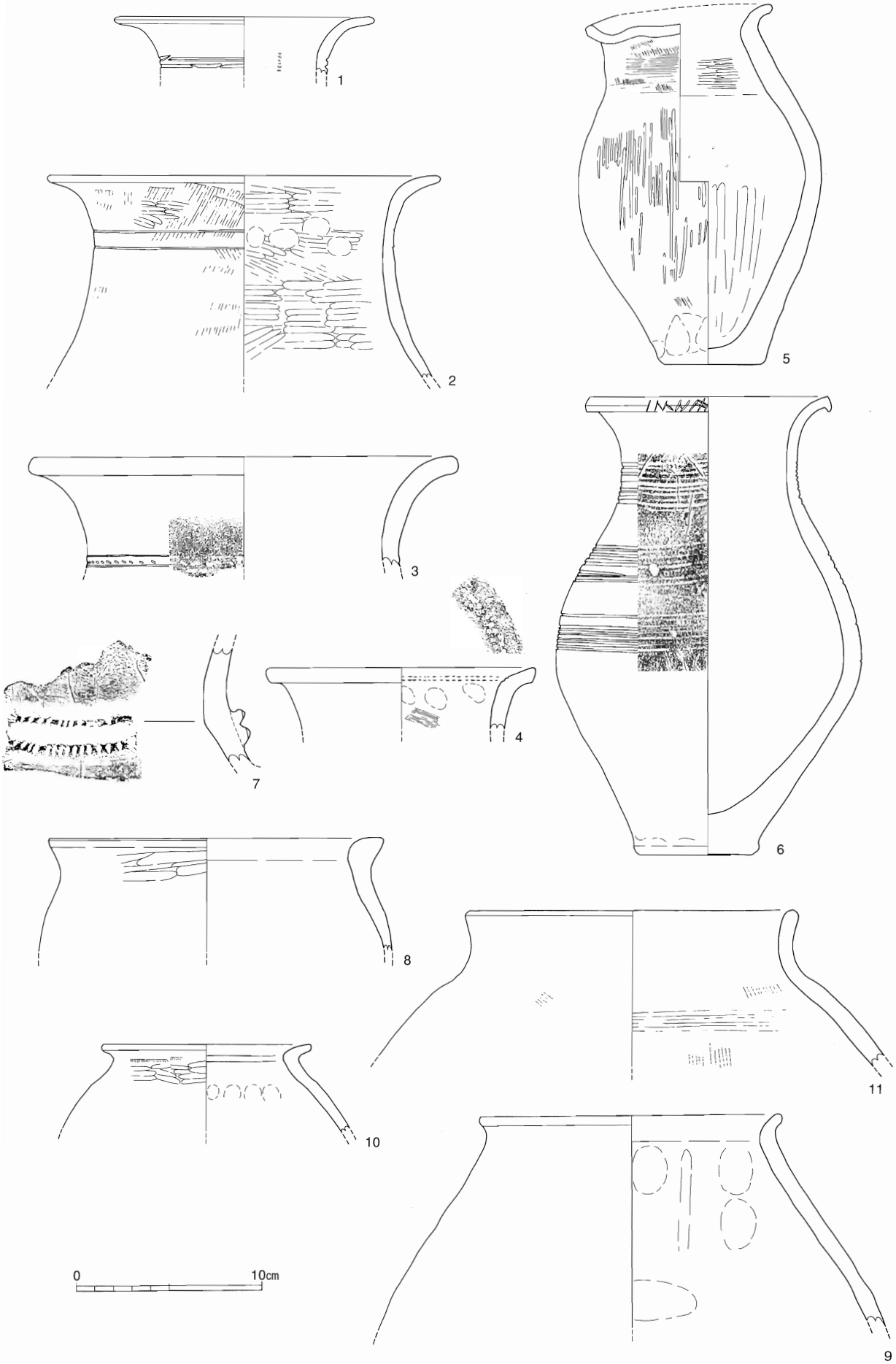
第128図は上層の弥生時代中期中葉の壷。１～８は広口壷。１～４は頸部から口縁部にかけて大きくラッパ状に開く。２と３の頸部には指頭圧痕帯を入れる。３の口縁部外面には櫛による波状文を、胴部には櫛の刺突文が入る。４は口縁部の上面と外面に、小さい竹管文が４重連となる施文体を用いて刺突している。５～８は短く外反する口縁部に球形の胴部をもつ。６は口縁部の下方に対になる孔が開く。６、７の肩部には刺突文が入る。９は長頸壷。外面に３条に突帯を貼り付け、刻みを付け、さらに上方に櫛による直線文と鋸歯文を交互に３段入れる。また、下方にも鋸歯文を描き飾る。10は壷の肩部で、櫛による直線文と鋸歯文が入る。



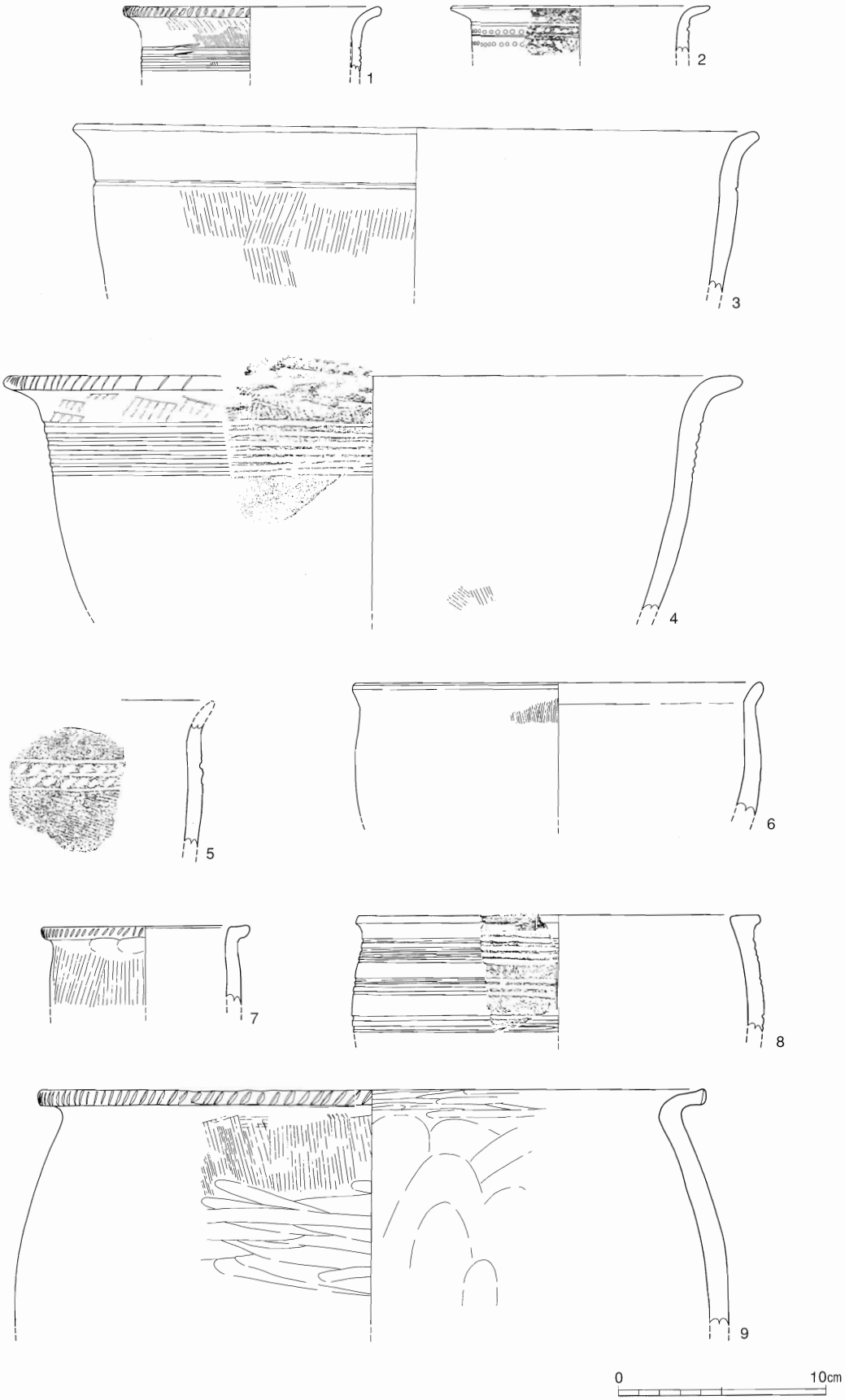
第123図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層出土土器実測図

表 37　Ⅲ区（左岸）C調査区砂礫層出土土器観察表

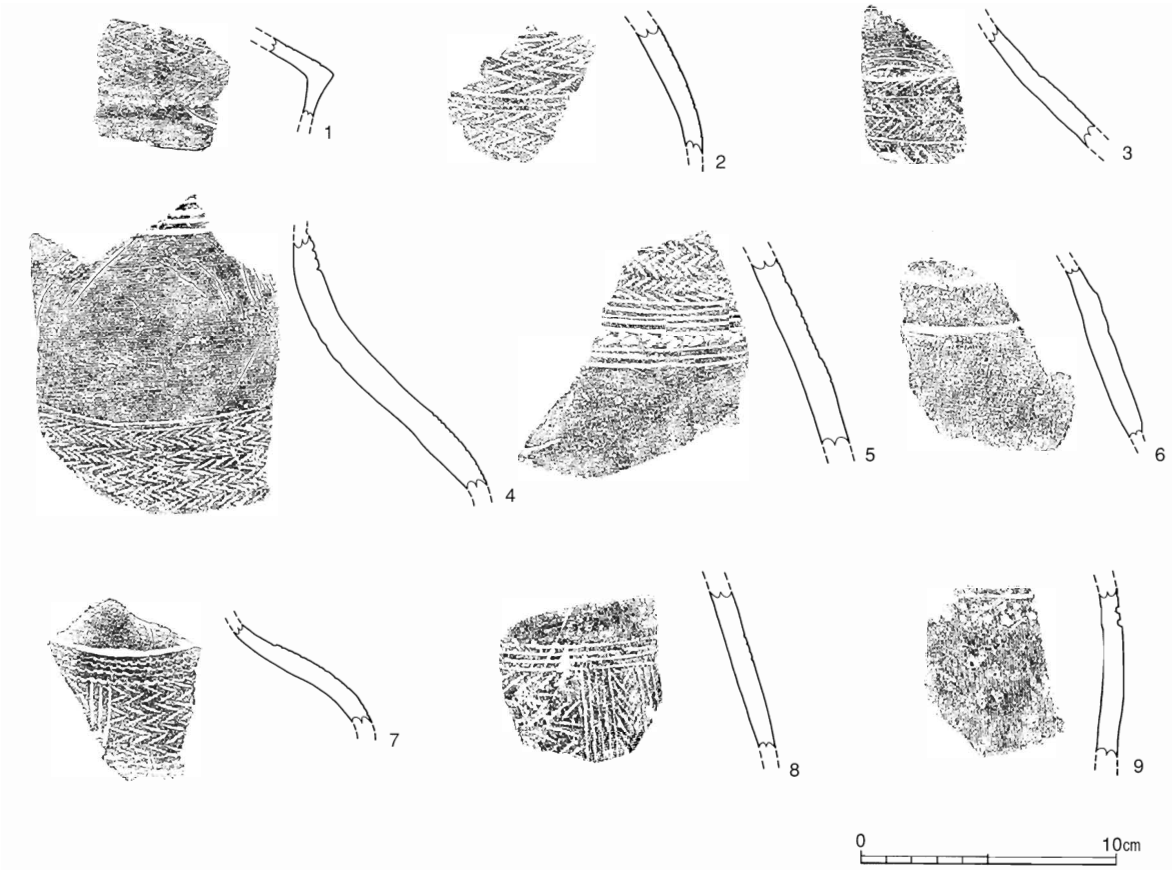
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
123 － 1	縄文　鉢	砂礫（下層）			突帯上に二枚貝による刺突文　地文は縄文	内面　ナデ	微砂含む	黒褐色		長山式
123 － 2	鉢	砂礫（上層）			縄文	外内面とも条痕の後ナデ	微砂含む	黒褐色		菱根式
123 － 3	鉢	砂礫（上層）			竹管状刺突文　地文は縄文	外面　ナデ　条痕 内面　ナデ	細砂含む	外面黒褐色 内面褐色	20	小形品
123 － 4	鉢	砂礫（上層）			肥厚帯上に貝殻刺突文	外面　条痕 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黒褐色		
123 － 5	鉢	砂礫（上層）			肥厚帯上に貝殻刺突文押引き刺突文	内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		繊維が入る
123 － 6	鉢	砂礫（下層）			肥厚帯上に平行の刺突文　下方は斜行の刺突文	内面　ナデ　指頭圧痕	細砂含む	黒色	10	
123 － 7	鉢	砂礫（上層）			肥厚帯	外内面ともナデ？	細砂含む	黒褐色		外面スス付着
123 － 8	鉢	砂礫（下層）			両面とも二枚貝による条痕		微砂含む	黒褐色		粘土の貼付面あり　土器片錐
123 － 9	鉢	砂礫（上層）			波状隆帯　方形の押引き状刺突文（重弧状）	内面　ナデ？	粗砂含む	黒褐色		羽島下層１式の影響 外面スス付着
123 － 10	鉢	砂礫（上層）			D字形の爪形文４列	外内面とも指頭圧痕　ナデ	微砂含む	黒褐色		
123 － 11	鉢	砂礫（上層）				外内面とも二枚貝による条痕	微砂含む	淡褐色		
123 － 12	鉢	砂礫（下々層）			口縁部に入組み文	ナデ	粗砂含む	暗褐色		サルガ鼻式
123 － 13	鉢	砂礫（下々層）			波状口縁		微砂含む	茶褐色		
123 － 14	鉢	砂礫（上層）	21.4			外面　ナデ 内面　ナデ　ヘラケズリ？	粗砂含む	淡褐色	15	外面スス付着
123 － 15	鉢	砂礫（下層）	29.0		内面に段	外内面ともヘラミガキ	微砂含む	褐色	10	
123 － 16	鉢	砂礫（下層）			凹線文２条　巻貝の側面による圧痕・刺突文	内面　ナデ？	細砂含む	灰褐色		宮滝式
123 － 17	鉢	砂礫（下層）			内面　ヘラ描沈線１条	内面　ナデ？	砂粒多く含む	暗褐色		
123 － 18	鉢	砂礫（下々層）			刻目	外面　条痕 内面　ナデ	微砂含む	褐色	15	
123 － 19	鉢	砂礫（下々層）			波状口縁		微砂含む	淡黄褐色		黒川式
123 － 20	鉢	砂礫（上層）			口縁に刻目　二枚貝による刻目突帯	外面　ヘラケズリ 内面　ナデ　ヘラケズリ	粗砂含む	褐色		
123 － 21	鉢	砂礫（下々層）	20.2		口唇部に竹管文　貼付突帯上に巻貝による刺突文？	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ナデ　ハケ	細砂含む	淡褐色	10	突帯文土器 外面スス付着
123 － 22	鉢	砂礫（下々層）	22.0		突帯上に巻貝による刻目	外面　ハケ　ハケの後ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色 一部黒褐色	10	
123 － 23	鉢	砂礫（下々層）	25.6		突帯	外内面ともナデ	微砂含む	外面黒褐色 内面褐色	10	
123 － 24	鉢	砂礫（下々層）			口縁上に刻目　刻目突帯	外内面ともナデ	細砂含む	茶褐色		
123 － 25	鉢	砂礫（上層）			貼付突帯上に刻目	外内面ともナデ	細砂含む	淡褐色		
123 － 26	鉢	砂礫（下々）			内面　円形刺突文		細砂含む	茶褐色		
123 － 27	鉢？	砂礫（上層）			外面　重弧文状の多条沈線 内面　垂下沈線	ナデ	細砂含む	黒褐色		



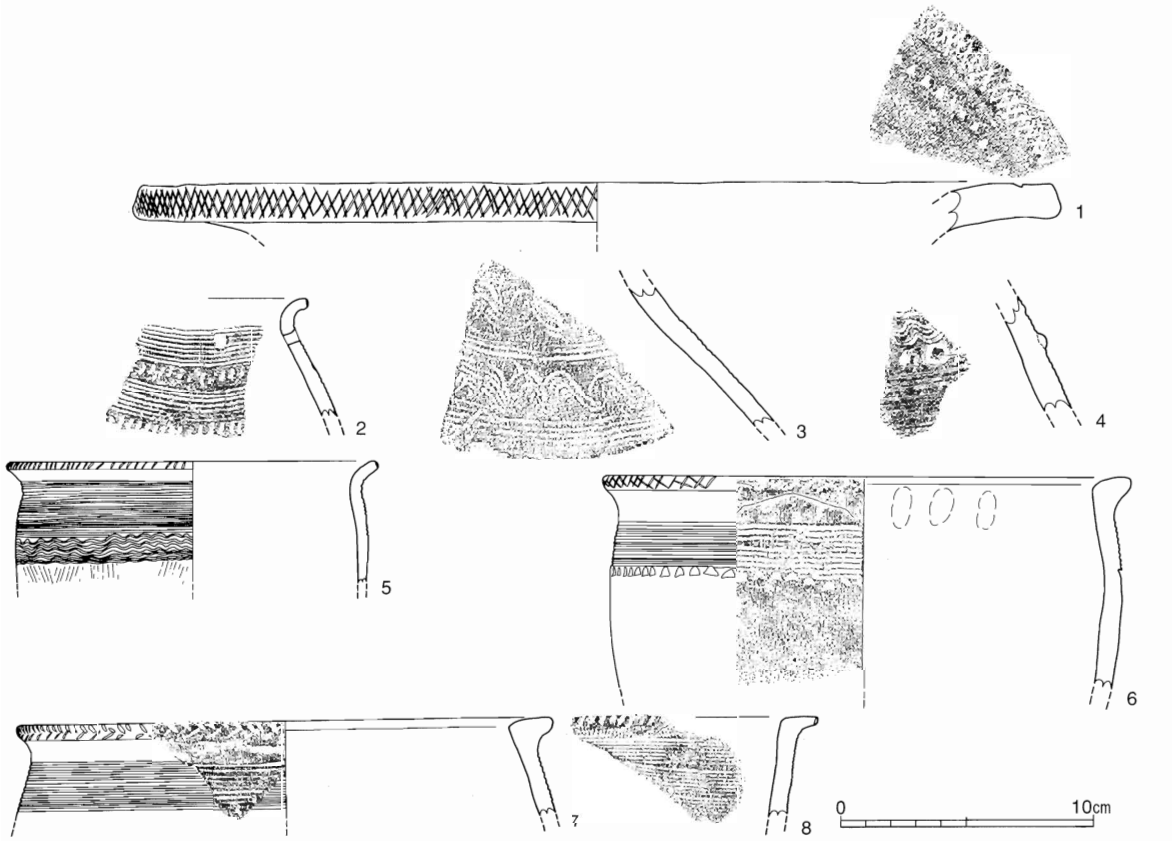
第124図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図（1）



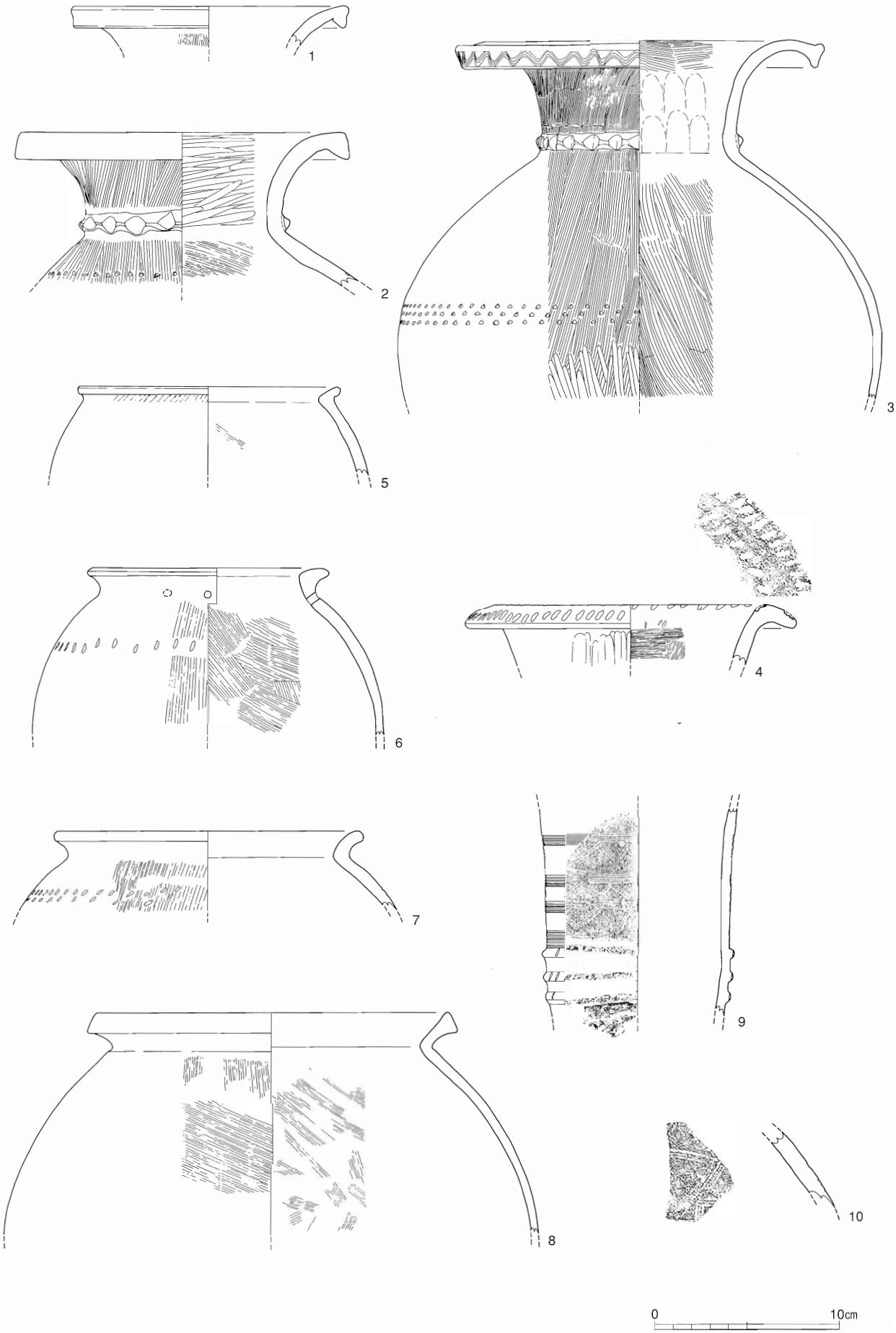
第125図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図（2）



第126図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図（3）



第127図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図（4）



第128図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図（5）

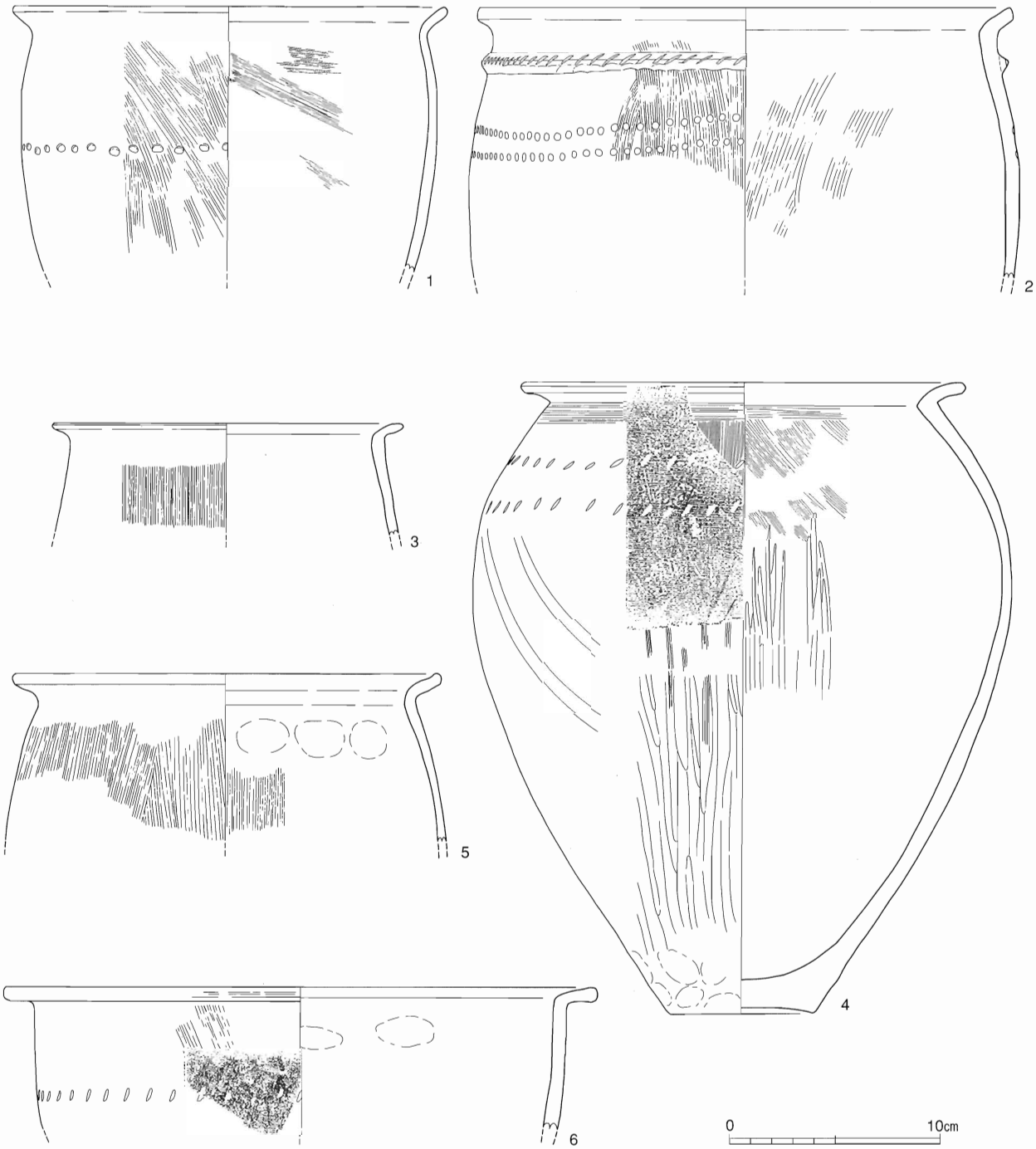
第129図は上層の弥生時代中期中葉の甕。口縁部は外方にくの字に外反するものと、大きく屈折するものとがある。４は、全体が分かる甕で、胴部が張りだし、器壁は薄い。文様は少なく、口縁部の下方に刺突文を巡らすものが多い。２のように突帯を貼り付ける甕もある。

第130図は上層の弥生土器の蓋と底部。１～10は前期、11、12は中期と推定される。１は蓋。傘形の小形品で、口縁部付近に２個の孔をもつ。２～４は壷の底部。９、10は焼成後に底の内外面より穿孔している。

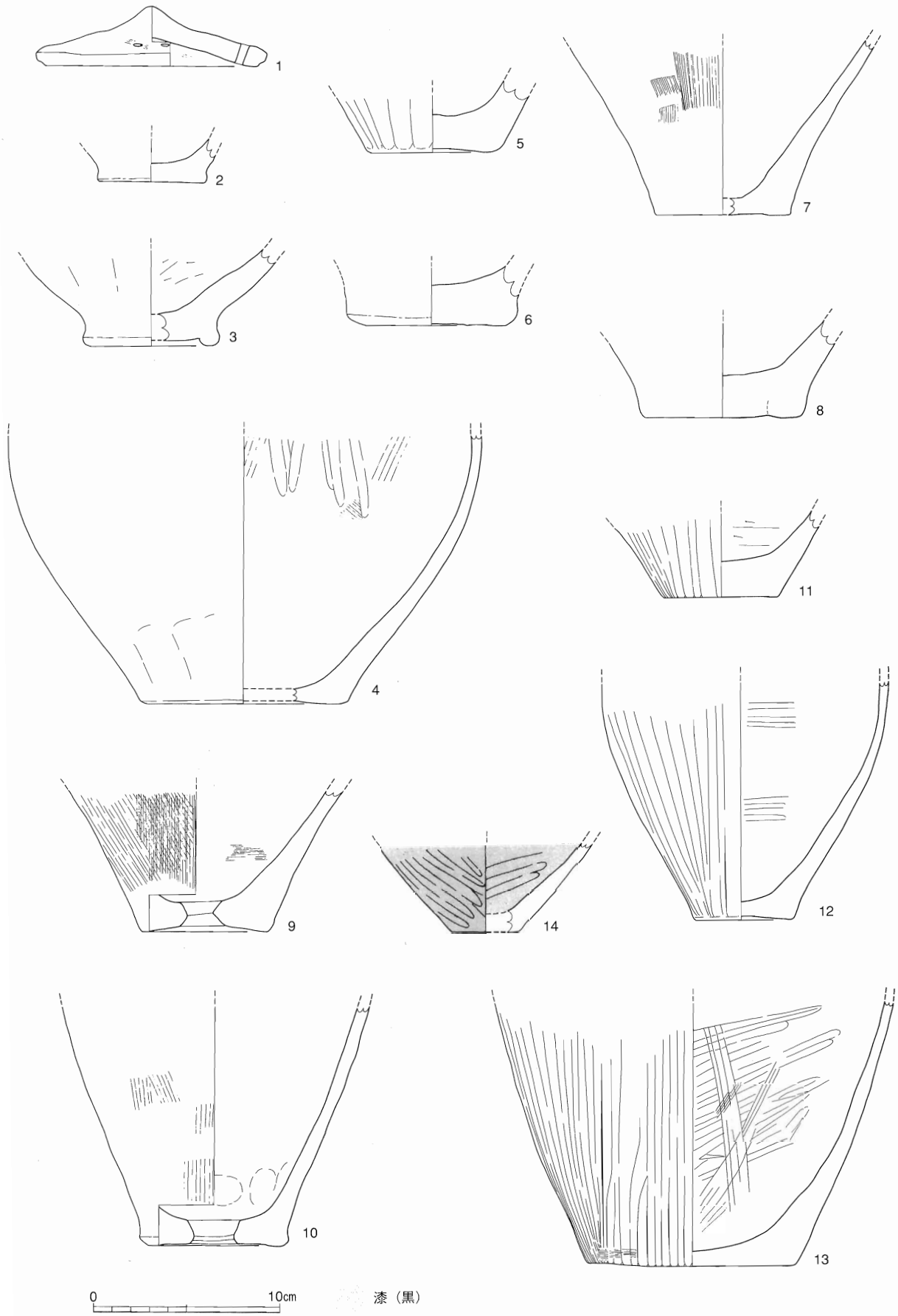
第131図は中層の弥生土器で、１～４は前期、５～９は中期に属する。１は広口壷の口縁部で、口縁部外面にヘラによる×印を、頸部に平行直線文を巡らす。２は口縁部が大きく屈折する広口壷である。３は甕の破片で、外面にヘラによる平行直線文の間に楕円形の刺突文を巡らし、その上下にヘラによる重弧文を描く。４は壷の底部。５は壷の肩部の破片。外面に櫛による直線文と三角形の刺突文を入れる。６は、口縁部が短い広口壷。口縁部の外面に刻目を、頸部から肩部に櫛による直線文と三角形の刺突文を入れる。７は広口壷で、頸部から口縁部にかけて大きくラッパ状に開く。頸部には指頭圧痕文帯を入れる。８は、口縁部が外面にくの字に外反する甕で、胴部が大きく張る。９は高杯の脚部。ハの字に広がり、端部は単純に終わる。杯部の底部は粘土を充填している。

第132図は下層の弥生土器で、１～11は前期、12、13は中期に属する。１～５は壷の肩部の破片。１の外面には段があり、その下方に貝殻による２条の平行直線文が巡る。２はヘラによる２条の平行直線文の上に羽状文が、下に鋸歯文が付く。３はヘラによる２条の平行直線文の上に重弧文が、下に鋸歯文が付く。４は貼付突帯の下方にヘラによる有軸羽状文と２条の平行直線文を交互に入れる。５には貝殻による羽状文と区画する４条の縦方向の平行直線文がある。６は広口壷の完形品。口縁部は大きく外反し、胴部は張る。頸部外面にはヘラによる平行直線文が入る。肩部は内外ともハケが残るが、他の部分はヘラ磨きが著しい。７～９は底部で、８は壷の底部である。10は甕で、口縁部は外反し、外面下方には楕円形の２列の刺突文の上下にヘラによる沈線が施されている。11は傘形の蓋。12は壷の頸部から肩部の破片。頸部外面には突帯が巡り、肩部には爪形の刺突文が入る。13は鉢で、口縁部の端部は外に肥厚し、上面は平坦面ができている。

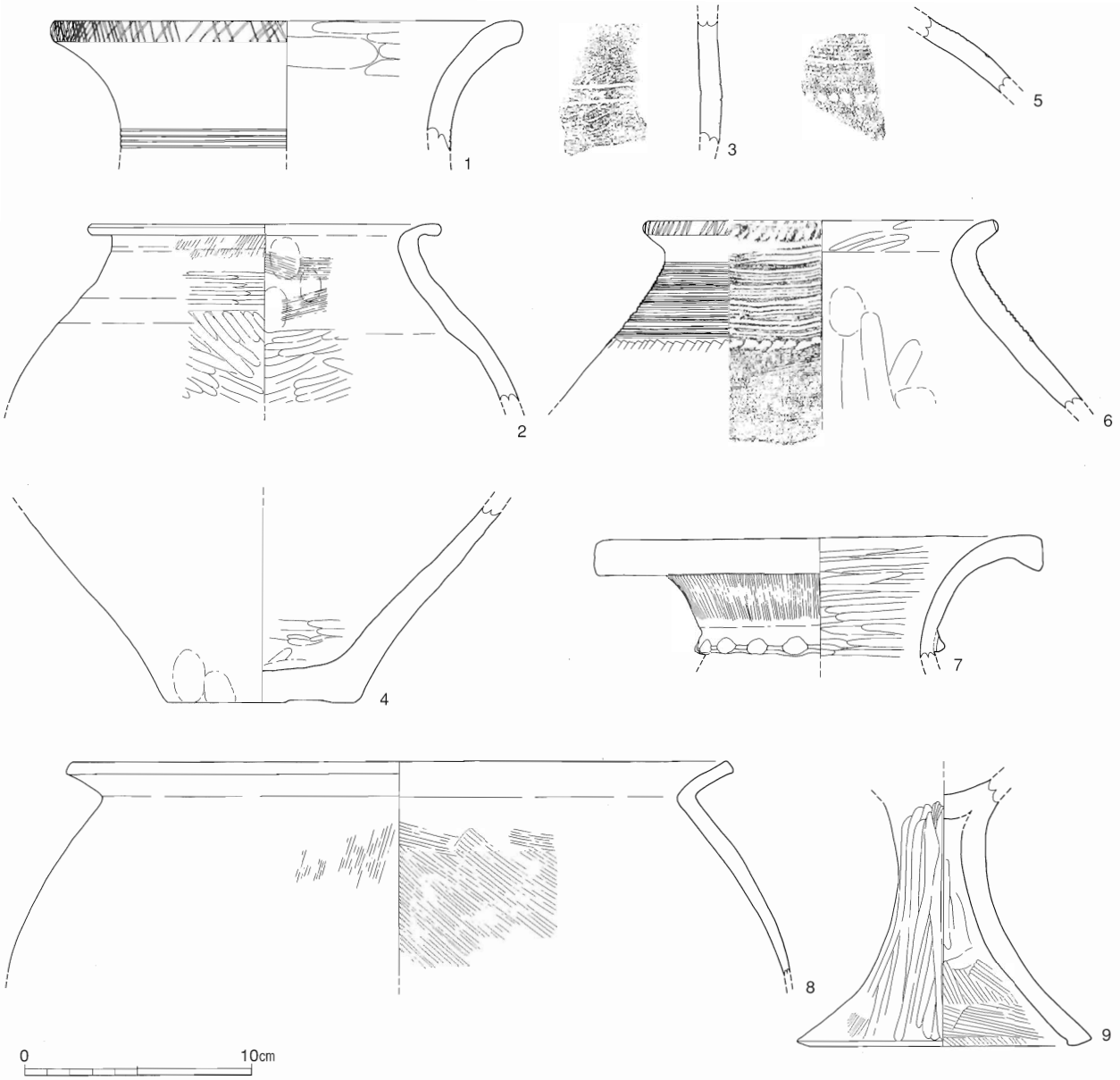
第133図は下々層の弥生土器で、１～12は前期、13、14は中期に属する。１～５は広口壷。１の口縁部は大きく外反する。口縁部と頸部、頸部と胴部との境に段をもつ。段の下方にはヘラによる２条の平行直線文を巡らし、その下に貝殻による羽状文を施す。２の口縁部は大きく、くの字に外反する。口縁部の外面にはヘラによる沈線が入る。頸部には２条の突帯が巡り、刻目を施す。３の口縁部は大きく外傾し、内面には粘土紐を貼り、段がある。内面の頸部境には断面三角形の突帯が付く。４は大きく外傾する口縁部の破片で、端部の上下に刻目を入れ、内面にヘラによる沈線と円形の刺突文を交互に入れる。５はくの字に外傾する口縁部をもつ。６は無頸壷。口縁部に２段に突帯を貼付け、下方の２条の突帯には刻目を入れ、下方には貝殻で２条の平行直線文を施し、その間に斜格子文を描く。７は小形の壷。胴部は球形となる。８～10は甕。８は口縁部が外傾し、外面下方にヘラによる２条の平行直線文とその間に楕円形の刺突文を入れる。さらに、胴部にかけてヘラによる３条からなる鋸歯文が描かれている。９は口縁部が外反し、外面下方にヘラによる２条の平行直線文とその間に楕円形の刺突文を３列に入れる。10は口縁部が外反し、外面下方にヘラによる５条の平行直線文が入る。11～13は鉢。11は、口縁部が真っすぐに立ち上がり、端部は丸くなる。12は、口縁部が外側に折れ、端部外面には刻目が付く。口縁部下方にはヘラによる沈線が入る。13は



第129図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図（6）



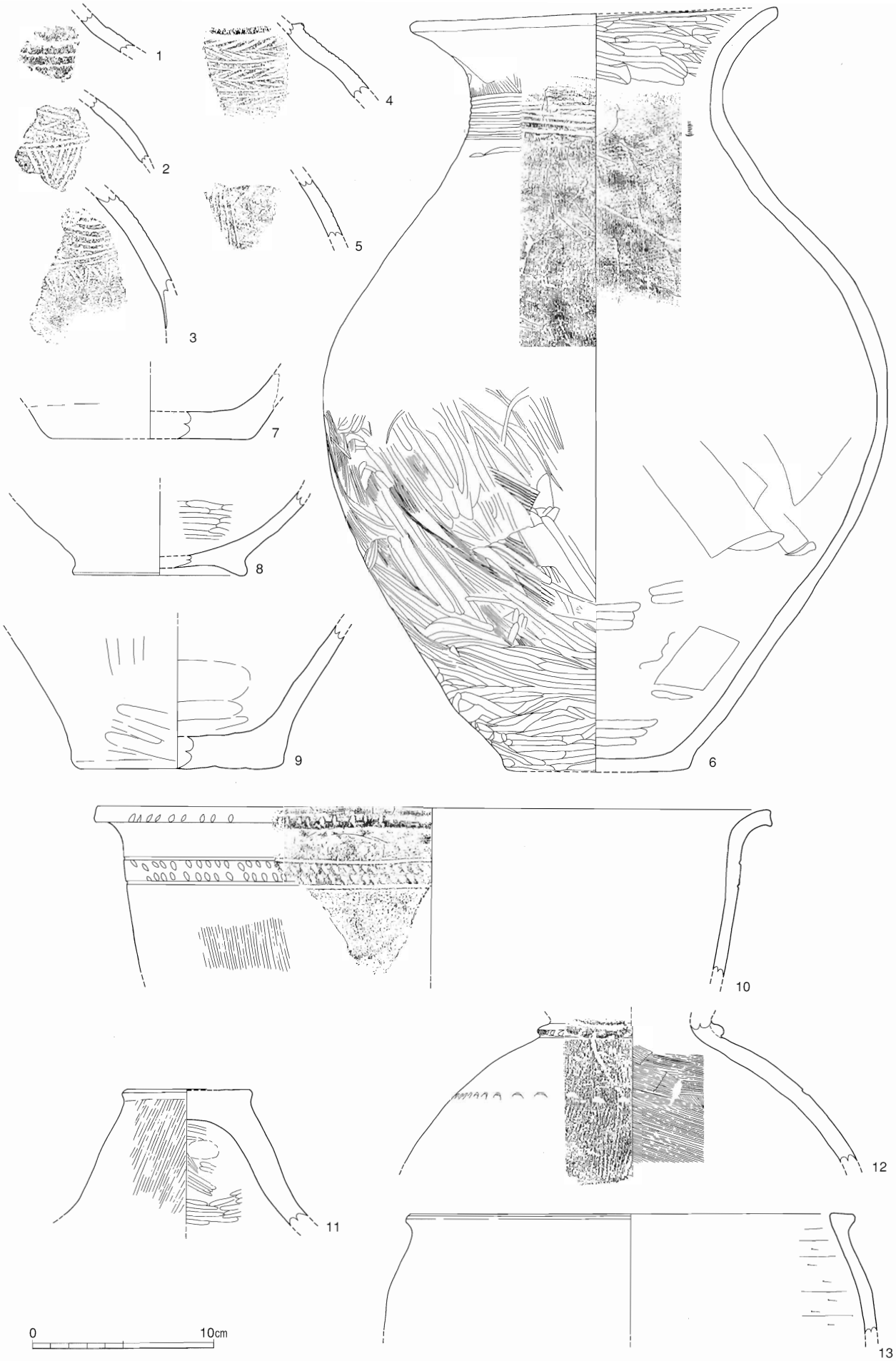
第130図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（上層）出土土器実測図（7）



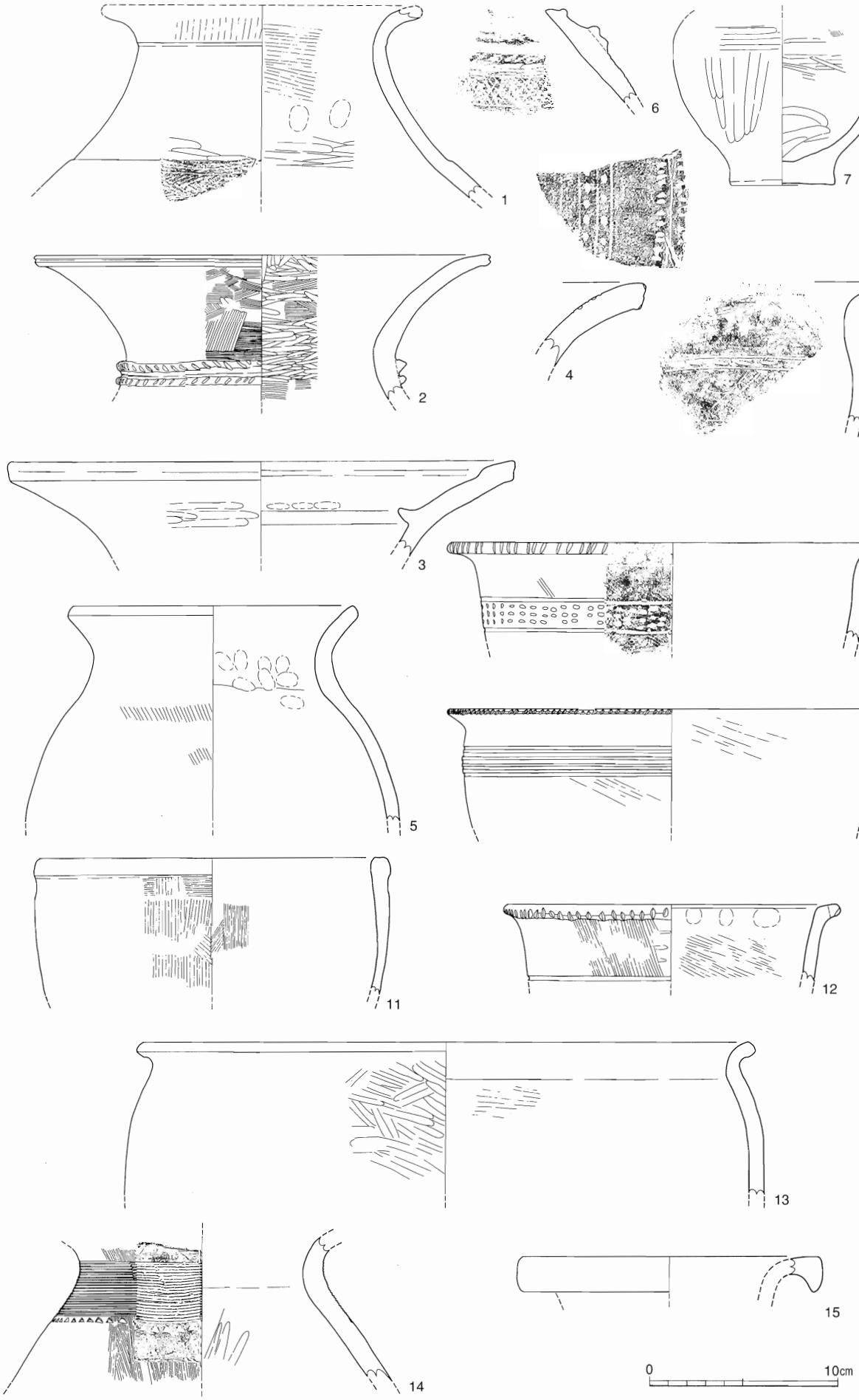
第131図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（中層）出土土器実測図

大形品で、口縁部は短く、屈曲する。14は壷の破片で、頸部に櫛による直線文と三角形刺突文を入れる。15はラッパ状に開く口縁部をもつ壷。

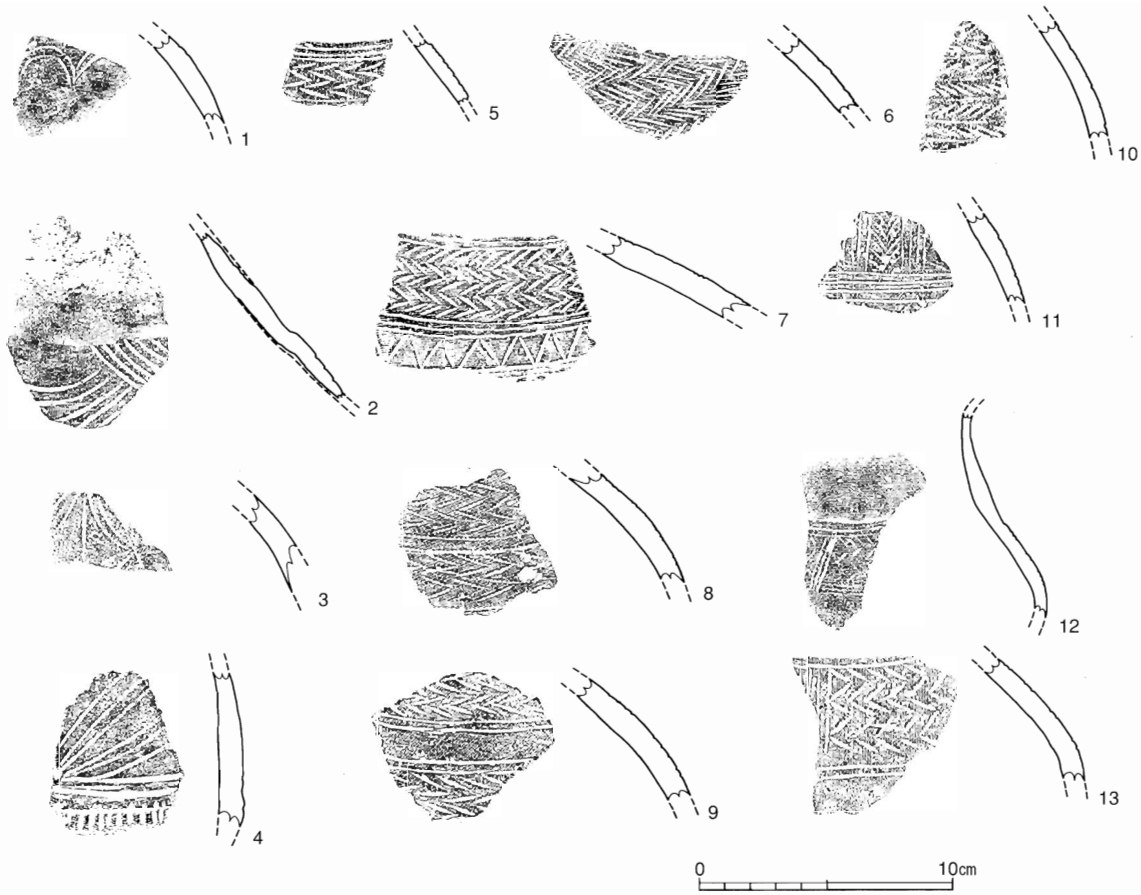
第134図は下々層の弥生時代前期の文様をもつ壷の破片。１は、肩部に貝殻で重弧文を施す。２は頸部から胴部にかけての破片で、段の下にヘラによる５条以上の重弧文を施す。３は肩部に貝殻で木の葉文を、４はヘラにより平行直線文と木の葉文を描く。５は肩部に貝殻による４条の平行直線文と貝殻による羽状文を巡らす。６は肩部に貝殻による羽状文を巡らす。７は肩部に貝殻による３条の平行直線文を上下に巡らし、その間に羽状文を施す。さらに、その下方に鋸歯文を描く。８は肩部に貝殻による平行直線文の上下に羽状文を施す。９は貝殻による２条の平行直線文の上下に羽状文を施す。10は肩部にヘラの平行直線文を巡らし、その間に貝殻で刺突を入れ、綾杉文とする。11は肩部に貝殻による羽状文を巡らし、その間に３条の縦の平行直線文で区画し、さらに下方にヘラによる３条の平行直線文を入れる。12は小形の広口壷で、頸部から胴部の破片である。段の下方にヘラにより２、３条の平行直線文を入れ、その間に羽状文と区画する３条の縦の平行直線文を施す。13は肩部にヘラによる２条の平行直線文を上下に巡らし、その間に羽状文と区画する３条の縦の平行直線文を施す。



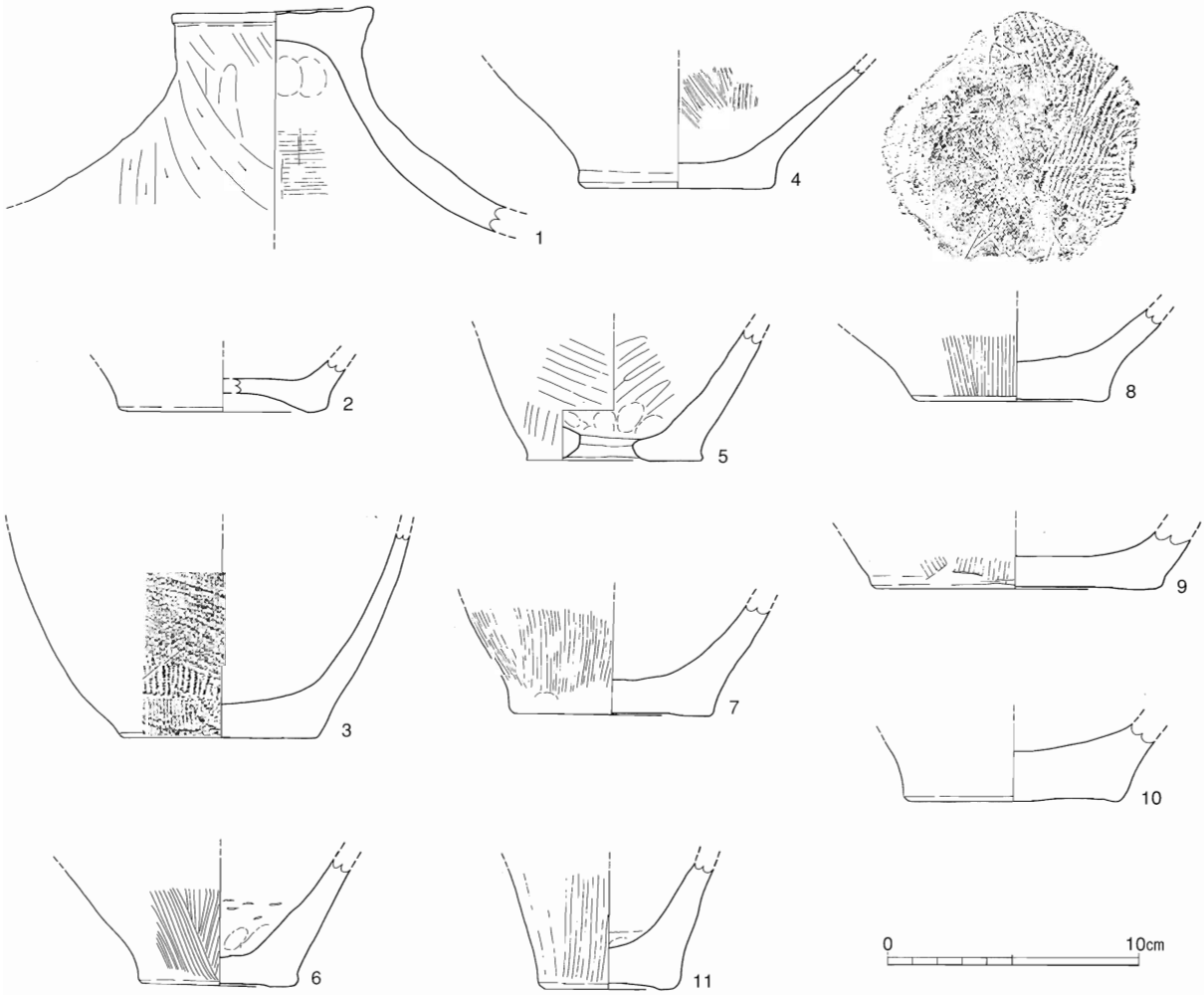
第132図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（下層）出土土器実測図



第133図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（下々層）出土土器実測図（1）



第134図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（下々層）出土土器実測図（2）



第135図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（下々層）出土土器実測図（3）

表 38　Ⅲ区（左岸）C調査区砂礫層出土土器観察表

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
124－1	弥生　壷	砂礫(上層)	14.0		小形広口壷 ヘラ描平行直線文２条	外面　ハケの後ナデ 内面　ハケの後ナデ　ナデ	粗砂含む	黄褐色	15	
124－2	壷	砂礫(上層)	21.3		大形広口壷 ヘラ描平行直線文２条	外面　ヘラミガキ　ハケ ヨコナデ　ハケの後ナデ 内面　ヘラミガキ　ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	30	
124－3	壷	砂礫(上層)	22.7		広口壷 ヘラ描平行直線文２条 刺突文１列	外内面ともミガキ	粗砂含む	黄褐色	20	
124－4	壷	砂礫(上層)	14.5		広口壷 口縁部の内面に円形刺突文２列	内面　ヨコナデ　ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	黒褐色	10	外面磨滅する
124－5	壷	砂礫(上層)	10.1 底径5.8	19.4	広口壷 口縁部は短く　大きく外反する	外面　ハケの後ヘラミガキ 指頭圧痕 内面　ヘラミガキ	粗砂含む	茶褐色	ほぼ完形	口縁部歪む スス付着
124－6	壷	砂礫(上層)	12.8 底径6.8	25.0	広口壷 口縁に刻目　ヘラ描平行直線文		粗砂含む	茶褐色	ほぼ完形	外面硫黄付着 磨滅する
124－7	壷	砂礫(上層)			広口壷 頸部に刻目突帯２条	外面　ナデ　ヘラミガキ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色		
124－8	壷	砂礫(上層)	18.0		無頸壷 口縁部の内側は肥厚する	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色	15	磨滅する
124－9	壷	砂礫(上層)	16.3		無頸壷 口縁部は短く　外へ開く	外面　ハケの後ミガキ？ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	20	
124－10	壷	砂礫(上層)	11.3		無頸壷 口縁部は短く　大きく外反する	外面　ナデ　ハケの後ミガキ 内面　ヨコナデ　ナデ 指頭圧痕	細砂含む	黄褐色	20	
124－11	壷	砂礫(上層)	17.3		無頸壷 口縁部は直立する	外面　ヨコナデ　ヘラミガキ　ハケ 内面　ハケの後ナデ　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	5	
125－1	甕	砂礫(上層)	12.2		口縁部に刻目　ヘラ描平行直線文４条	外面　ハケの後ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色	10	小形品 内面剥離する
125－2	甕	砂礫(上層)	12.0		円形刺突文２列　ヘラ描平行直線文１条	外内面ともナデ	粗砂含む	淡褐色	10	小形品
125－3	甕	砂礫(上層)	32.8		ヘラ描沈線１条	外面　ナデ　ハケ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色	10	大形品
125－4	甕	砂礫(上層)	35.1		口縁部に刻目　ヘラ描平行直線文７条	外面　ハケの後ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ナデ	粗砂含む	黄褐色	20	大形品 内面一部スス付着
125－5	甕	砂礫(上層)			ヘラ描平行直線文３条 楕円形刺突文２列	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		
125－6	鉢	砂礫(上層)	19.6		口縁部は短く　外に開く	外面　ハケ 内面　ヨコナデ ハケの後ナデ	粗砂含む	淡褐色	10	
125－7	鉢	砂礫(上層)	9.8		口縁部に刻目	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ナデ	粗砂含む	褐色	15	小形品
125－8	鉢	砂礫(上層)	19.4		ヘラ描平行直線文 円形刺突文	外面　ナデ　ハケの後ナデ 内面　ヘラミガキ　ハケのナデ	粗砂含む	外面淡褐色 内面黄褐色	10	
125－9	鉢	砂礫(上層)	32.4		口縁部に刻目	外面　ナデ　ハケ　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ナデ	細砂含む	褐色	10	外内面スス付着
126－1	壷	砂礫(上層)			ヘラ描羽状文３段・平行直線文（縦）	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		外面に一部黒斑
126－2	壷	砂礫(上層)			貝殻平行直線文・羽状文	内面　ナデ	粗砂含む	褐色		外面一部スス付着
126－3	壷	砂礫(上層)			ヘラ描重弧文･有軸羽状文	外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ　ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色		
126－4	壷	砂礫(上層)			ヘラ描平行直線文　貝殻羽状文	内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		
126－5	壷	砂礫(上層)			貝殻羽状文　ヘラ描平行直線文　三角形刺突文	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色		
126－6	壷	砂礫(上層)			帯状削出し	内面　ヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色		
126－7	壷	砂礫(上層)			貝殻平行直線文４条　ヘラ描羽状文・平行直線文（縦）	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
126－8	壷	砂礫(上層)			ヘラ描平行直線文４条 貝殻平行直線文（縦）・羽状文	外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	肌色		
126－9	壷か	砂礫(上層)			ヘラ描沈線１条　円形刺突文２列	外内面ともナデ	粗砂含む	黒褐色		
127－1	壷	砂礫(上層)	36.0		外面　ヘラによる×形刻目 内面　三角形刺突文		微砂含む	黄褐色	10	磨滅する
127－2	壷	砂礫(上層)	9.4		短頸壷 口縁部に刻目　櫛描直線文・刺突文　穿孔	外面　ハケ 内面　ヘラミガキ	密	茶褐色	10	内面スス付着
127－3	壷	砂礫(上層)			櫛描直線文・波状文	内面　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		
127－4	壷	砂礫(上層)			櫛描直線文・波状文　円形浮文		粗砂含む	赤褐色		磨滅する
127－5	甕	砂礫(上層)	14.6		口縁部に刻目　櫛描直線文13条・波状文６条	外面　ハケ	粗砂含む	黄褐色		外内面スス付着
127－6	鉢	砂礫(上層)	20.8		口縁部に×形刻目　櫛描直線文　三角形刺突文	外面　ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色		
127－7	鉢	砂礫(上層)	21.1		口縁部に刻目　櫛描直線文10条	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ナデ　ハケ	粗砂含む	黄褐色		
127－8	鉢	砂礫(上層)			口縁部に刻目　櫛描直線文17条以上	外面　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケ	粗砂含む	淡褐色		
128－1	壷	砂礫(上層)	14.6		広口壷 口縁部はラッパ状に開く	外面　ナデ　ハケ 内面　ナデ	細砂含む	赤褐色	10	
128－2	壷	砂礫(上層)	17.4		広口壷 頸部に指頭圧痕文帯　肩部に刺突文	外面　ハケ　ナデ 内面　ヘラミガキ　ハケ	粗砂含む	淡褐色	70	
128－3	壷	砂礫(上層)	19.8		広口壷 外面　指頭圧痕文帯　櫛による刺突文　櫛描波状文	外面　ハケ　ハケの後ナデとヘラミガキ 内面　ハケ　指頭圧痕	微砂含む	茶褐色	胴部以下を欠く	
128－4	壷	砂礫(上層)	15.0		広口壷 口縁部に竹管文	外面　ナデ　ヘラミガキ 内面　ナデ　ハケ	粗砂含む	褐色	20	
128－5	壷	砂礫(上層)	14.3		広口壷 口縁部は短く　外に開く	外面　ヨコナデ　ハケ　ナデ 内面　ハケ　ハケの後ナデ	微砂含む	黄褐色	10	
128－6	壷	砂礫(上層)	12.6		広口壷 頸部に穿孔　肩部に刺突文１列	外内面ともナデ　ハケ	細砂含む	淡褐色	20	
128－7	壷	砂礫(上層)	16.6		広口壷 肩部に刺突文２列	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ナデ　ヨコナデ	細砂含む	淡褐色	10	
128－8	壷	砂礫(上層)	19.2		広口壷 口縁部はくの字に開く	外内面ともヨコナデ　ハケの後ナデ	細砂含む	黄茶色	95	
128－9	壷	砂礫(上層)			長頸壷 櫛描直線文・鋸歯文　刻目突帯	外内面ともヨコナデ	粗砂含む	褐色	30	
128－10	壷	砂礫(上層)			ヘラ描平行直線文･鋸歯文	内面　ハケの後ナデ	微砂含む	灰褐色		
129－1	甕	砂礫(上層)	20.4		部に円形刺突文１列	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ハケの後ナデ	細砂含む	淡茶色	20	外面スス付着
129－2	甕	砂礫(上層)	25.2		刻目突帯　円形刺突文２列	外内面ともヨコナデ　ハケの後ナデ	粗砂含む	暗茶色	20	内面スス付着
129－3	甕	砂礫(上層)	16.7		口縁部は大きく折れる	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　ナデ	細砂含む	褐色	10	外面スス付着
129－4	甕	砂礫(上層)	21.1 底径7.0	33.3	胴部張る　刺突文２列	外面　ハケの後ミガキ　指頭圧痕 内面　ヨコナデ　ハケの後ナデミガキ	細砂含む	褐色	60	内面スス付着
129－5	甕	砂礫(上層)	20.4		口縁部くの字に開く	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕　ハケ	細砂含む	淡褐色	25	外面黒色塗彩
129－6	甕	砂礫(上層)	28.1		口縁部は水平に折る　刺突文	外面　ハケ 内面　ハケ　指頭圧痕	微砂含む	外面淡黄褐色 内面淡赤褐色	15	磨滅する
130－1	蓋	砂礫(上層)	11.4		傘形　口縁部に孔２個	外内面ともハケの後ナデ	粗砂含む	茶褐色	40	小形品
130－2	壷（底部）	砂礫(上層)	底径5.7			外内面ともナデ	粗砂含む	暗褐色	完存	底部に爪痕 外面スス付着

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
130－3	壷（底部）	砂礫(上層)	底径6.4			外面　ハケの後ナデ 内面　ケズリの後ナデ	粗砂含む	淡褐色	20	磨滅する
130－4	壷（底部）	砂礫(上層)	底径11.2			内面　ハケの後ミガキ　ナデ	粗砂含む	淡褐色	20	外面磨滅する
130－5	（底部）	砂礫(上層)	底径6.3			ヘラミガキ　ナデ	粗砂含む	黒灰色	完存	
130－6	（底部）	砂礫(上層)	底径7.5			ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	完存	磨滅する
130－7	（底部）	砂礫(上層)	底径7.2			外面　ハケ　ナデ 内面　指頭圧痕	粗砂含む	コゲ茶色	50	磨滅する
130－8	（底部）	砂礫(上層)	底径7.7				粗砂含む	赤褐色	完存	底部に段差 磨滅する
130－9	（底部）	砂礫(上層)	底径6.8		焼成後穿孔	外面　ハケ　ナデ 内面　ハケ　ナデ　ヨコナデ ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	完存	黒班
130－10	（底部）	砂礫(上層)	底径8.0		焼成後穿孔	外面　ハケ　ヨコナデ　ナデ 指頭圧痕 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	50	磨滅する
130－11	（底部）	砂礫(上層)	底径5.9			外面　ヘラミガキ　ナデ 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕	密	淡褐色	完存	外内面スス付着
130－12	（底部）	砂礫(上層)	底径5.1			外面　ハケの後ヘラミガキ ナデ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	茶褐色	完存	磨滅する
130－13	（底部）	砂礫(上層)	底径11.0			外面　ヘラミガキ　ハケ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	外面黄灰色 内面茶褐色	完存	
130－14	（底部）	砂礫(上層)	底径3.5		外内面とも黒漆塗り	外内面ともヘラミガキ	細砂含む		10	溝内出土
131－1	壷	砂礫(中層)	20.7		広口壷 口縁部上に×形刻目 ヘラ描平行直線文４条	外面　ヨコナデ　ハケ 内面　ヘラミガキ　ヨコナデ	粗砂含む	淡褐色	15	
131－2	壷	砂礫(中層)	15.5		広口壷 口縁部は短く　大きく外反する	外面　ハケ　ハケの後ヘラミガキ 内面　ハケ　ヘラミガキ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	45	
131－3	甕	砂礫(中層)			ヘラ描重弧文・平行直線文　楕円形刺突文	外内面ともナデ	粗砂含む	黄褐色		
131－4	壷(底部)	砂礫(中層)	底径8.5			外面　ヨコナデ　指頭圧痕 内面　ヘラミガキ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	完存	
131－5	壷	砂礫(中層)			櫛描直線文 三角形刺突文１列		粗砂含む	橙褐色		磨滅が著しい
131－6	壷	砂礫(中層)	15.4		広口壷 口縁部に刻目　櫛描直線文　三角形刺突文１列	外面　ハケ 内面　ハケ　ヘラミガキ　ハケの後ミガキ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	40	
131－7	壷	砂礫(中層)	18.2		広口壷 頸部に指頭圧痕文帯が付く	外面　ハケ　ナデ　指頭圧痕 内面　ナデ　ヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色	20	
131－8	甕	砂礫(中層)	28.8		口縁部はくの字に外反する	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ハケの後ナデ	細砂含む	乳茶色	55	
131－9	高杯(杯部)	砂礫(中層)	底径13.0		ハの字に開く	外面　ナデ　ヘラミガキ 内面　ハケ　ナデ	粗砂含む	淡褐色	30	
132－1	壷	砂礫(下層)			貝殻平行直線文２条	外内面ともナデ	粗砂含む	外面灰橙色 内面黒灰色		
132－2	壷	砂礫(下層)			ヘラ描羽状文・平行直線文・鋸歯文	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	外面黒色 内面灰橙褐色		
132－3	壷	砂礫(下層)			ヘラ描重弧文・平行直線文・鋸歯文	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		
132－4	壷	砂礫(下層)			刻目突帯　ヘラ描平行直線文８条･有軸羽状文３段	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	褐色		
132－5	壷	砂礫(下層)			貝殻平行直線文(縦)５条･羽状文	内面　ナデ	細砂含む	暗褐色		
132－6	壷	砂礫(下層)	20.3 底径10.2	42.9	広口壷 ヘラ描平行直線文７条	外内面ともハケ　ヘラミガキ	粗砂含む	灰褐色	完形品	表面黒色塗彩
132－7	（底部）	砂礫(下層)	底径11.3			外面　ナデ 内面　ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色		

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
132－8	壷(底部)	砂礫(下層)	底径 9.6			外面　ヘラミガキ　ナデ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	淡褐色	35	
132－9	(底部)	砂礫(下層)	底径 11.6			外面　ヘラミガキ　指頭圧痕　ナデ 内面　ナデ	粗砂含む	外面赤褐色 内面黒褐色	10	
132－10	甕	砂礫(下層)	37.0		口縁に一部刻目　ヘラ描平行直線文２条　楕円形刺突文２列	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ナデ　ヨコナデ	微砂含む	赤褐色	10	
132－11	蓋	砂礫(下層)	天井径 7.1		傘形	外面　ハケ 内面　ヘラミガキ　ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	灰褐色	65	外内面に黒班
132－12	壷	砂礫(下層)			刻目突帯　爪形刺突文１列	外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ハケ	細砂含む	淡褐色		
132－13	鉢	砂礫(下層)	23.4		口縁部は外面に肥厚する	外面　ヨコナデ 内面　ヘラケズリ	粗砂含む	淡褐色	10	
133－1	壷	砂礫(下々層)			広口壷 ヘラ描平行直線文２条 貝殻羽状文	外面　ハケの後ヘラミガキ 内面　ハケ　指頭圧痕　ヘラミガキ	粗砂含む	明褐色	10	
133－2	壷	砂礫(下々層)	24.0		広口壷 口縁部に沈線１条 刻目突帯２条	外面　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ハケ	粗砂含む	淡褐色	20	
133－3	壷	砂礫(下々層)	26.8		広口壷 内面　段が付く　貼付突帯	外面　ヘラミガキ 内面　ヨコナデ　ヘラミガキ　ハケ	粗砂含む	淡褐色	25	
133－4	壷	砂礫(下々層)	34.8		広口壷　沈線文・刻目 内面　ヘラ描平行直線文　円形刺突文	外面　ヘラミガキ 内面　ヨコナデ	細砂含む	外面灰白色 内面肌色	10	
133－5	壷	砂礫(下々層)	15.0		広口壷 口縁部は外へ開く	外面　ヨコナデ　指頭圧痕　ハケの後ナデ 内面　ナデの後指ナデ	細砂含む	灰褐色	30	
133－6	壷	砂礫(下々層)			無頸壷 突帯上に貝殻刻目・平行直線文・斜格子文	ヨコナデ	粗砂含む	褐色		
133－7	壷	砂礫(下々層)	底径 5.5		体部は球形となる	外面　ヘラミガキ 内面　ハケ　ヘラミガキ　ナデ	粗砂含む	黄褐色	完存	小形品
133－8	甕	砂礫(下々層)			ヘラ描平行直線文２条 楕円形刺突文１列　ヘラ描鋸歯文	外面　ナデの後ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ハケの後ナデ	粗砂含む	淡褐色		
133－9	甕	砂礫(下々層)	23.5		口縁部に刻目　ヘラ描平行直線文２条　楕円形刺突文３列	外面　ハケ 内面　ヨコナデ	粗砂含む	淡褐色	10	
133－10	甕	砂礫(下々層)	23.7		口縁部に刻目　ヘラ描平行直線文５条	外面　ハケの後ヨコナデ 内面　ヨコナデ　ハケの後ヨコナデ	細砂含む	黄褐色	12	内面スス付着
133－11	鉢	砂礫(下々層)	18.4		口縁部はまっすぐ立ち上がる	外面　ヨコナデ　ハケの後ヨコナデ 内面　ハケの後ナデ　ヨコナデの後ハケ	粗砂含む	黄褐色	10	
133－12	鉢	砂礫(下々層)	17.6		口縁部に刻目　ヘラ描沈線１条	外面　ハケの後ヨコナデ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕　ハケ	微砂含む	外面褐色 内面黄褐色	15	
133－13	鉢	砂礫(下々層)	33.2		口縁部は短く　外へ開く	外面　ヨコナデ　ハケの後ヘラミガキ 内面　ヨコナデ　ハケの後ナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	20	大形品
133－14	壷	砂礫(下々)			櫛描直線文７条×３　三角形刺突文１列	外面　ハケ 内面　ヘラミガキ　ナデ	粗砂含む	淡褐色		
133－15	壷	砂礫(下々層)	16.2		口縁部はラッパ状に外反する	外内面ともヨコナデ	細砂含む	茶褐色	15	
134－1	壷	砂礫(下々層)			貝殻重弧文	外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ	粗砂含む	淡褐色		
134－2	壷	砂礫(下々層)			ヘラ描重弧文	外面　ヘラミガキ 内面　ハケの後ナデ	細砂含む	外面黄褐色 内面灰褐色	10	
134－3	壷	砂礫(下々層)			貝殻木葉文	内面　指頭圧痕	粗砂含む	淡褐色		
134－4	壷	砂礫(下々層)			ヘラ描木葉文・平行直線文・直線文（縦）	内面　ナデ　指頭圧痕	細砂含む	茶褐色		磨滅する
134－5	壷	砂礫(下々層)			貝殻平行直線文・羽状文	内面　ヘラミガキ	細砂含む	外面淡黄褐色 内面黄褐色		
134－6	壷	砂礫(下々層)			貝殻平行直線文２条・羽状文	外面　ヘラミガキ 内面　ナデ	粗砂含む	赤褐色		
134－7	壷	砂礫(下々層)			貝殻平行直線文・羽状文・鋸歯文	内面　ナデ	粗砂含む	淡褐色		

挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
134－8	壷	砂礫(下々層)			貝殻羽状文・平行直線文	外面　ヘラミガキ 内面　ヨコナデ	細砂含む	黄褐色		
134－9	壷	砂礫(下々層)			貝殻羽状文・平行直線文	外内面ともヘラミガキ	粗砂含む	淡褐色		
134－10	壷	砂礫(下々層)			ヘラ描平行直線と貝殻刺突文とで綾杉文とする	内面　ハケ	粗砂含む	灰褐色		
134－11	壷	砂礫(下々層)			貝殻平行直線文（縦）・羽状文　ヘラ描平行直線文	外面　ヘラミガキ？ 内面　ヨコナデ	細砂含む	黄褐色		
134－12	壷	砂礫(下々層)			小形広口壷 ヘラ描平行直線文（縦）・羽状文	外面　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　指ナデ　指頭圧痕	細砂含む	茶褐色		
134－13	壷	砂礫(下々層)			ヘラ描平行直線文・(縦)	外面　ヘラミガキ 内面　ハケ　ナデ	粗砂含む	淡褐色		
135－1	蓋(天井部)	砂礫(下々層)	天井径 7.5	9.1	傘形	外面　ヘラミガキ　ハケ 内面　指頭圧痕　ハケ	粗砂含む	灰褐色	完存	
135－2	壷(底部)	砂礫(下々層)	底径 8.2		上げ底		粗砂含む	黄褐色	25	磨滅する
135－3	壷(底部)	砂礫(下々層)	底径 7.9			外面　ハケ　ミガキ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	灰褐色	完存	
135－4	壷(底部)	砂礫(下々層)	底径 7.7			外面　ナデ 内面　ハケ　ヘラミガキ　指頭圧痕	粗砂含む	外面黄褐色 内面黒褐色	完存	磨滅する 内面スス付着
135－5	(底部)	砂礫(下々層)	底径 7.0		焼成後穿孔（底から）	外面　ヘラミガキ　ナデ 内面　指頭圧痕ハケヘラミガキ	粗砂含む	黄褐色	完存	外面スス付着
135－6	(底部)	砂礫(下々層)	底径 6.3			外面　ハケ　ハケによるナデ 内面　ヨコナデの後指ナデ　指頭圧痕	細砂含む	外面灰褐色 内面茶褐色	完存	内面スス付着
135－7	(底部)	砂礫(下々層)	底径 8.1			外面　ハケ　ヨコナデ　指頭圧痕 内面　ナデ	細砂含む	黄褐色	完存	外面スス付着
135－8	(底部)	砂礫(下々層)	底径 7.9			外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ハケ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	完存	
135－9	(底部)	砂礫(下々層)	底径 7.9			外面　ハケ　ヨコナデ 内面　ヨコナデ　指頭圧痕	粗砂含む	黄褐色	50	
135－10	(底部)	砂礫(下々層)	底径 8.8			外内面ともナデ	粗砂含む	外面黄褐色 内面黒色	90	内面スス付着
135－11	(底部)	砂礫(下々層)	底径 5.6			外面　ナデ　ハケ　ヨコナデ 内面　ナデ	微砂含む	暗黄褐色	75	外内面スス付着

第135図は下々層の弥生土器の蓋と底部。１～10は前期、11は中期と推定される。１は傘形の蓋。２～４は壷の底部。５は焼成後に底の外面より穿孔している。

ミニチュア土器は11個ある（第114図１～３・５・７～12・14)。各層から出土している。壷、甕、鉢、蓋と各種存在する。第114図１・２は壷で、１はすぼまる口縁部をもち、２は肩部にヘラで３条と２条の平行直線文をもつ。３・５・７は鉢で、３は体部が外開きとなり、口縁部は丸く立つ。５は体部が丸くなり、口縁部は直立する。７は口縁部が外反する。ハケで内外面を丁寧に調整されている。８～10は底部。11・12は脚をもつもの。14は蓋で、傘形を呈す。土錘には大小２個ある（第115図１・２)。１は大形品。紡錘車は２個（第116図1・2）あり、弥生土器の再利用である。２は不整形のもの。円形土製品は８個ある（第116図５～12)。径４～６cmで、弥生土器片を丸く加工している。重さ12.9～33.6ｇ。１～３mmの砂粒を多く含むので、前期と推定される。

石製品は23点ある。第136図は全て黒曜石で、１は無茎凹基式の石鏃。２はバルブを大きく残す横長剥片で、片面に細い剥離が加えられ、掻器とみられる。３は腹面に調整を加えた楔形石器。４は２辺に敲打状の細かいつぶれがある。５～８は剥片で、一部使用痕がある。第137図１は玄武岩製の磨製石斧で、刃部は使用による剥離が著しい。２～４・９は穂摘具とみられる。２は両面からの穿

孔が１つ残り、全面を研磨される。３は表面と裏面刃部に細かい研磨がされ、４は研磨はされず、刃部に細かい剥離が残る。９は一部残る刃部のみが両面から研磨される。５～８・10は擦切り痕をもつ板状石材で、５は片面に浅く円形の凹がみられる。穿孔途中と思われるが、中央に円形の高まりが残るため、錐状工具での穿孔とは異なり、弧状の研磨により大きい孔をくり抜こうとした可能性がある。６は下部を欠損するが、厚さ１cmの全面を研磨された石材を幅約１cmの棒状に擦切る途中のもので、両面に浅い擦切り溝を残す。８は研磨されず片面に擦切り痕をもち、タガネ状のもので裁断されている。11は側縁に自然面を残す安山岩の横長剥片で調整痕がある。12は一面使用の砥石で、周囲を欠き、砥面の中央に敲打痕がみられる。13は石錘と考えられる滴状の磨製石器で、上部に幅１mm程度の溝が半周するが、抉りにしては浅い。14は丁寧に研磨された径約4.7cmの玉石で、断面はやや楕円形を呈す。石材、用途は不明。第138図は桃色を呈する安山岩（中海に面する松江市大海崎町付近で採れる石）の大形の重りで、川舟の碇として使用されたものであろう。表面には敲打による縄止めの十字の溝をもち、溝底は一部摩滅する。表面全体には敲打痕を残し、底部は平らに加工され、断面はつぶれた楕円形である。重さは約９kg。時期は弥生時代中期頃か。

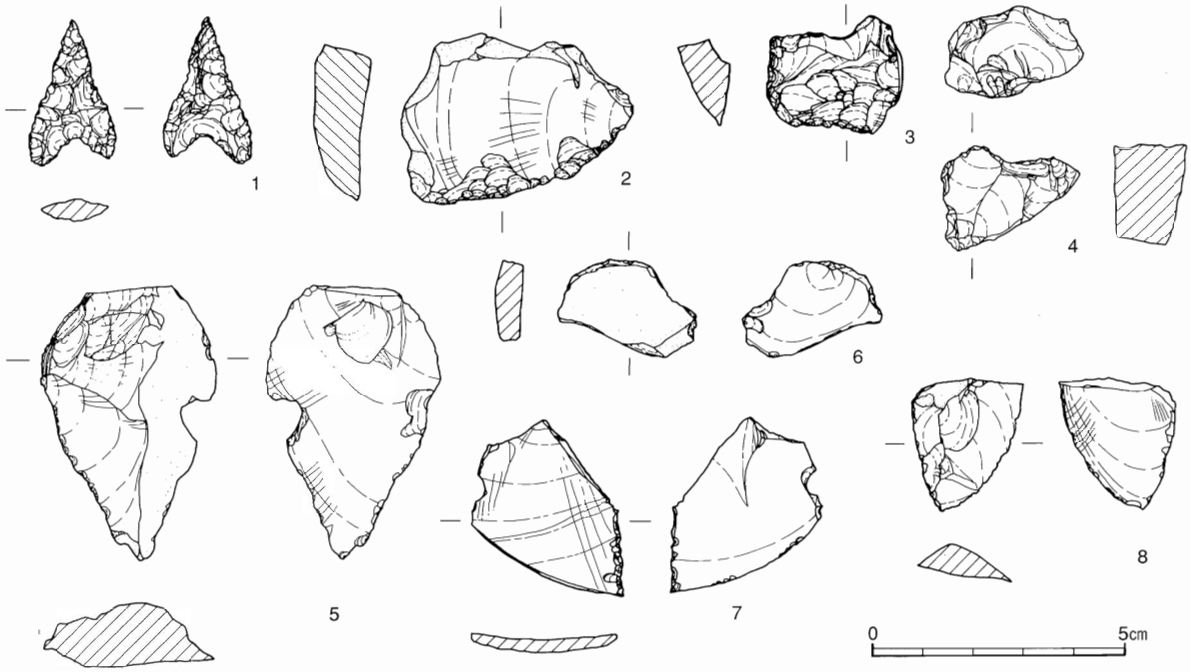
木製品には櫛、容器、農具などがある。第119図１は弥生時代の結歯式縦櫛である。頭部の先端と歯は欠損している。頭部の幅は3.9cm、厚さ0.6cmで、先端に向かってすぼまる。竹ひごを並べ、繊維で固定し、朱漆で塗り固めている。２は木製の箱で、小口板と側板の一部が残る。小口の上幅9.1cm、下幅６cm、高さ7.6cmで、外面の上端中央部には厚さ0.6cm、径2.0cmの円形の突起がある。中央部に径0.7cmの孔が両面から穿たれている。側板は現存長16.5cmで、小口側と中程の３ヶ所で、４条の平行直線文を刻んでいる。幅１mm、深さ１mm弱の細い線である。３の木製品は残りが悪く、全体形は不明。現存長8.1cm、幅3.1cm、厚さ1.3cmである。先端部は尖っており、加工痕が良く残る。欠損している所は円形にくり抜かれている。第139図は弥生時代の農具などである。１、２は泥除の未製品である。突起はあるが、柄孔は開いていない。１は上縁は直線に加工されているが、その他の部分は丸く仕上がっている。縦27.6cm、横31.9cm、厚さ2.6cm。２は上縁と刃縁は直線に加工されているが、両側は丸く仕上がっている。縦25.6cm、横33.2cm、厚さ3.4cm。３は直柄鍬の破片。柄孔は径3.4cmで、厚さ2.2cmで、斜めに開けられている。４は直柄鍬の未製品で、突起はあるが、柄孔は開いていない。平面形は長方形を呈し、縦32.1cm、横21.6cm、厚さ5.2cmを測る。５は直柄鍬の製品である。突起と上縁面の多くは残るが、刃縁は欠く。柄孔は径3.1cmで、厚さ2.9cmで、斜めに開けられている。６は直柄鍬の製品である。柄孔の部分のみ残る。柄孔は径3.2cmで、厚さ2.7cmで、斜めに開けられている。裏側に泥除装着装置が付く。７は直柄鍬の製品である。突起部分と刃縁部の一部が残る。縦約12.0cm、横約9.9cm、厚さ0.3cmで、柄孔は径3.1cm、厚さ2.9cmで、斜めに開けられている。８は木製用具の支脚。長さ18.6cm、接合部の径7.2cmで、先端に至るほどすぼまる。先端にかけて少し外に反る。接合部の上面の取付け部は断面U字に抉られ、接合するための加工である。９、10は漆塗椀である。

第140図１は弥生時代の杵。完形品であるが、一方側の半分は二次的に火を受けて表面が炭化している。長さ144.0cm、最大径7.5cm、最少径3.6cmを測る。２は弥生時代の橇（そり）。ほぼ完形で、滑板は長さ203.0cm、最大幅16.0cm、厚さ8.5cmである。上面の突起は４個付き、柄孔がそれぞれに穿たれている。穴には横桟の部材が残る。加工痕は随所で認められるが、表面は丁寧に仕上げられている。

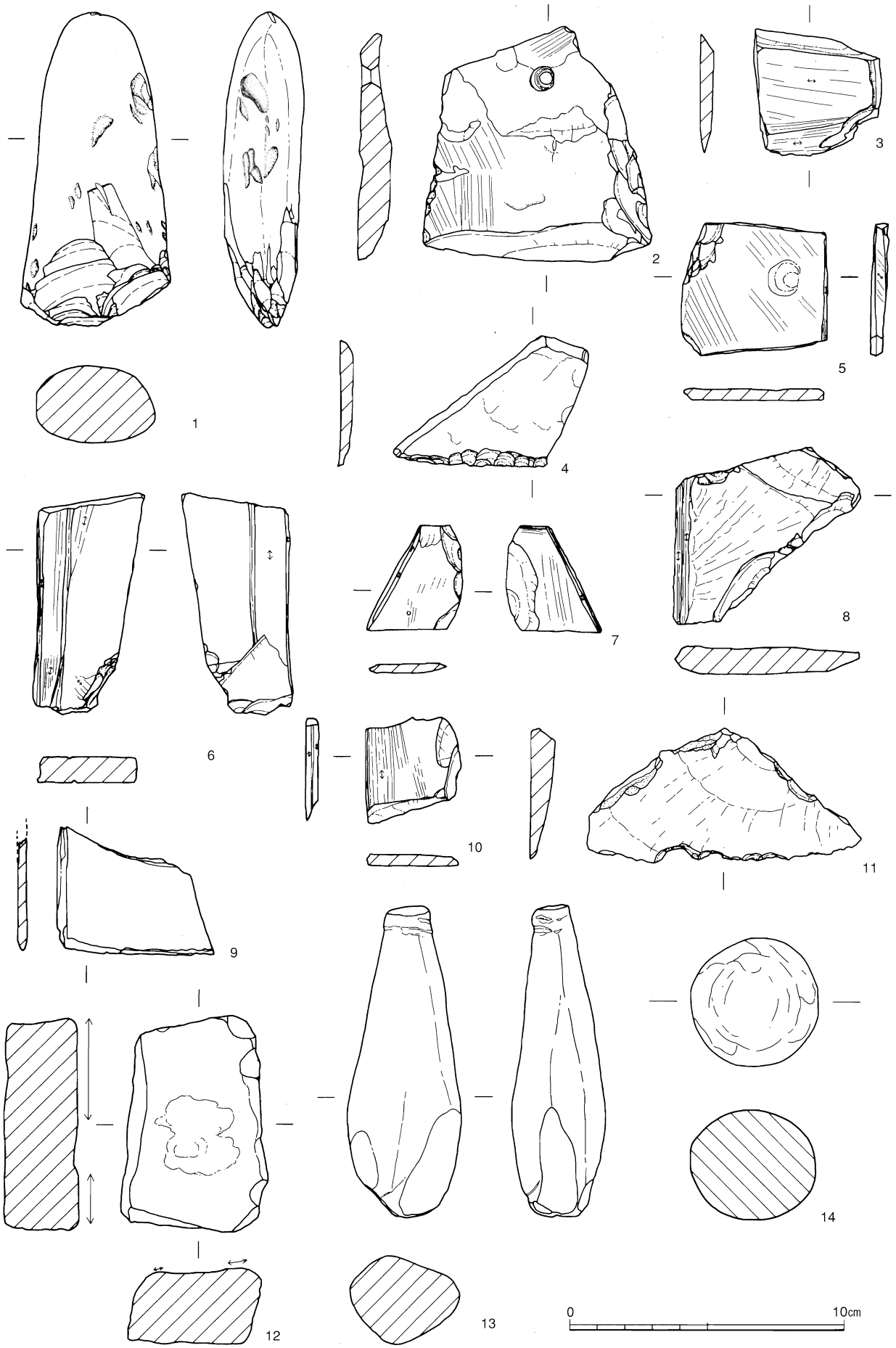
(注)

(1) 島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅰ　1980

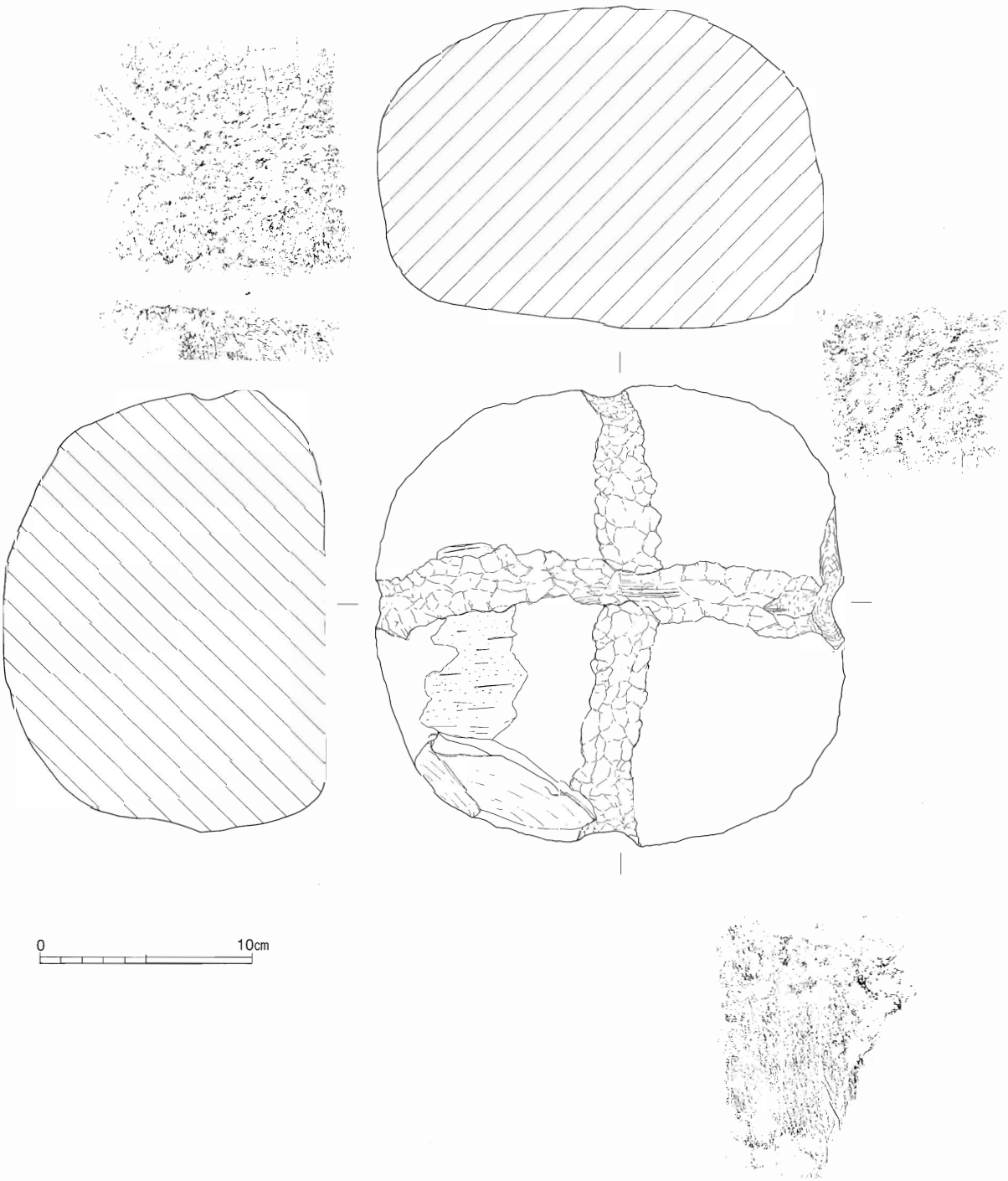
(2) 島根県教育委員会『朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11冊
－西川津遺跡－』Ⅵ 1999



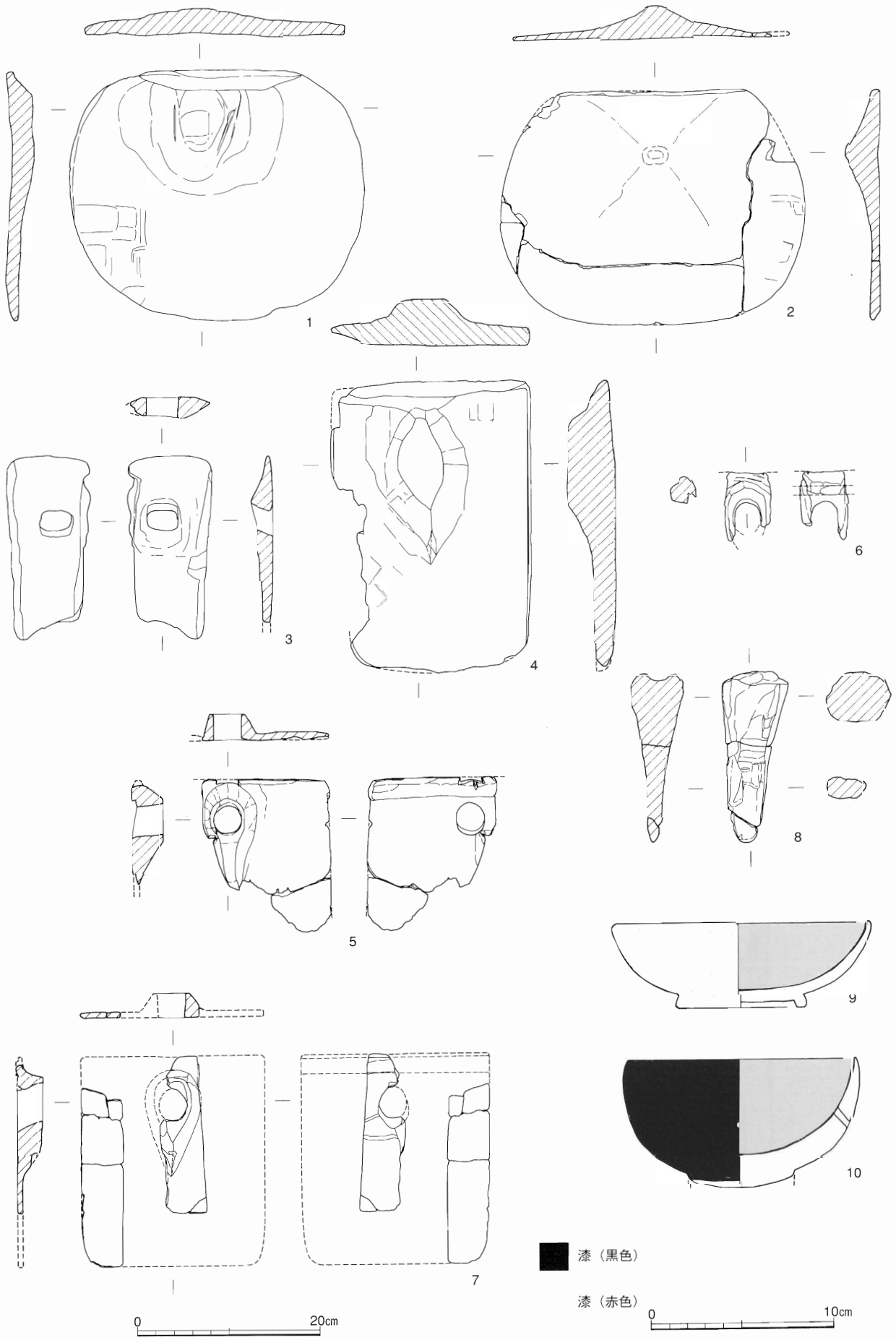
第136図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層出土石製品実測図（1）



第137図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層出土石製品実測図（2）



第138図　Ⅲ区（左岸）C調査区　砂礫層（下層）出土石製品（重り）実測図



第139図　Ⅲ区（左岸）調査区　砂礫層出土木製品実測図（1）

第140図　Ⅲ区（左岸）C調査区砂礫層出土木製品実測図（2）

表 39 Ⅲ区（左岸）C調査区砂礫層出土石製品観察表

挿図番号	種　別	層　位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備　考
136－1	石鏃	砂礫（下層）	2.9	1.7	0.4	1.2	黒曜石	
136－2	掻器？	砂礫	3.4	4.6	1.1	16.3	黒曜石	
136－3	楔形石器	砂礫（上層）	2.3	2.7	0.9	5.6	黒曜石	自然面あり
136－4	楔形石器？	砂礫（上層）	2.0	2.7	1.4	8.5	黒曜石	自然面あり
136－5	剥片	砂礫（上層）	5.5	3.4	1.2	16.6	黒曜石	自然面・使用痕あり
136－6	剥片	砂礫（上層）	1.9	2.8	0.5	2.8	黒曜石	節理面・使用痕あり
136－7	剥片	砂礫	(3.5)	(2.9)	0.3	3.5	黒曜石	使用痕あり
136－8	剥片	砂礫	2.6	2.3	0.6	3.5	黒曜石	調整あり
137－1	石斧	砂礫（下層）	10.4	4.3	2.8	238.8	玄武岩	
137－2	穂摘み具	砂礫（上層）	8.6	8.2	1.1	86.2	頁岩	
137－3	穂摘み具？	砂礫（上層）	4.7	5.1	0.5	18.4	頁岩	
137－4	穂摘み具？	砂礫（上層）	4.8	(7.0)	0.5	18.5	頁岩	
137－5	穂摘み具未製品？	砂礫（上層）	4.9	5.3	0.4	20.9	頁岩	穿孔途中？
137－6	擦切未製品？	砂礫（上層）	8.1	4.0	0.9	53.8	頁岩	両面から擦切途中
137－7	剥片	砂礫（上層）	3.9	3.4	0.4	8.0	頁岩	擦切痕あり
137－8	剥片	砂礫	(6.5)	(6.7)	1.0	44.4	流紋岩	擦切・タガネ状裁断あり
137－9	穂摘み具	砂礫（下層）	(4.7)	(5.7)	0.4	17.4	頁岩	
137－10	剥片	砂礫（上層）	(4.8)	(3.5)	0.4	20.9	流紋岩	擦切痕・擦痕あり
137－11	剥片	砂礫（上層）	4.8	9.9	0.9	33.3	安山岩	調整あり
137－12	砥石	砂礫	(7.9)	(5.3)	2.8	171.2	凝灰岩	1面使用
137－13	石錘？	砂礫（上面）	11.4	4.1	3.2	156.0	砂岩	
137－14	石玉	砂礫（上層）	径4.7	－	4.0	89.7	不明	
138	重り	砂礫（下層）	22.0	22.2	16.1	9,000		敲打痕あり

表 40 西川津遺跡Ⅲ区（左岸）C調査区砂礫層出土木製品観察表

挿図番号	種　別	層　位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ／太さ(cm)	形態・手法の特徴	木取	備　考
139－1	泥除未製品	砂礫（上層）	27.6	31.9	2.6	表面に加工痕あり	板目	
139－2	泥除未製品	砂礫（上層）	25.6	33.2	3.4	表面に加工痕あり	板目	
139－3	直柄鍬	砂礫（下々層）	20.1	9.1	2.3	舟形突起なし	板目	中央部のみ残存
139－4	直柄鍬未製品	砂礫	32.1	21.6	5.2	舟形突起あり	板目	
139－5	直柄鍬	砂礫（上層）			3.4	舟形突起あり　歯あり　上辺中央に抉り	板目	欠損
139－6	直柄鍬破片	砂礫（下々層）	7.7	5.0	2.8	舟形突起あり　歯あり	板目？	突起部のみ
139－7	直柄鍬	砂礫（下々層）			2.5	舟形突起あり　歯あり	板目？	欠損
139－8	支脚	砂礫	18.6	径7.2		上面に幅広の溝	？	
139－9	漆塗椀	粘土	口径13.8	底径7.2	器高4.7	外面　黒漆塗後赤塗 内面　黒漆塗後赤塗	柾目	
139－10	漆塗椀	粘土	口径12.4	底径5.8	器高7.1	外面　黒漆塗 内面　黒漆塗後赤塗　器壁に孔1あり	柾目	
140－1	竪杵	砂礫	144.0	径7.5		中央部を細く加工	芯持	下端摩耗 一部炭化する
140－2	櫂	砂礫（上層）	203.0	16.0	高8.5	隆起部4 磨り板は摩耗する 加工痕あり	柾目	二葉マツ

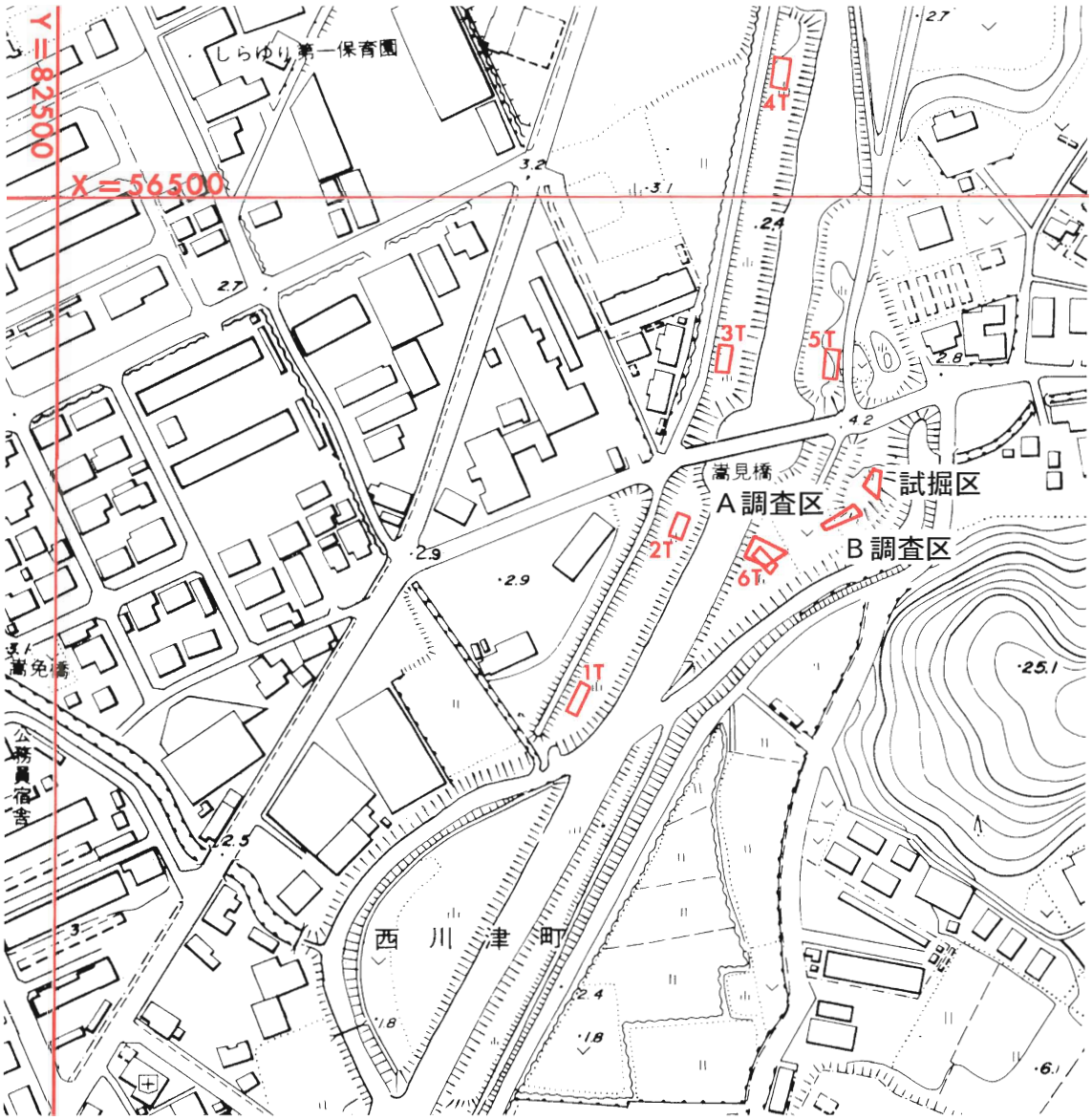
第６章　Ⅳ区の調査

第１節　調査経過と調査概要

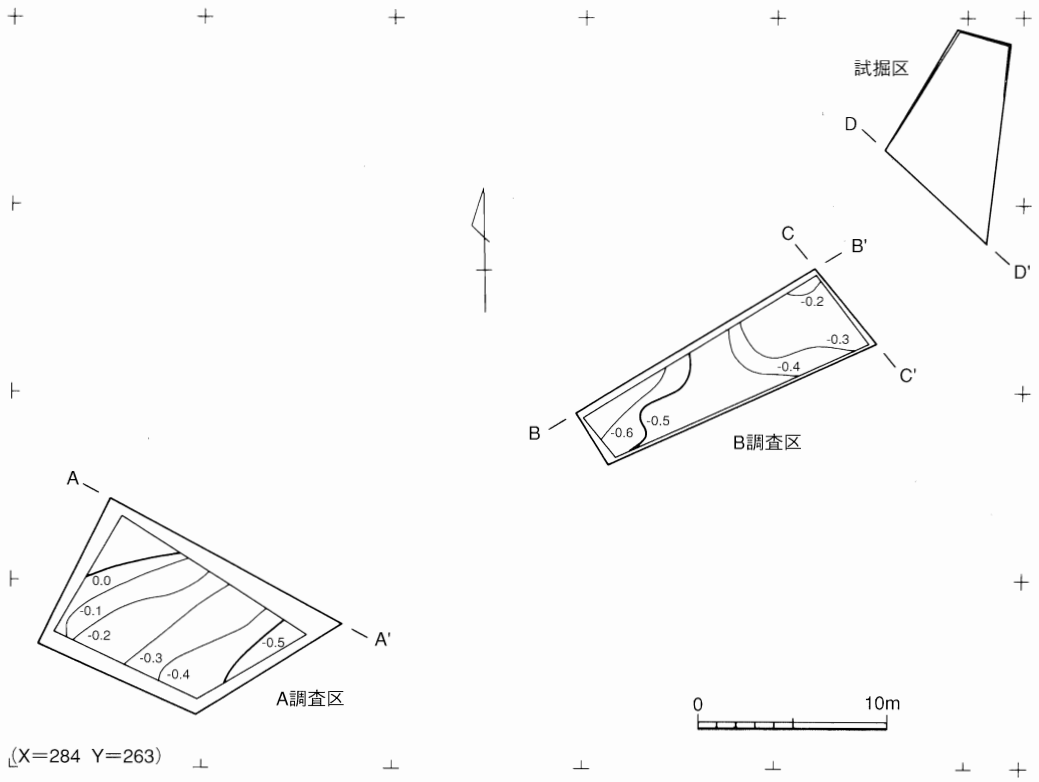
調査経過

西川津遺跡Ⅳ区は朝酌川に架かる嵩見橋（だけみばし）の付近の大内谷地区に位置する。大内谷集落の出口に当り、遺跡の現状は河川敷である。1993年度にトレンチ調査が実施され、朝酌川右岸からは遺物は発見されなかった。左岸側については、嵩見橋の下流部で、現在流れている川部分と旧河川との間（６トレンチ）において、東南に傾斜する古墳時代中期から後期にかけての河跡肩口部を検出した。遺物としては須恵器、土師器、木製品が少量出土している(注1)。島根県土木部では、1995年に、朝酌川の河川改修に伴い大内谷集落を流れる小さい河川を嵩見橋東詰め下流部流路へ変更することとなった。これを受けて県教育委員会は1995年11月に発掘調査を実施した。

調査対象地としては、1993年度の６トレンチ部分をＡ調査区、その東の旧朝酌川沿いの荒地をＢ調査区とし、さらに東の旧河川の隣接地には試掘溝を入れた。Ａ調査区は南北11m、幅は最大７m、

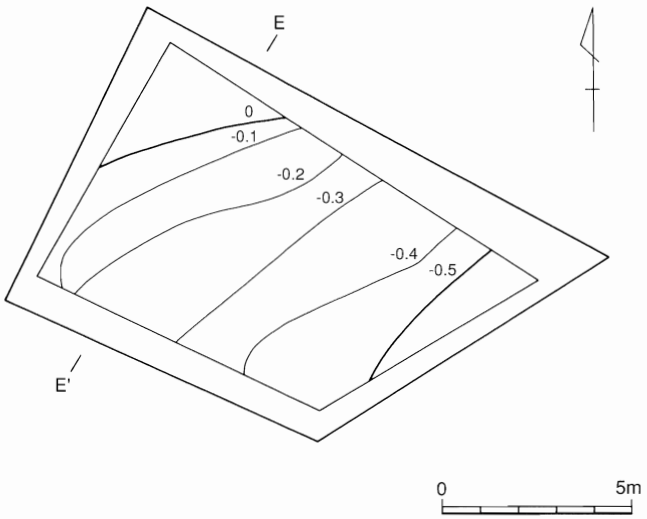


第141図　Ⅳ区試掘・本調査区位置図



第142図 Ⅳ区調査区位置図

最小６ｍで、従来どおり長さ７ｍの矢板を調査区の周囲に打ち込んだが、南側は矢板が半分程度しか入らなかった。その原因はⅡ区左岸のＢ－１調査区でも確認された様に、丘陵から伸びる岩盤が浅い所に存在するためであった。東側のＢ調査区は河跡に接するため東西15m、幅は最大５ｍ、最小３ｍの東西に細長い調査区とした。この場所は丘陵付近で、比較的高い位置なので、矢板は打たずに調査を行った。また、その東側は新しい時代の河跡と推定されるため、堆積土層の観察を重点に置いたトレンチ調査(試掘区）にした。大きさは横３～７ｍ、縦８ｍで、深さ2.5mである。堆積した土砂は近世以降のものである。なお、この区は水田の耕作土から遺物を含む粘土層と砂礫層まで人力で掘り下げた。



第143図 Ⅳ区A調査区測量図

調査概要

Ａ調査区で検出した遺構は、古墳時代の河道跡とこれを削り込んでいる中世から現代まで流れていた河道跡である。その河道跡は北東から南西の方向で認められ、Ｂ調査区の最下層には前記した丘陵から伸びる岩盤がある。その底部には中世以降の砂礫層が厚く堆積していた。その層は洪水時の強い水流で運搬され、堆積したものとみられる。出土品としては縄文土器から近世の陶磁器まで各時代の遺物がある。量は少なく、コンテナ６箱分しかない。この場所は、江戸時代前半までは河川敷であったが、江戸時代後半に客土が入れられ、水田になった。しかし、Ⅱ区にあった護岸用の杭などは存在しなかった。なお、明治期作成の切図(第152図）には、川沿いの部分が小さい番地に区切られている。これは水田を拡張したことを物語っており、発掘においても、Ｂ調査区の北側の表土部分で排水用の陶器製土管を検出している(186頁写真)。近代以降にも、Ｂ調査区付近の河川敷が埋められ、さらに川幅が狭められてきたのである。

第２節　各調査区の遺構と遺物

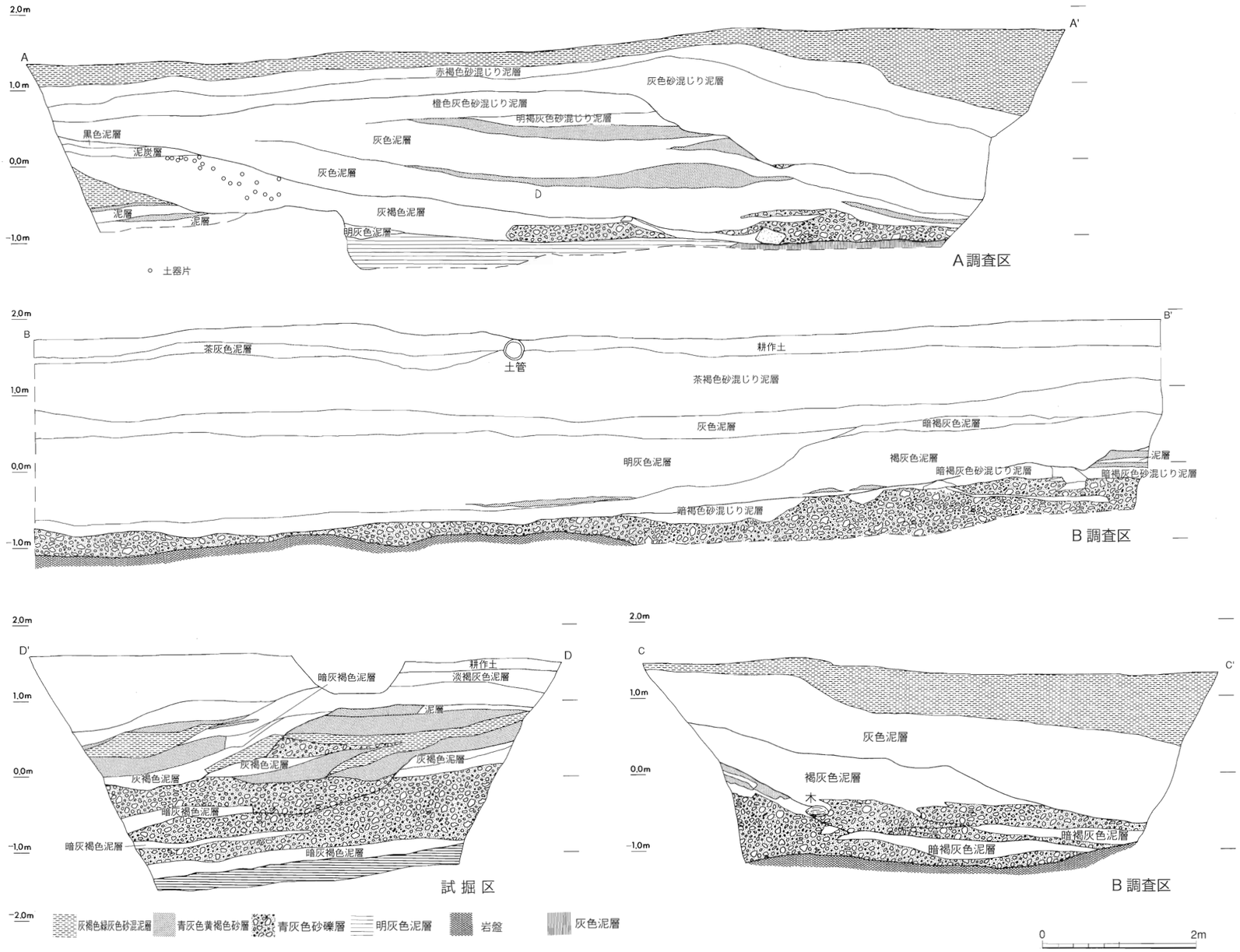
（１）Ａ調査区

Ⅳ区の南側に当たり、嵩見橋東詰の下流の河川敷に位置する。調査区の中程から南にかけて1993年度の６トレンチがある(第141図)。この場所で古墳時代の河道の肩口部を検出し、遺物を発見したので、遺物の範囲と河道の様子を把握することとした。

古墳時代の河川の肩口部は東南に傾き、その角度は20°である。この傾斜で川底へ向かうとすると、川跡は南側の丘陵部との間となる。1993年度の範囲確認調査では、朝酌川は旧河道とほとんど同じであり、流路を変えていないことが知られた。また、下流のⅢ区の調査成果からすると弥生時代より現代までの川は嵩見橋東詰から丘陵の狭い部分を流れていたと考えられる。ただし、川津の平野にはこの流路だけとはいえず、北側の金崎古墳群がのる丘陵付近に分流していた可能性も残されている。土層堆積状況は北壁(第144図）をみると、西端の標高０ｍからマイナス60cmに砂礫層がある。これを切って、古墳時代の河道が存在する。この河道には厚さ２ｍの泥層が２、３層の薄い砂層を挟んで斜めに堆積している。古墳時代後期の須恵器などの土器は、砂礫層を切っている古墳時代の河道に最初に堆積した泥層の上面に点在している(第146図)。須恵器や土師器の完形に近い杯や高杯は標高マイナス20～30cmにあり、水辺に廃棄されたものであろう。甕は調査区内の広い範囲に分布する。また、調査区南側では、これらの古墳時代後期前後の泥層を、さらに切り込んだ新しい河道が存在する。その時期は、遺物が出土していないため特定できない。

Ａ調査区の泥層出土遺物（第145・148図）

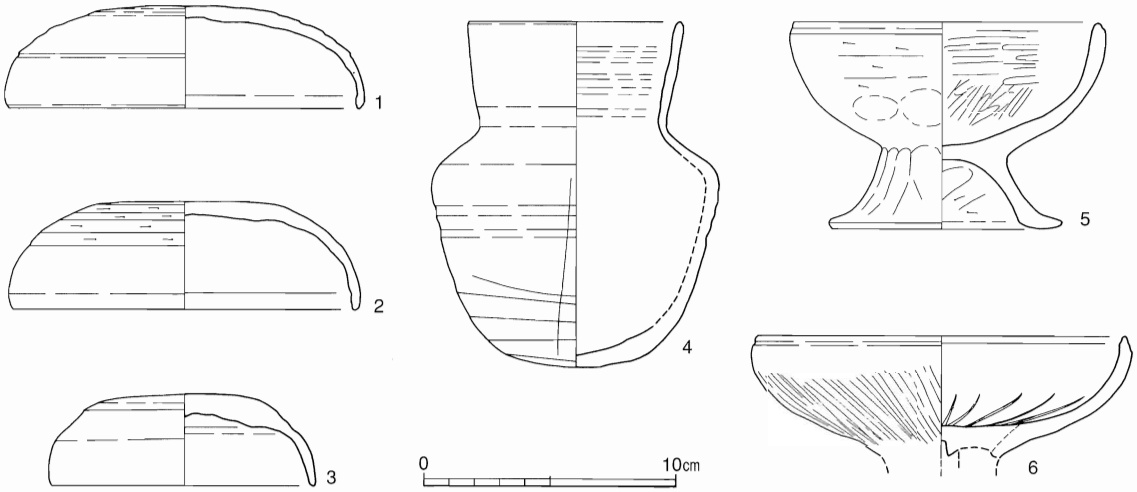
泥層からは須恵器と土師器が出土している。第145図の１は須恵器の蓋杯の蓋。天井部外面はヘラで削られ、口縁部との境にはかすかに段が付く。２は須恵器の蓋杯の蓋。天井部外面はヘラで削られ、口縁部内面にはかすかに段が付く。３は小形の蓋杯の蓋。４は直口壷。口縁部は真っすぐに立ち上がり、肩部はなで肩となる。底部はヘラで削られ、丸くなる。５は土師器の高杯。口縁部はゆるやかに立ち上がり、口唇部外面はかすかに段が付く。脚部は短く、ハの字に踏ん張り、外面はヘラでなでられ、内面は削られている。同様な形態は隠岐島前でみられる(注2)。搬入品と推定される。６は土師器の高杯。杯部は浅く、口縁部はゆるやかに立ち上がる。口唇部内外面にはかすかな段が



第144図　Ⅳ区A調査区（北壁）・B調査区（北壁・東壁）・試掘区（南壁）土層堆積図

付く。脚部は欠く。なお、この他に須恵器甕の破片が一個体分出土している。

A調査区とその付近の砂礫層からは縄文土器の深鉢や弥生土器の壷及び土師器の高杯（第148図6・8・16）などの破片が出土している。



第145図　Ⅳ調査区A調査区　出土土器実測図

表 41　Ⅳ区 A 調査区出土土器観察表

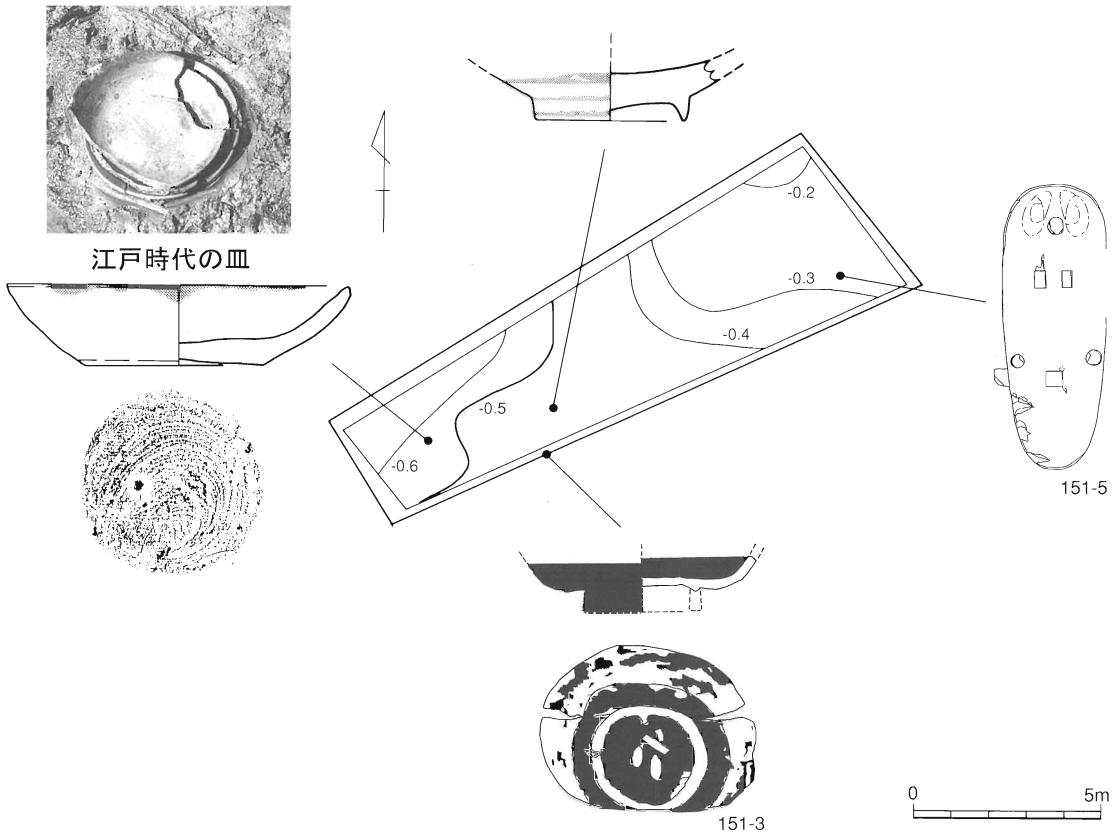
挿図番号	器　種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
145－1	須恵器杯蓋	泥層	13.8 天井径6.1	4.0	天井部と口縁部との境に段	外面　回転ナデ 内面　回転ナデ　ナデ	粗砂含む	青褐色	30	
145－2	杯蓋	泥層	13.3 天井径6.5	4.3	口縁部内側に段　天井部外面に格子状の文様	外面　丁寧なヘラケズリ 内面　ヨコナデ　回転ナデ	微砂含む	灰？褐色	60	
145－3	杯蓋	泥層	10.1 天井径6.5	3.6	天井部外面に×印	外面　回転ナデ　粗いケズリ 内面　回転ナデ　ナデ	粗砂含む	青灰色	98	小形品 ほぼ完形
145－4	壷	泥層	8.4 底径5.5	13.8	直口壷 口縁部は直立する　外面に×印	外面　回転ヘラケズリ 内面　回転ナデ	密	灰褐色	95	ほぼ完形
145－5	土師器高杯	泥層	12.6 底径9.1	8.2	口縁部はゆるやかに立ち上がり　脚はハの字に開く	外面　ナデ　ケズリ　ミガキ　ヨコナデ　回転ナデ 内面　ハケ　ミガキ　ハケの後ミガキ	粗砂含む	赤褐色	70	磨滅する
145－6	高杯 (杯部)	泥層	14.5		底部内面に放射状の暗文が付く	外面　ハケ　ヨコナデ	密	橙褐色	40	

（2）B調査区

A調査区の東側に位置し、南は旧朝酌川である。この調査区では、遺構は認められなかった。堆積層の下部には中世の土師質土器や陶磁器があり、上層の江戸時代の河川敷からは下駄や漆椀の木製品、日本産陶磁器、さらに当時の水際では、手向けた３枚重ねの土師質土器が発見された。同じ大きさの小皿で、３枚重ねの一番上には灯明皿に使われた土器を置くが、何らかの意図で河原に投棄されたものであろう。この土器以外は全て上流部から流れてきた遺物である。

土層図（第144図）でも、川岸に見られる泥層が斜めに堆積していた。

第146図 Ⅳ区 A調査区遺物出土状況実測図



第147図　Ⅳ区　B調査区測量図・遺物出土位置図

B調査区の砂礫層出土遺物（第148～151図）

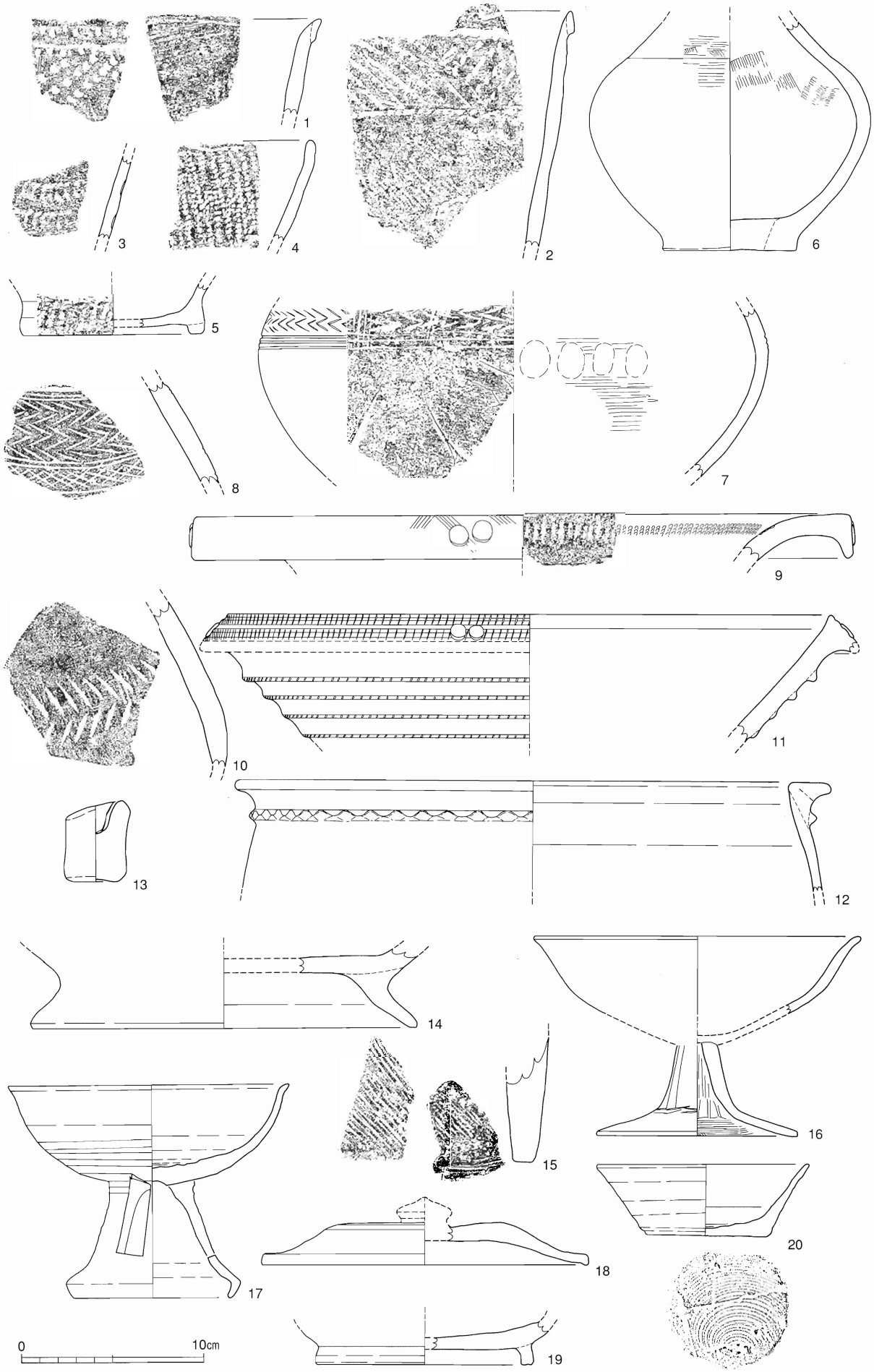
砂礫層からは土器、陶磁器、石製品、木製品が出土している。

土器と陶磁器には、縄文土器から江戸時代の陶磁器までがある（第148図）。

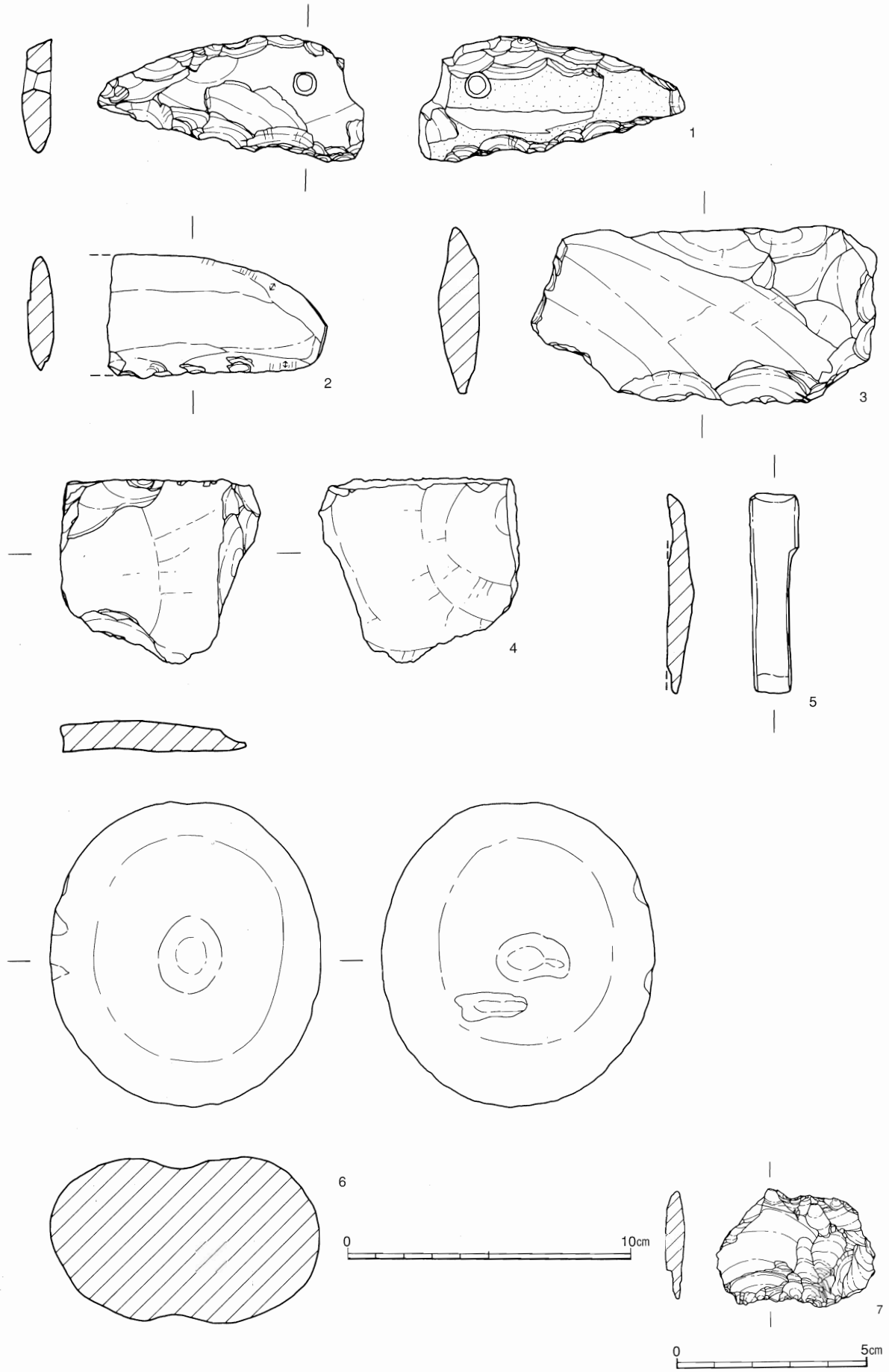
１～５は縄文土器の深鉢で、１、３は前期に属する。５は底部。７、９～12は弥生土器。７は前期の壷、９・10・12は中期の壷。11は鉢。13はミニチュア土器。14は脚付の土器。土師器か。15は円筒埴輪の破片。16、17は古墳時代の高杯で、前者が土師器、後者が須恵器。18～20は奈良時代より平安時代初めの須恵器で、18は蓋、19は高台をもつ杯、20は糸切りの杯である。

石製品は13点を図示した。第149図１は穂摘み具で、両面が研磨されているが、表面は節理によって薄く剥離し、周囲も使用に伴うとみられる深い剥離がほぼ全周する。両面穿孔の孔を一つ残し、中央から欠損する。２は両面を研磨された石鎌。３、４は玄武岩の剥片。５は両面がやや剥離し、長さ7.1cm、幅1.7cmと小形だが、磨製石斧とみられる。片側面は階段状に研磨される。６は偏平な楕円球状につくられた凹石で、両面中央に径2.3cmほどの窪みが残っている。７は黒曜石の剥片で、下方から両面に細かな剥離が行われ、非常に薄くされている。掻器とした。第150図１はひん岩製の局部磨製石斧で、刃部を欠損する。２は片刃の磨製石斧の刃部で、閃緑岩製。３は凝灰岩製の石剣とみられ、両面に鎬をもつが、全体に摩滅するため刃部は丸い。４は磨製石斧の欠損品。５は石斧の未製品で、鎬打痕や粗い剥離が認められる。６は穂摘み具で、両面穿孔の孔を一つ残し、欠損している。片面が研磨され、刃部は使用により摩滅している。

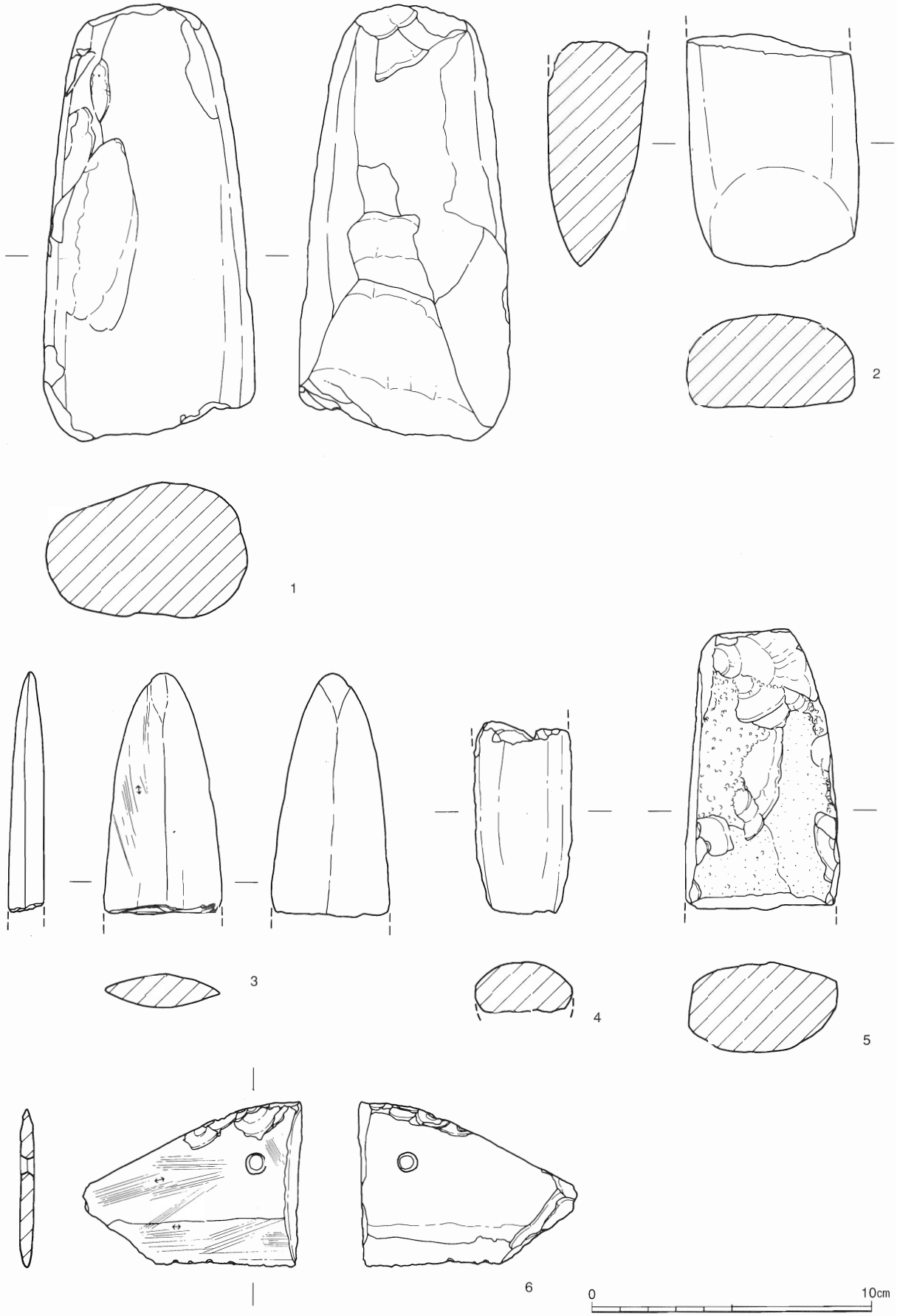
木製品には椀、下駄などがあり、江戸時代頃の製品と推定される。第151図１は漆塗り平皿あるいは椀の蓋。外面は黒漆、内面は赤漆で仕上げ、外面に丸に三角形の紋が描かれている。色は丸が赤色で、三角形が茶色。２は椀。内外とも赤漆で仕上げる。３は漆塗り平皿あるいは椀の蓋。内外とも赤漆で仕上げ、高台の内側に黒漆で「六」を行書体で書く。４はスコップ状木製品で、本体は長方形で、深さは浅い。粗く削られている。５は女性用の下駄。親指の形が両方に残るが、右上の方



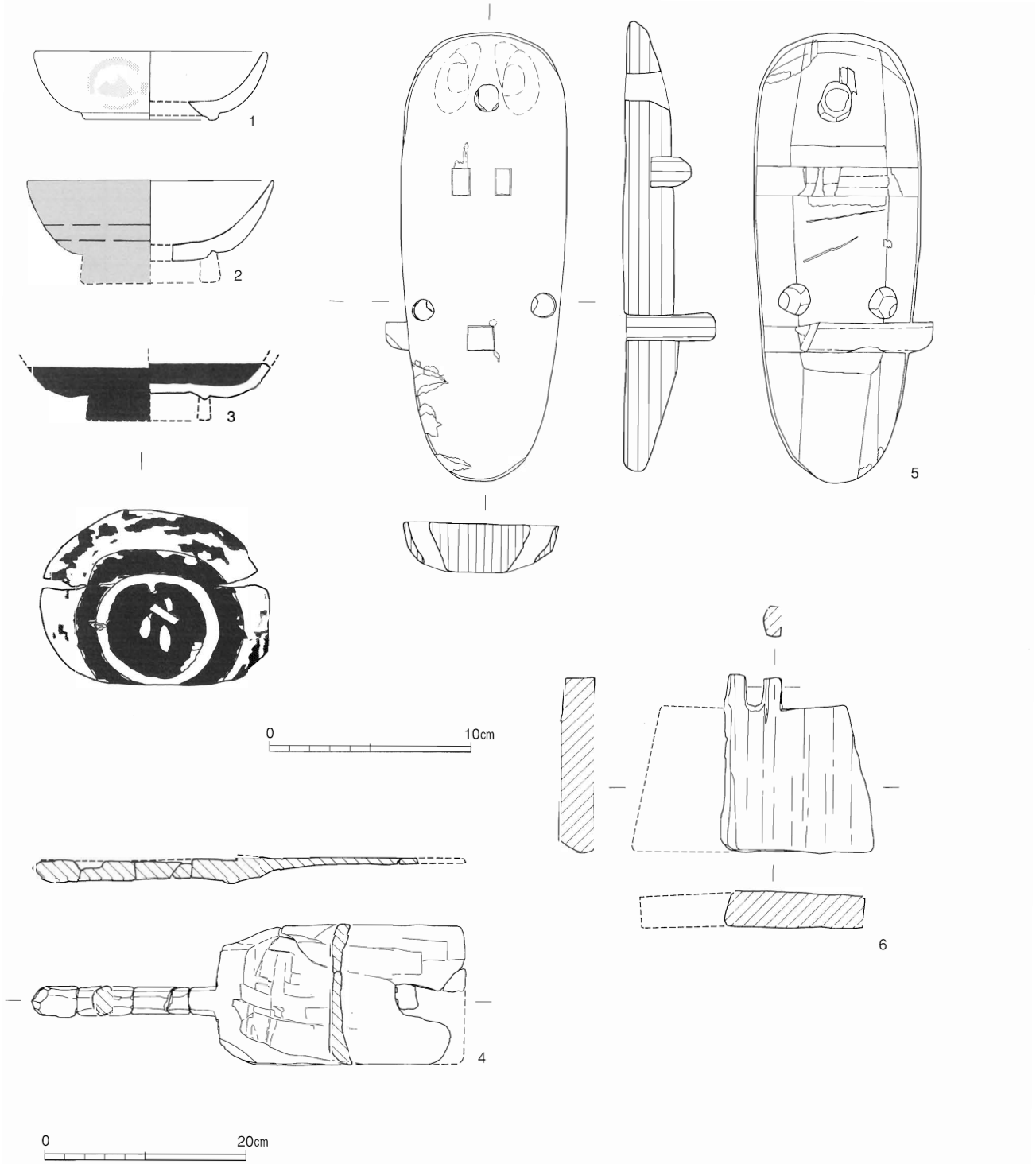
第148図　Ⅳ区　A・B調査区出土土器実測図



第149図　Ⅳ区　B調査区出土石製品実測図（1）



第150図　Ⅳ区　B調査区出土石製品実測図（2）



第151図　Ⅳ区　A・B調査区出土木製品実測図

が良く残るので、左足に履かれたことが多かったようだ。６は男性用の下駄の差し歯。台形を呈すが、一部は欠損している。上部の突起は２個残る。

（注）

(1)島根県教育委員会「西川津遺跡Ⅳ区（大内谷地区）の範囲確認調査」『朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－原の前遺跡－』　1995を参照。

(2)勝部昭・西尾克己「西ノ島・兵庫遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』Ⅸ 島根県教育委員会 1982
柚原恒平『兵庫遺跡第２集』西ノ島町教育委員会　1996

表 42 Ⅳ区出土土器観察表

挿図番号	器　種	調査区・層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調　整	胎　土	色　調	残存度(%)	備　考
148－1	縄文　鉢	B・砂礫			肥厚帯上にハッチング状のD字形刺突文　竹管状工具による刺突文	二枚貝による条痕	微砂含む	灰褐色		
148－2	鉢	矢板外部・砂礫			肥厚帯上にハッチング状の押し引き刺突文　斜行刺突文　連続刺突文	二枚貝による条痕	微砂含む	暗褐色		スス付着
148－3	鉢	B・砂礫			爪形文3列	内面　ナデ	微砂含む	暗褐色		
148－4	鉢	B・砂礫			口縁部は内弯しやや肥厚	外面　縄文 内面　ナデ	細砂含む	淡褐色		外面スス付着
148－5	鉢(底部)	B・砂礫	底径 9.9		上げ底	外面　縄文 内面　ナデ	細砂含む	暗褐色	35	
148－6	弥生　壷	A・砂礫	底径 7.3		外面にゆるい段	外面　ナデ　ハケの後ミガキ 内面　ナデ　ハケの後ナデ	細砂含む	灰褐色	35	
148－7	壷	B・砂礫			ヘラ描羽状文・平行直線文	外面　ヘラミガキ ? 内面　指頭圧痕　ヘラミガキ	細砂含む	外面淡褐色 内面暗褐色	12	
148－8	壷	A・砂礫			ヘラ描平行直線文・羽状文・斜格子文	内面　ナデ	粗砂含む	淡赤橙色		
148－9	壷	B・砂礫	33.1		凹線文3条上に刻目と円形浮文　貼付突帯上に刻目	外面　ヨコナデ 内面　ナデ	粗砂含む	黄褐色	8	口縁部外面に黒班
148－10	壷	B・砂礫			ハケ原体による羽状刺突文	外面　ナデ 内面　ハケ　ヘラケズリ	細砂含む	淡灰褐色		
148－11	鉢	B・砂礫	32.6		指頭圧痕文帯	外面　ヨコナデ　ナデ 内面　ヘラミガキ	細砂含む	黄褐色	10	
148－12	壷	B・砂礫	35.4		外面　櫛描文・鋸歯文・円形浮文 内面　3連の櫛描刺突文	外内面ともナデ	細砂含む	明褐色	12	
148－13	ミニチュア土器	B・砂礫	底径 3.0	4.1	内面　ヘラでえぐる ?	外面　ナデ 内面　ヘラケズリ	微砂含む	淡橙色		手捏ね土器
148－14	(高台付底部)	B・砂礫	脚径 21.0	2.5	高台はハの字に開く	内面　ナデ　ヨコナデ	細砂含む	暗褐色		
148－15	円筒埴輪	B・砂礫				外内面とも斜め方向にハケ	細砂含む	橙褐色		底部の破片
148－16	土師器高杯	A・砂礫	17.9 底径 11.0	11.0	口縁部は外へ外反し脚はハの字に開く	外面　ヘラミガキ 内面　ヘラミガキ　ケズリ　しぼり目　ハケ	細砂含む	杯部淡褐色 脚部赤褐色	40	
148－17	須恵器高杯	B・砂礫	15.4 底径 8.4	11.7	脚端部は内傾する	外内面とも回転ナデ	密	灰色	80	
148－18	蓋	B・砂礫	17.9	11.7	回転糸切り　つまみは欠く	外面　ヘラケズリ　回転ナデ 内面　ナデ	細砂含む	暗青色	25	
148－19	杯(高台付底部)	B・砂礫	底径 8.4	1.0	回転糸切り　高台が付く	外面　回転ナデ 内面　回転ナデの後丁寧なナデ	粗砂含む	暗青色	17	
148－20	杯	B・砂礫	11.6 底径 6.8	4.0	回転糸切り	外内面とも回転ナデ	密	灰褐色	85	

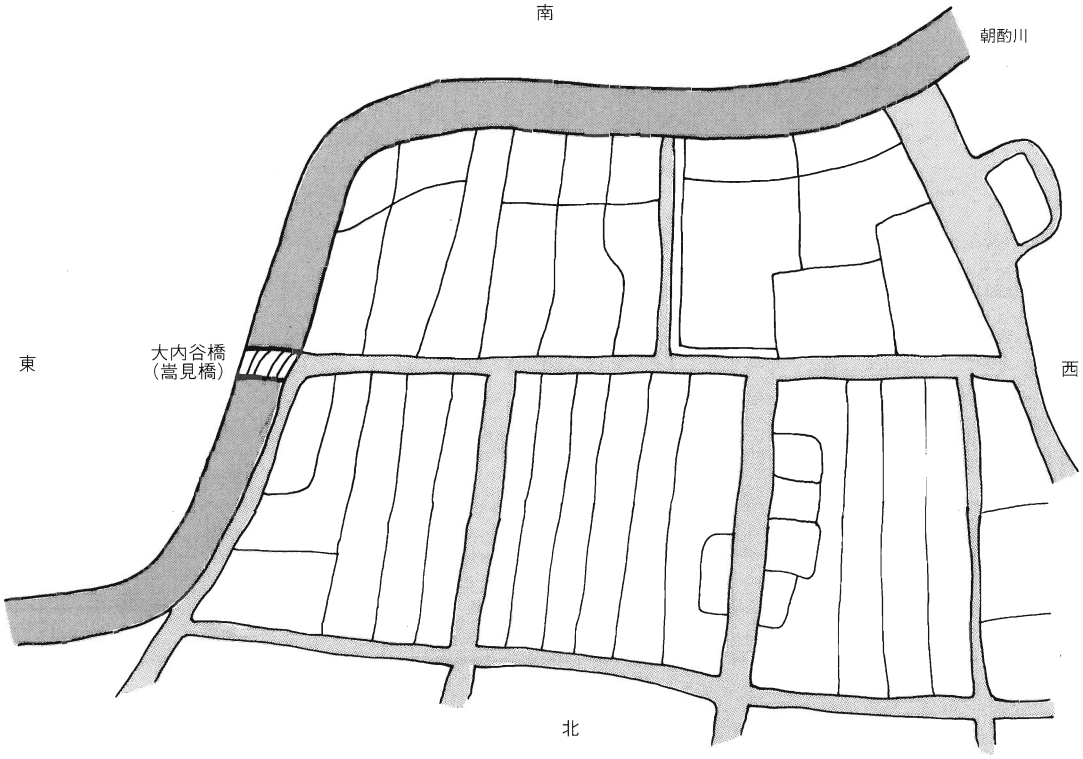
表 43 Ⅳ区B調査区出土石製品観察表

挿図番号	種　別	層　位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石　材	備　考
149 － 1	穂摘み具	砂礫	4.5	(9.3)	1.0	53.3	頁岩	
149 － 2	石鎌	砂礫（最下層）	(4.4)	(7.7)	0.9	48.7	玄武岩	
149 － 3	剥片	砂礫	6.4	12.1	1.4	141.4	玄武岩	
149 － 4	剥片	砂礫	(6.5)	(7.1)	1.0	60.2	玄武岩	
149 － 5	石斧	砂礫（最下層）	7.1	1.7	0.9	17.5	頁岩	
149 － 6	凹石	砂礫	10.8	9.6	5.8	835.7	凝灰岩	
149 － 7	掻器	砂礫	3.1	4.1	0.5	10.8	黒曜石	
150 － 1	石斧	砂礫	(15.8)	(7.5)	4.8	908.6	ひん岩	
150 － 2	刃石斧	砂礫（最下層）	(8.3)	(6.1)	3.3	294.4	閃緑岩	
150 － 3	石剣	砂礫	(8.7)	(4.2)	1.2	49.0	凝灰岩	
150 － 4	石斧		(6.9)	(3.5)	(1.8)	76.8	蛇紋岩	
150 － 5	石斧未製品	砂礫	(10.1)	(5.5)	3.2	302.2	玄武岩	
150 － 6	穂摘み具	砂礫（最下層）	(6.0)	(7.6)	0.5	36.8	頁岩	両面より穿孔

表 44 Ⅳ区出土木製品観察表

挿図番号	種　別	調査区・層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ／太さ(cm)	形態・手法の特徴	木取	備　考
151 － 1	漆塗平皿	B・砂	口径 11.4		高 3.4	外面　黒漆塗・赤漆と茶漆で文様 内面　赤漆（ベンガラ）	柾目	
151 － 2	漆塗椀	B・細砂	口径 12.2			内外面　赤漆（ベンガラ）	柾目	高台欠損
151 － 3	漆塗平皿	B・砂礫				内外面　赤漆（ベンガラ） 高台中央に黒漆「六」	柾目	口縁・高台欠損
151 － 4	スコップ状木製品	A・細砂	42.7	13.8		加工痕あり	柾目	未製品 ?
151 － 5	下駄	B・砂	22.4	8.3	4.6	差し歯を残す　摩耗する つま先部に指痕あり	柾目	
151 － 6	下駄差し歯	B・砂礫	高 8.8	7.6	1.7	差込突起２　台形状	柾目	

Ⅳ区　A調査区（北から）



第152図　Ⅳ区　付近切図（西川津村切図写）

旧朝酌川と排水管

第７章　自然化学分析

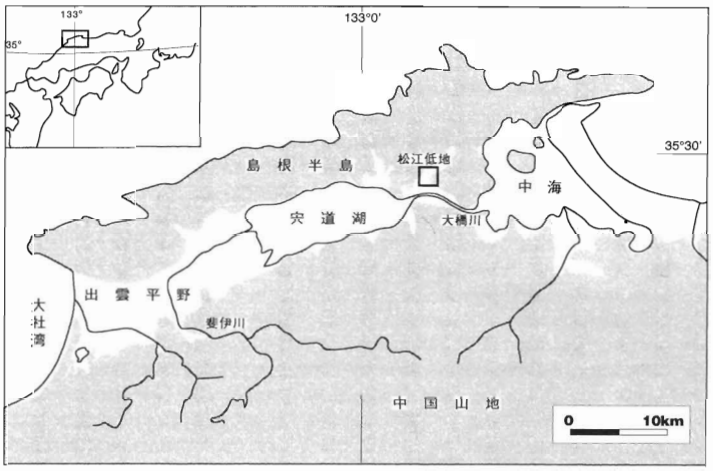
第１節　西川津遺跡の古環境変遷

中　村　唯　史

（1）はじめに

西川津遺跡をとりまく環境は縄文時代以降大きく変化してきた。

西川津遺跡は海岸沖積低地の松江低地に立地している(第153図)。海岸沖積低地は1万年前以降に、河川や沿岸流の堆積作用によって形成された地形で、東京や大阪の下町低地に代表されるように土地利用が盛んなことが多い。土地利用の歴史は、少なくとも水稲農耕の普及にまで遡ることができる。



第153図　調査位置

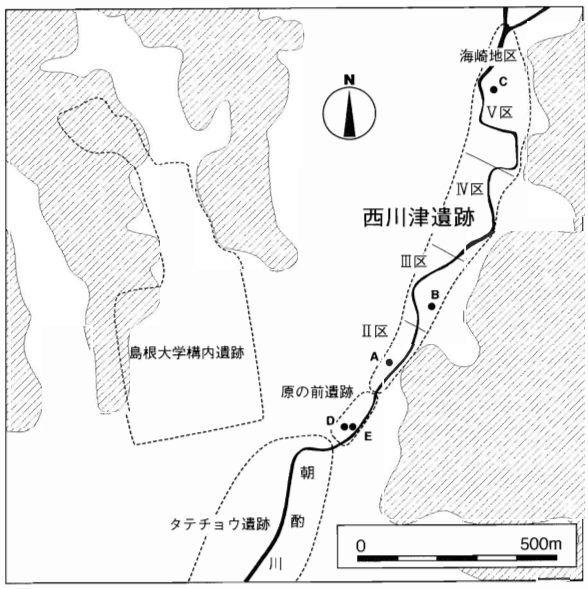
松江低地は東西に細長い宍道低地帯の一角にある。図中の囲み部分は第 154 図の範囲を示す。網掛部は山地・丘陵。

西川津遺跡では縄文時代の杭群や弥生時代の多様な農耕具が出土しており、古くからの沖積低地（あるいはその沿岸）の土地利用が想像される。本項では、西川津遺跡をとりまく環境の変遷を述べる。なお、本報告は島根大学総合理工学部の徳岡隆夫、中山勝博、三瓶良和の諸先生の指導の下に、中村（当時島根大学大学院生）が発掘調査に参加し、その成果をまとめたものである。

（2）地形と地質の概要

西川津遺跡が位置する松江低地は、中国山地北縁と島根半島に挟まれた宍道低地帯の一角にある。宍道低地帯には西から出雲平野、宍道湖、中海、弓ヶ浜砂州といった、大きな規模の沖積低地・潟湖システムが発達する。松江低地は宍道湖の東岸に発達する沖積低地で、それを南北に分断する形で、宍道湖と中海をつなぐ大橋川が流れる。

島根半島から流れ出る朝酌川が松江低地の北東部を流れ、西川津遺跡はその川沿いにある。また、西川津遺跡の南には原の前遺跡とタテチョウ遺跡の一連の低湿地遺跡がある



第154図　調査地区

A～Eは第 156 図のイオウ分析地点。

(第154図)。朝酌川は大橋川に合流して中海へ流出している。

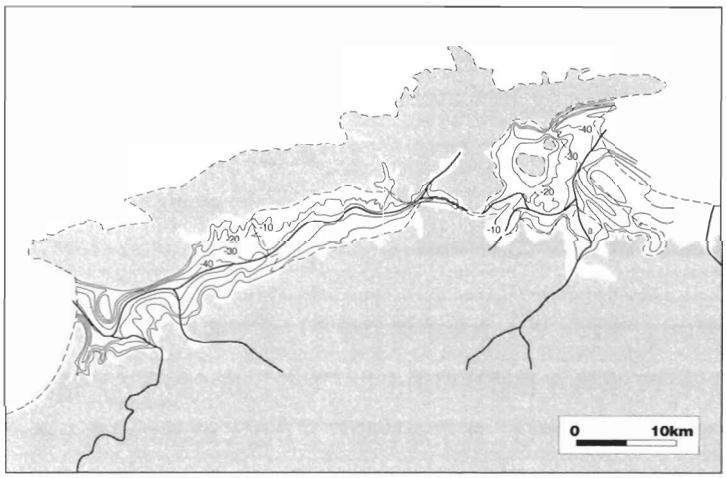
松江低地の地下地質は、基本的に下部が軟弱な完新統泥層からなり、その上に朝酌川の河川堆積層と、宍道湖岸および大橋川沿いに分布する砂州堆積層が重なる。ここでは、原の前遺跡発掘調査報告書(注1)にならい、松江低地の地下に分布する内湾成の完新統泥層および砂州堆積層を「宍道湖層」、朝酌川沿いに分布する河川堆積層を「朝酌層」と呼ぶ。

宍道湖層には6300年前に降灰したアカホヤ火山灰層が挟まれ、本報告の調査区では標高マイナス1.4～マイナス2.4mで確認されている。

(3) 沖積低地の形成

氷期の谷

沖積低地はウルム氷期以降の環境変化に対応して発達した地形である。ウルム氷期は7万年前頃に始まり、1万年前に終わった氷期で、最終氷期と呼ばれることもある。



第155図 完新統泥層基底面高度分析と古水系

内湾成泥層の基底面高度の等深線を示すもので、1万年の谷地形に対応する。
数字は標高(m)。太実線は古水系を示す。

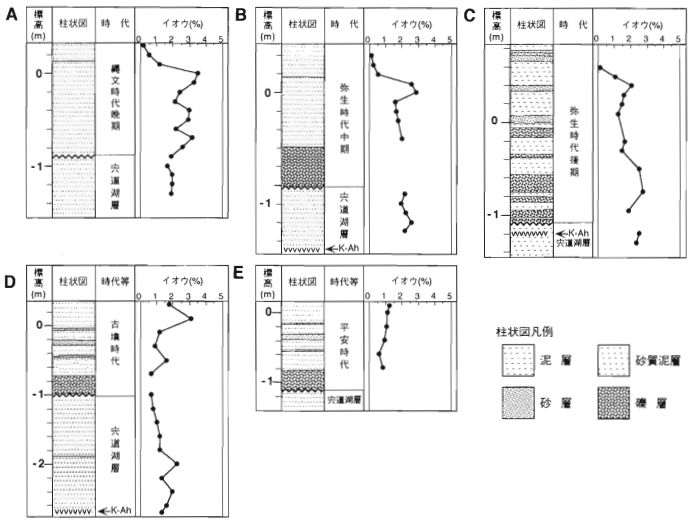
ウルム氷期中で最も気候が寒冷化したのは1.8～1.6万年前で、日本列島周辺では海面がマイナス100～マイナス140mまで低下していたと考えられている。気候の寒冷化によって海面が低下するのは陸上に氷床・氷河が発達することによって水が陸上に閉じこめられ、海水量が減少するためである。

海面が100m以上低下したということは、松江低地付近は海抜100m以上の地点だったことになる。海面との高度差が大きい分だけ、河川が地盤を浸食する力が増大し、松江低地付近は谷の形成が進んでいた。当時の谷地形は地下に埋没しているが、その形状はボーリング調査や水域の音波探査から明らかにされている。それによると、松江低地の地下に埋没している「氷期の谷」は、西へ向かって深くなり、宍道湖、出雲平野の地下へ続いて、さらには大社湾に到っている(第155図)。すなわち、ウルム氷期中には、朝酌川が西へ流れて谷を形成し、斐伊川、神戸川などと合流して海に注いでいたということになる。

また、中海側では東に向かって深くなる別の谷が形成されていた。大橋川の狭窄部(塩盾島付近)が宍道湖側と中海側の東西2つの谷の分水界になっており、現在の河川水系とは大きく異なっていた。

縄文海進

1万年前にウルム氷期が終わると気候が急速に温暖化し、それに伴って海水面が上昇した。1万年前から6千年前までの4千年間での海面上昇量は40mにもなり、海進現象が著しく進行した。い



第156図　遺跡堆積層のイオウ濃度

宍道湖層泥層、各時代の河川堆積層の泥層はともに数%のイオウを含んでいて、海水が流入する環境で堆積したことを示している。A～Eの地点は第154図参照。

わゆる縄文海進である。

宍道低地帯に形成されていた谷は海進によって海中に没し、宍道湖側と中海側にそれぞれ内湾が形成された。海進の進行とともに、西川津遺跡付近は宍道湖側の内湾最奥部の海域に変化した。その証拠になるのが、遺物包含層の下に分布する内湾成泥層（宍道湖層）である。

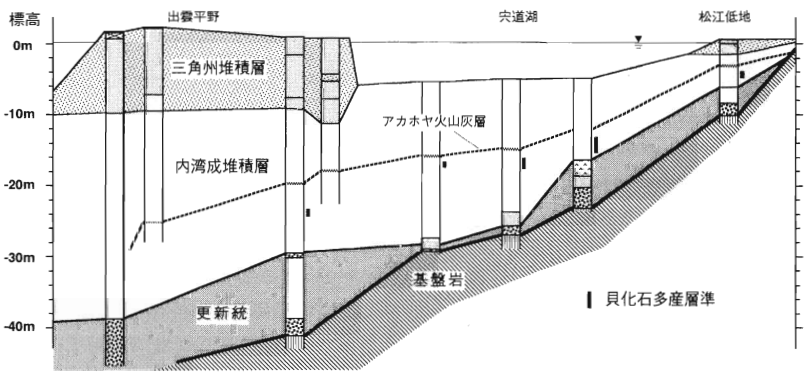
堆積物の海成、淡水成を識別する指標のひとつにイオウ濃度がある。宍道湖層泥層のイオウ濃度は概ね１％以上の高い値を示す（第156図）。淡水成の堆積物では特殊な場合を除いてイオウはほとんど含まれないことから、宍道湖層は海水～汽水環境に堆積したと判断できる。

また、西川津遺跡の西にある島根大学構内遺跡では、宍道湖層から内湾生の貝類化石（自然堆積物）が産出している。(注2) これらのことから、西川津遺跡付近が内湾の一部になっていたことがわかる。

内湾の古環境

松江低地から宍道湖、出雲平野にかけて広がっていた内湾の環境は次の様なものであった。

この地域の地下に分布する内湾成の地層は、全体として貝化石の量があまり多くなく、やや閉鎖的な内湾環境だったことが推定される。しかし、広い範囲に共通して、アカホヤ火山灰の下位に貝化石が多産する層準があることが確認されている（第157図）。この層準の貝化石は量が多いだけでなく、海水濃度が高い環境を示す種が出現することから、一時的に海水交換が良好な開放的な内湾環



第157図　松江低地から出雲平野までの地下地質断面図

西川津遺跡の地下に分布する宍道湖層泥層（内湾成泥層）は、宍道湖から出雲平野の地下に連続している。アカホヤ火山灰層の下位に貝化石の多産層準が存在する。

境になっていたことが推定できる。

その原因はいくつかの可能性があるが、最も湾奥にあたる松江低地まで一様に環境が変わっていることから、海面上昇によって中海側の湾とつながり、宍道低地帯が一続きの水道になった時期を示しているのではないだろうか。

島根大学構内遺跡のボーリング試料では、この時期の地層からウニやカキなどとともにハイガイの化石が産出している。ハイガイは瀬戸内海以南に生息する暖流系の貝である。縄文海進期には東北地方まで分布していたことが知られ、当時の海域環境が温暖だったことを示す指標である。中海に面した米子市目久美遺跡でも縄文時代の自然貝層からハイガイがサルボウガイなどと共に産出している(注3)。

縄文の高海面期

日本列島では多くの地域で6～5千年前の海面が現在より数m高くなっていたことが報告されている。

西川津遺跡では宍道湖層の上部が河川の浸食によって失われているために、高海面を示す証拠は見つかっていないが、周辺ではいくつか確認されている。

島根大学構内遺跡ではプラス1m前後まで塩水性湿地の堆積物が分布していて、その上限付近から4470yr. BPの^{14}C年代値が得られている(注4)。

松江市浜佐陀町の宍道湖湖岸では砂岩からなる波食崖(通称、十六ハゲ)が発達している。ここでは水面からプラス0.2mまでの範囲に現生の穿孔貝の生痕が無数にみられるが、プラス1.7m付近にもこれと同様の生痕が確認できる。形成時期はわからないが、プラス1.5m程度の高海面を示す有力な証拠である(写真1)。

また、中海周辺では、安来市岩屋遺跡でプラス0.7mの平坦面を持つ旧波食台地形が確認されている(注5)。東出雲町鷭貫(ぼんぬき)遺跡では海成砂層がプラス1.5mまで連続している(注6)。

これらのことから、松江低地付近では縄文時代の一時期に海面がプラス1～プラス1.5mまで上昇していた可能性が高い。

沖積低地の拡大

海面上昇期には沖積低地は殆ど形成されなかったが、上昇が終わると沖積低地の拡大が始まった。松江低地は朝酌川とその他の小河川の三角州、大橋川と宍道湖岸の砂州からなっている。

西川津遺跡で最も古い時期の河川堆積層(朝酌層)は縄文時代後・晩期層で、Ⅱ区右岸調査区で確認されている(本報告)。この調査区は遺跡範囲の南端(最も下流側)にあたるので、この時期には朝酌川三角州が西川津遺跡の下流端まで広がって来ていたことになる。

島根大学構内遺跡では縄文時代中期から晩期にかけて、砂州(海浜)の堆積層が西川津遺跡の方向へ発達していったことがわかっていて、縄文海進以降に朝酌川と内湾の沿岸流の堆積作用によって松江低地が拡大していく様子がうかがわれる。

(4) 遺跡の営みと古環境

縄文時代の杭群

1995年度のⅡ区右岸の調査では、縄文時代に打たれた杭が多数出土している。

縄文時代後・晩期の遺物を含む河川堆積層に押し倒されて斜めになった産状を示す杭が多くあり、

その堆積以前に打たれていたことがわかる。

杭の頂部はいずれも朽ち折れた形状をしていて、そこにはフナクイムシの生痕が認められるものが多い。フナクイムシは材に孔を開けて暮らす二枚貝で、海～汽水に生息する。現在の宍道湖にも生息している（写真２）。

杭に残るフナクイムシの生痕は、それが海～汽水環境に打たれていたことを示し、杭群は河口付近の浅場に打たれていたと考えられる。漁労のために打たれたものであろうか。

川の利用

西川津遺跡の「川津」の地名は、近代まで交通手段として舟がよく使われていたことに由来している。Ⅲ区左岸で出土した弥生時代の重り石は、当時も川を舟が行き来していたことの証拠のひとつと思われる。

河川堆積層のイオウ濃度をみると、時代が新しくなって平安時代になると値がやや下がるものの、それ以外では１％を越える高い値を示している。上記のように、イオウ濃度が高いことは、堆積環境に海水流入があったことを示すと判断でき、河道へ海水が遡上していたと考えられる。

河道の底面が海面より低い場合、海水が河道へ塩水楔として入り込む。海水と淡水の密度差によって、重い海水は淡水の下に潜り込み、淡水（河川水）はその上を流れるためである。

このような河川では、海との間を舟で行き来することも容易である。西川津遺跡から舟で朝酌川を下り、海まで出かけることも可能だったと思われる。

低地の土地利用

西川津遺跡では多様な農耕具が出土していて、沖積低地での農耕が行われていたと推定できる。発掘調査では農地や集落はわかっていないので、土地利用を具体的に知ることはできないが、状況証拠から推理してみたい。

上記のように、縄文時代後・晩期に朝酌川三角州が西川津遺跡の下流端まで達していることから、稲作農耕が定着する弥生時代には遺跡周辺は陸地になっていたといえる。遺跡周辺は近代まで殆どが水田として利用されていて、大雨でしばしば冠水する低湿な環境であった。そのことから、弥生時代頃には沼沢地が点在するような環境で、水田としての利用に適していたと思われる。

居住地としては、海崎地区で丘陵に近い場所で集落に伴う遺構が確認されているように、丘陵裾の緩斜面や、枝谷の谷底斜面を利用して集落が形成されていたことが推定される。

まとめ

西川津遺跡をとりまく環境は、過去1万年間の地球的規模の環境変化を反映して、谷から内湾、そして沖積低地へと変化してきた。

西川津遺跡では農具から漁具に至るまで多様な遺物が出土していて、それらからは内湾に面した沖積低地の環境を利用した、人々の暮らしが彷彿される。

参考文献

（注 1）島根県教育委員会，1995 編：朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書「原の前遺跡」．198p.

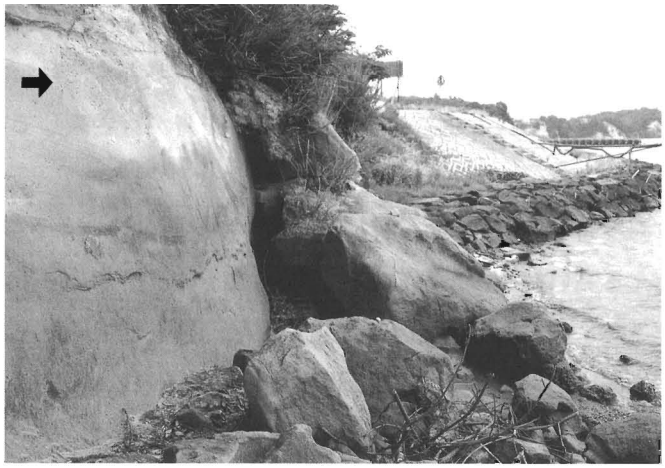
（注 2）島根大学埋蔵文化財調査研究センター，1996 編：島根大学構内遺跡発掘調査概報（諸田地区 1）．38p.

（注 3）財団法人米子市教育文化事業団・米子市公園街路課，1998 編：財団法人米子市教育文化事業団文化財調査報告書 25「目久美遺跡Ⅴ・Ⅵ」，162p.

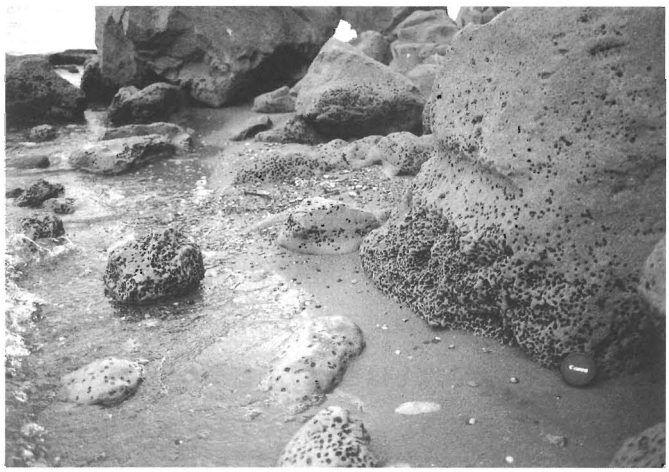
(注 4) 島根大学埋蔵文化財調査研究センター，1998 編：島根大学埋蔵文化財発掘調査研究報告第 2 冊「島根大学構内遺跡第 3 次調査（深町地区 1）―宍道湖北東側における低湿地遺跡の調査―」．96p.

(注 5) 水口晶郎・大塚　充・中村唯史・徳岡隆夫，1998：安来市岩屋遺跡および小汐手遺跡で発見された縄文～弥生時代の旧海岸地形　山陰地域研究，14，7-11.

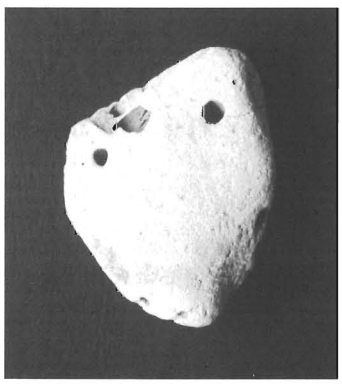
(注 6) 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会，1997 編：一般国道 9 号安来道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書　西地区　「島田池遺跡　鷸貫遺跡」本文編（第 2 分冊）．278p.



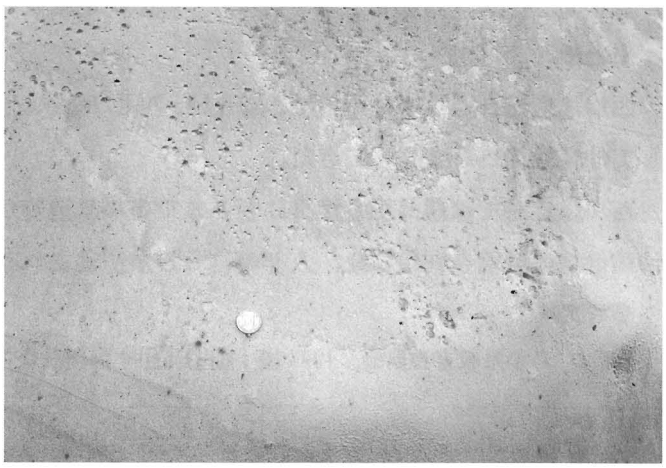
松江市浜佐陀町宍道湖岸の海食崖



汀線部に穿孔貝の巣穴が多数ある



西川津遺跡Ⅲ区出土の礫．穿孔貝の巣穴がある内湾がこの地点より上流まで入り込んでいた時期があることの証拠



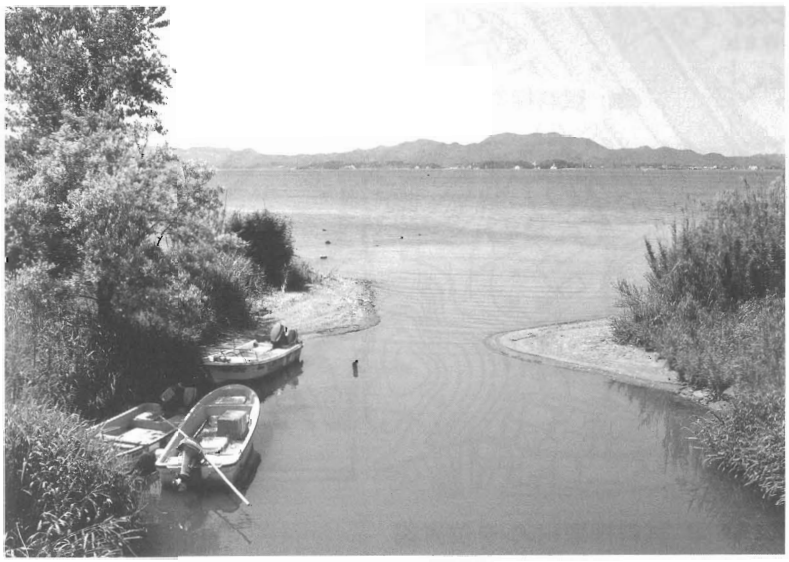
上段写真の矢印部分に残る穿孔貝の巣穴、高さは約 1.7 m

写真1　穿孔貝の巣穴

宍道湖湖岸に漂着した材にみられる巣穴付近に打たれた杭もフナクイムシに喰われている

西川津遺跡Ⅱ区出土の杭。朽ち折れた部分に巣穴が残る
杭が打たれた水域が海～汽水だったことを示している

写真2　フナクイムシの巣穴



河口が舟だまりとして使われている。朝酌川では西川津遺跡付近まで舟が入ることができ、近代まで舟が交通手段として用いられていた。松江市嫁島町忌部川河口

湖岸の桟橋と沖の杭群。杭にはエビ漁のオダが仕掛けられている。西川津遺跡Ⅱ区出土の杭群も同じような浅い水域に打たれていた。松江市岡本町

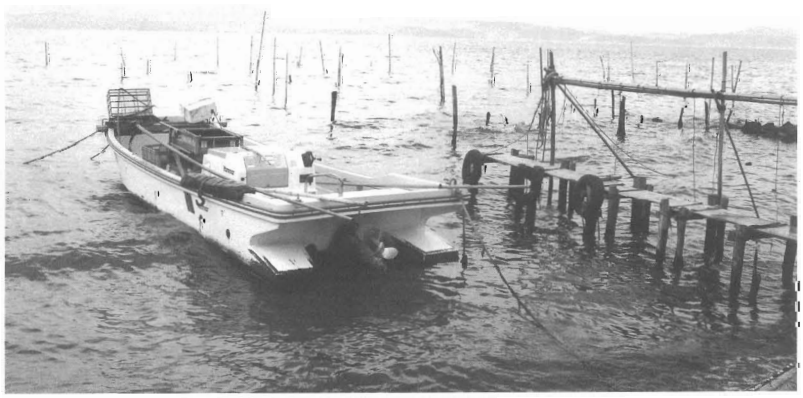


写真3　現在の宍道湖湖岸の風景

第２節　西川津遺跡1995年度調査における花粉分析

渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

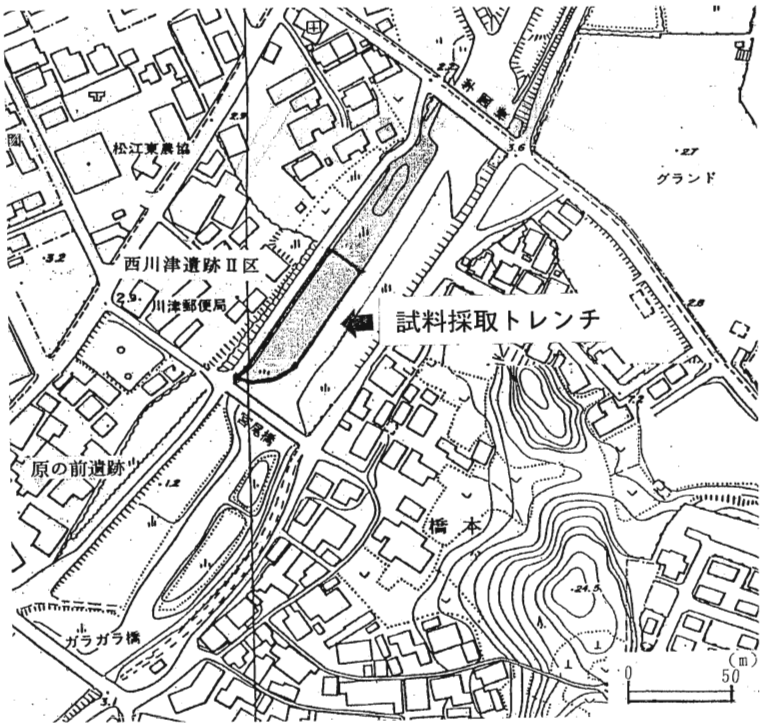
（１）はじめに

西川津遺跡は島根県東部松江平野の北東に位置し、朝酌川の中・下流域に分布する縄文時代早期から現代に至る複合遺跡である。

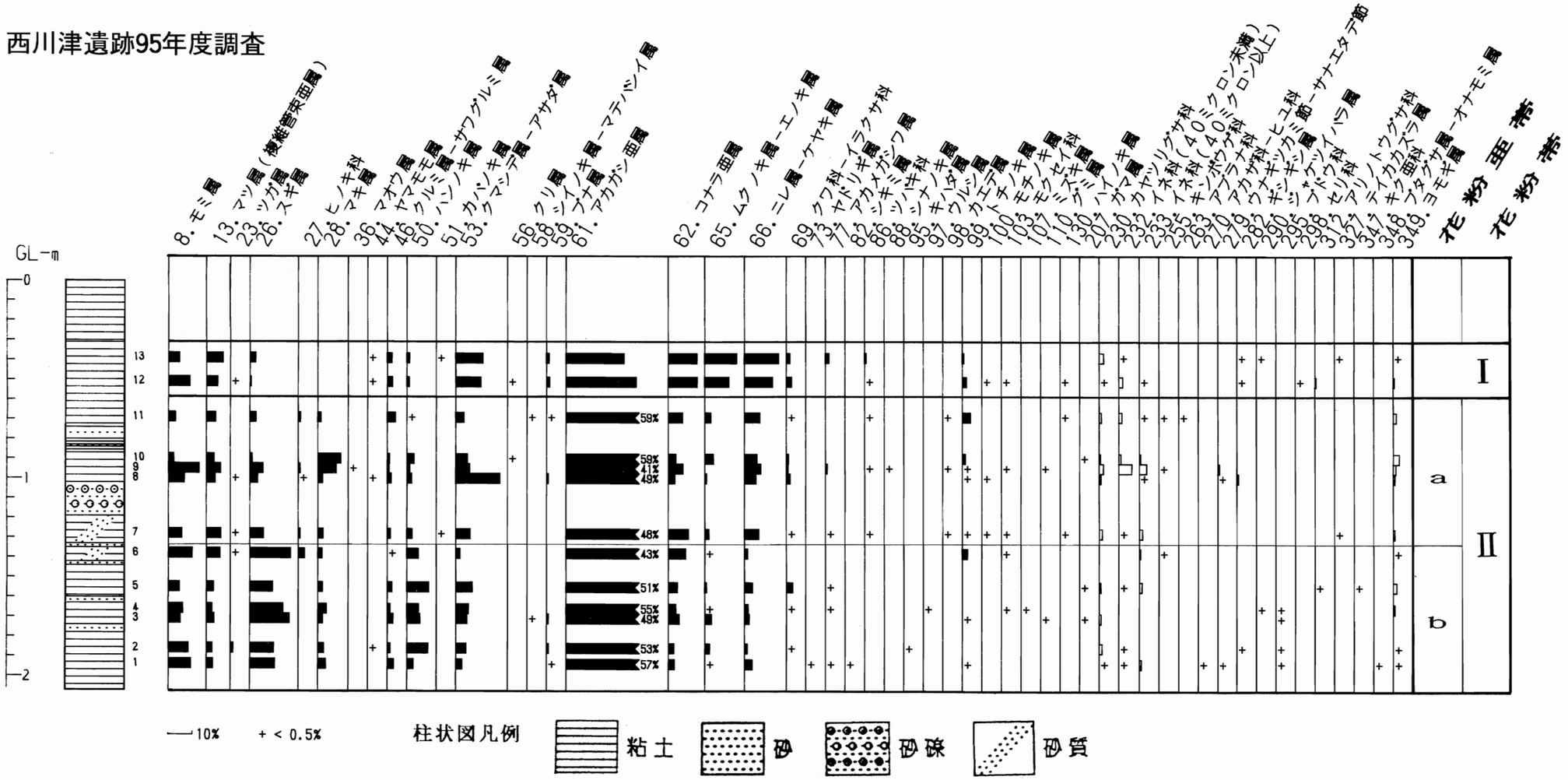
本報は、西川津遺跡の1995年度発掘調査に伴って実施した花粉分析についてまとめたものである。

（２）試料について

第158図に示す調査トレンチのほぼ中央で試料を採取した。試料採取地点の柱状図を第159図の花粉ダイアグラム中の左端に示す。また試料採取層準を、柱状図右に試料番号として示した。



第158図　試料採取トレンチ位置図



第159図 花粉ダイアグラム

（3）分析方法および分析結果

分析方法

花粉分析処理は、渡辺(1995）に従い行った。顕微鏡観察は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。しかし、一部の試料では花粉化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数で200を越えることができなかった。

分析結果

花粉分析結果を第159図の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。

（4）花粉分帯

花粉分析結果より、２花粉帯を設定した。花粉組成の変化を過去から現在の方向へ示すため、下位から上位に向かって花粉帯を記載した。

Ⅱ帯（試料No.1～11）

アカガシ亜属が卓越する。下部の試料No.1～6では、スギ属が他の種類に比べやや高率で出現する。一方上部の試料No.７～11では、ニレ属－ケヤキ属が他の種類に比べやや高率で出現する。このことから、試料No.１～６をb亜帯、７～11をａ亜帯とした。

Ⅰ帯（試料No.12、13）

アカガシ亜属が卓越するものの、下位のⅡ帯に比べ低率を示す。一方、アカガシ亜属を除く木本花粉の多くは、下位に比べ高率になる。

（5）大西（1990,1993）との対比

朝酌川流域のタテチョウ遺跡、西川津遺跡では、大西(1979）以降花粉分析が行われている。大西ほか(1990)、および大西(1993）では、これらの遺跡から得られたデータに宍道湖、中海の湖底ボーリングから得られたデータを加え、およそ１万年前から現在までの花粉組成の変化をまとめている。ここでは、今回の地域花粉帯を、大西(1990,1993）の花粉帯と対比する。

分析結果全体を通じて（試料No.６以深のみではなく）イネ科の出現率が低い。しかし、試料No.11下位の砂層から弥生時代前期の遺物が出土しており、この層準から上位がイネ科花粉帯に対応する時期の堆積物であることは明らかである。

今回のⅠ帯はマツ属（複維管束亜属）の出現率が低いこと、クマシデ属－アサダ属、コナラ亜属などが、アカガシ亜属と同程度の出現率を示すこと、および前述のようにイネ科花粉帯に含まれる時期であることなどから、カシ・ナラ亜帯に相当すると考えられる。

今回のⅡ帯ｂ亜帯（試料No.６以深）では、スギ属が10％以上の出現率を示す。従来朝酌川流域で得られた花粉分析結果のうち、スギ属がこの様な高率になる時期はイネ科花粉帯スギ亜帯のみであり、今回のⅡ帯ｂ亜帯がイネ科花粉帯スギ亜帯に対応する可能性が示唆される。しかし、上位の試料No.７と８の間の砂礫層には、縄文時代後期頃の遺物が含まれ、スギ亜帯の示す時期と矛盾する。

また今回のⅡ帯ａ亜帯は、スギ亜帯の上位であることからカシ・ナラ亜帯に対応すると考えられる。しかし、試料No.11と10の間の砂層から弥生時代前期頃の遺物が出土するなど、カシ・ナラ亜帯の示す時期と矛盾する。

現状では、上記のような花粉帯の対比ができるが、出土遺物から考えられる堆積年代との整合性

が充分に得られていない。今後、出土遺物の様式の再考を踏まえ、花粉帯の再考が必要となる。

（6）古環境推定

各花粉帯毎に、古植生を主とした古環境を推定する。

Ⅱ帯期

ｂ亜帯期、ａ亜帯期ともにイネ科(40ミクロン以上）花粉がほとんど出現しないことから、試料採取地点近辺の陸域で水田が存在した可能性は低い。周囲の山地にはカシ類を要素とする照葉樹林が広がり、一部では、ナラ類や、クマシデ属－アサダ属を要素とする落葉樹林が二次林として広がっていたと推定できる。また、ｂ亜帯では山間低地にスギが分布していたと考えられるが、ａ亜帯では分布域を減少させる。有用材としての伐採などがこの原因の一つと考えられる。

Ⅰ帯期

前帯同様にイネ科(40ミクロン以上）花粉がほとんど出現せず、試料採取地点近辺での稲作の可能性は低い。また周囲の山地では、ナラ類やクマシデ属－アサダ属を要素とする二次林が分布を広げていったと推定できる。また自然堤防が発達し、ニレ、ケヤキ、エノキなどを要素とする自然堤防林が広がっていったと考えられる。

（7）まとめ

西川津遺跡1995年度調査に伴い実施した花粉分析から、以下のことが明らかになった。

(1)　得られた花粉組成から、Ⅰ、Ⅱ帯の地域花粉帯を設定できた。さらにⅡ帯はａ、ｂ亜帯に細分できた。

(2)　大西(1990、1993）との比較から、Ⅱ帯ｂ亜帯がイネ科花粉帯スギ亜帯に、Ⅱ帯ａ亜帯およびⅠ帯がイネ科花粉帯カシ・ナラ亜帯に対比できた。

(3)　花粉帯の対比結果と、出土考古遺物からの推定堆積年代に矛盾が生じた。今後、出土遺物の詳細な検討を踏まえ、花粉帯の対比について再考する必要がある。

(4)　遺跡周辺の古植生を推定した。

引用文献

大西郁夫「花粉の分析」『朝酌川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』188-193. 島根県教育委員会　1979

大西郁夫・干場英樹・中谷紀子「宍道湖湖底下完新統の花粉群」『島根大学地質学研究報告 9』117-127. 1990

大西郁夫「中海・宍道湖周辺地域における過去 2000 年間の花粉帯と植生変化」『地質学論集 39』33-39. 1993

渡辺正巳「花粉分析法」『考古資料分析法』84 － 85.　ニュー・サイエンス社　1995

第３節　西川津遺跡1995年度調査における樹種鑑定

古野　毅（島根大学総合理工学部）
渡辺正巳（文化財調査コンサルタント㈱）

（１）はじめに

西川津遺跡は島根県東部松江平野の北東に位置し、朝酌川の中・下流域に分布する複合遺跡である。

本報は、西川津遺跡の1995年度発掘調査に伴って出土した杭材、用途不明大径木についての樹種鑑定結果をまとめたものである。

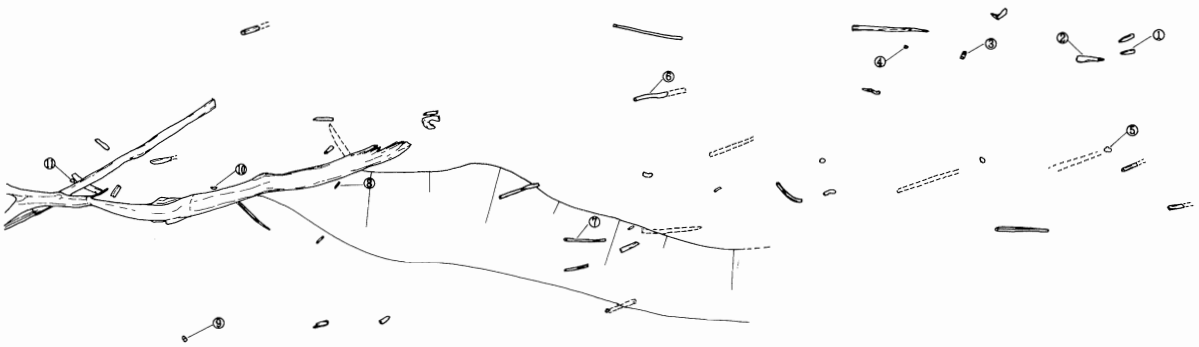
（２）試料について

樹種鑑定を行った試料の内、杭材の配置を第160図に示す。

樹種鑑定に当たり、第161図に示すフローチャートに従い永久プレパラートを作成した。また、作成した永久プレパラートは文化財調査コンサルタント㈱において整理保存している。

（３）樹種の鑑定と記載

鑑定結果を表１に示す。また、以下に分類群毎に樹種決定に至った特徴の記載を示す。



第160図　試料杭材配置図（Ⅱ区（右岸）C調査区）（S＝1:50）

モミ属 *Abies* sp.

試料番号：2(W95112102)

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はやや急で、晩材の幅は広い。分野壁孔はスギ型で２～４個存在する。また、放射柔細胞に典型的なじゅず状末端壁をもつ。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* sp.

試料番号:1(W95112101)、3(W95112103)、4(W95112104)、5(W95112201)、6(W95112202)、7(W95112203)、8(W95112204)、9(W95112205)、10(W95112801)、11(W95112802)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。早材から晩材への移行はややゆるやかで、晩材の幅は非常に狭い。一部の試料では不連続年輪が認められる。樹脂細胞が認められるが少なく、接線状配列を示す試料もある。分野壁孔は一部の試料で不明瞭であるが、ヒノキ型で２～４個存在する。また、インデンチャーが認められる試料もある。

コナラ属（アカガシ亜属） *Quercus*（sub. *Cyclobalanopsis*）sp.

試料番号：29R(W95112804)

記載：中庸で円形ないし楕円形の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。道管せん孔は単せん孔で、周囲仮道管が存在する。また、道管にはチロースが発達している。軸方向柔細胞は接線方向に１ないし２細胞幅の典型的な独立帯状柔組織を形成している。放射組織は同性で、単列放射組織ときわめて幅の広い広放射組織がある。さらに道管放射組織間壁孔は柵状を示す。

サカキ *cleyera* japonica Thunb.

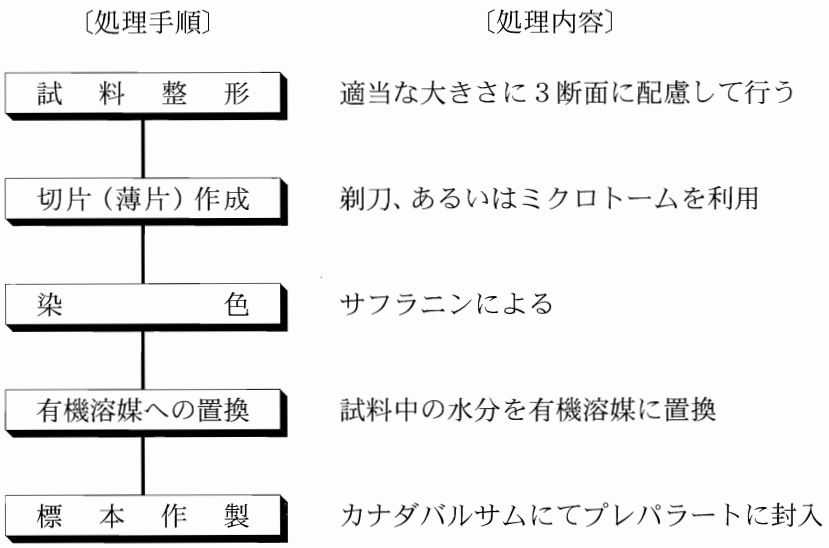
試料番号：11R(W95112805)

記載：小道管が、単独ないし数個複合して散在状に多数分布する散孔材である。道管の形状は角張っているものが多い。道管せん孔は階段せん孔で、バーの数は多く、非常に顕著である。放射組織は単～２列であるが単列のものが多く、両端に直立細胞を数個持つ異性Ⅱ型を示す。また、放射柔細胞は厚壁である。軸方向柔細胞は散在状である。木部繊維も厚壁で、有縁壁孔が明らかに認められる。

カエデ属 *Acer* sp.

試料番号：10R(W95112803)

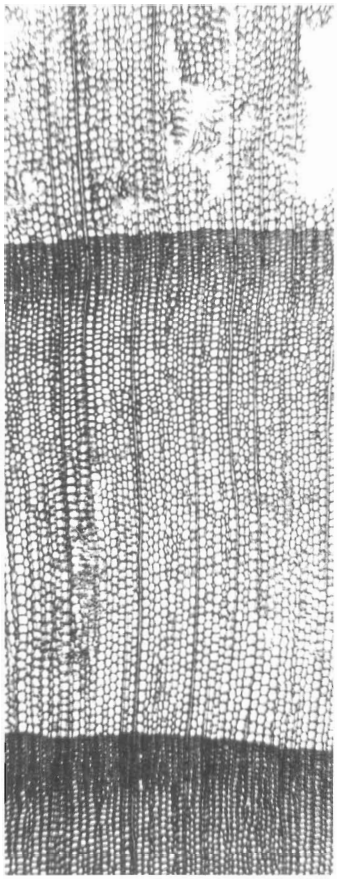
記載：小さい道管が、単独ないし放射方向に２～３個（ごく希に４個）複合して散在状に分布す散孔材である。道管せん孔は単せん孔であり、小道管の側壁にらせん肥厚が認められる。また、道管内腔に着色物質を含むものがある。放射組織は１～８細胞幅で、紡錘形を示すものが多い。ほとんど同性であるが、上下辺縁に方形細胞をもつものがある。さらに、軸方向柔組織が幅広く接線方向に不規則に配列し、特徴的な模様をなしている。また、軸方向柔細胞に結晶が認められる。



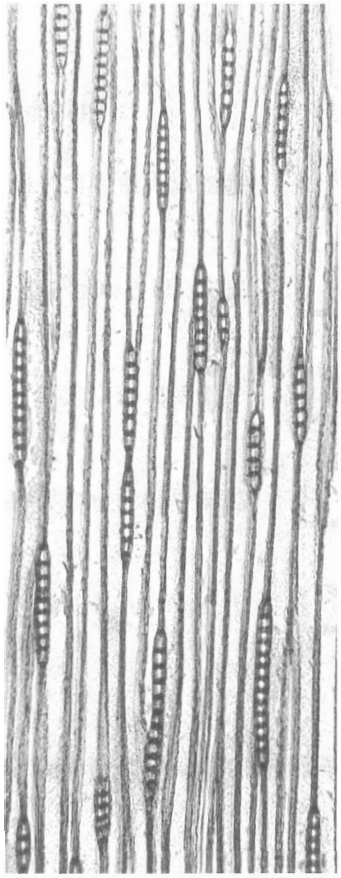
第161図　樹種鑑定用プレパラート作製フローチャート

表45　樹種鑑定結果一覧表

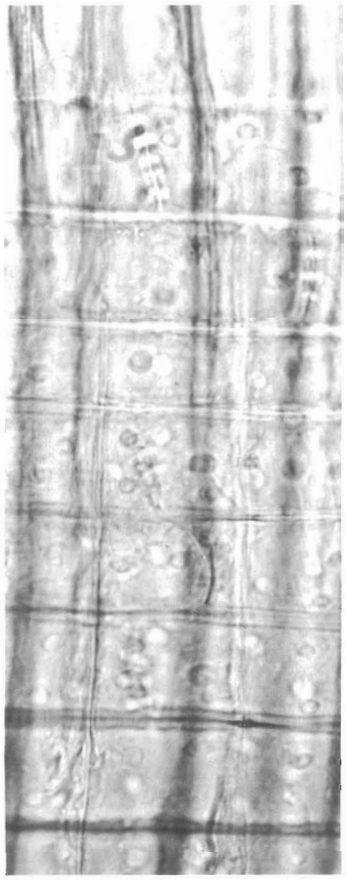
試料番号	樹種名	
	和名	学名
1	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
2	モミ属	*Abies sp.*
3	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
4	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
5	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
6	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
7	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
8	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
9	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
10	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
11	ヒノキ属	*Chamaecyparis sp.*
10R	カエデ属	*Acer sp.*
11R	サカキ属	*Cleyera japonica Thunb.*
29R	コナラ属（アカガシ亜属）	*Quercus (sub. Cyclobalanopsis) sp.*



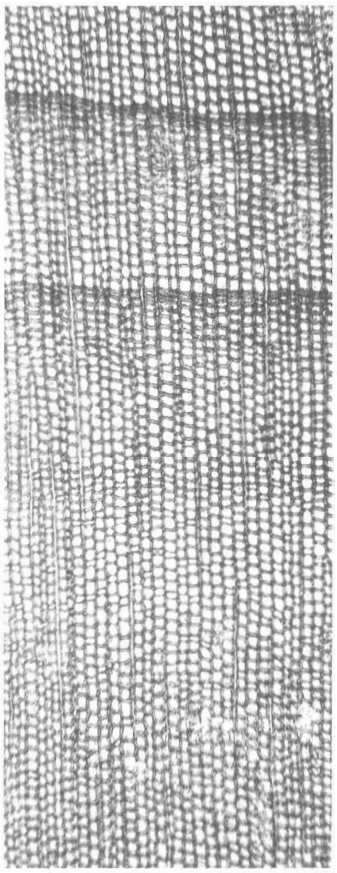
モミ属：2　横断面40倍



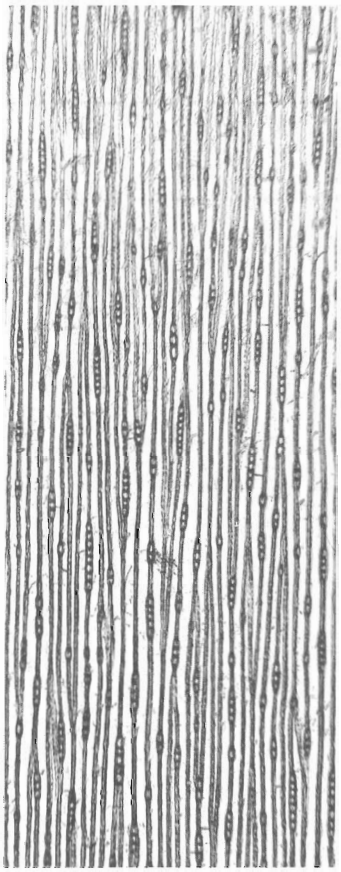
接線断面40倍



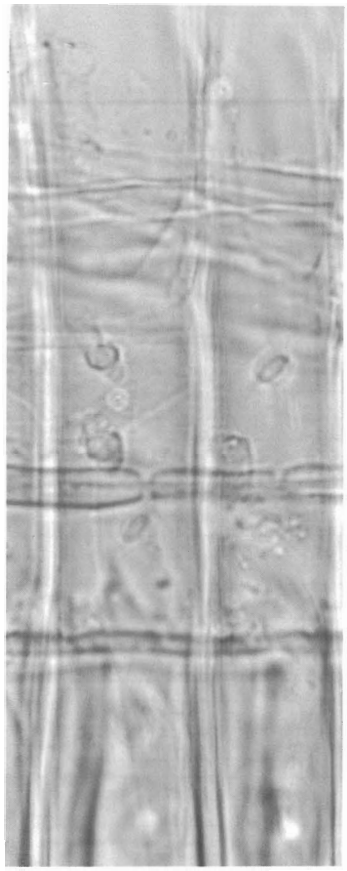
放射断面560倍



ヒノキ属：9　横断面40倍

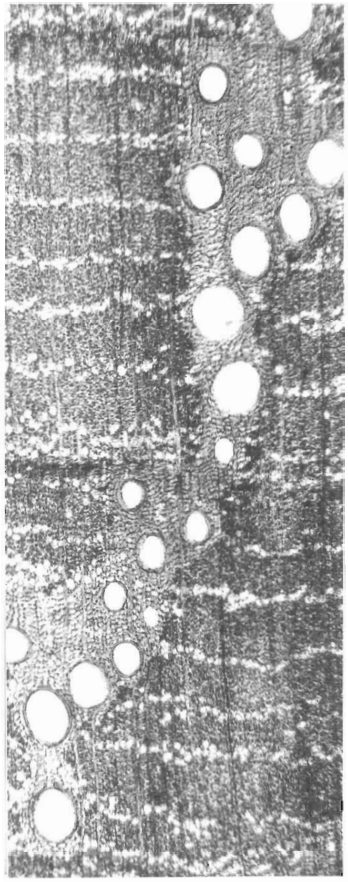


接線断面100倍

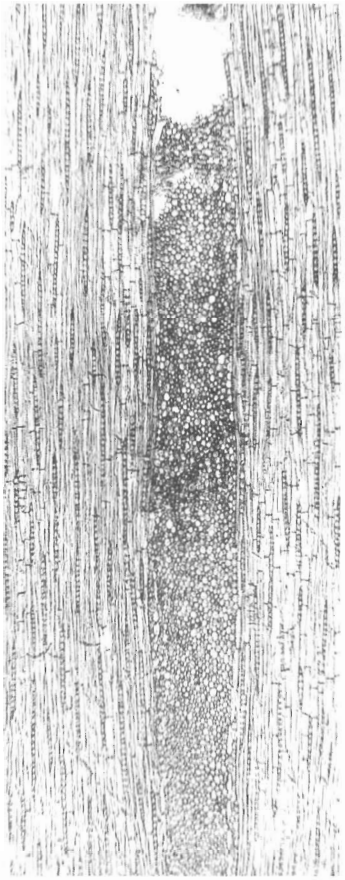


放射断面560倍

写真4　樹種鑑定（1）

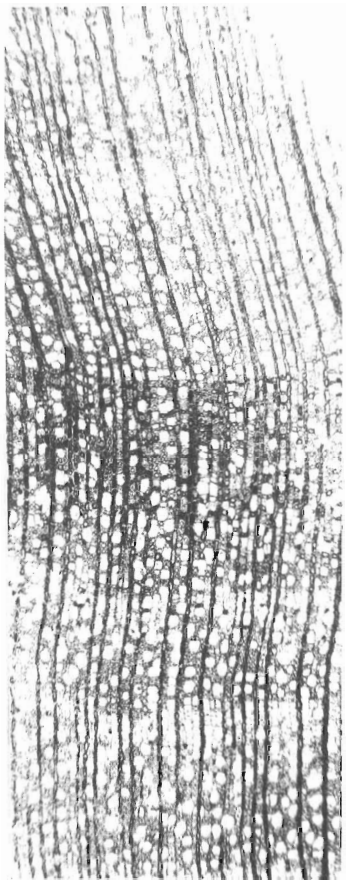


アカガシ亜属：29 R　横断面40倍



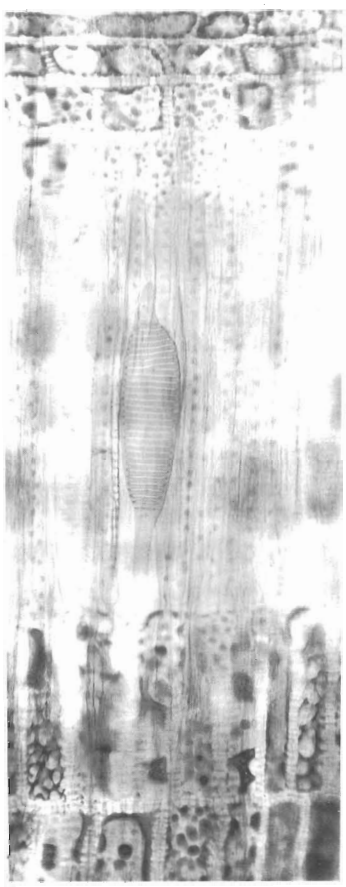
接線断面40倍

放射断面190倍



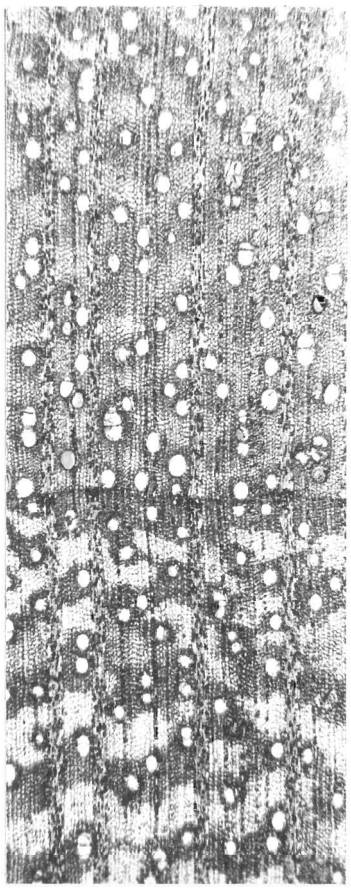
ヒサカキ属：11 R　横断面40倍

接線断面100倍

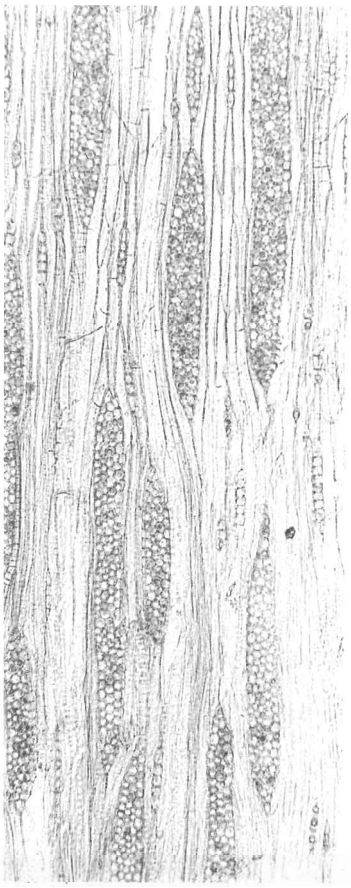


放射断面190倍

写真5　樹種鑑定（2）



カエデ亜属：10Ｒ　横断面40倍



接線断面100倍

放射断面190倍

写真6　樹種鑑定（3）

第8章　まとめ

1994・95年度に行った西川津遺跡の発掘調査では、Ⅱ区からⅣ区において縄文時代後・晩期から近現代までの二千年以上に及ぶ朝酌川の河道の変遷を追うことができた。特に、昭和50年代後半の暫定掘削以前の蛇行して流れていた朝酌川は弥生時代前期後半以降、今日に至るまで大きな河道の変更はなく、西川津町大内谷地区から橋本地区を南に流れ、入り海（宍道湖）へと注いでいた。

既に、タテチョウ遺跡、原の前遺跡、西川津遺跡の主要部の発掘は終了し、大きな成果を得ているので、今回の調査結果もそれを補強するものに過ぎない。ただ、各調査区において各時代の河の流れとその水辺で暮らした人々の営みは、僅かに残されていた遺構、遺物で復元することができた。

本章では以下、各調査区の調査成果と課題を述べてみたい。

（Ⅱ区）

原の前遺跡の上流に当たる区であり、朝酌川の河道跡を検出した。右岸では縄文時代の後・晩期の河道跡と流路および底に打ち込まれていた杭群を発見した。杭の性格は不明であるが、この時期から川として、人々の暮らしに係わる最初の遺構といえる。また、この河道跡を大きく削って、弥生時代の川が形成されている。この河道は今日まで大きく変わることはなかった。しかし、川津の平野の主要河川は朝酌川一本であるが、Ⅳ区で記したように古代には分流していた可能性もある。

左岸においては、東南の丘陵から伸びる尾根の岩盤が水面すれすれに存在し、弥生時代前期から中期の砂礫層が岩盤に堰止められるように堆積していた。同じ場所には、昭和に入って打たれた護岸用の杭列もあり、二千年の間でも河道の変遷幅は大きくなかったことが知られた。また、同じ場所で、長さ1.5m程の塔婆が杭に混じって打ち込まれていた。供養に使われたもので、江戸時代中頃のものである。なぜ、多くの塔婆が逆さまで土手に打たれていたであろうか。

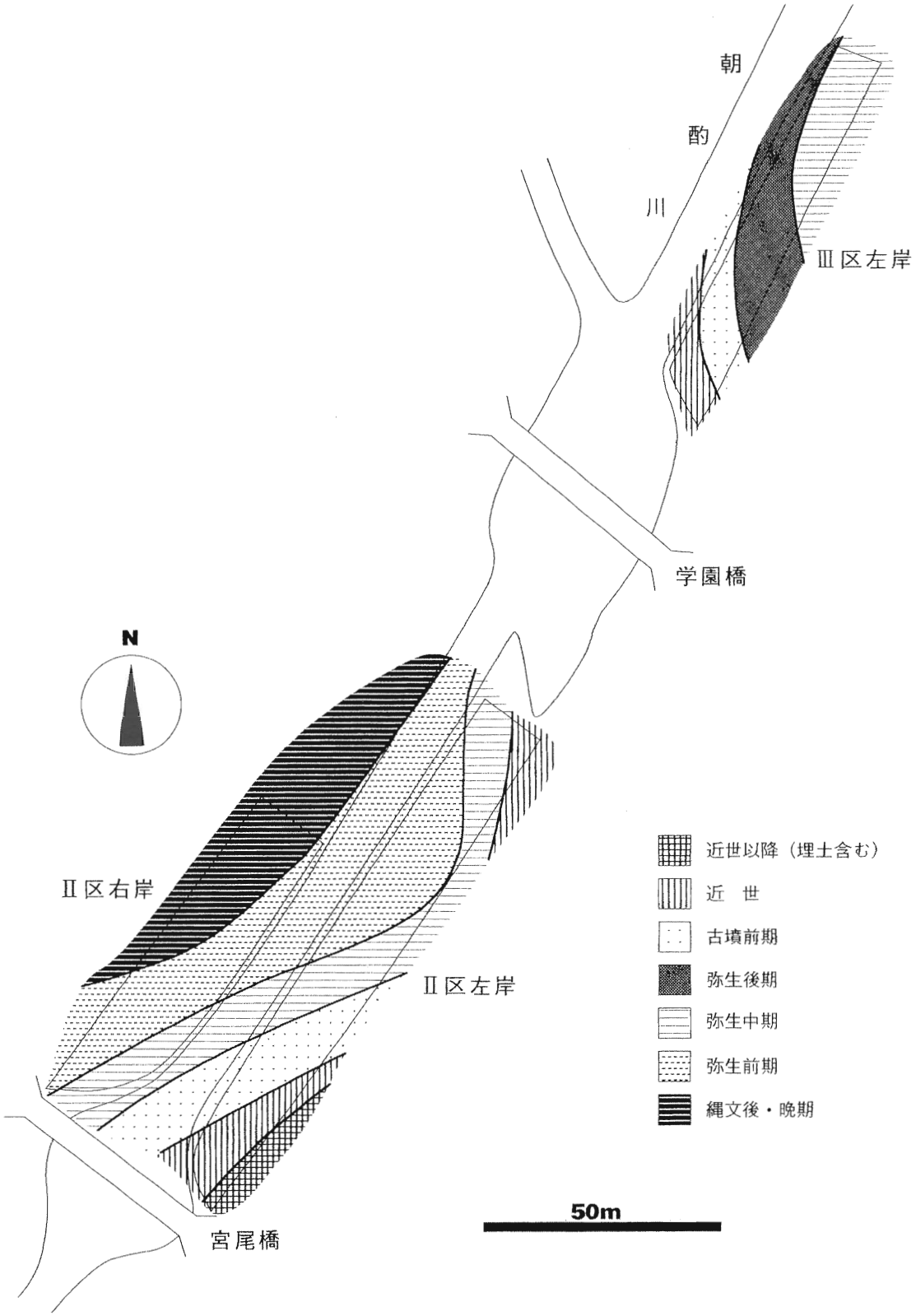
（Ⅲ区）

川津小学校の北側に当たる左岸では弥生時代中期の砂礫層が中州状に堆積していた。この層からは土器、石製品、木製品が多く出土し、中でも、弥生土器が大部分を占める。木製品には農具が多いが、中には鍬等の未製品もある。竪杵や橇などの完全な品も混じり、大量の木製品が出土した昭和56年度調査区と隣接しており、それら遺物との関連が注目される。

（Ⅳ区）

大内谷集落の入口にある嵩見橋の東詰め下流部を対象とした。1993年度の試掘によりこの区の大部分が後背湿地の状態であり、旧朝酌川は調査により古墳時代以降最近まで流れていたほぼ同じ場所に存在していたことが知れた。また、中世以降は南の丘陵との狭合な部分を流れ、Ⅲ区に至っていた。なお、出土品の中には意図的に投げられた古墳時代の土器や３枚重ねで手向けられた江戸時代の土師質土器も確認された。時代を超えて、祭祀を行っていることが僅かながら窺われた。

今回の調査においても、地質学をはじめ自然科学分野の協力があり、朝酌川流域の古環境の復元など多くの成果を挙げることができた。今後も、歴史学や地理学および自然科学の調査とにより連携を深め、遺跡とそれを取り巻く自然の営みや朝酌川流域の人々の生活の様相を明らかにすることが必要である。



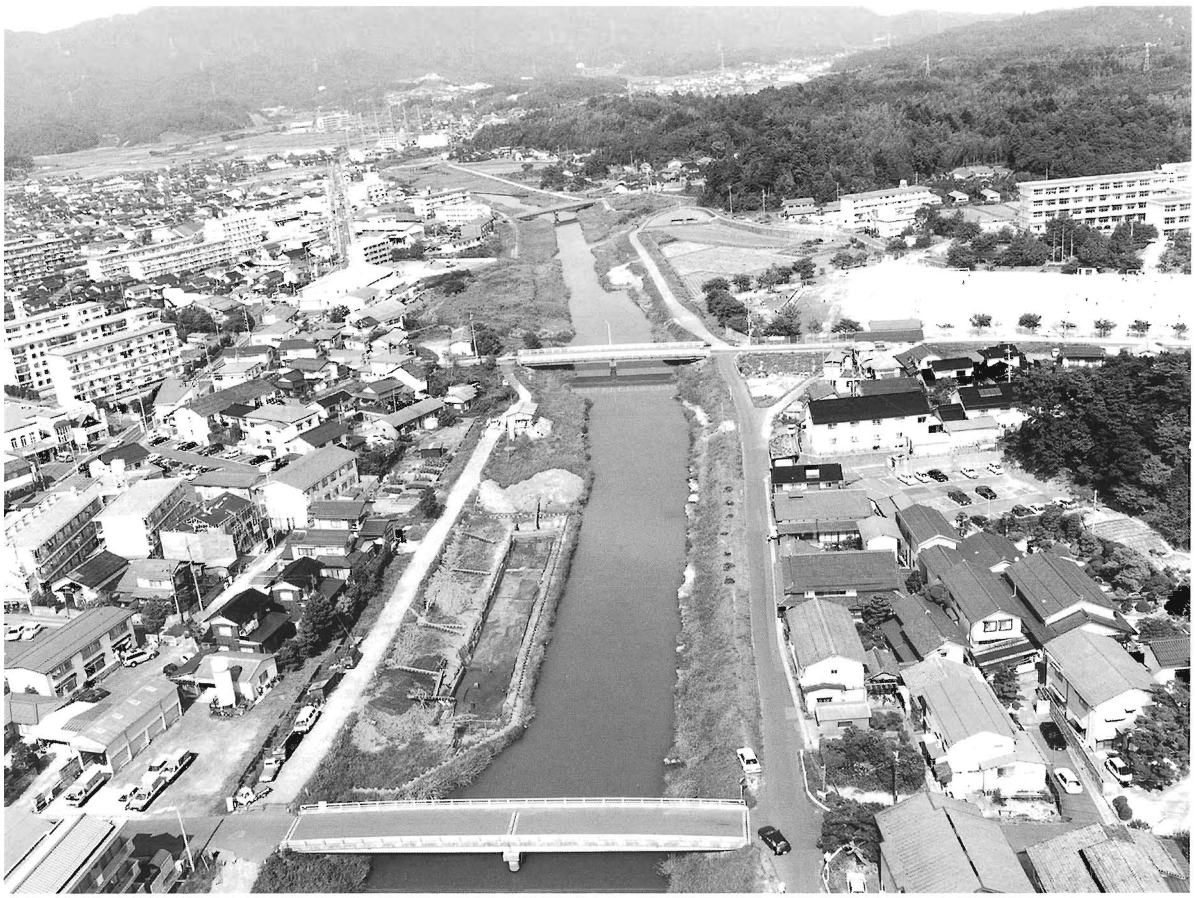
第162図　Ⅱ・Ⅲ区の河川変遷概念図

図　　版

Ⅲ区（左岸）砂礫層出土弥生土器

西川津遺跡（Ⅱ～Ⅳ区）航空写真（1988 年）

図版２



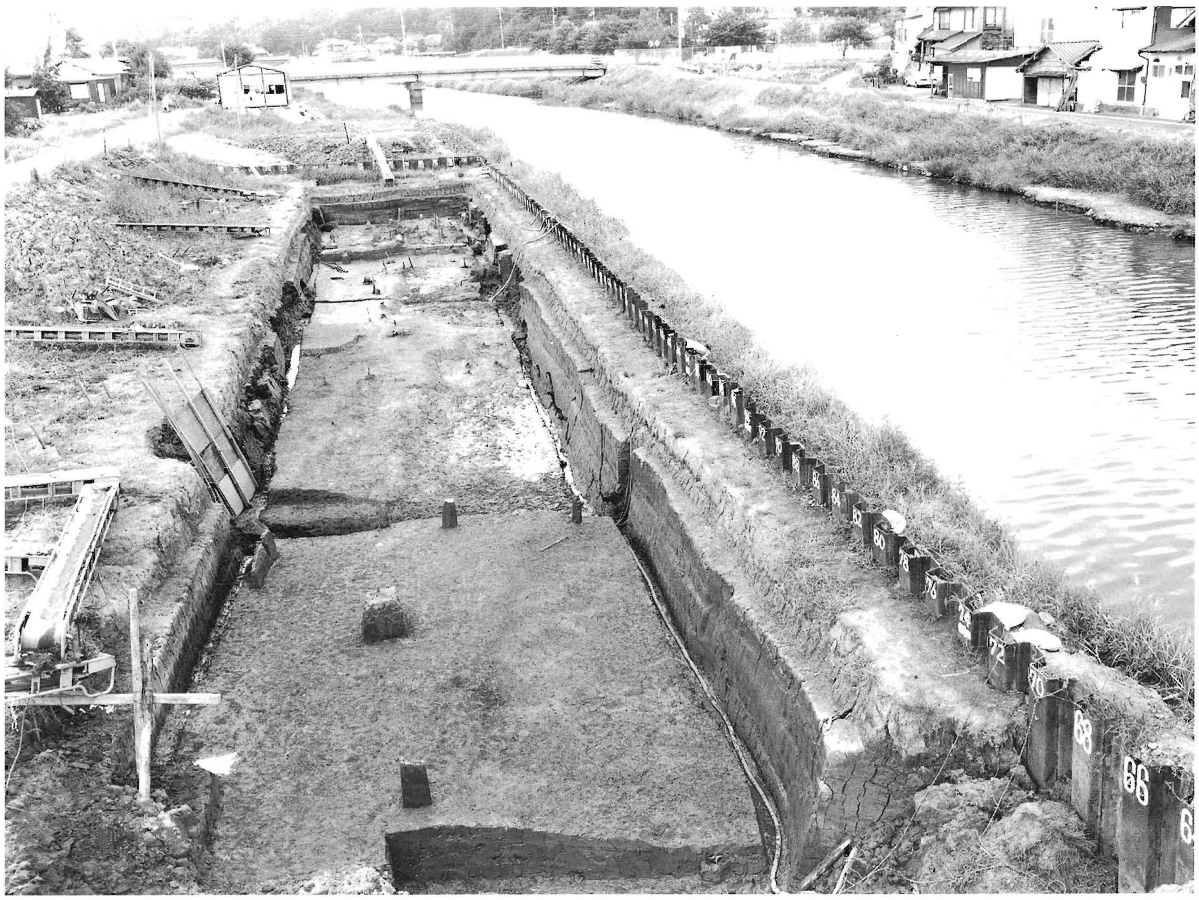
原の前遺跡上空から西川津遺跡Ⅱ・Ⅲ区を下流より望む

Ⅲ区上空から下流を望む（手前は川津小学校グラウンド）

Ⅲ・Ⅳ区を学園橋上空から望む（上流に嵩見橋が見える）

Ⅱ区全景（手前は右岸調査区、下流に宮尾橋が見える）

図版４



Ⅱ区（右岸）全景（下流から、上流に学園橋が見える）

Ⅱ区（右岸）B調査区全景（南から、手前は弥生時代の河道跡）

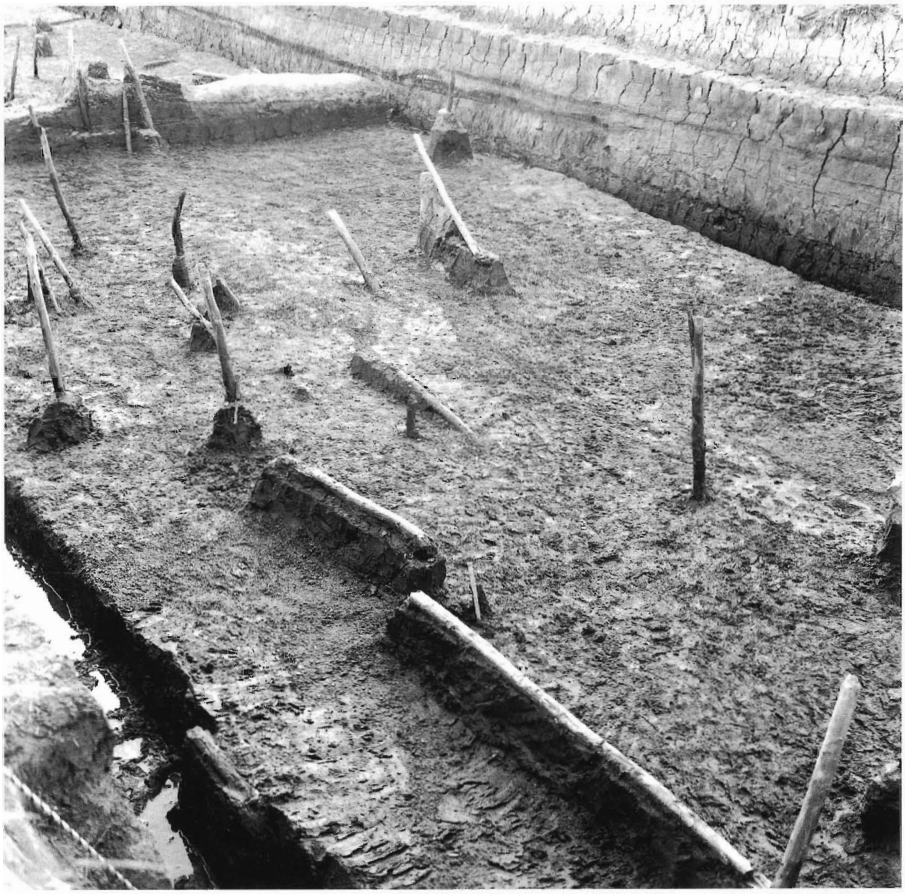
Ⅱ区（右岸）C調査区全景（南から、中央に流木がある）

Ⅱ区（右岸）C調査区 流木（南から、流木にフナクイムシの巣穴が見える）

図版 6

Ⅱ区（右岸）C調査区 弥生時代の河道跡と流木（南から）

Ⅱ区（右岸）A調査区 弥生時代の河道跡（西から、流痕）



Ⅱ区（右岸）C調査区 杭検出状況（北西から）

Ⅱ区（右岸）北トレンチ 杭検出状況（東から）